

## 第VII章 鎌倉・室町時代

### 第1節 C 遺跡の調査（第277図）

C 遺跡では、1号墳の周溝上に土坑1基を検出している。遺構番号は C 遺跡報告に従っている。

#### 4号土坑

1号墳後方部南東隅部の周溝上で検出された円形の土坑である。径240cm×深さ約58cm、筒状に深く落ち込む部分で径114cmを測る。断面図から、一度7層レベルまで埋められた後、4層レベルまで掘り込まれ、埋められたと考えられる。壁面等に焼けた部分はない。3層と6層の二時期の灰層は埋められた（捨てられた）ものと判断できる。3層には土師器皿が6枚含有されていた。これらは破損状態に統一感がなく、3層上面ではなく土中の出土である。よって、その場で納められたのではなく、灰の中に混入されていたと考える。出土状態からその場で投げ込まれたものでもないと判断する。各灰層の上は炭化物・焼土粒等を含む灰褐色土で埋められている。6層からの出土遺物はなく、明確な時期差は分からぬが、ある時期灰を埋める（捨てる）土坑として機能していたことは言える。灰の中には骨片は含まれておらず、墓かどうかは不明である。なお、6層には炭化材が残っていた。時期は土師器皿から、14世紀前葉には埋められていたと考えられる。

### 第2節 F 遺跡の調査

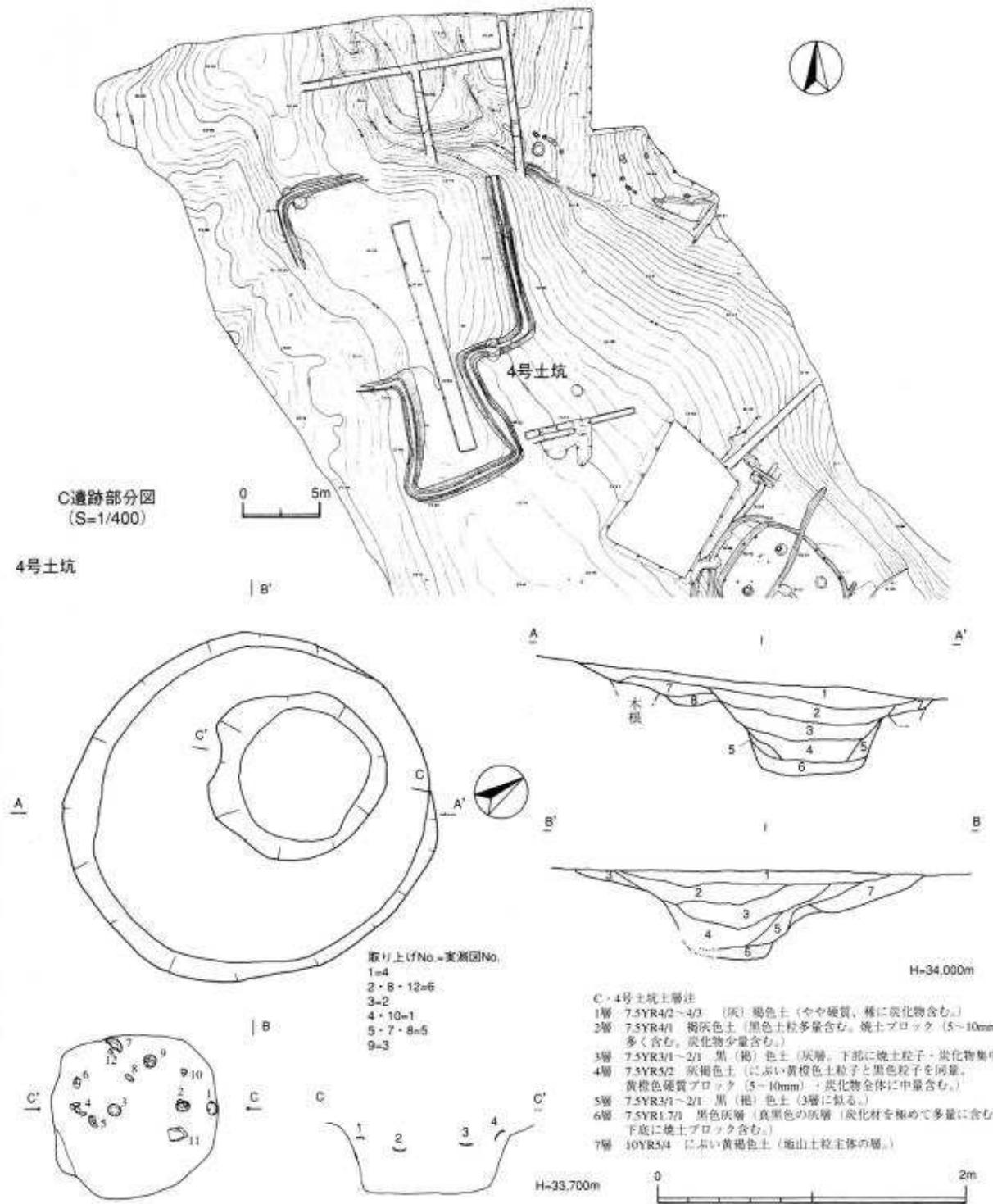
F 遺跡は南側の平野部に向かって突出す尾根上に、古墳時代中期の円墳が10基検出されている遺跡である。中世遺構はその古墳群に重複して形成されている。中世墓は10号墳上に位置し、中世横穴と考えられる遺構は1号墳上とその西側に位置している。焼土坑（1号土坑）は3号墳上に位置する。また、尾根南側先端に位置する礫群も中世墓と捉えることも可能だが、既に崩壊しており詳細は不明である。なお、中世横穴は、過去の調査例から考えると、中世墓より後出であることは確実といえる。

#### 第1項 1号墓（第278～284図）

盛土による墳丘と、配石による区画及び集石による表象をもつ墓である。全体では南北約10m×東西約6mを測り中世墳墓の中では突出した大きさをもつ。しかし、これは北側の墓に南側の墓が追葬された結果である。ここでは北側の墓を1-A号墓、南側の墓を1-B号墓と呼称する。標高は最高所で41.5mを測る。表層を除去すると両者の上面には破碎した中世陶器片が散乱した状態で検出された。それらの中世陶器は数個体に纏まり、土に混入したのではなく、その場にあったものが破壊されたと考える。また、遺物の内容では、土師器皿と石塔類が一切出土しないことが特徴として挙げられる。出土陶器の様相や石塔を持たず墓自体が高さを持つという形態からも、下方斜面に展開する中世墓群より先行して築かれたと考えられる。また、その大きさからも、被葬者一族の最上位階層の墓といえる。

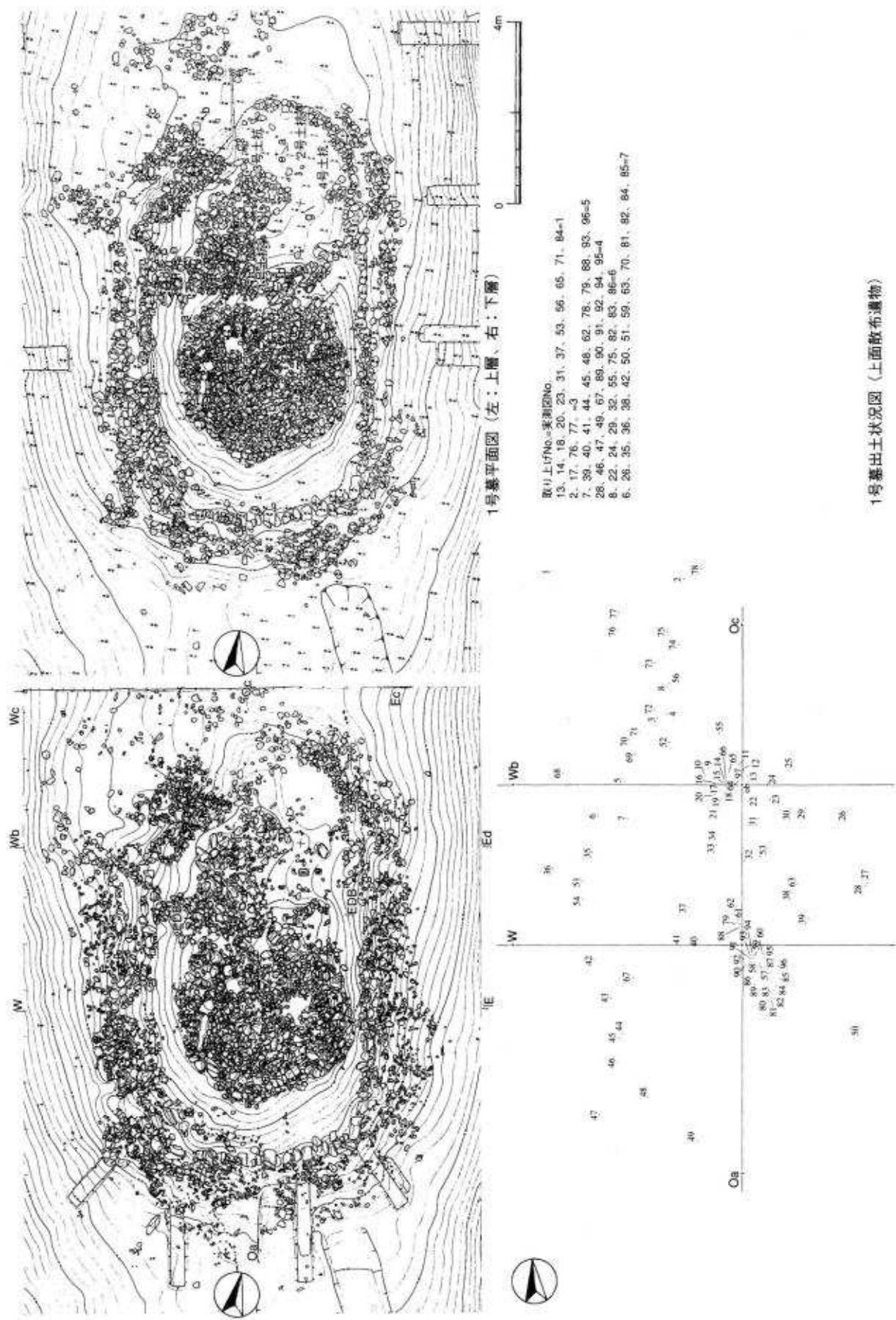
##### 1-A号墓

この地に最初に造られた墓である。基底石により区画が設定された後、4層の盛土によって墳丘を構築し、墳丘裾部に礫積を行っている。墳丘上部にも礫積は見られ、土坑状の掘り込みも検出されている。径は東西約500cm×南北約420cmを測る。標高約41.4mを測り、墳丘高は約50cmを測る。盛土は基底にぶい黄褐色土が敷かれ、ほぼ水平に黒色土、黒褐色土、暗灰黄褐色土の順に積まれ、最後にぶい黄褐色土が積まれている。区画北東部は区画が崩れおり、長方形に見える2段の集石群が検出されている。この部分は基底石まで完全に崩されている。崩壊や破壊行為の後ないし、後世に造られた集石墓とみることも出来る。盛土上面の集石は墳丘南西部に見られる。その下部から2基、墳丘東側より2基の土坑状の掘り込みを検出している。上面に散在して見られた中世陶器破片と礫下レベルから出土した破片は接合関係にあり時期差はない。なお、火葬骨片は上面及び盛土中からも検出されていない。礫や盛土を外し、基底石のみ残した状態にすると、円ではなく多角形であることが判明

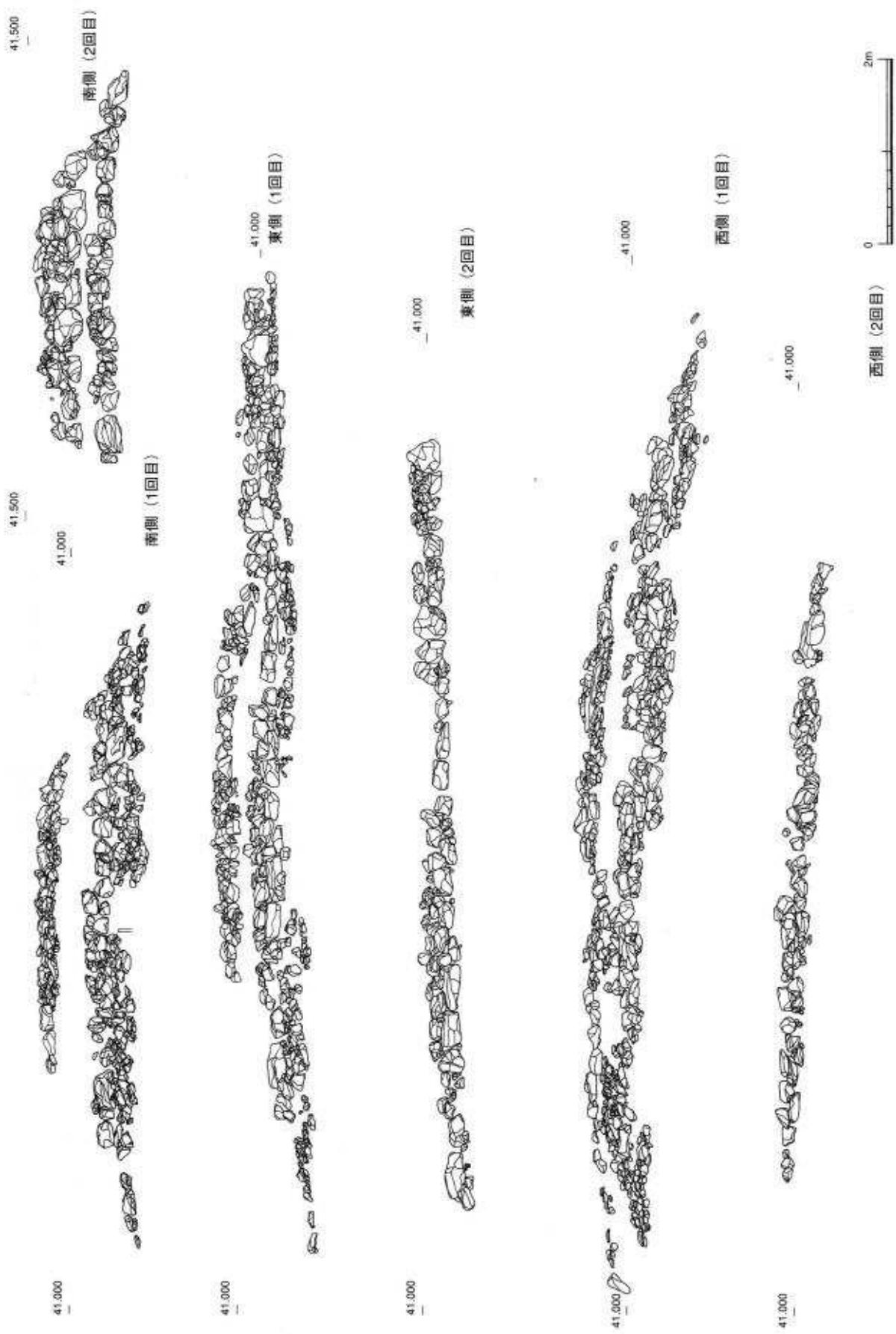


第277図 C遺跡 4号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

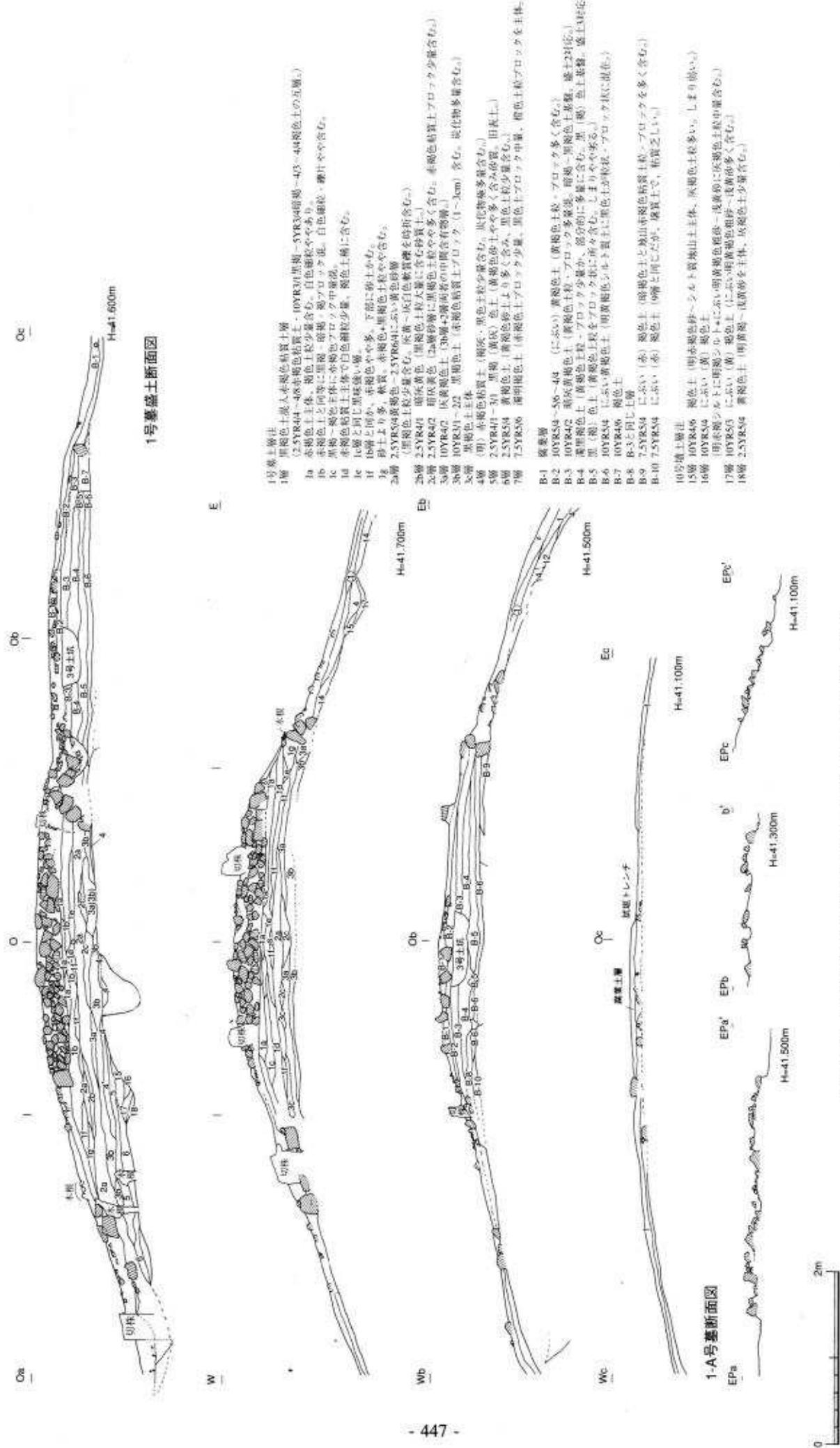
した。北西部分が崩れていって確定は出来ないが、八角形と考えられる。八角塔などの仏塔との共通性が考えられる。從来から指摘されていることだが、墓の構築には仏教思想が反映されており、僧が関わっていたことへの一つの証明となろう。塔は本来的には「釈迦の墳墓であり、釈迦の遺骨と称する舍利を納めるもの」であり藤澤典彦氏の「石組墓は本来的には仏塔的意義を担っていたと考えられる」という指摘に合致する例といえよう。なお、盛土下部には土坑状のプランが見えたが、古墳時代の土師器が共伴するため、10号墳に関わる遺構と判断し、中世墓調査段階では掘削しなかった。以下、墳丘上の土坑について検討する。



第278図 F遺跡1号墓平面図・出土状況図(S=1/120)

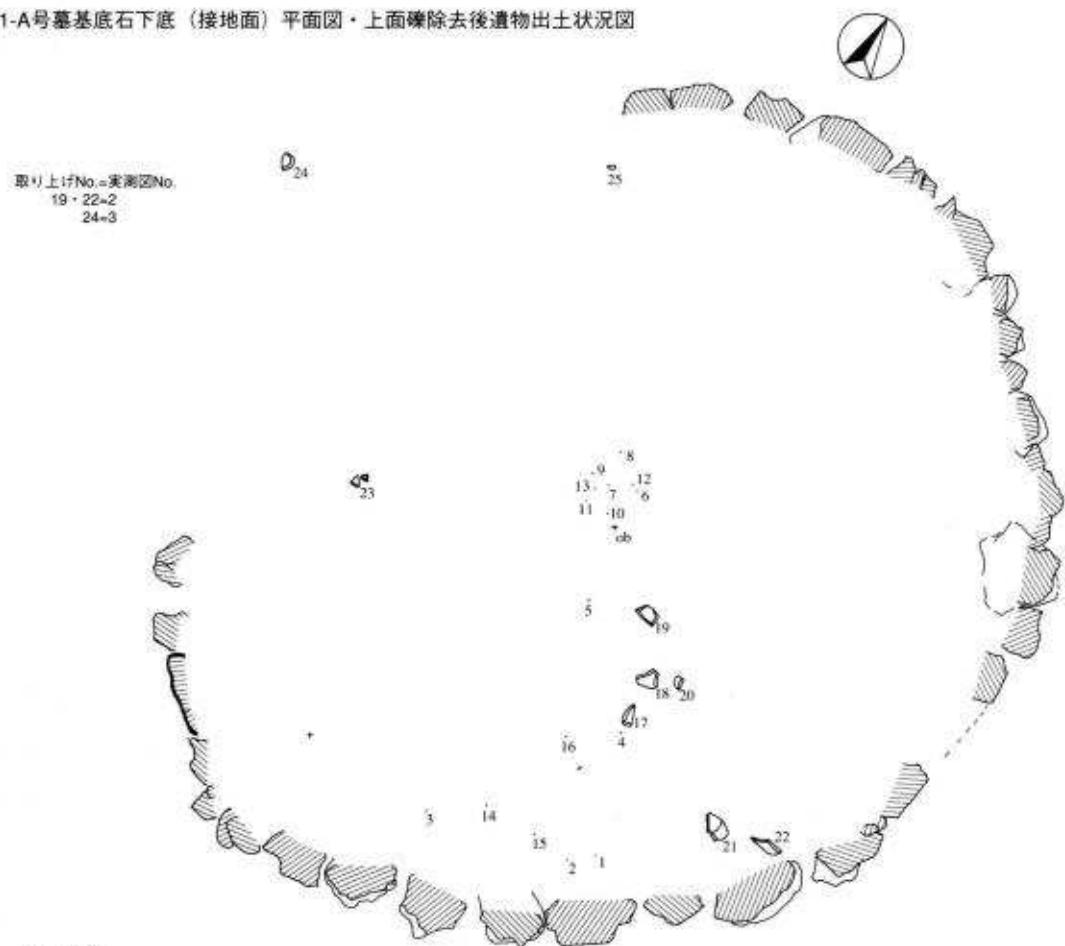


第279図 F遺跡 1号墓側面図 (S=1/60)

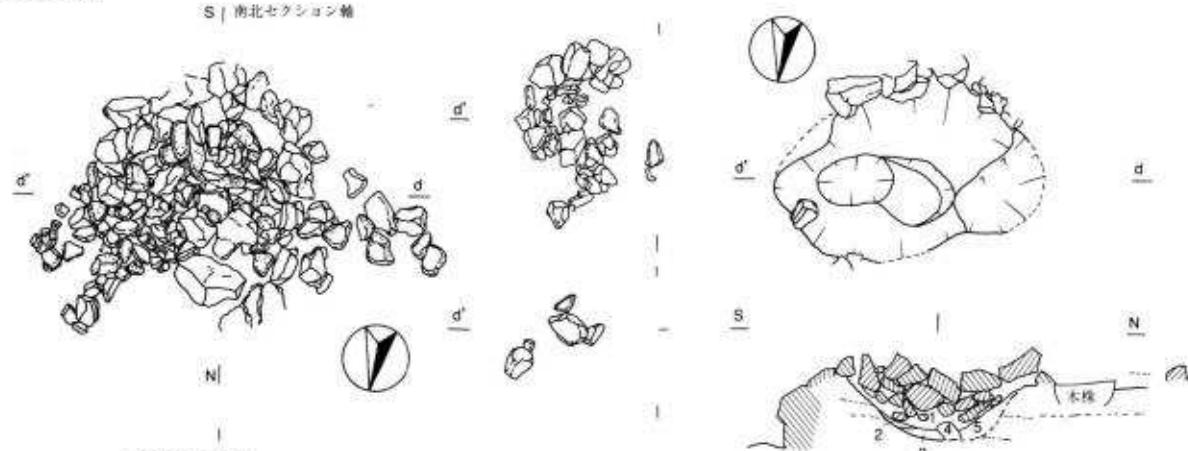


第280圖 F遺跡1號墓盛土斷面圖·1-A號墓斷面圖(S=1/60)

1-A号墓基底石下底（接地面）平面図・上面礫除去後遺物出土状況図



S | 南北セクション軸

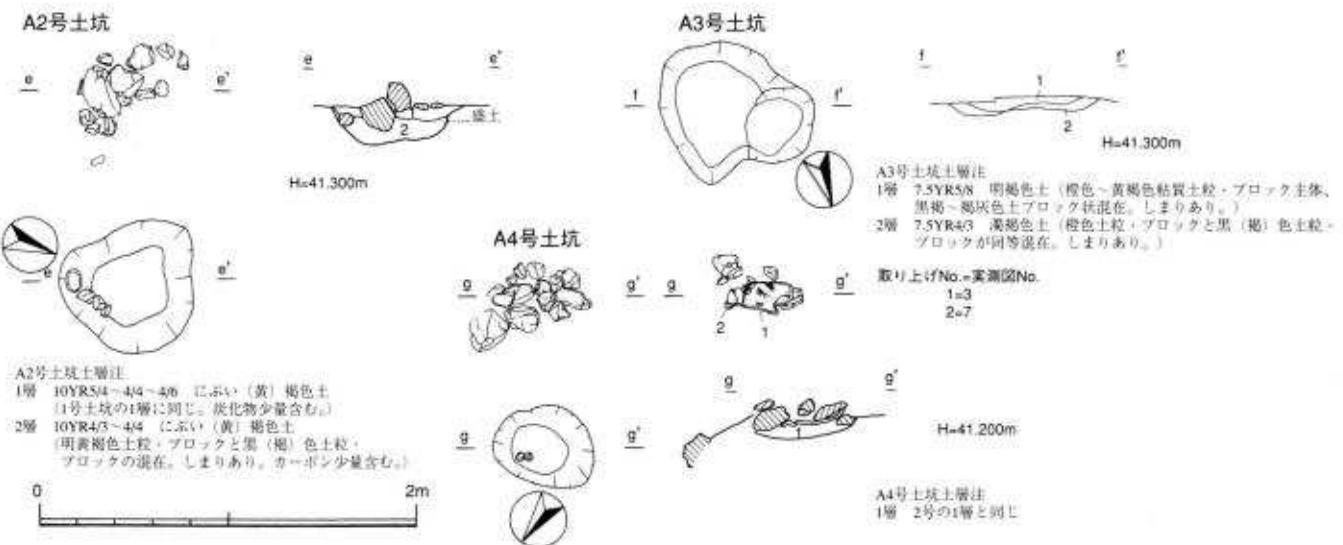


A1号土坑土層注  
 1層 10YR5/4-4/3~4/4 に5% (黄) 黄褐色土 (しまり劣るが。  
 手位近くであります。)  
 2層 10YR3/4 暗褐色土 (1層土に黒(褐)色土粒・ブロック  
 (盛土2層壤土) 多量混入。明黄褐色土粒少量混入。)  
 3層 10YR4/6 褐色土 (白壤土に黒褐色土粒少量と明(赤)褐色  
 地山土粒・ブロック多量混入。しまり良い。)  
 4層 10YR4/3 に5%黄褐色土 (1層土に黄褐色土粒子多量混在。  
 しまりない。)  
 5層 2層に明(赤)褐色ブロック (大) を少量含む。

H=41.500m



第281図 F遺跡 1-A号墓基底石平面図・出土状況図、A1号土坑平面図・断面図 (S-1/40)



第282図 F遺跡A2号～4号主体部平面図・断面図 (S=1/40)

### A1号土坑

区画南側石積上端部に隣接した土坑で、礫が土坑内部に落ち込んだ状態で検出された。長辺約220cm×短辺約120cmの集石が上位にある。上層礫を除去すると、長辺約115cm×短辺約80cmの長方形区画として捉えることができた。土坑は盛土上面より掘られ、長辺144cm×短辺90cm×深さ約30cmの不整形な楕円形を呈している。上層がにぶい（黄）褐色の土で、下層は盛土崩壊土ブロックを含む褐～暗褐色土で埋っていた。遺物は落ち込んだ礫の隙間より、中世陶器片が数点出土しているが、それらは上面に散在する破片群と接合関係にある。総合的に判断すると、後世に掘り返された穴の可能性が高い。

### A2号土坑

区画中央から北東寄りで検出された土坑である。約60cm×約40cm範囲の集石が、土坑覆土に一部食い込んで見られた。土坑は盛土上面より掘られ、径70cm×70cm×深さ約20cmで不整形である。上層はA1号土坑と同じ土であり、下層もほぼ同質の土で埋っていた。1号土坑や後述する4号土坑の状況から判断すれば、後世に掘り返された穴とすべきであろう。

### A3号土坑

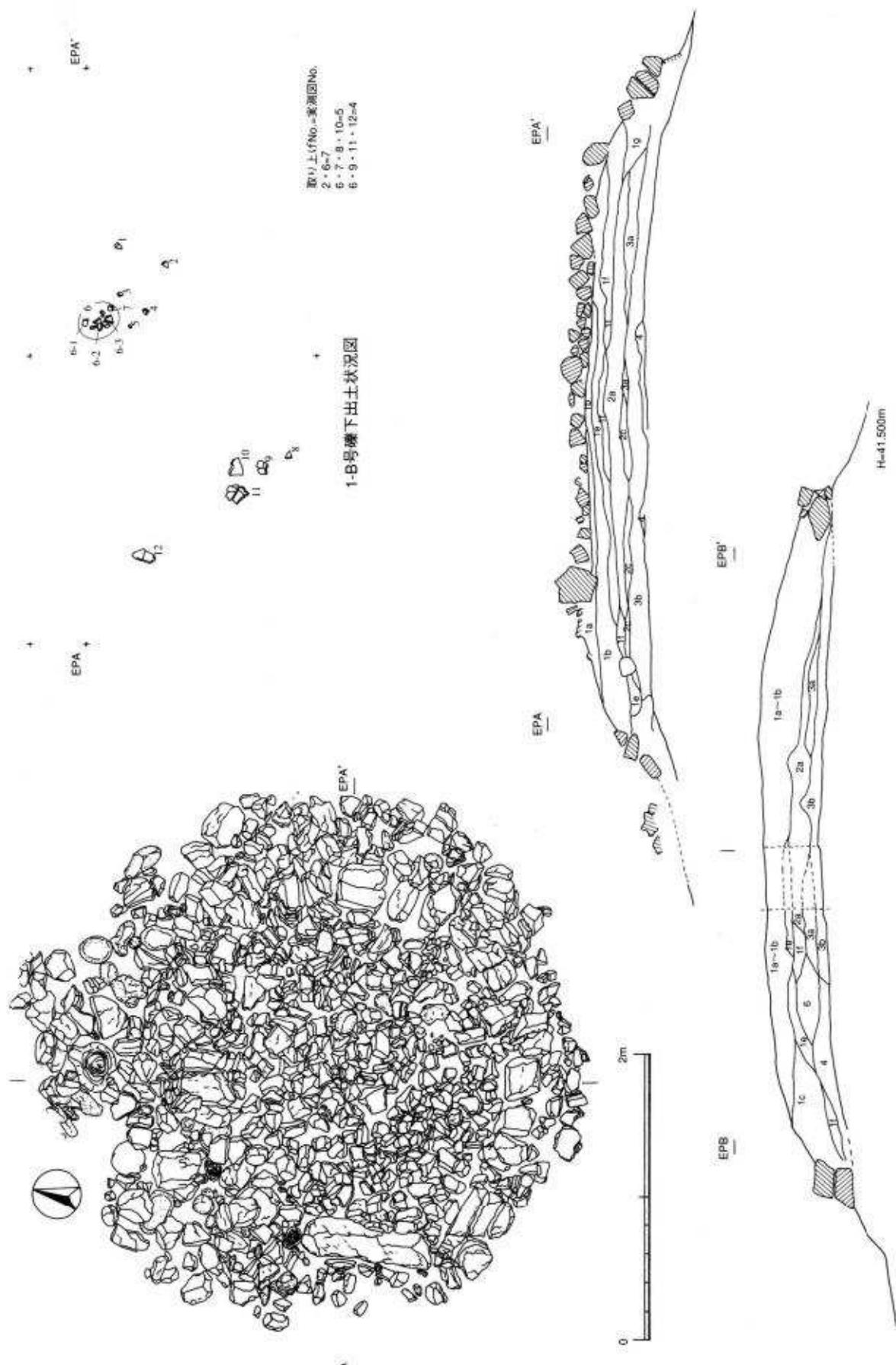
区画のはば中央に位置する土坑である。長辺約160cm×短辺約140cmの集石が上位にある。土坑は盛土途中より掘られ、確認面で長辺83cm×短辺74cm×深さ約7cmを測る。しかし、断面図上からは、18cm程度の深さを復元できる。他の土坑と違い、やや赤味を増した褐色土で埋っており、堅く締まりもよい。墓壙等1-A号墓との関連性を考えられる土坑といえる。

### A4号土坑

区画東辺に隣接して検出された土坑で、直径約50cm範囲の集石が上位に見られた。土坑は盛土上面より掘られ、長辺52cm×短辺42cm×深さ約10cmで楕円形である。覆土はA1号土坑と同じ土である。礫下より鉢の破片が2点検出された。しかし、加賀焼と洲焼の別固体であり、1号墓内部に散在する中世陶器破片や、区画外で出土した破片とも接合することから、荒らされた跡といえる。この土坑の例から、1・2・4号土坑に共通する1層は破壊行為に伴うものといえる。

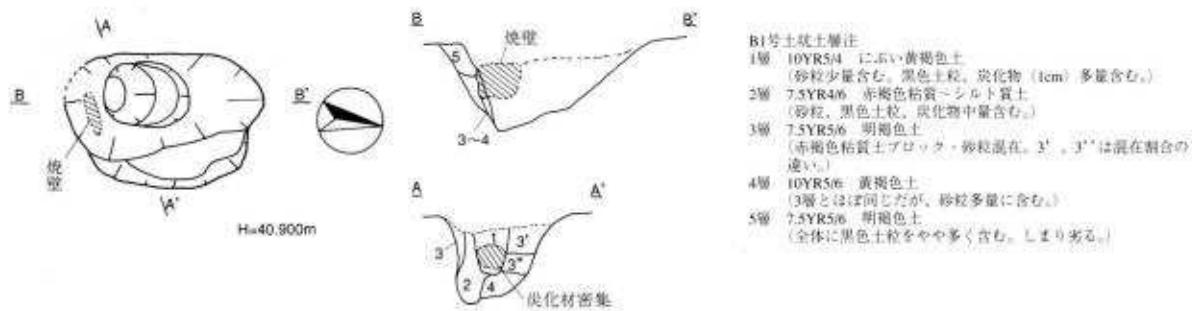
### 1-B号墓

1号墓の南側に区画延長する形で造られた墓である。長方形で、東西約450cm×南北約600cmを測る。標高約41.5mを測り、墳丘高は約60cmを測る。盛土は旧表土の上に赤褐色粘質土が敷かれ、黒褐色土、灰黃褐色～黃褐色の砂層、赤褐色粘質土の順に積まれている。区画石は2段であり、区画石には20cm大の石を使用している。1号墓南辺を埋めており、検出時には一つの墓のようにも見える。中心部に礫積がみられ、直径約370cm×高さ30cmを測る。礫積は4段見られ、最下層の石は底辺をつけたものが多く、中層の礫は尖った部分を下に向け、隙間にめ込むように置かれたものが目立ち、安定感を出し高く積むための工夫が見られる。外形は円ではなく多角形

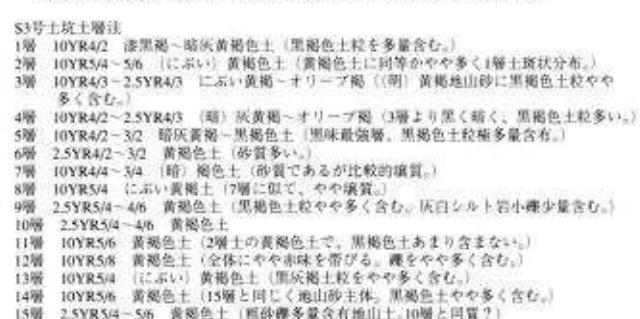
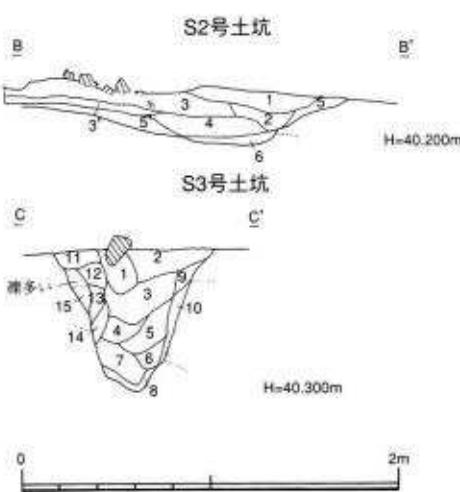


第283圖 F遺跡1-B號墓中央集石平面圖・盛土断面圖 (S=1/40)

### B1号土坑



### S1~3号土坑



第284図 F遺跡 B1号土坑・S1号土坑～S3号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

であり、おそらく六角形を意識していると考えられる。背景に1-A号墓と同様の仏教思想が読み取れる。上面に散在して見られた中世陶器破片と碟下から出土した破片は接合関係にあり時期差はない。さらに、1-A号墓側に散在する破片とも接合する。しかし、盛土には荒らされたような痕跡は検出されておらず、上面からの掘り込みもない。一方で、盛土下から墓壙と考えられる土坑が検出されている。

#### B1号土坑

1-B号墓中央部分で検出された土坑である。長径114cm×短径70cm×深さ約45cmを測る楕円形であり、擂鉢状をなす。覆土は褐色系の土で埋っており、断面図から、3~4層は掘り方埋土と考えられる。ピット状に残る中央部分の覆土は、多量の炭化材を含んでおり、その壁は焼結した状態であった。その他の遺物や、骨片は出土しておらず、その正確は不明である。しかし、この土坑の構築は、1-B号墓構築前であり、その後搅乱を受けていないことは確実である。よって、墓を造る全段階の埋納行為に伴う土坑であると考える。

#### 1号墓総括

1号墓は最終段階において中世陶器片が散乱した状態であった点は、前述したとおりである。ここでは、そこから読み取ることについて検討する。第一に散乱した遺物は、1-A号墓・1-B号墓上であること、碟の上か下か、土坑外か内かという要素全てに関係なく接合関係にあることが挙げられる。次に、1-A号墓には荒らされた跡があり、1-B号墓の盛土には荒らされた跡がないことが挙げられる。これらのことから、幾つかの推論を提示したい。

- ① 所々を掘り返す方法で、1-A号墓上を荒らした時に、遺物が散乱したと見る見解である。ただし、遺物の接合関係から1-B号墓の碟積内部も荒らされている必要がある。
- ② 1-B号墓の碟積みを構築する際に1-A号墓側に積まれていた碟を移動した。
- ③ 逆に1-B号墓の碟はもっと高く詰まっていたり、1-A号墓を荒らした後、その碟が崩されて1-A号墓側へ破棄された。

各説を検証すると①・③併に、何故1-B号墓の盛土が荒らされていないかが、単に偶然1-B号墓盛土を掘り反さなかっただけとしか説明できない。また、②についても、追葬ないし、追善供養を行うのに、先人の墓を壊すのかという問題がある。しかし、丘陵下方のH遺跡での、墓の上に墓を造る状況や、石塔片を新たな墓の区画石等に転用した事実もあることから、墓に対する現代人とは異なる意識がある可能性も否定できない。

次に②説以外の場合に、その荒らした目的を検討する。壺が1点に対し鉢が6点と多いことから、破損した壺以外が持ち去られたとも考えられる。しかし、H遺跡の状況から考えればその可能性は低く、同様に有機質の容器を使用したと考えられる。また、骨が全く出土しないことからは、遺骨そのものをねらった可能性も考えられる。これは、近隣の宮竹中世墳墓の調査において、五輪塔が細かく破碎されていることから、「単純な副葬品を目指した盗掘ではなく、意図的で集団的な破壊が行われた可能性が高いと考えられる。それは、優れて本中世墓群を構築していた階層の破滅的な没落を反映していると考えられる。」という見解に当てはまる可能性もある。しかし、H遺跡では、確かに五輪塔片は破碎されたものが多いが、それを墓の区画等に転用している例もあり、一概にはいえない。

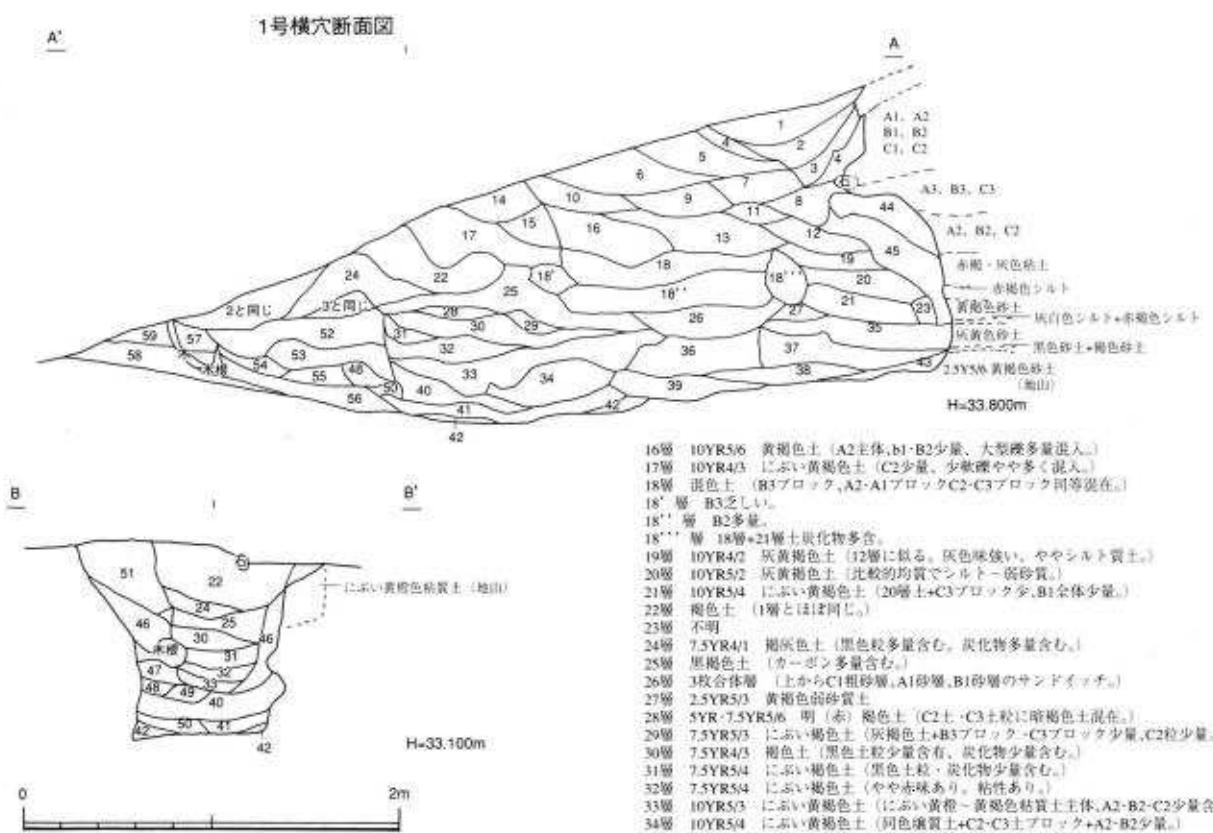
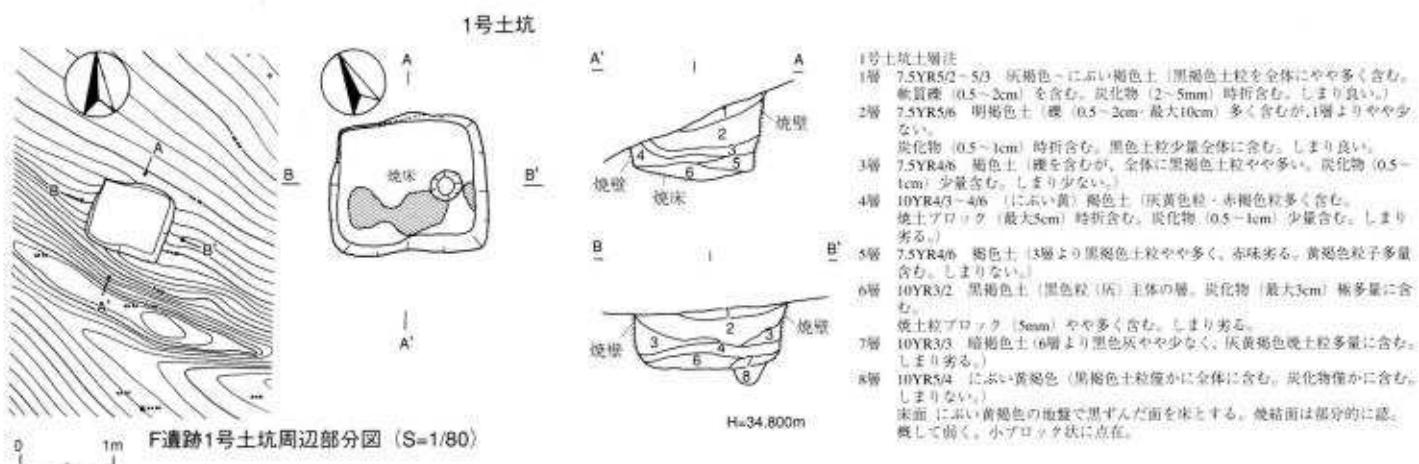
最後にこの墓の構築時期について述べる。出土した遺物は中世陶器のみで、使用痕も認められることから、使用年代を考慮しなければならないが、13世紀前半～中頃までには造られていたと考える。

#### 第2項 他の遺構（第285～287図）

横穴3基、焼土坑である1号土坑、1号墓南側に土坑3基を確認している。これら3基の土坑と1号墓との関係は不明である。S1号～3号土坑と呼称する。

#### S1号土坑

1号墓南面西側に位置する落込みである。確認部分で長径350cm×短径240cm×深さ約25cmを測る。上層が炭化物含む黒色土、下層はにぶい褐色土で埋っていた。5層が埋った段階で一度掘り込まれている。掘り込み幅は156cmを測る。時期不詳である。



A1-2.5YR6/6 明黃褐色砂質土 A2-シルト質土 A3-粘質土  
B1-2.5YR6/2-8/1-7/1 黑褐色砂質土 B2-シルト質土 B3-粘質土  
C1-5YR4/6-4/8 黄褐色砂質土 C2-シルト質土 C3-粘質土  
D-暗褐色土 塗質 (=シルト) 土

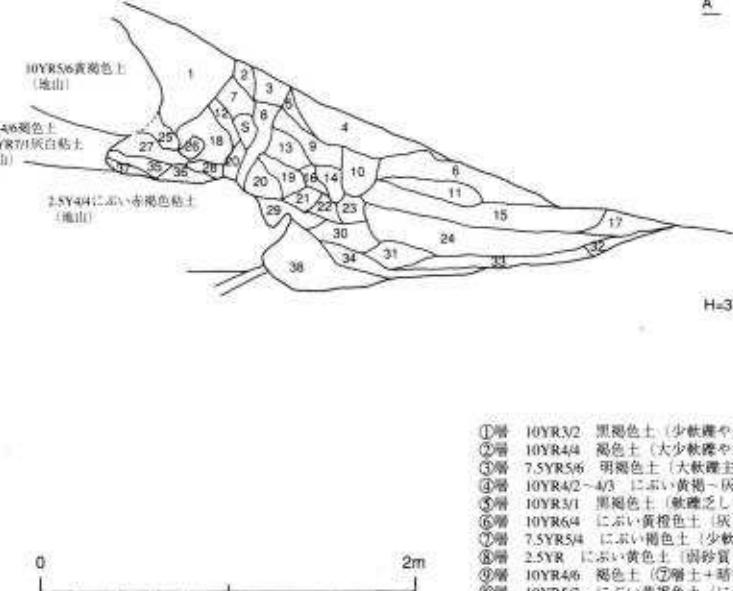
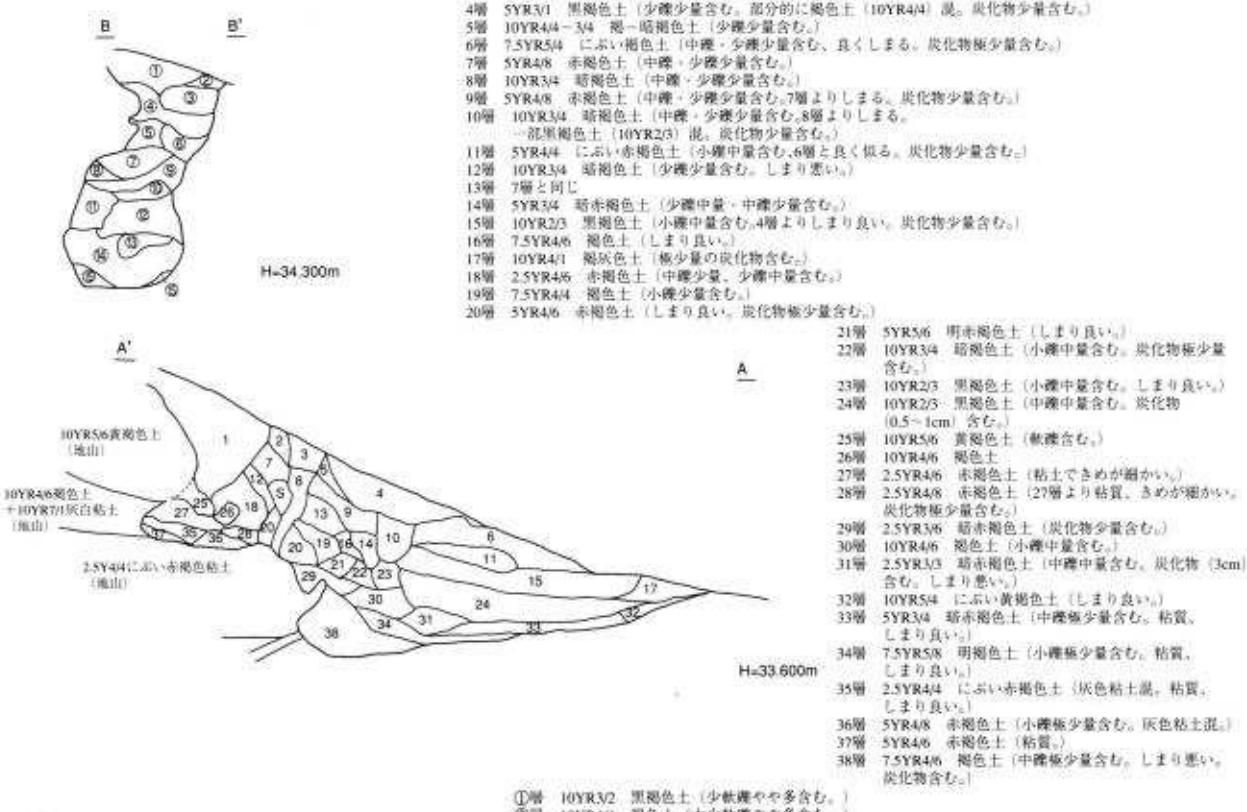
1号横穴層注

- 1層 7.5YR4/0 褐色土 (小軟靡少量含む。)  
2層 7.5YR3/1-3/2 黑褐色土 (小軟靡中量含む。)  
3層 7.5YR4/0 (灰) 褐色土 (小軟靡中量含む。)  
4層 7.5YR5/4-5/6 (にぶい灰-明褐色土 (小軟靡少量含む。))  
5層 5YR5/6 明赤褐色土 (小軟靡少量含む。暗褐色土粒やや多く含む。)  
6層 5YR5/6 明赤褐色土 (5層よりA2を多く含む。)  
7層 褐色土 (A2少能含む。大型軟靡多量含む。)  
8層 5YR4/8 赤褐色土 (C2多、A2少、中秋靡やや多、D土少量。)  
9層 10YR5/6 黄褐色土 (A2多、B2僅少、軟靡乏しい。)  
10層 5YR4/8 赤褐色土 (C2主体、A2僅少、軟靡少量。)  
11層 2.5YR5/4 黄褐色土 (A2主体、軟靡乏、D土粒多量。)  
12層 10YR4/3 (にぶい黄褐色土 (やや均質な壤質土、軟靡乏しい。))  
13層 混色土 (C3-B3土多、A2上少量、にぶい黄褐色土少量。)  
14層 1層 褐色土  
15層 7.5YR4/6 褐色土 (穢少、C2土粒少量、ややにぶい。)

第285図 F遺跡1号土坑平面図・断面図・1号横穴断面図 (S=1/40)

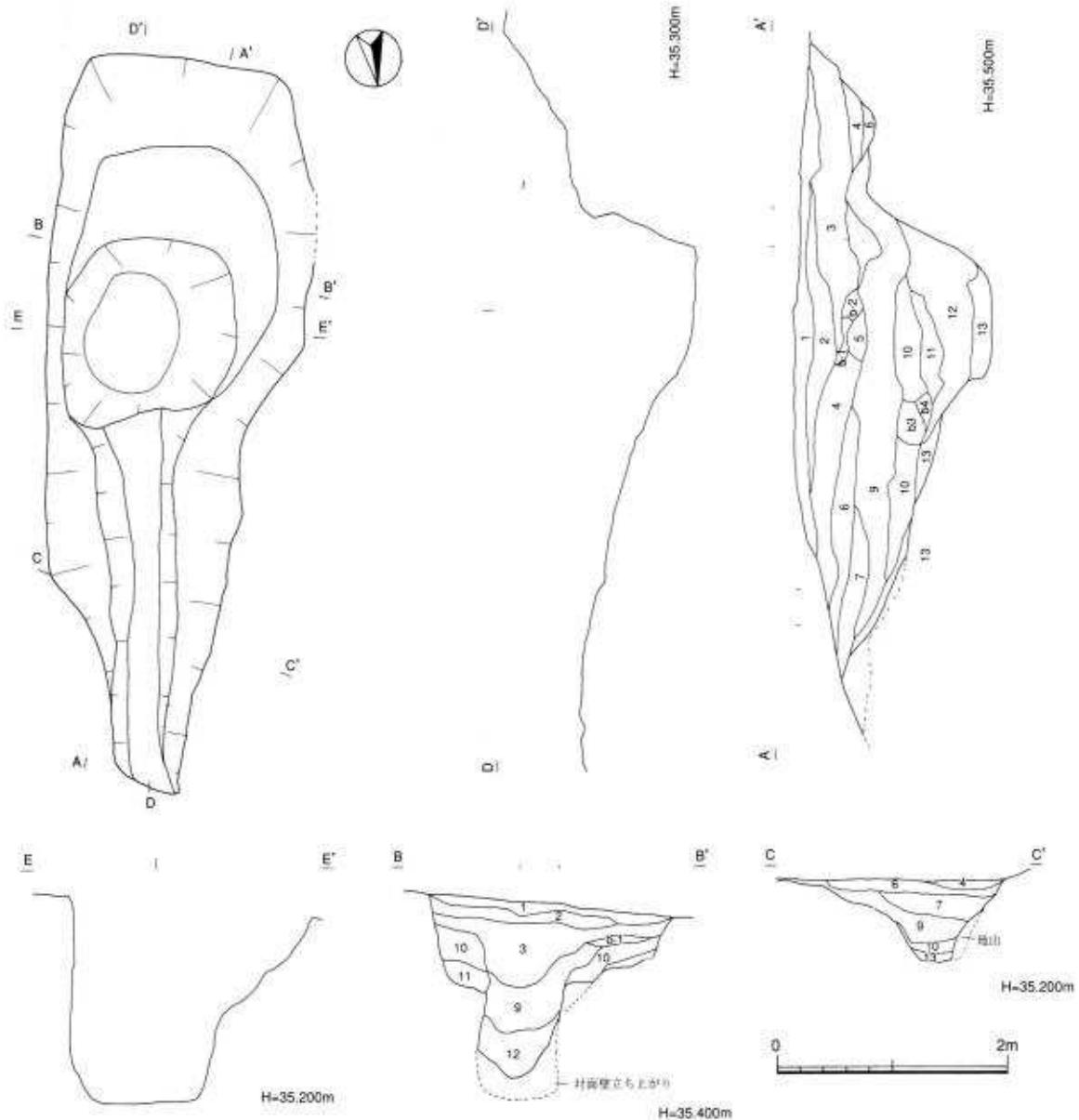


2号横穴断面図



- ①層 10YR3/2 黑褐色土 (少軟塵やや多含む。)
- ②層 10YR4/4 褐色土 (大少軟塵やや多含む。)
- ③層 7.5YR5/6 明褐色土 (大軟塵主体、疊層土。)
- ④層 10YR4/2-3/4 にぶい褐土 - 灰黃褐色土 (少軟塵やや多含む。極軟質。)
- ⑤層 10YR3/1 黑褐色土 (軟塵乏しい。)
- ⑥層 10YR6/4 にぶい黃褐色土 (灰白色粘土ブロック少量含む。しまり良い。)
- ⑦層 7.5YR5/4 にぶい褐色土 (少軟塵少量含む。炭化物やや多含む。)
- ⑧層 2.5YR4/4 にぶい黄色土 (崩砂質～砂質均質土。)
- ⑨層 10YR4/6 褐色土 (⑦層土 + 疊層土多含む。炭化物やや多含む。)
- ⑩層 10YR5/3 にぶい黃褐色土 (にぶい黄色土粒やや多く含む。)
- ⑪層 10YR4/4 褐色土 (黃褐色軟ブロック + 灰黃褐色軟ブロック。)
- ⑫層 10YR3/3 暗褐色土 (暗褐色土粒 + 黑褐色土粒。少軟塵少量。炭化物多量含む。)
- ⑬層 10YR5/4 黃褐色土 (ややにぶい黑色土粒微量含む。少軟塵少量含む。)
- ⑭層 10YR4/4 褐色土 (黑褐色土 + 黑褐色土粒。疊状ブロックや多量進入。後者ブロック中) 炭化物多量含む。)

第286図 F遺跡1・2号横穴平面図・2号横穴断面図 (S=1/40)



#### 3号横穴土層注

- 1層 7.5YR3/4 暗褐色土（しまり劣る。）
- 2層 7.5YR5/4 にぶい褐色土（B2土主体にAブロック土20%、暗褐色土ブロック10%混入。）
- 3層 7.5YR4/2~4/3（灰）褐色土（暗褐色土を基盤、Aブロック土（最大10cm大ブロック）40%、B1-B2ブロック少量混入。）
- 4層 5YR4/4 にぶい赤褐色土（Aブロック土（最大10cm大ブロック）70%、B1-B2ブロック少量、基盤的にC土少量とD土ブロック（20%程度）混入。）
- 5層 淡赤褐色土（Aブロック土主体にC土少量基盤。）
- 6層 10YR5/4 混にぶい黄褐色土層（C土主体にAブロック土（最大3cm小～中ブロック）多量（30%）混入。）
- 7層 10YR5/4 混にぶい黄褐色土層（C土主体でAブロック土の混入やや劣る（20%）。）
- 8層 破片。
- 9層 2.5YR5/4 淡黃褐色土（C土主体でAブロック土（小～大ブロック）20%程、B1-B2土ブロック極少量混入。）
- 10層 5YR4/8 淡赤褐色土（A土大ブロック主体にC土・D土・E土・明褐色土少量混入。）
- 11層 2.5YR5/4 黄褐色土（C土主体でB1土ブロック・D土粒・E土粒を少量混入。）

- 12層 黒褐色土（黒褐色土60%、A土ブロック30%、その他、B2・D・C・Eを少量混入。黒褐色土とA土は互層的に堆積。）
- 13層 灰白色シルト質土（E土にA土ブロック少量混在。）
- b1 C土ブロック
- b2 暗褐色ブロック、B1土ブロックに少量のC土及びA土混入ブロック層。
- b3 10層土中にD土が多量に入るブロック層。
- b4 D土を主体にB1土少量混入ブロック層。
- A 2.5YR4/6~5YR4/6 赤褐色粘質土
- B1 7.5YR5/4~5YR5/6 にぶい橙色粘質土~7.5YR5/6~5YR7/2 明褐色粘質土
- B2 10YR7/2~7/3 にぶい黄褐色粘質土
- C 2.5YR6/4~5/4~5/6 にぶい黄色～にぶい黄褐色（小粒質砂（2~5mm）多量混入細粒質シルト質土）
- D 2.5YR6/2 灰黄色シルト質土
- E 灰白色シルト質土

第287図 F遺跡 3号横穴平面図・断面図 (S=1/40)

### S2号土坑

1号墓南面東側に位置する。長径182cm×短径94cm×深さ約30cmを測る。覆土は全体にしまりが弱く柔らかい黄褐色系の土で埋っているが、4層のみ黒褐色土である。内部に礫が多く混入していた。時期不詳である。

### S3号土坑

1号墓南面東側に位置する。径94cm×短径70cm×深さ約76cmを測る楕円形の土坑である。覆土は全て極めて軟弱な砂質土で、炭化材（最大2cm大）を含んだ黄褐色系の土で埋っている。時期不詳である。

### 1号土坑（焼土坑）

西尾根の3号墳南西斜面上に位置するほぼ正方形の土坑である。長辺83cm×短辺73cmで、深さは斜面の上側で40cm、下側で10cmを測り、壁面が急角度立ち上がる箱型を呈する形態である。全壁面で焼結した範囲を検出している。床面は水平に造られ、斜面下側寄りで焼結した部分を検出している。床面の焼結は弱い。床面東側隅部から、長径18cm×深さ10cmの小ピットが検出されている。上層より褐色系の土で埋っており、中層の4・5層のみで焼壁の崩落土と考えられるブロックを含んでいる。下層は炭・灰を多量に含んだ黒褐色土で埋っていた。時期不詳である。

### 1号横穴

1号墳西側の墳丘裾部に掘り込まれた穴である。長さ420cm×幅130cmを測る。壁の高さは最も高い部分で残存高約150cmを測る。覆土は上層の堆積土以外は地山土が殆どの層に混入しており、その混入状態によって分層される。褐色土、黒褐色、暗褐色、赤褐色、（にぶい）黄褐色土の色調で分けられる。平らな板状に埋っており、天井ないし壁面崩落土の可能性もある。確認した部分は通路状部分のみであり、通路幅は約70cmである。入り口部分は、断面図上での確認だが、段状に高くなっていたようである。穴は北側に折れ、さらに奥に向かって続いている。遺物は全く出土しておらず、その性格も不明である。

### 2号横穴

1号墳西側の墳丘裾部に掘り込まれ、1号横穴の北側に位置する。長さ220cm×幅100cmを測る。壁の高さは最も高い部分で残存高約150cmを測る。覆土は褐色土、黒褐色、暗褐色、赤褐色、（にぶい）黄褐色土、灰黃褐色の色調で分けられる。入り口部分は段状なっており、1号横穴と同様の様相を示す。ただし、奥の地点の堆積状況は異なり、この部分に開口部があった可能性がある。確認した部分は通路状部分のみであり、通路幅は約60cmである。穴は西側に折れ、さらに奥に向かって続いている。1号横穴と連結する可能性もある。遺物は覆土に混入した古墳時代中期の土師器以外出土していない。

### 3号横穴

1号墳北側の墳丘状に構築されている。開口部は北側を向き、全長730cm測り、玄室部分で長さ上部410cm床面で225cm、上部幅205cm、下部幅120cmを測る。高さは最も高い部分で残存高約160cmを測る。羨道部分は、長さ320cm、上部幅70cm、下部幅25cmを測り、中央よりやや東寄りに取り付けられている。覆土は、上層の堆積土以外は地山土が殆どの層に混入しており、その混入状態によって分層される。褐色土、黒褐色、暗褐色、赤褐色、（にぶい）黄褐色土、灰白土の色調で分けられる。9層が玄室全体を覆うように堆積している。玄室部分は入り口付近に寄った位置に、一辺150cm角を測る隅丸方形土坑が掘り込まれている。しかし、断面で見ると入り口側の立ち上がりは緩やかで、スロープ状に降りてくる羨道部分と連結している。奥側の立ち上がりは急である。また、下底から高さ約110cmのところで段になっており、奥行幅80cm程度の平坦面を成し、羨道入り口部とは同じ高さである。遺物は全く出土しておらず、その性格も不明である。

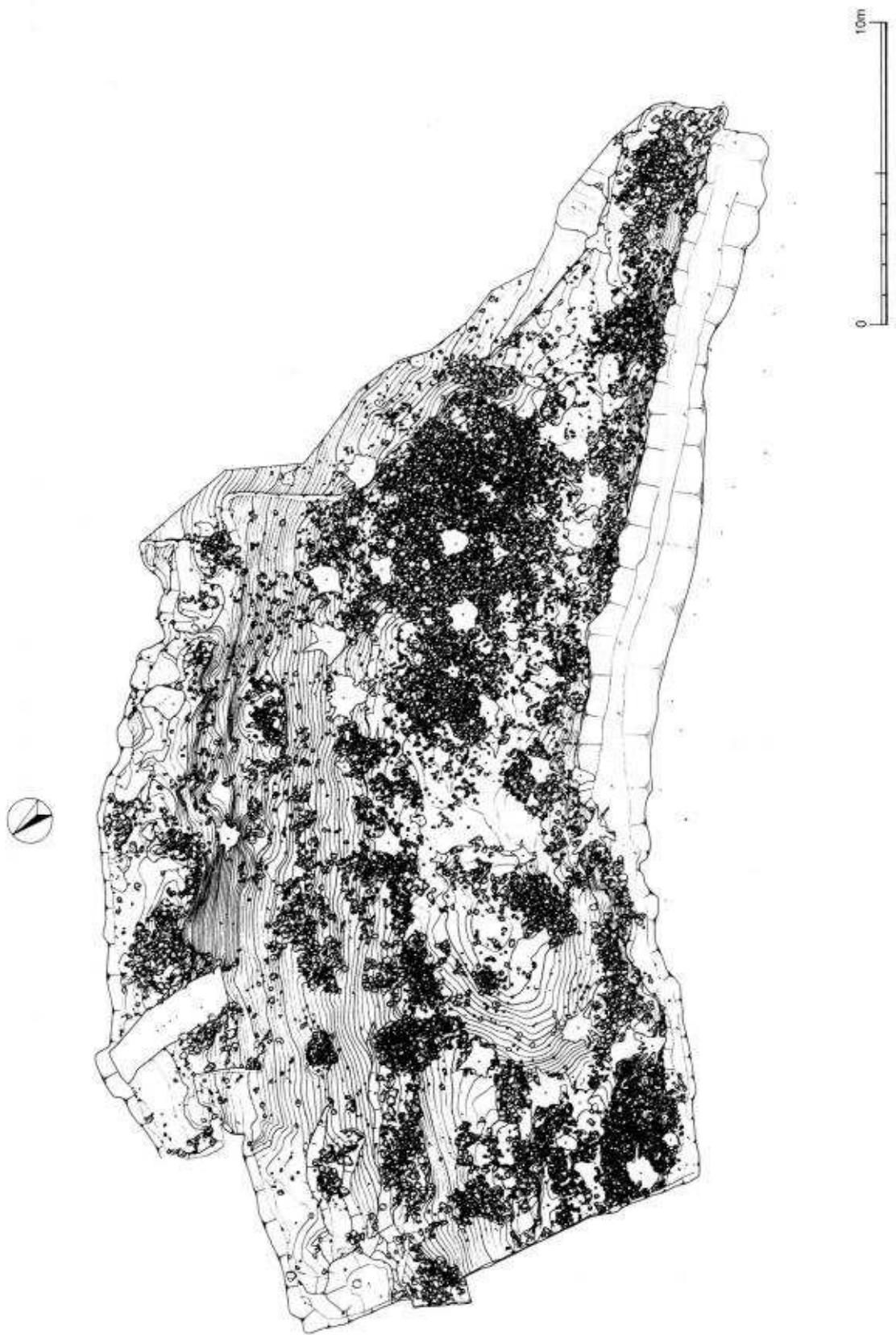
## 第3節 H遺跡の調査

F遺跡の南側斜面に展開された中世墓群であり、ほぼ集石墓で占められている。調査区の設定及び経過の特殊性については、第1章第2節を参照して頂きたい。今回報告にあたり、調査所見と実測図面等の再検討を行い、墓群をI～XV群に再編した。調査時に便宜上使用していた地区割りは使用していない。全体的な造墓過程の検討は、F遺跡とも合わせて考える必要があるため、総括で行うこととした。

第288図 八里向山H遺跡配置図 (S=1/250)

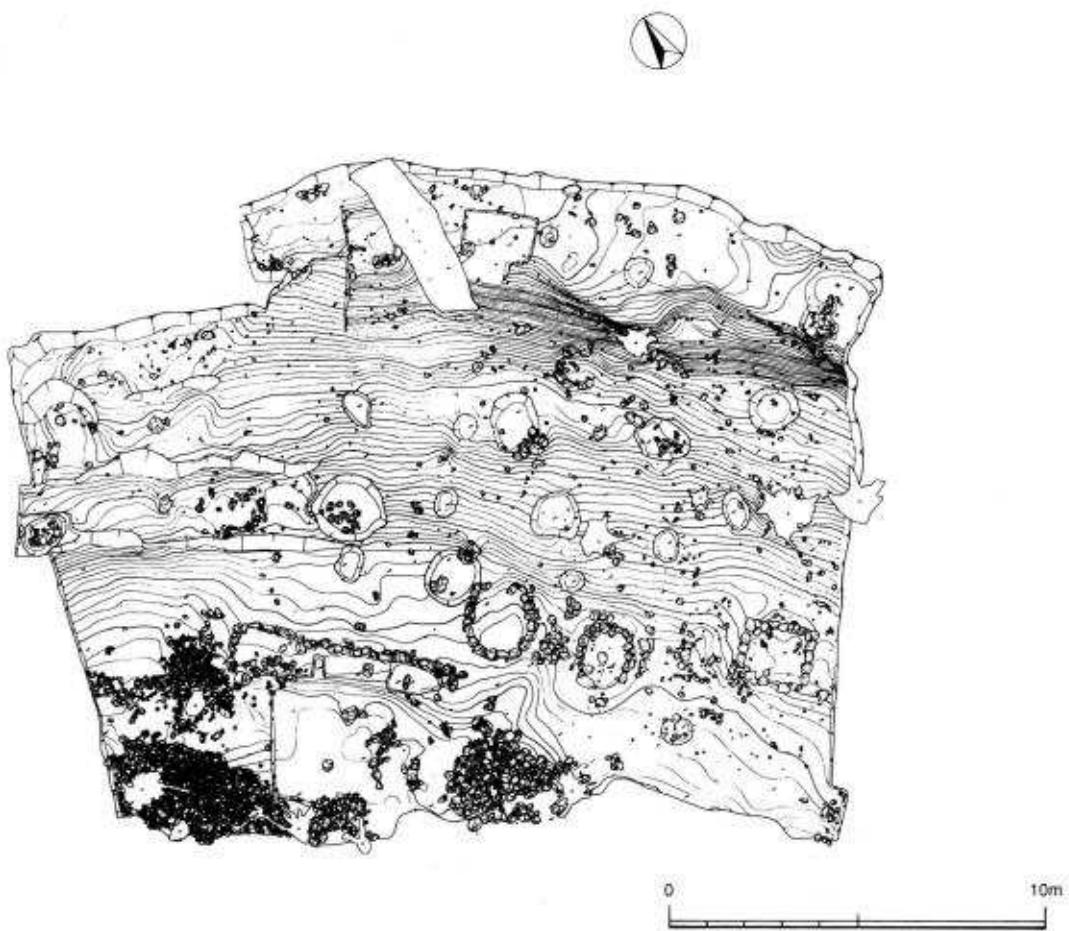


第289図 八里向山H遺跡平面図 1回目 (S=1/200)



第290図 八里向山H遺跡平面図 2回目 (S=1/200)





第291図 八里向山H遺跡平面図3回目 (S=1/200)

### 第1項 I群の調査 (第292~294図)

調査区内最上段に造られたテラスに位置する。標高は約17.8mを測る。その地点より上の斜面は既に削られた状態であり、その影響で一部搅乱を受けている。西側より遺構番号を付している。墓の法量は、斜面に平行する辺を東西、直行する辺を南北として表示している（以下同様）。

#### I-1号墓

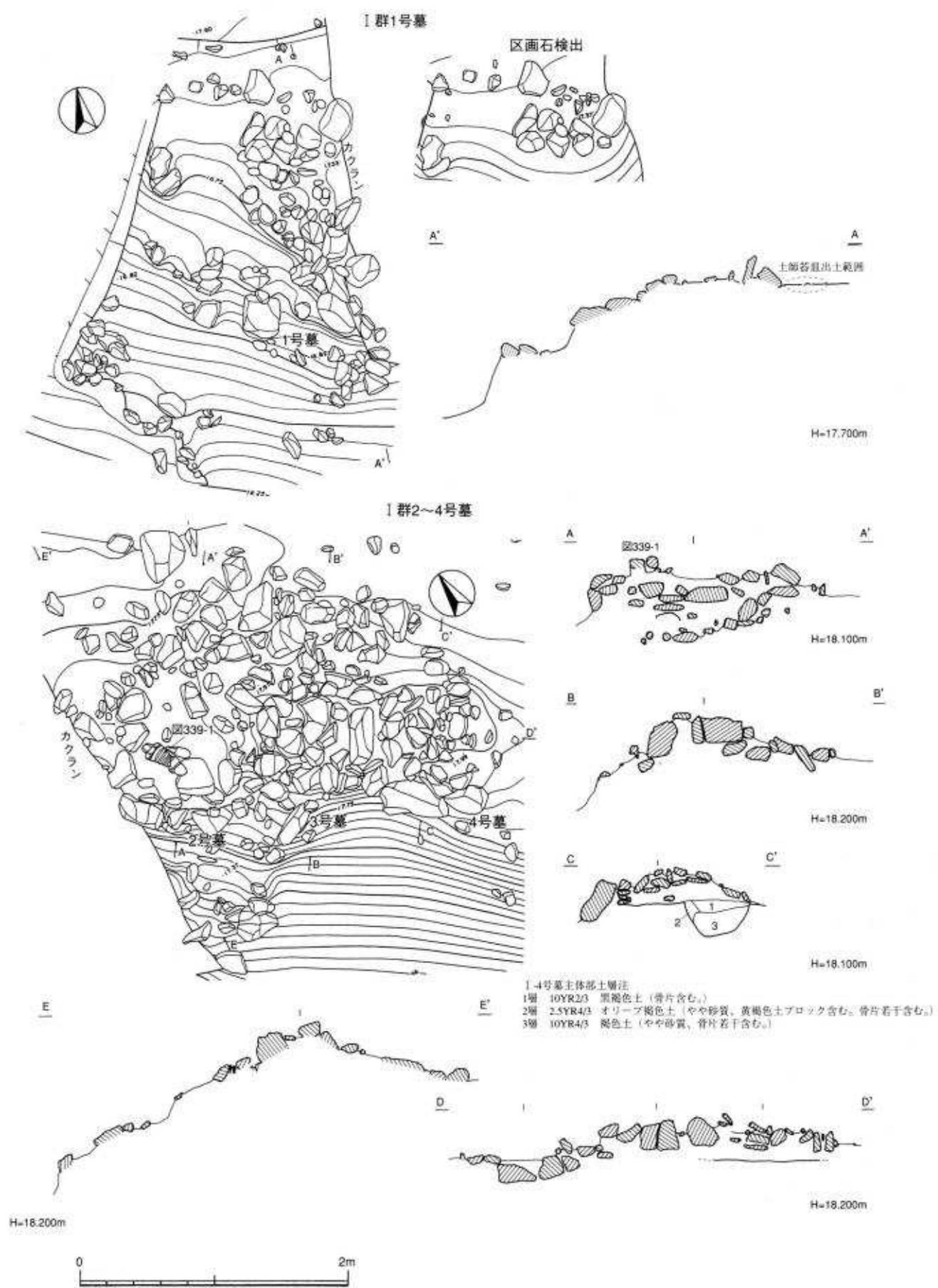
東西200cm×南北250cmの範囲における集石である。西側と南側は流出しており、東側と北側は搅乱を受けている。点在する約30cm大の礫が区画を示していた可能性がある。北辺寄りに集石が見られ、その北側から土師器皿が出土しており、その部分が主体部とも考えられる。南西方向に流出した礫群のなかに五輪塔の破片が出土したが、破碎片のみである。

#### I-2号墓

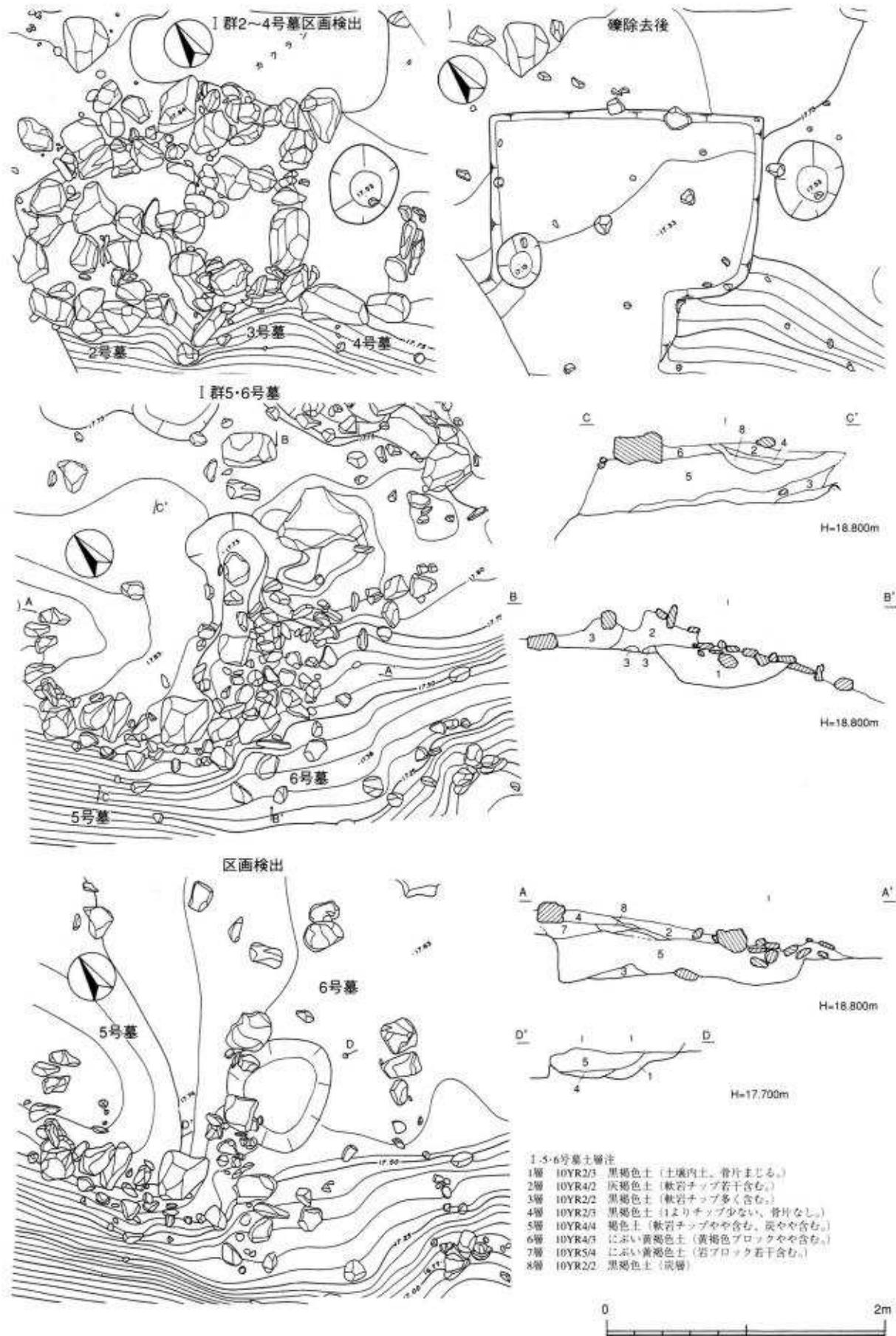
120cm四方の範囲で約20cm大の礫で区画された墓である。内部には土が充填されており、1辺が約30cmを測る扁平な石と、宝塔の相輪部分が出土している。土を除去すると内部は礫によって南北に2分し、さらに南区画のみを東西に分ける形で3区画に分けられていた。蓋石と考えられる礫があった南西隅の区画の下のみに墓壙を確認した。

#### I-3号墓

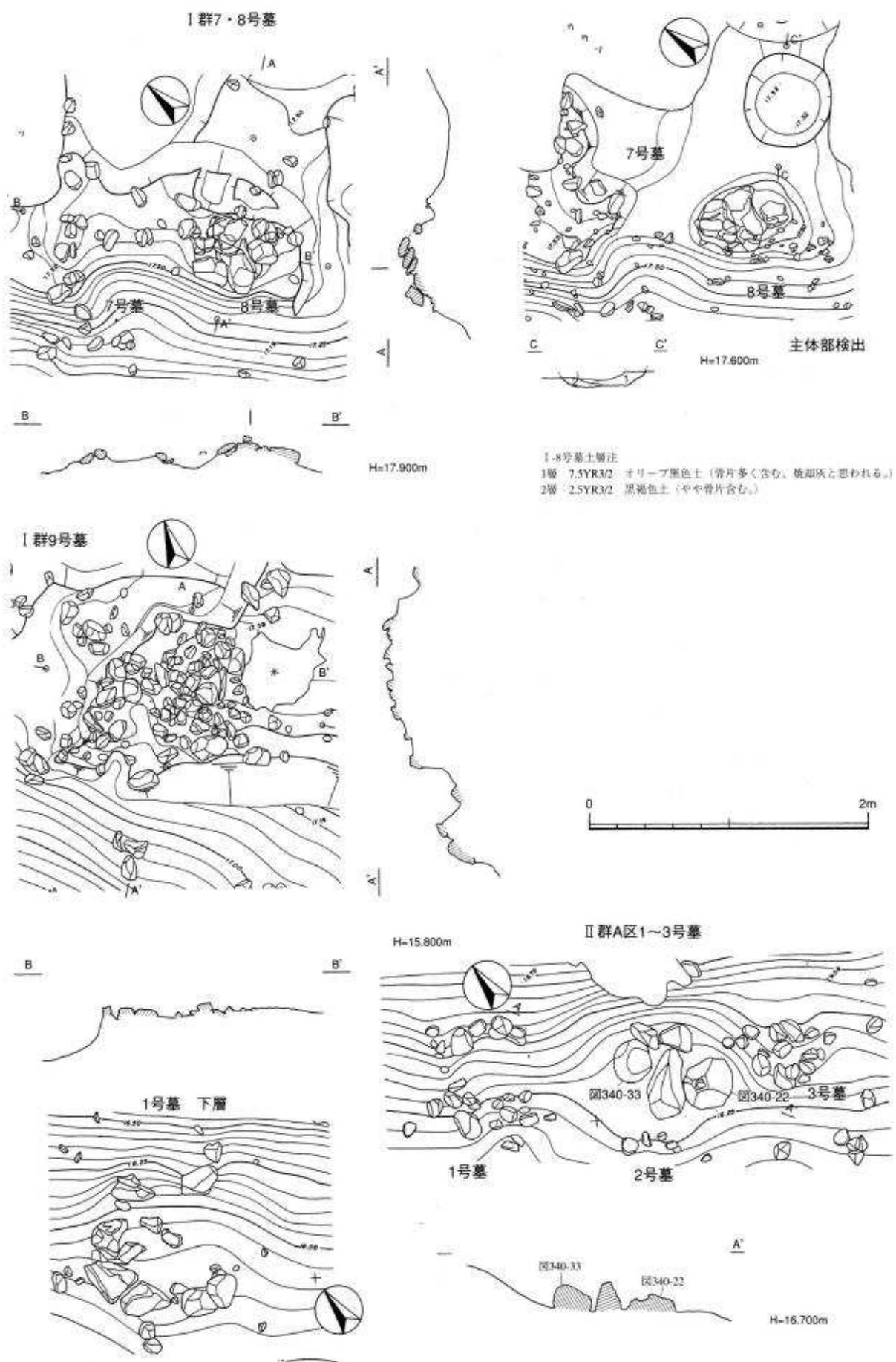
2号墓と4号墓の間に約20~40cm大の礫を充填する形で造られた墓である。東西60cm×南北130cmを測る。内部の礫を除去すると南北に2区画に分けられていた。



第292図 H遺跡I群1~4号墓平面図・断面図 (S=1/40)



第293図 H遺跡 I群 2～4号墓平面図・断面図 (S=1/40)



第294図 H遺跡Ⅰ群7～9号墓・Ⅱ群A区1～3号墓平面図・断面図 (S=1/40)

#### I-4号墓

東西100cm×南北120cmの区画をなし、西側と南側に長辺約50cmを測る長方形の礫を使い区画を示している。東側と北側の辺は明確な区画を示す礫がなかった。内部は土の上に礫を敷く形態をとる。その礫及び土を除去すると、長径約60cmの楕円形をした墓壙が検出された。充填土中から土師器皿小皿の破片や火葬骨片が出土している。

#### I-5号墓

4号墓より東に約30cm間隔をあけて造られた墓である。東西120cm×南北100cmを測り、前面にのみ大型の礫が区画石に使用されている。北側の区画は搅乱のためか既に失われていた。内部は土のみである。南側区画石前面より土師器皿小皿が出土している。

#### I-6号墓

5号墓の東側に接し、明確な区画石を持たず集石のみで表象された墓である。東西50cm×南北100cmを測る。礫除去後、長径約80cmの墓壙が検出されている。その埋土中より比較的多く土師器皿が見つかっているが、完形品ではなく破片のみである。また、火葬骨片も検出されている。

#### I-7・8号墓

搅乱を受けているが、東西170cm×南北70cmの范围内に見られる小礫による区画を7号墓、その東側の集石を8号墓とした。7号墓は既に北側が搅乱により失われている。8号墓は上層の礫及び土を除去すると、大礫が3個並んだ状態で検出され、標識と考えられる。また、その背後から長径約70cmの墓壙が検出されている。

#### I-9号墓

調査区の東端で検出した120cm四方圏内の集石である。搅乱等により流失したとも考えられるが、明確な区画石を持たない。他のI群の墓とは主軸を異にするため、別グループの造墓であろう。

### 第2項 II群の調査（第294～295図）

調査区内中央部でI群の直下に造られたテラスに位置する。標高は約16.3mを測る。空間によってA区とB区に分けられる。A区は、調査時には墓としては捉えていなかったが、ここでは3基の墓として報告する。B区は、西側に外縁を礫で囲む形態のものと、東側に前寄りに石塔が建ち、周囲に礫が充填される形態の墓のセットが2組並ぶものである。より近い血縁関係が想定できる。II群の背面と西端部分は搅乱を受けたため失われたものと考えられる。西側より遺構番号を付している。

#### II-A-1号墓

東西70cm×南北80cm圏内における区画であるが、西側と東側は明確ではない。上層除去後、径約40cm大礫による区画検出したことからも墓と考える。東側の区画石は欠損していた。

#### II-A-2号墓

東西80cm×南北70cm圏内の五輪塔の部位を含む大型礫による集石である。墓というよりは、倒壊した塔等を片づけた跡と考えるべきものであろう。五輪塔は火輪と水輪である。

#### II-A-3号墓

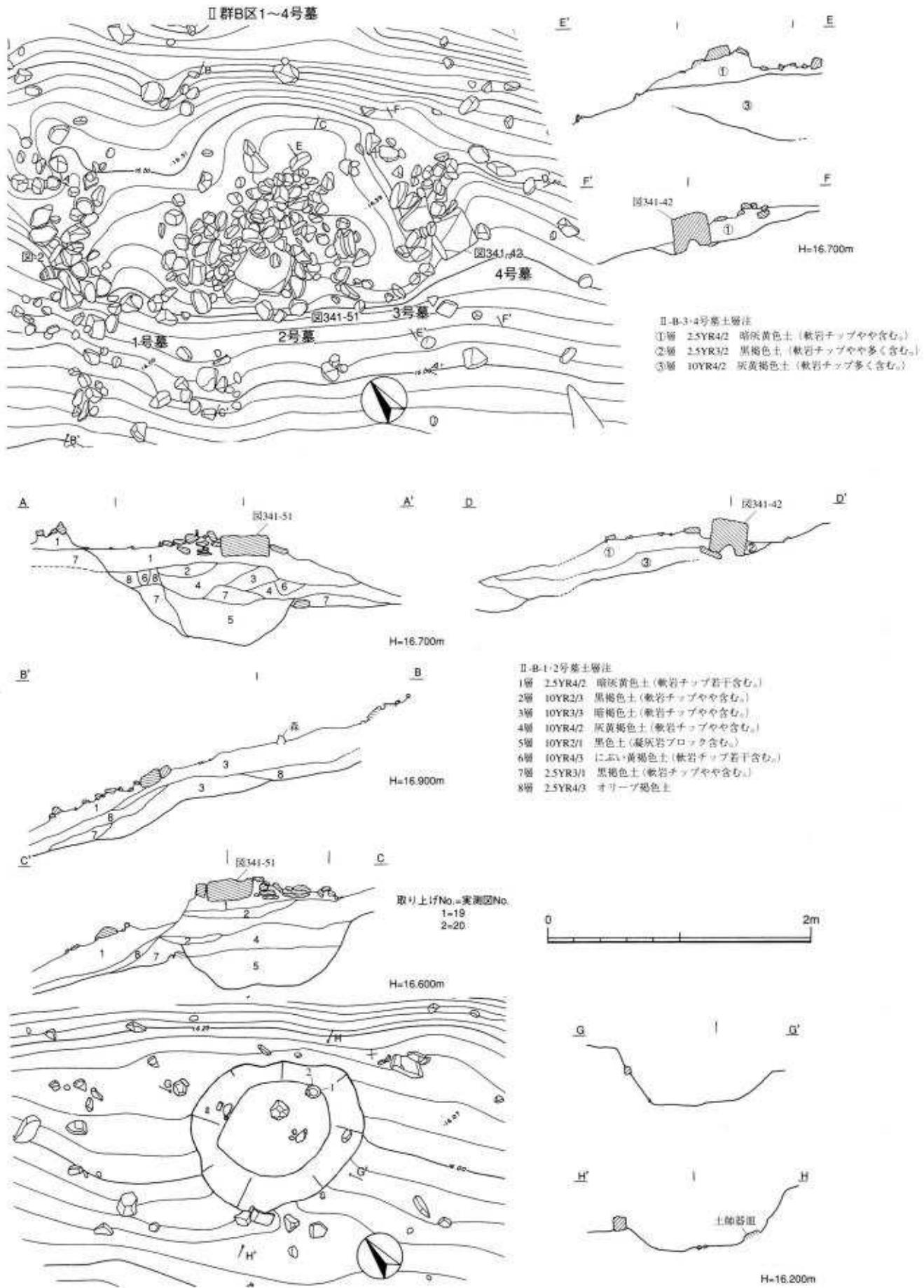
50cm四方を圏内とする約10～20cm大礫による集石である。詳細は不明である。

#### II-B-1号墓

約100cm四方の縁辺部を礫で囲んだ形態の墓と推察される。但し、北辺および東辺はII-B-2号墓の造成時に失われている。南側前方の礫は南辺の区画礫が流出したものと考える。区画の南西隅付近から宝塔の相輪部分の破片が検出されている。

#### II-B-2号墓

東西150cm×南北120cmの範囲に集石した墓で、石塔の台石が原位置で残っていた。縁辺部に残る径約20cmのやや大型の礫が区画石と考えられる。北西側の区画は搅乱のためか既に失われていた。集石の下に墓壙が検出されている。長径約120cmの楕円形で、深さは約50cmを測る。西側の壁は盛土されている。主に黒色土と灰黄褐色土で埋められている。土壙北東隅部分で、土師器皿大皿が2枚口を合わせた状態で出土している。蓋と身の関係にあり、内部に何かを納めたものと推察される。



第295図 H遺跡Ⅱ群B区1～4号墓平面図・断面図 (S=1/40)

## II-B-3号墓

II-B-1・2号墓とは主軸を異にする。II-B-4号墓の東側に接する形で、辺を延長し区画のみで示された墓である。東西60cm×南北100cmを測る。北西隅部はII-B-2号墓により切られていると考えられる。

## II-B-4号墓

東西40cm×南北70cmの范围内に見られる、五輪塔地輪とその背後の集石である。東側・北側の礫は、流出したものと考える。地輪は約10cm程が地中に埋められた状態で、西側には平らな石が基礎に入れられていた。破損しているが、原位置を保っていると考える。土層より、五輪塔は穴を掘って埋めたのではなく、地区全体を掘り窪めたあとに据えられ、全体に土を充填したものと考えられる。

## II群B区の造墓関係について

切り合い関係から考えて、2号墓が一番新しく、4号墓が一番古いと考えられる。石塔が建つ4号墓がまず造られ、次に区画を延長する形で四辺を礫で囲む形態の墓である3号墓が造られる。その後やや離れたところに3号墓と同じタイプの1号墓が造られ、最後に4号墓と同じタイプの2号墓が1号墓をやや壊す形で造られている。同じタイプの墓が造墓順序を逆にして造られていることは興味深い。このことから、墓の形態とその個人の持つ特質との関係を考えねばならない。墓の形態と造墓順は関係がなく、II群B区に造墓した集団内では、aという立場の人間が死ねば2号墓タイプの墓で石塔が建てられ、bという立場の人間が死ねば1号墓タイプの墓を造るということが決まっていたとも考えられる。

## 第3項 III群の調査（第296～299図）

調査区内の中段に造られたテラスに位置する。標高は約15.8mを測る。全長約16mを測り、空閑地を目安にA～D群に分かれる。西側部分は搅乱を受けている。西側より遺構番号を付しているが、一部下層より検出した墓は西側にあっても後の番号をつけた。

## III-A-1号墓

東西90cm×南北60cmの范围内における集石である。墓として報告するが確証はない。東側と北側は搅乱を受けている。径20cm程度の石が集まっているが、多くの部分は流出したものと考える。

## III群B区

III群B区は背面をカットして明確なテラスを造り出している。

## III-B-1号墓

135cm四方の範囲で、約40cm大の礫で区画した内部を土で充填し、その上面に径約20～30cmの扁平な石を敷く形態をとる。南側前方は流失しているものと考える。上層礫を除去し区画のみを残すと、背面の区画が2列になっていることが判明した。土層は、上層は灰黄褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土で埋る。背面石のすぐ傍に断面上だが窪んだ部分が見られ、そこが主体部の可能性がある。しかし、埋土中に骨片は認められなかった。

## III-B-2号墓

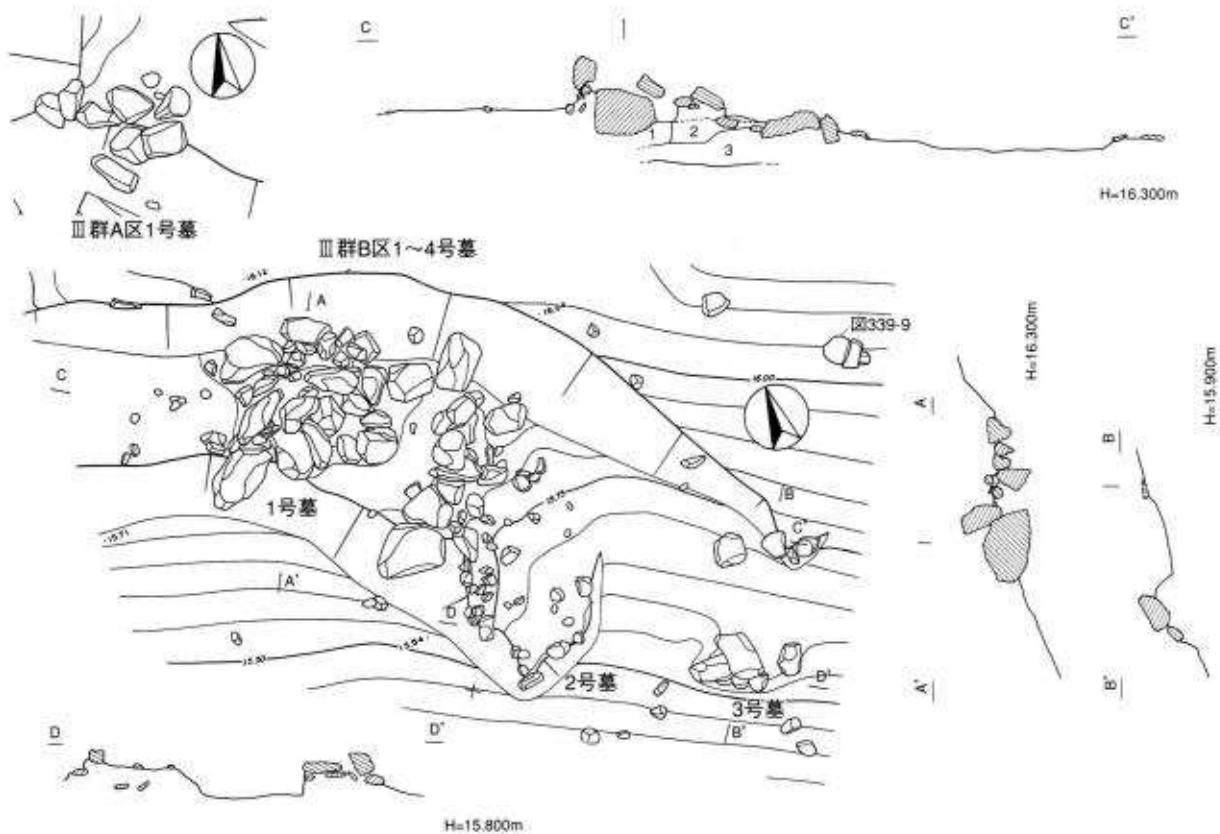
1号墓の南東に連結した墓である。東西70cm×南北120cmの範囲に小礫が散在する。搅乱等で石は流出していると考える。墓である確証はないが、1号墓には小礫が使用されていないため、新たな造墓と捉える。

## III-B-3号墓

2号墓より約70cm東に離れた位置にある、東西60cm×南北90cmの区画を3号墓とした。南側と北側の辺のみ区画石が残る。西側、東側は流出したと考えられる。下部施設等が見つかっていないこともあり、南側の礫積のみが墓である可能性もある。

## III-B-4号墓

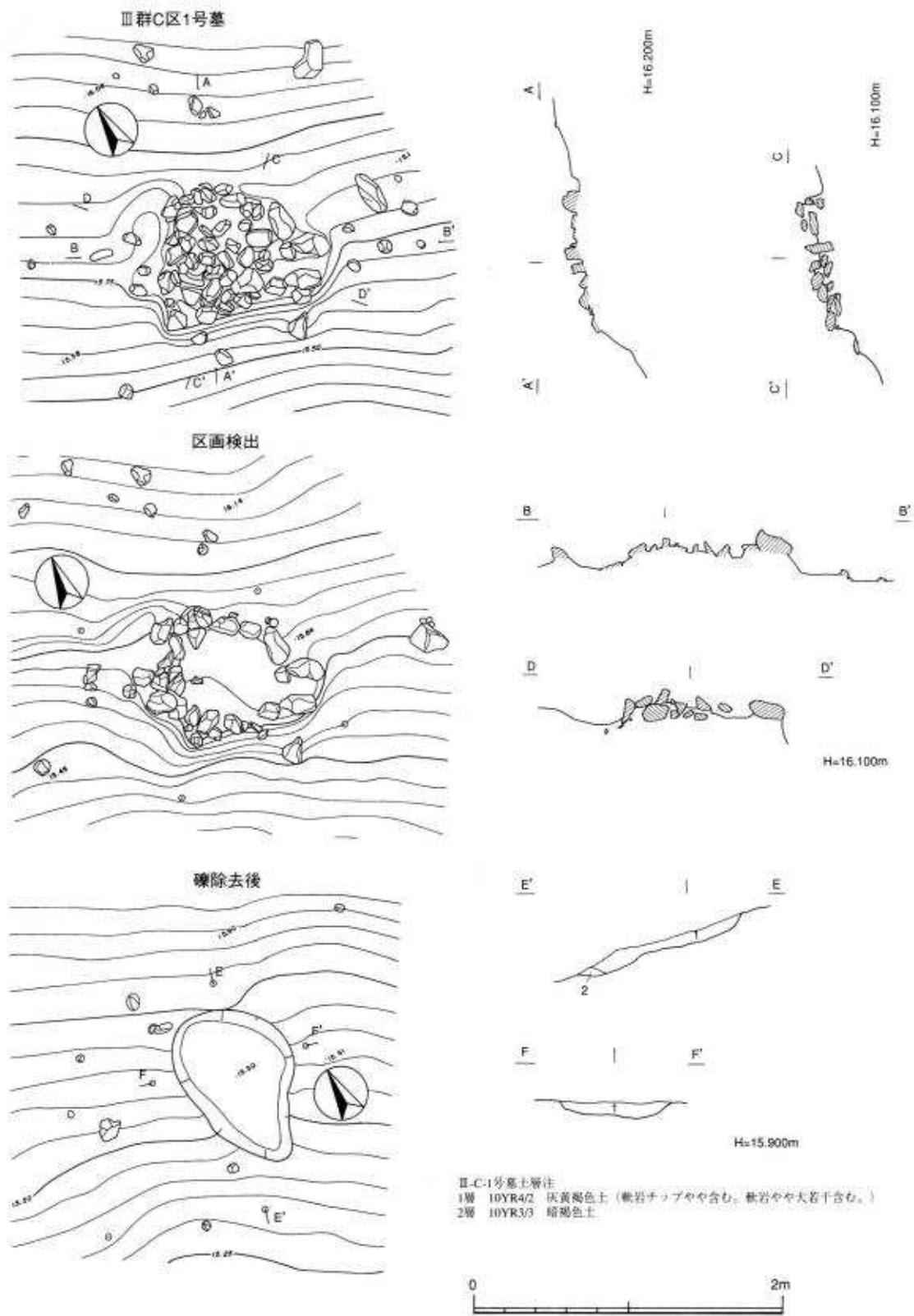
B区の礫を除去し、下部施設等を精査していた段階で発見された径約40cmの楕円形の小穴である。内部より4点の礫が検出された。ほぼ垂直な壁面からみて、埋葬主体として曲物等の有機質の容器を納めたあと、蓋石として積んだ礫が落ち込んだものと考えられる。しかし、火葬骨片等は検出されなかった。墓壙のみと見るよりは、表象である集石が失われた状態であったと見るべきである。



III-B-1号墓土層注  
 1層 10YR4/4 黑褐色砂質土 (黒褐色  
 ブロック含む。白礫極少量含む。)  
 2層 10YR4/2 灰黃褐色弱粘質土 (褐色  
 ブロック5mm大少量含む。白色礫  
 少量含む。)  
 3層 10YR3/2 黑褐色弱粘質土 (炭粒、  
 白色礫極少量含む。)  
 4層 10YR3/3 黑褐色弱粘質土 (白色礫、  
 赤色土粒極少量含む。)



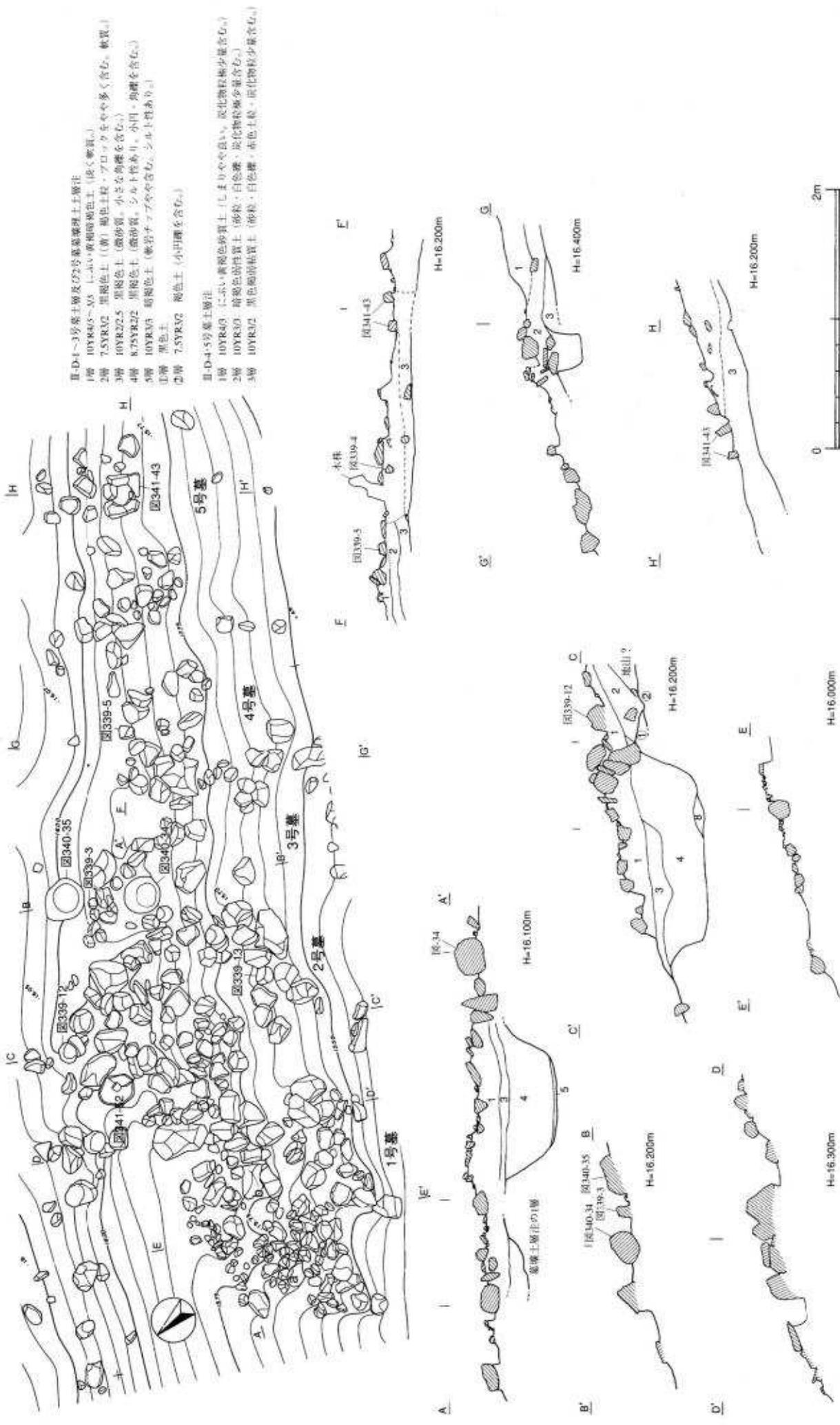
第296図 H遺跡III群A区1号墓・B区1~4号墓平面図・断面図 (S=1/40)



第297図 H遺跡III群C区1号墓平面図・断面図 (S=1/40)

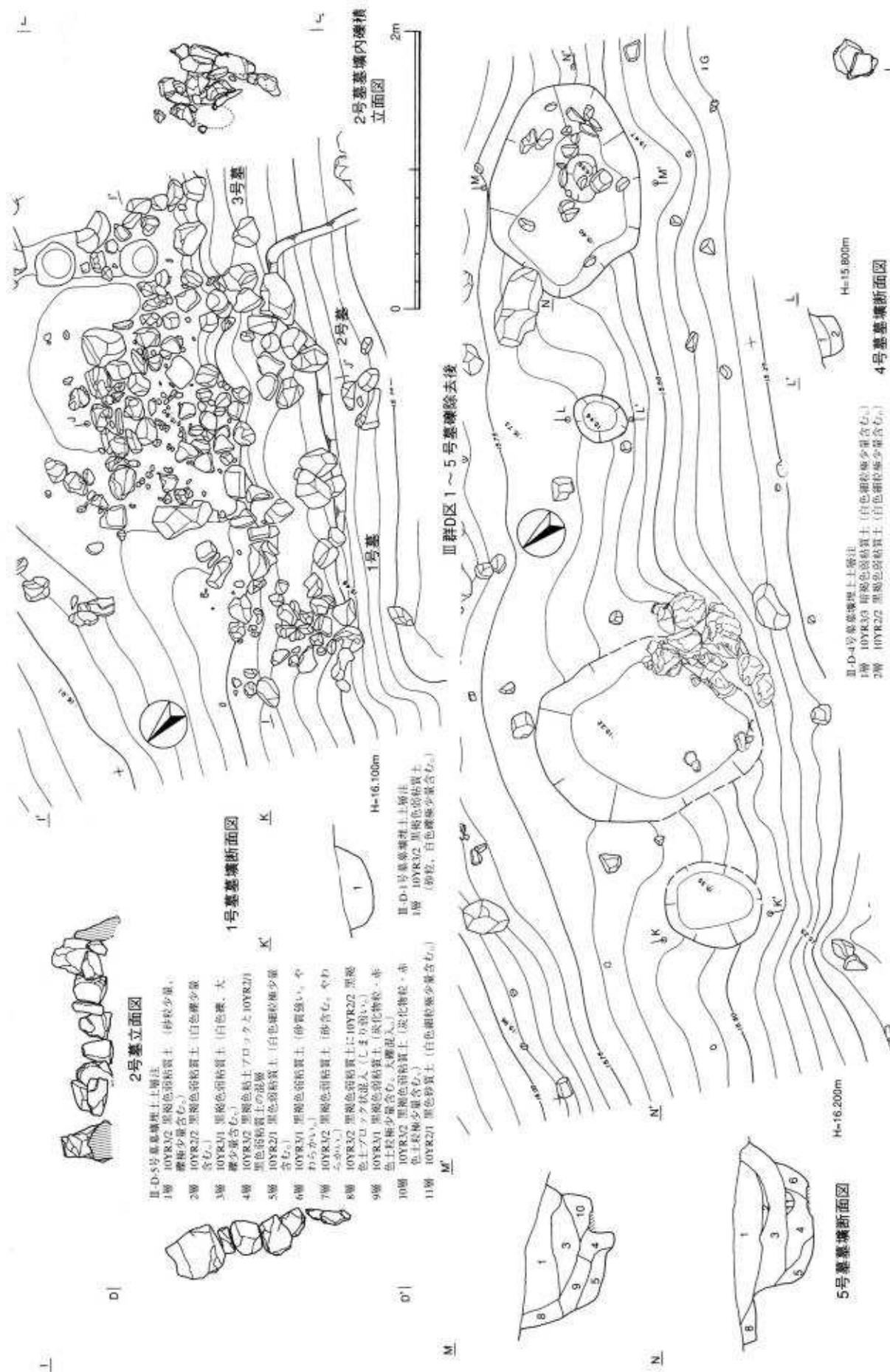
### III-C-1号墓

III-B-3号墓より約1.2m東側に位置する墓である。径約15~20cmの礫で方形に区画し、内部をやや小さめの礫で充填した形態をとる。東西80cm×南北120cmを測る。礫除去後、長径108cm×短径72cmの不整椭円形の墓壙



第298図 H遺跡Ⅲ群D区1～5号墓平面図・断面図 (S=1/40)

III群D区1~3号墓区画検出



が検出されている。深さは10cmと浅い。礫がほぼ水平に積まれているのに対し、墓壙の底部が斜面と平行している。その点で、墓壙とは考えにくく、墓造成時の掘削痕のような別の意味を考えねばならない。

### III群D区

III-C-1号墓より約1.2m東側に位置する一群である。1~5号墓まで確認している。

#### III-D-1号墓

1号墓は、逆L字に南東方向に突き出た形をなす。区画はやや崩れしており、特に北側、東側の区画石部分は搅乱を受けていると考えられ、残った径の大きめの石を目安に区画を想定した。全体で150cm四方の範囲に区画された墓だが、礫の構成を考えると2区画からなる墓と捉えるべきであったかもしれない。径20cm前後の礫を区画にも、内部にも使用した東西90cm×南北150cmを測る区画(a主体部)と、その東片に接続する形で、径約15~20cmの礫で区画し、内部に小礫を充填するタイプの区画(b主体部)が考えられる。調査当時は、長方形の一区画と考えていたため、それに合わせ礫を外してしまっている。礫除去後長径70cm×短径58cmの不整楕円形の墓壙が検出されている。やや北寄りだが、a主体部に収まる位置にある。深さ24cm程度を測り、黒褐色土で埋る。

#### III-D-2号墓

III-D-1号墓の東側に位置し、礫の重なりから判断すれば、1号墓より後出と考えられる。160cm四方の、ほぼ正方形区画を持つ墓である。区画石に径40cmを測る比較的大きい石を多く使用していることが特徴である。区画後方に見られる五輪塔の残欠は上方から転落したものと考えられる。一方で、区画石及び内部の石に転用したものも認められた。区画南側は一部流出しているものと考える。上層礫を除去すると、内部には径20cm前後の礫が方形に集中した部分が見られた。さらに下部には東西120cm×南北150cmを測る略方形の墓壙を検出した。上部区画に収まる範囲に検出されており、この墓壙のプランを意識して区画を組んだといえる。深さは60cm程度を測り、内壁北東部のみ礫が積まれていた。黒褐色のややシルト質を感じる土で埋る。

#### III-D-3号墓

III-D-2号墓より南辺に沿って約80cm延長し、直角に折れて北側に約100cm延ばした区画を3号墓とした。五輪塔の各部位の区画石への転用が多く認められた。区画内より五輪塔の水輪と空風輪が見つかっているが、他の部位はなく、造立していたとは考えられない。

#### III-D-4号墓

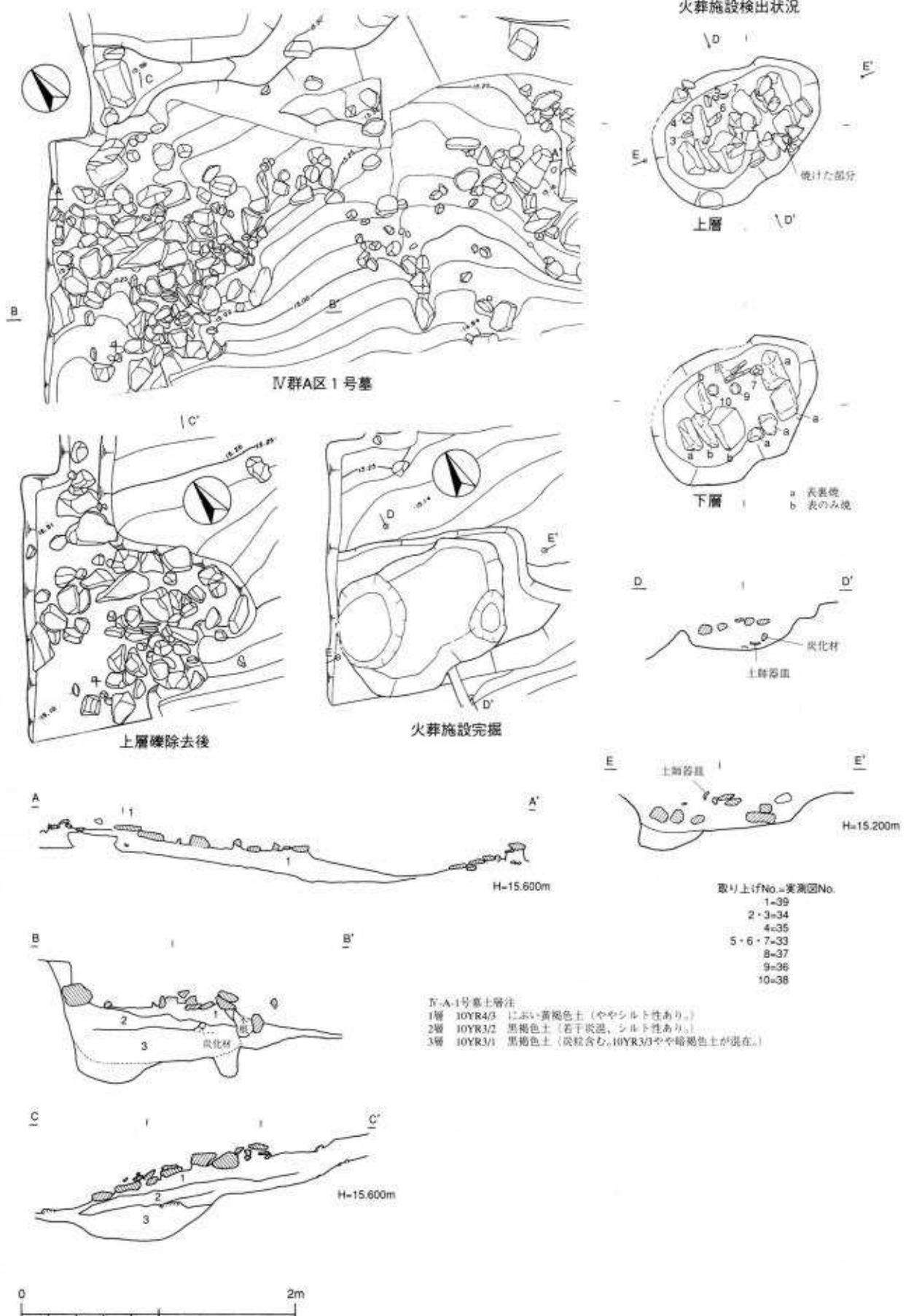
III-D-1~3号墓の東側やや前方に位置する墓である。約130cm四方の範囲に区画された墓と考えられるが、南側のかなりの部分が流出しているものと考えられ、明確な区画は分からず。上層礫除去後、蓋石を伴う小穴を検出した。小穴は約35cmの楕円形であり、壁面は垂直に立ち上がる。曲物製の蔵骨器の使用が想定されるが、火葬骨片は確認できなかった。

#### III-D-5号墓

III-D-4号墓の東側に位置し、礫の重なりから判断すれば、4号墓より後出と考えられる。東西140cm×南北90cmの長方形区画を持つ墓であると想定される。区画南側は多くの部分が流出しているものと考える。区画の東寄りの位置に五輪塔の地輪が検出されており、破損しているが原位置を保っていると考える。上層礫を除去すると、下部に東西153cm×南北108cmを測る楕円形で、西側がハの字にすさまる形の墓壙を検出した。中央部が長径35cmのピット状に窪んでいる。深さは115cmを測る。内部に散在して見られる礫は地山に含まれるものである。黒褐色の土で埋る。集石及び石塔は本来的な意義は舍利であり、火葬墓に伴うものと考えられるので、大きな墓壙を伴うが、火葬墓と考えたい。下位墓壙の範囲に合わせて配石されたものと考えられる。形態的には明確な区画石を持たないタイプといえ、比較的新しい造墓であろう。

## 第4項 IV群の調査(第300~307図)

調査区内中央に形成された墓群である。この墓群を境に斜面だった地形が変わり、以下は傾斜が非常に緩やかな平坦面となる。標高は約15.0mを測る。全長約20mの範囲で、空閑地を目安にA~D群に分かれる。B群のみ墓群の後背地の斜面を切ってテラスを造成している。他は、上位からの連続する斜面上に形成されている。下段に形成されている墓については、辺を共有するものは上段の墓との連続性を重視して同じ群として捉えた。西側



第300図 H遺跡IV群A区1号墓平面図・断面図 (S=1/40)

より遺構番号を付している。

#### IV-A-1号墓

東西160cm×南北130cmの範囲における集石である。長方形の形態をとるが、明確な区画石はない。南東隅部は攪乱を受け出したものと考えられる。上層礫を除去すると、下位より火葬施設が検出された。長軸約135cm×短軸約90cmの楕円形をなし、内部より多くの礫が見つかっている。中心部分に炭の塊が多く残っており、その隙間に土が入り込むような状態で埋っている。土壤の上面及び下底付近から、埋納されたと考えられる土師器皿が10点検出されている。上面の礫を除去すると径約30cm大の礫が並べられた状態で検出され、土師器皿は礫の空白部分から見つかっている。礫は表裏が焼けているものと、表のみ焼けているものに大別される。これらは、火葬時に通風を良くするための機能を持つと考えられる。焼け方に差があることから、火葬は1回ではなく2回以上行われたものと考えられ、その都度集骨を行つために礫が移動するのであろう。この最終時の状態でも、覆土中には炭は多く残るが目立った骨片の出土はなく、礫もやや浮いた状態である。よって、丁寧な集骨を行つたあとに、土師器皿を埋納した後、土盛り及び集石したものと考えられる。東西の端部寄りがピット状に掘り込まれており、火葬施設増築時の掘削と考えられる。

#### IV群B区

IV群B区は背面をカットして明確なテラスを造り出している。1号墓と2号墓が主軸を同じくしており、3号墓と4号墓はそれぞれ主軸を異にする。5号墓は4号墓と主軸をほぼ同じくする。全ての墓が辺を共有しており、何らかの関係が想定できる。1・2号墓背面の径約25cmの礫を使用した石列は、後背面にある程度の流土が堆積した段階で形成されており、IV群B区が形成された後に造られたものであるが、その正確は不明である。内部に五輪塔や宝塔の残欠が見受けられるが、その付近に造立していたものではない。

#### IV-B-1号墓

1号墓は、東西140cm×南北110cmの範囲を、径約30~40cm大の礫で明確に区画した長方形の墓である。内部に土や礫の充填もなく、テラス面に区画石を置くだけで形成されている。越前焼の鉢が藏骨器の蓋として使用されていた。その下部の主体部(a主体部)は、扁平な石の上に炭化物と骨片混じりの土が乗っていた状態から考えると、底石の上に曲物か袋状の有機質の骨臓器に火葬骨を納めたものを置き、鉢で蓋をしたものといえる。鉢の東横に径30cm大の石が置かれていた。また径10cmの石が鉢の北端と南端に重なるように置かれており、鉢の押さえかもしれない。また、区画石の北西隅部分のみが、東西40cm×南北50cmの範囲が礫で囲まれたようになっていた。その部分より埋骨ピット(b主体部)が検出されている。長径36cmの楕円形をなし、深さは10cm程度の浅いものである。上層は土と言うよりは、灰と骨片と一緒に集めた物である。これも有機質の容器に納められて埋葬されたものと考えられる。これは墓の一隅に追葬されたものとみることができ、夫婦のようなより近い血縁関係が想定できる事例である。

#### IV-B-2号墓

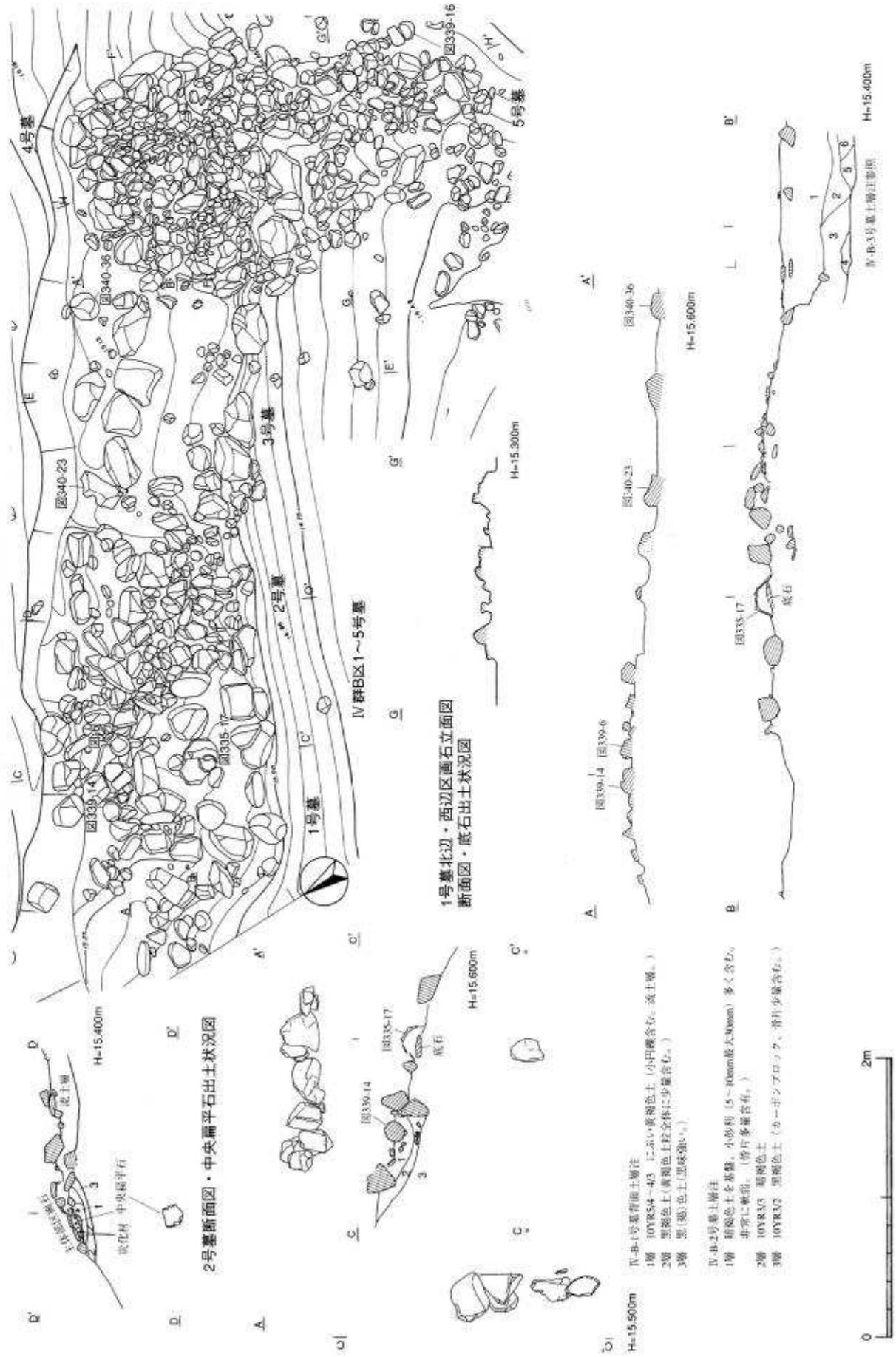
1号墓の東辺と3号墓の西辺を共有する墓である。東西110cm×南北80cmを測る長方形区画をなす。内部には骨片混じりの土が充填されており、その上に小礫が敷かれていた。径25cm大の礫を使用した北辺は明確に判別するが、南側の区画石は流出したものと考えられる。上層礫を除去すると、径約30cmの円状に、径約5cmの小石で周りを縁取った主体部が検出された。内部より骨片と炭化材と小砂利(径5~10mm)と灰が混ざった土が発見された。中位より、径15cm程度の扁平な礫が検出されたが、その下部は骨片・小砂利とも少なくなるが基本的には同質の土である。少量の埋納物質を入れた有機質の骨臓器を置き、蓋石をしたあと周りを同質のものでうめたのであろうか。小砂利は意図的に混ぜたと考えられる。

#### IV-B-3号墓

2号墓と4号墓の間に位置し、西側を4号墓と共有する。東西150cm×南北100cmの長方形区画で、南側と北側の辺のみ径30cmを超える大きな礫のみで明確に示すのが特徴である。内部は土充填だが、骨片は含まない。下位に墓壙を持つ。長径約140cm×短径約110cmの楕円形を呈し、深さ30~40cmを測る。

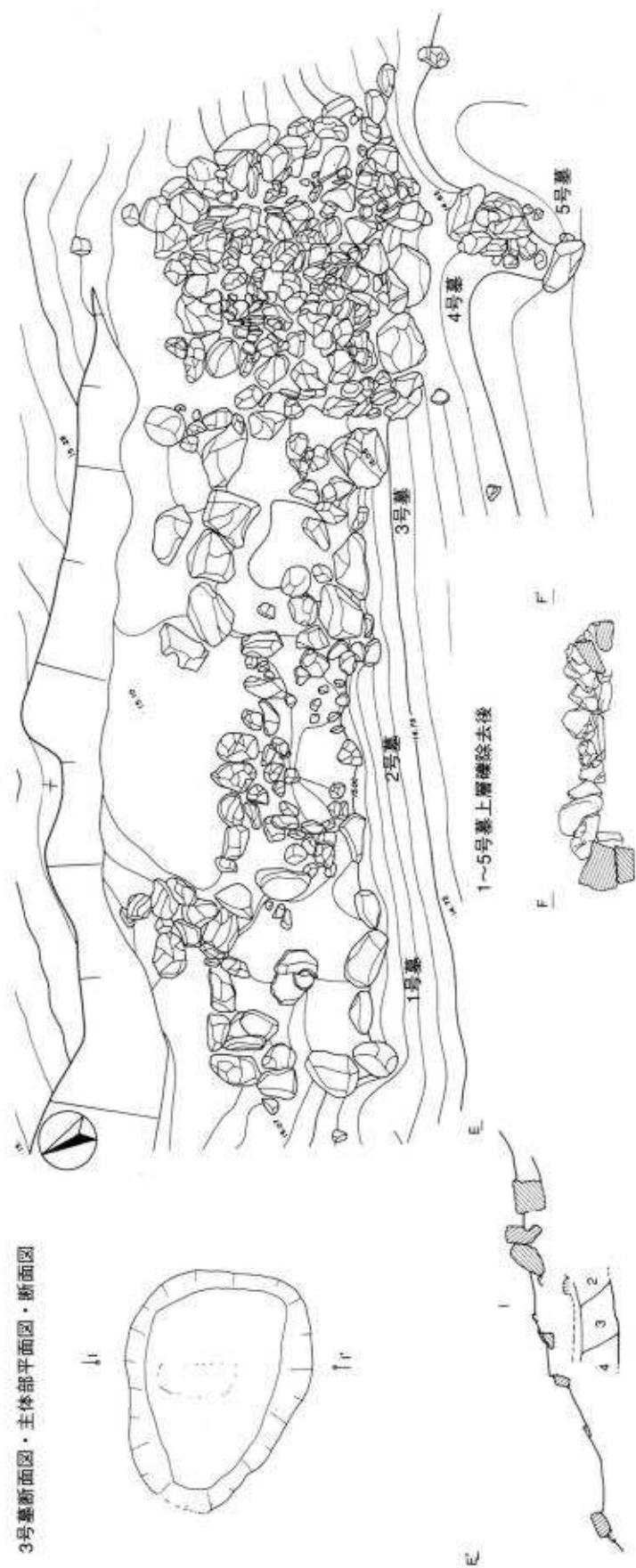
#### IV-B-4号墓

B区東端に位置する。下位に火葬施設が検出されており、その外郭線に合わせ、径約30cm~40cmの礫で区画を組んだ、略方形の墓である。区画石を下位の石と石の隙間に礫を乗せる形で立面上に組んでいるのが特徴である。

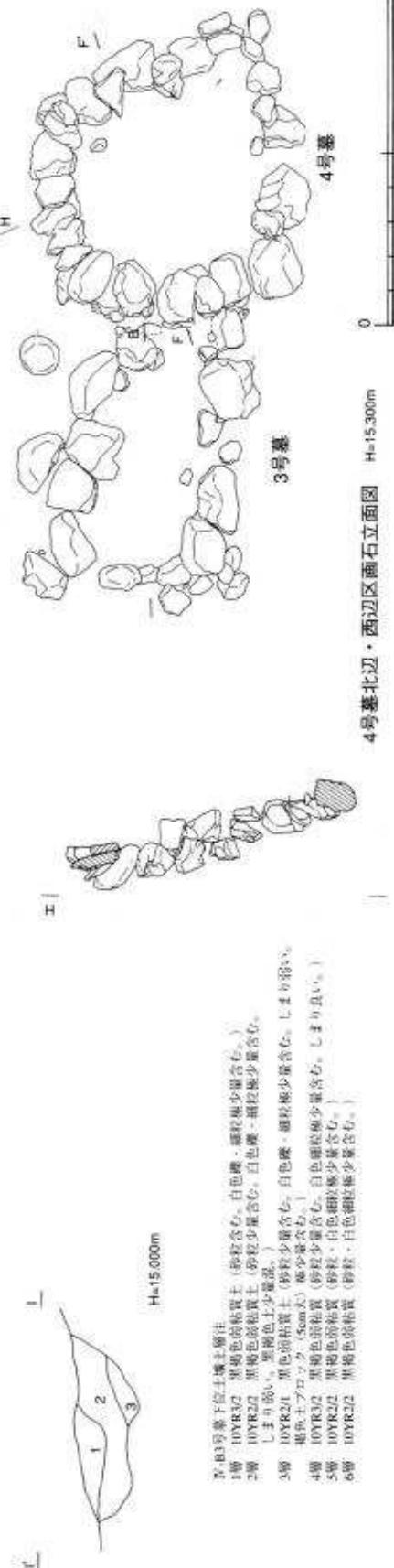


第301圖 H遺跡IV群B區1~5號墓平面圖・斷面圖 (S=1/40)

3号墓断面图・主体部平面图・断面图



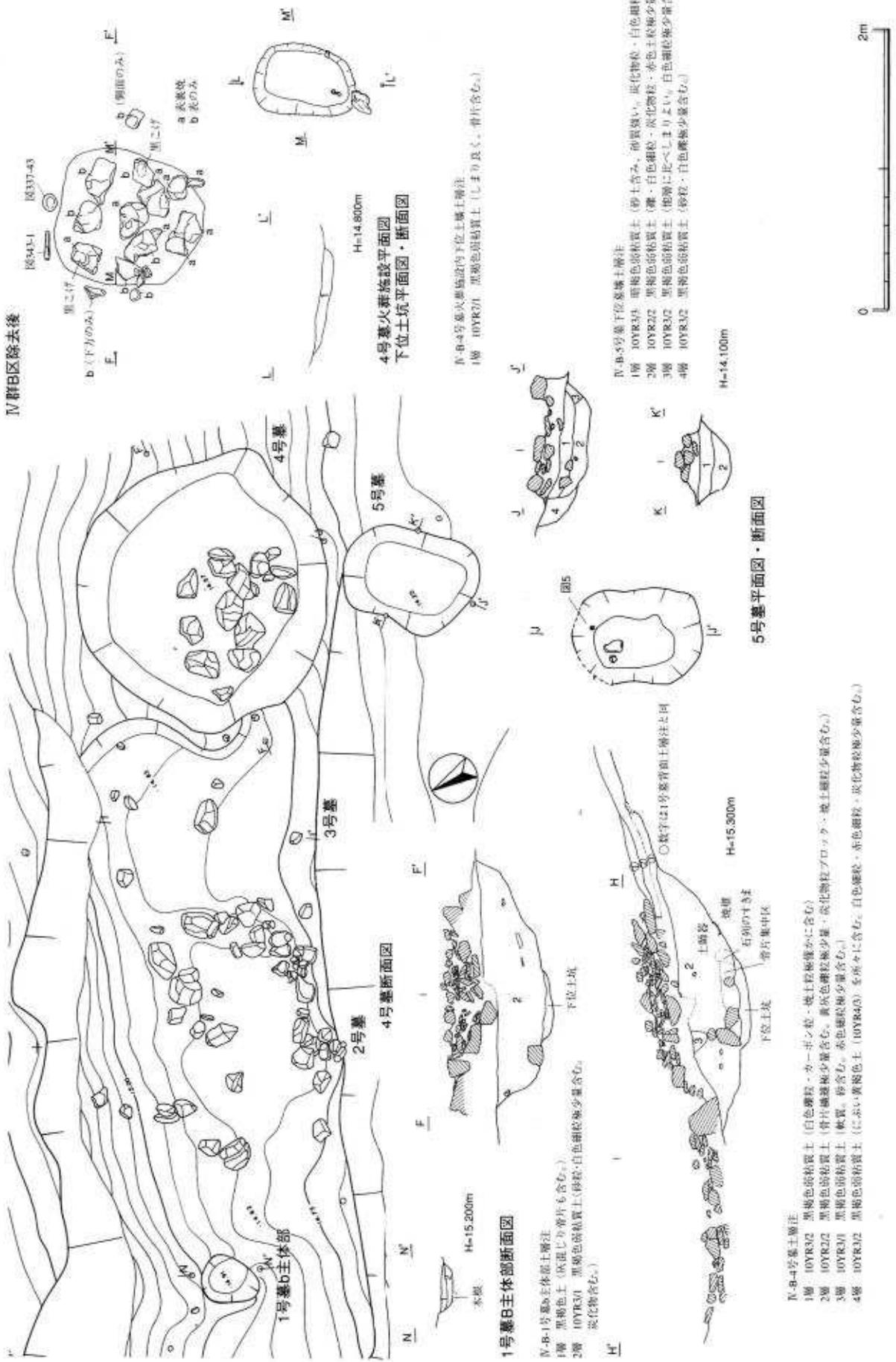
3号墓・4号墓区画検出



下位土壤土質注  
1層 10YR3/2 黑褐色粘粒質土 (砂粒含む。白色鐵・鐵錆少量含む。)  
2層 10YR2/2 黑褐色粘粒質土 (砂粒少量含む。白色鐵・鐵錆極少量含む。)  
しまり弱い。黒褐色土少量混入。  
3層 10YR2/1 黑褐色粘粒質土 (砂粒少量含む。白色鐵・鐵錆極少量含む。しまり良い。)  
4層 10YR2/1 黑褐色粘粒質土 (砂粒少量含む。白色鐵・鐵錆少量含む。しまり良い。)  
5層 10YR2/2 黑褐色粘粒質土 (砂粒・白色鐵少量含む。白色鐵極少量含む。)  
6層 10YR2/2 黑褐色粘粒質土 (砂粒・白色鐵極少量含む。)

第302図 IV群B区1～5号墓平面图・断面图 (S=1/40)

M'群B区除去後



その区画内に土を入れた後、大きめの礫を並べ、その上に小礫を積み上げた高さを持つ集石墓である。上位集石内には火葬骨片は混入しない。火葬施設は、東西200cm×南北180cmを測る大型のもので、深さは約45cmを測る。下底には径約20cm大の礫が11個ならべられており、これらは、火葬時に通風を良くするための機能を持つと考えられる。礫はIV-A-1号墓同様、表裏が焼けているものと、表のみ焼けているものに大別され、火葬が複数回行われていたことが分かる。また、石のある範囲のみに集中して火葬骨片が見られることから、最後はさほど集骨せずに骨を残し、土師器皿1枚と小刀を北壁部分に置いた後に埋めて集石したものと考えられる。埋めた土には、繊維程度の火葬骨片が少量混じる程度である。土壤底面が1段低く掘り窪められている。この埋土には炭化物も骨片も含まないため、火葬施設増築時の掘削と考えられる。

#### IV-B-5号墓

4号墓の南辺に接する形で検出され、東西約140cm×南北約110cmの範囲の集石である。明確な区画石は持たないが、方形に復元できる。礫を除去すると、長径35cm×短径15cmの細長い石に南北を挟まれた状態で、礫積みによる主体部が検出された。その礫積み下から、長径93cm×短径65cm深さ22cmの墓壙が検出された。火葬骨片の出土はないが、土壤の北東隅の壁面より銅錢が2枚重なった状態で検出されている。

#### IV群C区

IV群B区より約1m間隔を置いて東側に形成された一群である。明確なテラスの造成はなく、上方より連続する斜面上に造られている。礫のつながりを重視し、上下にある墓を同群として捉えた。12基分の区画を想定したが、崩れている部分が多く、不確定な部分を残す。

#### IV-C-1号墓

C区上側で、一番西寄りに位置する。100cm四方の方形に区画され、区画石に径約20~30cmの礫を使用し明確に示している。内部は同じ大きさの礫が疎らに置かれている。上層礫を除去すると、区画の東半分側にあたる部分に墓壙が検出された。長径80cm×短径60cmの楕円形で、深さ約30cmを測る。内部は炭化物を少量含む黒褐色のしまりのない砂で埋っている。

#### IV-C-2号墓

1号墓の南東隅に接し、4号墓の北辺を共有する区画を2号墓とした。東西90cm×南北70cmを測る。径約20cm大の礫を使った東辺のみが明確に捉えられる。その区画石の一つに五輪塔の破片が転用されていた。

#### IV-C-3号墓

下側の一番西側に位置し、100cm四方の方形に区画された墓である。区画石は径約20cmの石が20cm程度の間隔をおいて設置されている。内部は区画石と同じ大きさの石が疎らに置かれたあと、径5cm程度の小礫を敷き詰めた形態をとる。西辺の区画石に五輪塔の破片が転用されていた。

#### IV-C-4号墓

3号墓の北東隅を接する位置する。区画石には径約20cm大の礫と径約10cm大の礫が使用されている。東西100cm×南北80cmを測る。区画石と同様の礫が敷き詰められている。大礫の位置を検討すると、中央に円形状の部分が捉えられる。この部分が主体部にあたる可能性がある。

#### IV-C-5号墓

3号墓の南側に、軸は異なるが南辺に接して東西両側にはほぼ同じ長さの石列が伸びていることから、その範囲を墓として捉えた。140cm×90cmを測る。内部は土のみである。

#### IV-C-6号墓

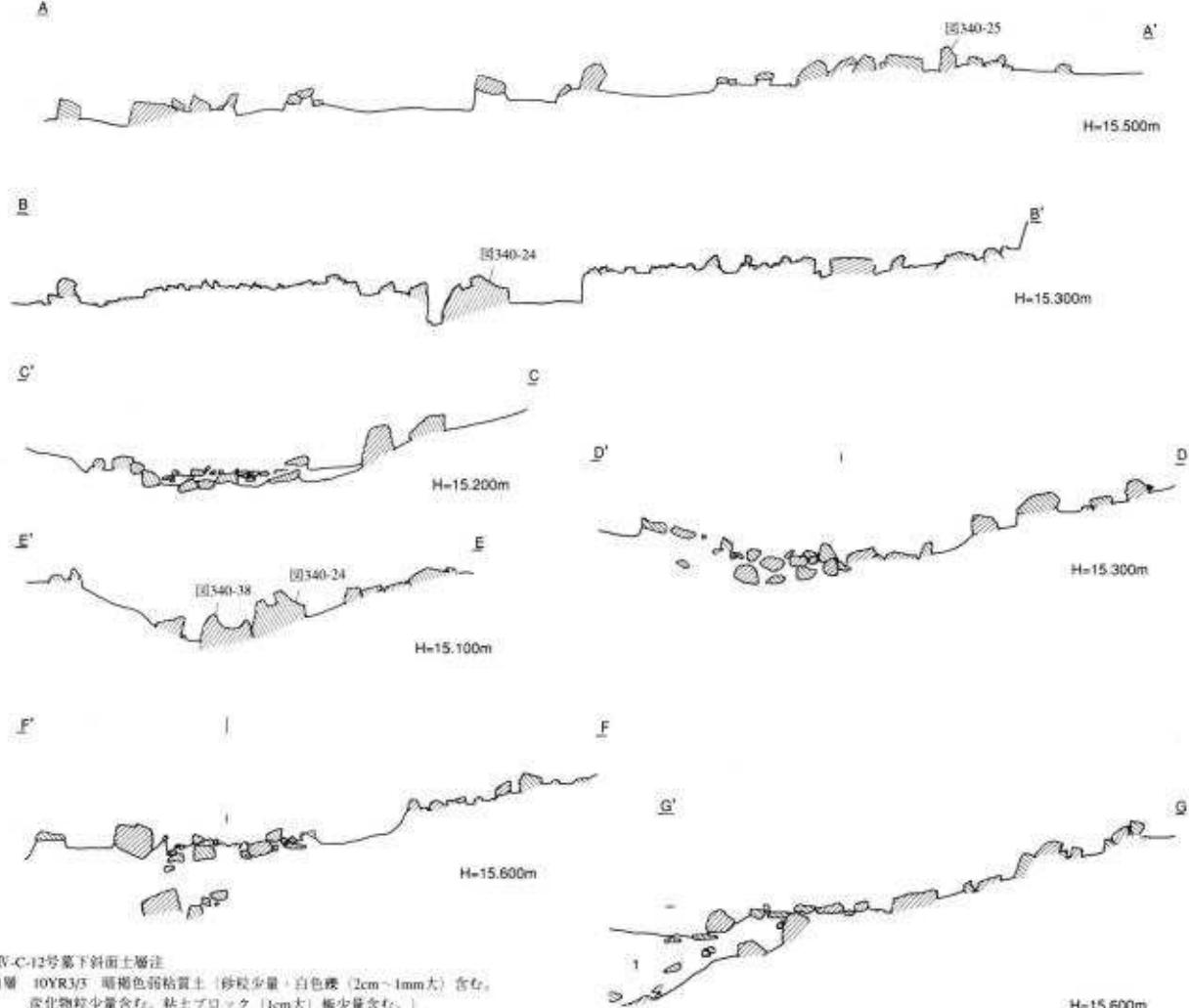
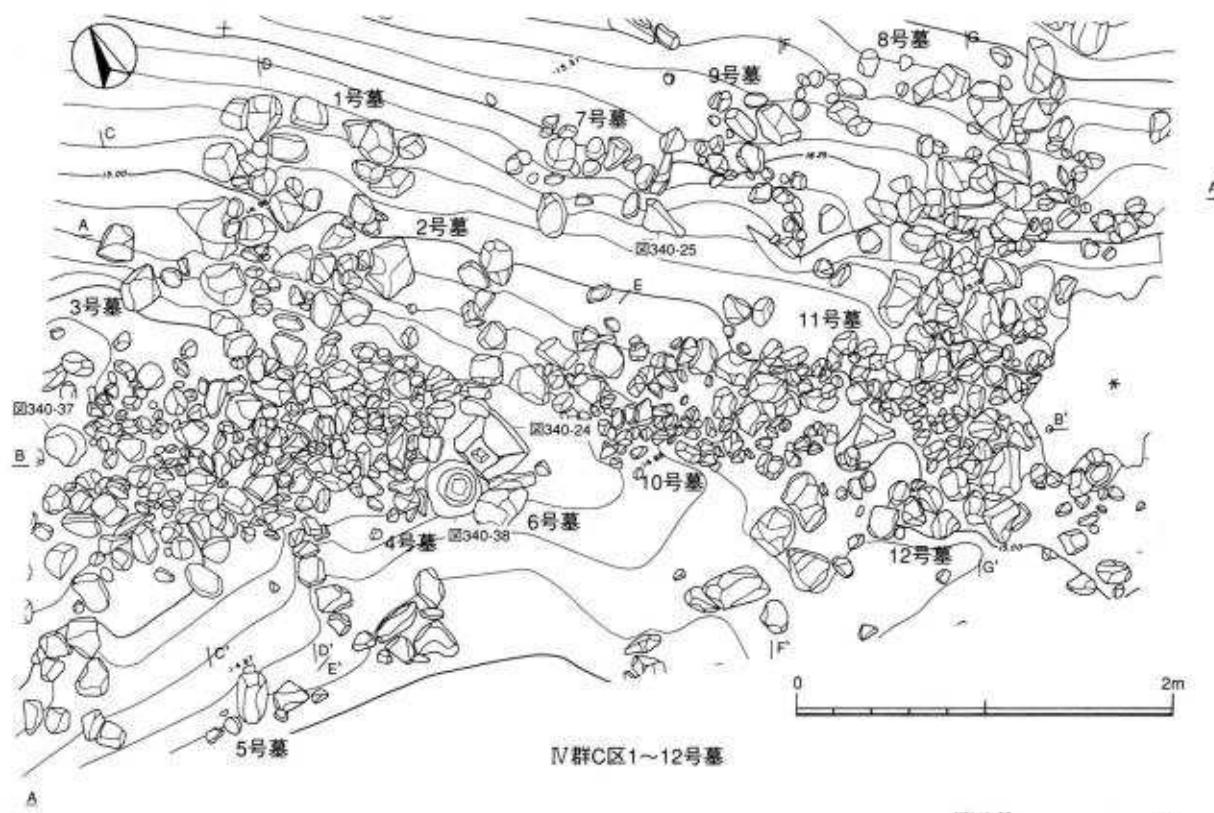
II-A-2号墓と同様の、五輪塔の部位を含む大型の石による集石である。60cm四方を測る。同様に、その性格も墓というよりは、倒壊した塔等を片づけた跡と考えるべきものであろう。但し、両者には五輪塔の部位が花輪と水輪であるという共通項があり、そこに何らかの意図を考える必要があろう。

#### IV-C-7号墓

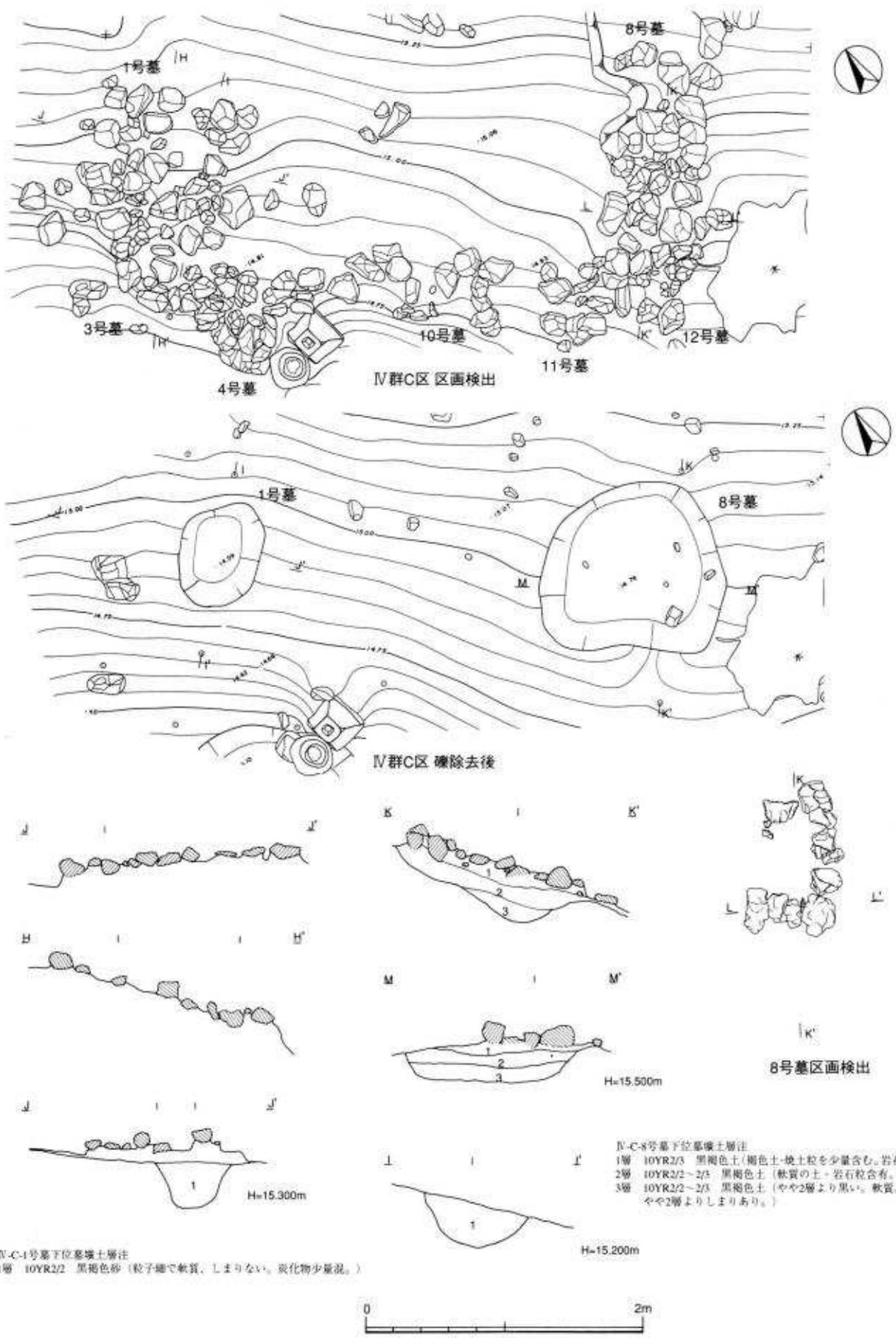
C区の上側で、1号墓と8号墓の間に位置する。東西70cm×南北50cmの長方形範囲が予想されるが、北辺付近の石がないため確定はできない。東辺に五輪塔火輪の破片が転用されていた。

#### IV-C-8号墓

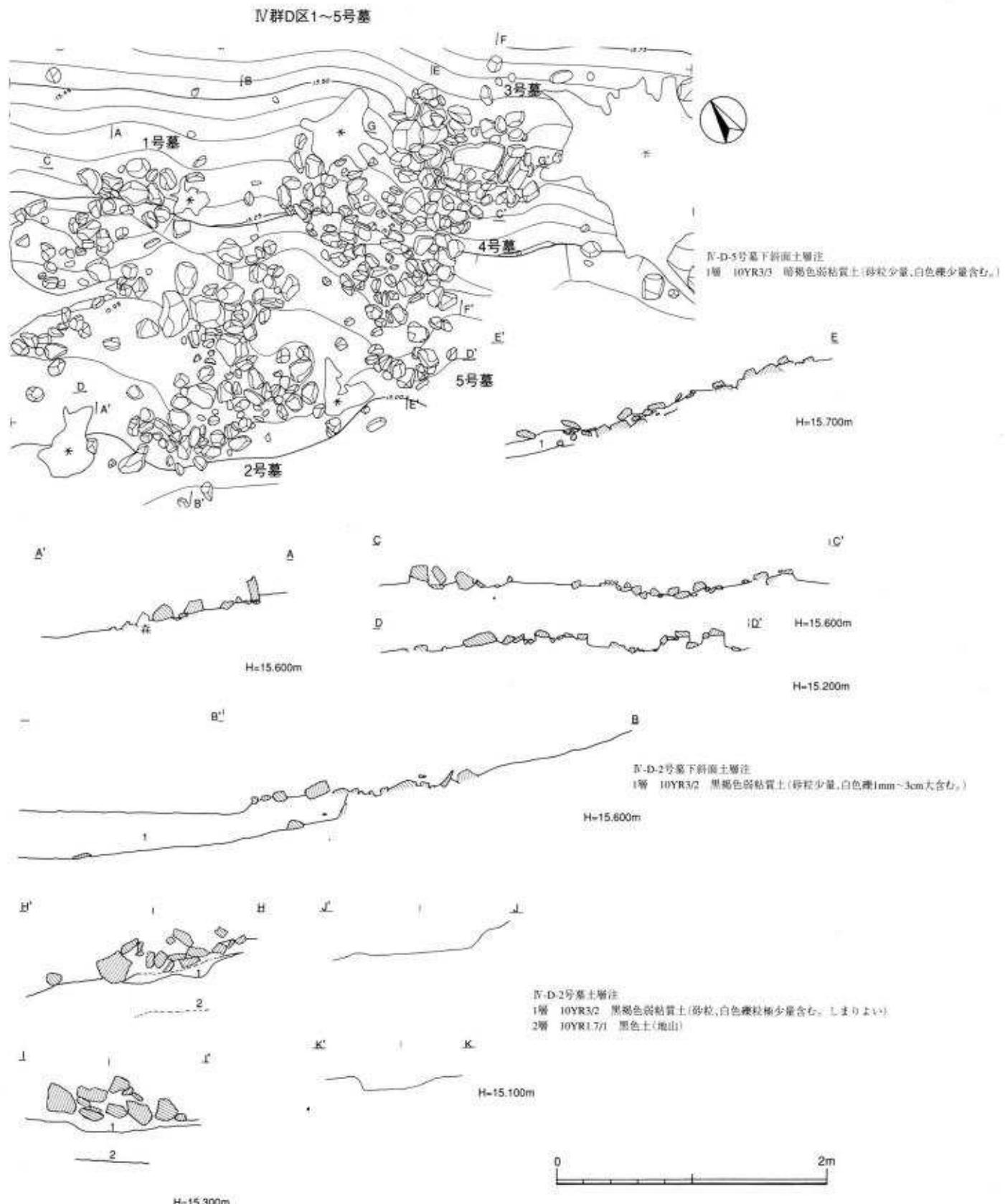
IV群C区の東端に位置する。区画の大きさは、検出された下位墓壙の範囲も考慮に入れて想定した。復元範



第304図 H遺跡IV群C区 1~12号墓平面図・断面図 (S=1/40)

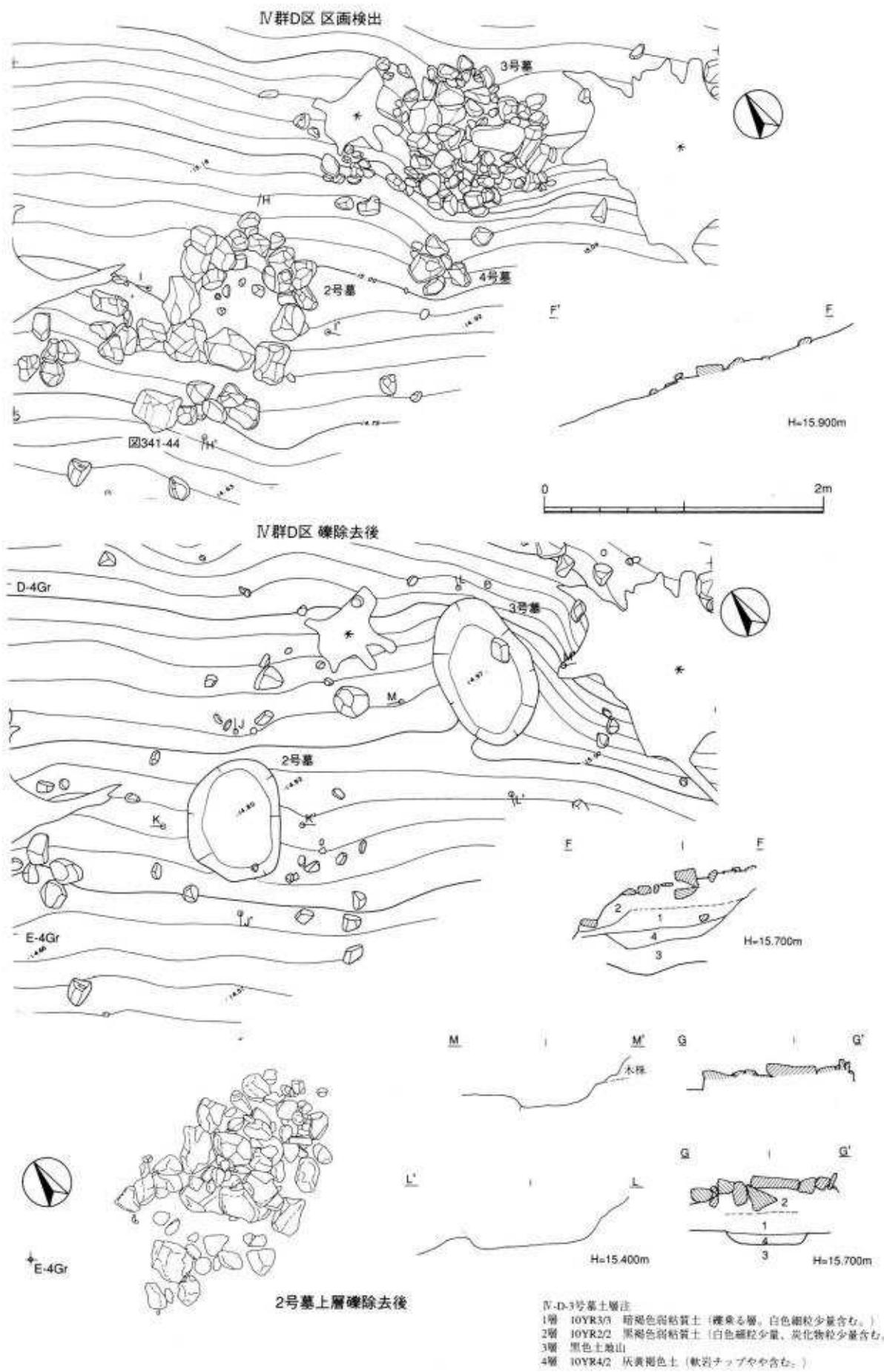


第305図 H遺跡IV群C区 1～12号墓平面図・断面図



第306図 H遺跡IV群D区1～5号墓平面図・断面図 (S=1/40)

囲で東西140cm×南北150cmを測る。碟の観察からは、径20～30cmの碟を中心させた部分と、そこから西方に径5～10cmの小碟で延長した部分の2つの墓のように見える。しかし、検出された下位墓壙は、両者を跨ぐ範囲でちょうど収まるように検出されている。さらに大碟集中部分の外縁にも小碟の分布も見えることから一つの墓と考え、碟の空白部分は、後世の造墓時に抜き取られた状況を想定したい。検出された墓壙は東西130cm×南北120cm



第307図 H遺跡IV群D区1～5号墓平面図・断面図 (S=1/40)

の略方形で、南辺が上位の区画石の並びと一致する。深さは約30cmを測る。黒褐色のしまりに欠ける土で埋る。上層に若干の焼土の粒を含むが、火葬骨片や他の遺物の出土はない。斜面に対して、平行に掘られており、底面が斜めになっている。

#### IV-C-9号墓

8号墓の西辺に接し、増設された小区画である。45cm四方を測り、区画石には径10cm以下の小礫が使用されている。内部に径20cm大の礫が配置されている。8号墓に追葬されたものと考えられる。

#### IV-C-10号墓

7号墓の下に位置する。12号墓より派生する墓のなかで、最後に造られたと考えられる。西辺を11号墓と共有する。区画石には径約20cm大の礫が使用されている。東西100cm×南北60cmを測る。内部は径約10cm以下の小礫が敷き詰められている。

#### IV-C-11号墓

10号墓と12号墓の間に位置する。南辺を8号墓と西辺を12号墓と共有する。区画石には径約10~20cm大の礫が使用されている。東西80cm×南北60cmを測る。内部は10号墓よりやや大きい礫が敷かれている。

#### IV-C-12号墓

8号墓より下方に派生した墓で、南辺を8号墓と共有する。径約20cm~30cmの礫の集石で区画が示されている。東西80cm×南北100cmを測る。区画内北西隅部のみ小礫が敷かれている。一方で、11号墓前方の大礫を出したものと考えれば、11号墓と12号墓で一つの区画とみることもできる。

### IV群D区

IV群C区より約80cm間隔を置いて東側に形成された一群である。明確なテラスを造成はなく、上方より連続する斜面上に造られている。5基の区画を設定した。

#### IV-D-1号墓

D区の上側で、一番西寄りに位置する。80cm四方に区画され、区画石に径約20cmの礫を使用している。内部は区画石と同様の礫や小礫が置かれているが、南側は空白となっている。

#### IV-D-2号墓

1号墓の南東隅に接し、140cm四方を測る方形区画を想定した。北辺を除く3辺は、区画石に径10cm前後の小礫が使用されている。下位から墓壙が検出されており、区画内の北東隅に位置する。その墓壙の上部には、径約30cm大の礫が集石されている。上層礫を除去すると、区画石と南面に位置する石列が検出された。墓壙は長径86cm×短径58cmの楕円形を呈す。深さ約10cm程度の極浅いものである。黒褐色の粘性の弱い土で埋る。

#### IV-D-3号墓

一番東側の墓である。東西100cm×南北90cmのはば方形に区画された墓である。明確な区画石は無く、径約10cmの石を主体とした集石である。中央に蓋石のような、長辺40cm×短辺20cmの長方形状の扁平石が設置されていた。約25cm程度の盛土も検出されている。下位より墓壙が検出されており、長径105cm×短径68cmの楕円形を呈す。深さ約10cm程度の極浅いものである。

#### IV-D-4号墓

3号墓の南辺を一部共有する位置に造られている。明確な区画石は無く、径約10~15cm大の礫を主体とする集石である。東西95cm×南北60cmの範囲を想定した。上層礫を除去すると、東辺寄り部分に45cm四方の範囲で、径15~20cmの礫を集中させた部分が残った。主体部と考えられるが、火葬骨片等の遺物の出土はない。

#### IV-D-5号墓

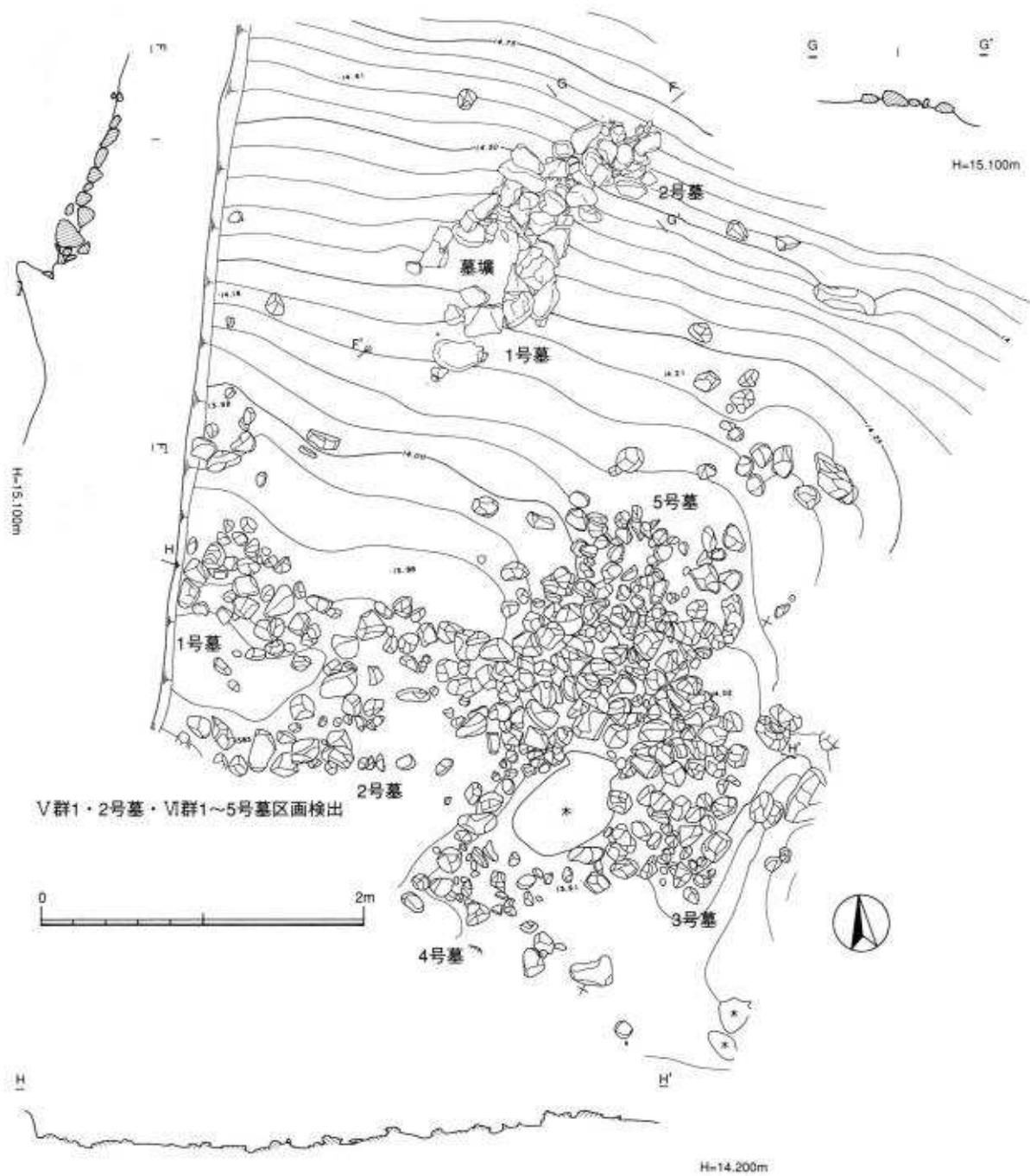
4号墓の南辺を共有し、南側に造られた小区画の墓である。55cm四方を測る。遺存状態は良くないが、径約15cm大の礫で区画を並べた後、隙間に小礫を詰めた状態が見受けられる。内部には礫は疎らであるが、五輪塔の破碎片の転用が見られた。

### 第5項 V・VI群の調査（第308~309図）

調査区の西端中央やや下に形成された墓群である。V群は斜面上に造られており、VI群はその下の平坦面に形



第308図 H遺跡V群1～5号墓・VI群1～5号墓平面図・断面図 (S=1/40)

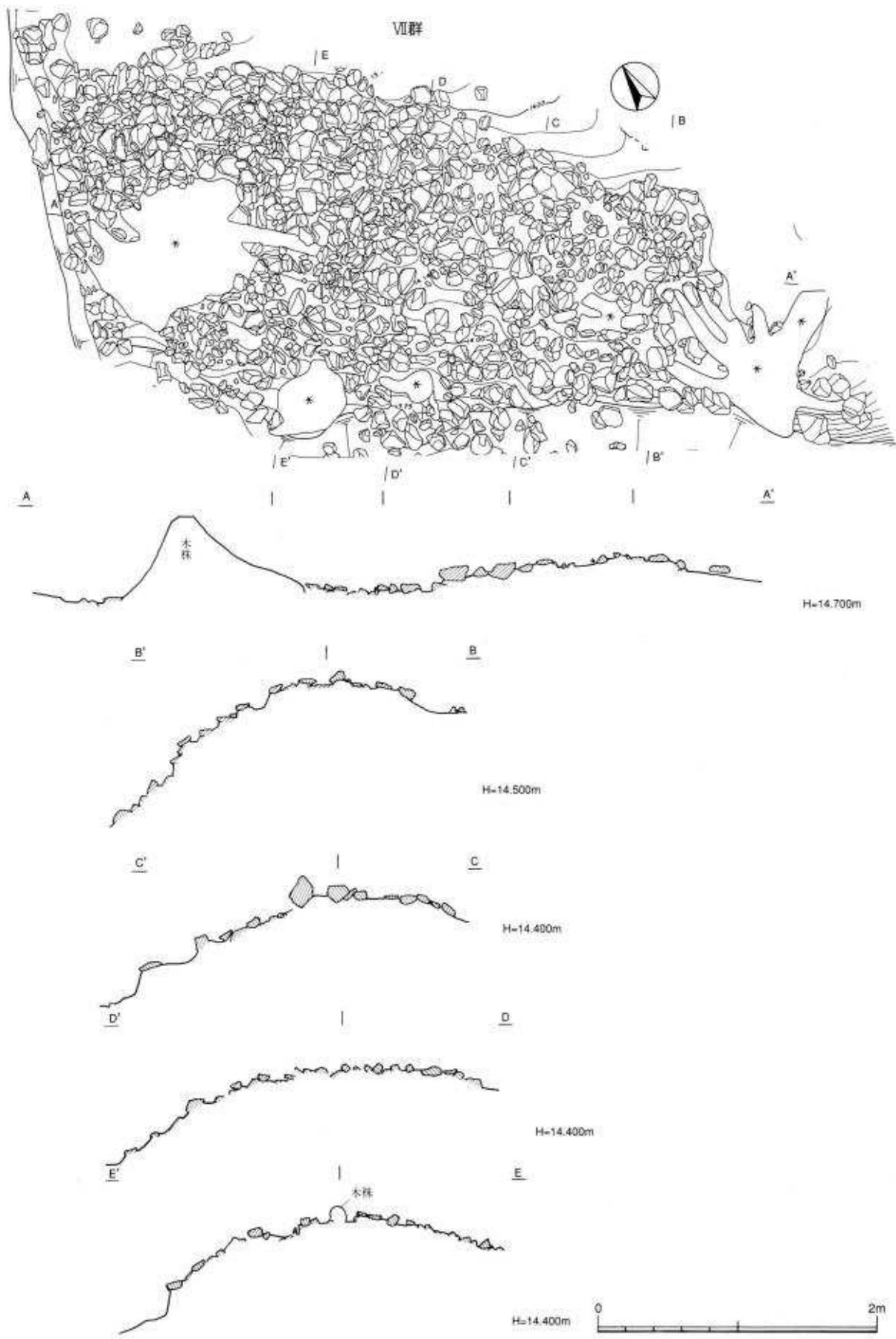


第309図 H遺跡V群1・2号墓・VI群1~5号墓平面図・断面図 (S=1/40)

成されている。標高は約14.8m~13.8mを測る。墓の形態や使用礫の共通性からV群とVI群の設定を行った。V群は大きめの礫の集石、VI群は小礫の集石と捉えている。また、VI群は調査区外西方に続くと考えられる。断面図より、VI群はV群より先行して形成されていることがわかる。VI群は各墓の個別調査は行わず、現状保存措置をとった。上位西側より遺構番号を付している。

#### V-1号墓

東西105cm×南北80cmの長方形区画である。区画には、径30~40cm大の石を主に使用している。内部には径10cm大の礫も使用されている。その小礫は、北西隅部分に集中する傾向を見せ、20cm×30cmの平石が蓋石として載せられていた。上層礫を除去すると下位より墓壙が検出された。墓壙の北端は斜面を直角に切るが、底面から南辺にかけては緩斜面状を呈す特異な形態である。深さは40cm程度、開口部の大きさは100cmを測る。



第310図 H遺跡VII群平面図・断面図 (S=1/40)

## V-2号墓

2号墓は主軸を違えて、1号墓上方に北辺に接し造られている。105cm四方を測り、約30cm大の礫を主に使用している。内部に同じ大きさの礫が詰められているが、北辺及び北西隅付近には径5cm以下の小礫が見られる。上層土を除去すると、大礫を積み上げた集中部分が検出されたが、下位施設等は検出されていない。

## V-3号墓

2号墓の東方に造られている。東西110cm×南北130cmを測る長方形区画をなす。区画石には径20~30cmの礫が使用されている。南辺は搅乱により、やや崩れている。3号墓の内部には礫充填はみられない。但し、外側の方形区画に接する形で、円状に径20cm大の礫が並べられていたが、下位施設等は検出されていない。

## V-4号墓

1号墓の下方、5号墓より西側に区画延長された墓である。搅乱により礫が失われているが東西100cm×南北80cmの長方形区画を想定する。西辺を5号墓と共有し、区画石にも径20~30cmの礫が使用されており、他のV群の墓との共通性が認められる。

## V-5号墓

3号墓の下方に位置する墓である。区画は東西150cm×南北80cmの長方形である。径20cm大の礫で区画し、同じ礫が内部に積まれている。一部、南辺の中央西寄り部分が搅乱により失われている。断面図状に見える下位の礫は、VI群のものである。

## VI-1号墓

調査区の西端ある小規模な墓である。東西70cm×南北80cmの長方形体である。径10~15cmの礫が区画に使用されている。内部にも使用され、径5cm以下の小礫も使用されている。

## VI-2号墓

1号墓より約40cm東側に位置する。東辺が3号墓に喰い込んでいるように見える。東西140cm×南北105cmの長方形に区画され、区画石に約径10~20cmの礫を使用している。内部は同じような大きさの礫と、径5cm以下の小礫が使用されている。

## VI-3号墓

2号墓の西辺に接し、4号墓の北西隅を共有する区画である。上層土を除去すると、東西160cm×南北120cmの長方形に区画された墓が現れた。VI群の中では一番大きい区画である。区画石は径約15cmの石が使用されており、内部は区画石と同じ大きさの石が敷かれている。また、径5cm程度の礫も少量使用されている。

## VI-4号墓

3号墓の下方、南辺に接し造られた墓である。東西100cm×南北60cmを測る長方形区画である。径約15cm大の礫で区画され、内部は区画石と同じ大きさの礫及び、径5cm程度の礫も使用されている。

## VI-5号墓

3号墓の北辺を共有し、上方向に派生した墓である。区画石には径約10cm大の礫と径約5cm大の以下の礫が使用されている。東西100cm×南北50cmを測る。内部は区画に使用された両者と同様の礫が敷かれている。

## 第6項 VI群の調査（第310図）

調査区西端の最下段の平坦面に形成された墓群である。標高は約14.3m前後を測る。礫を積み上げ、中央が盛り上がった形状をなす。主に径20cm以下の礫が使用されており、径5cm以下の小礫の使用も目立つ。1基ではなく数基の墓の連接したものと考えられる。各墓の個別調査は行わず、現状保存措置をとったため、詳細は不明だが、区画内部の礫には五輪塔破片の転用がみられることから、初期の造墓ではないと考える。

## 第7項 VII群の調査（第311~313図）

調査区内で唯一土盛りによって造られた墳丘を持つ墓と、その上面を占地して造られた集石墓群をVII群とした。集石墓群は墳丘上面北部（A区）、南側裾部（B区）、南東部（C区）の3グループに分かれている。A区は1

基単独で存在し、B区は大礫使用の墓を基点として、西側に小礫を使用した墓が連続して造られるものが2グループ存在する。標高は墳丘上で約15.15m、一番低い南側裾部で約14.25mを測り、比高差約90cmである。遺構番号は墳丘墓をVII-1号墳墓とし、他は従来の～号墓として付けている。

#### VII-1号墳墓

盛土によって構築された墳丘墓である。南北約710cm×東西730cm（断面図上で墳丘が終ったと思われる部分で判断した。厳密に規定することは不可能）を測る。下位の斜面寄りに、集石墓があり、その部分が高くなっているため南側部分の盛土が厚い。盛土は7系統にグルーピング可能である。基本的には黒褐色土と黄褐色土に分かれ、両者の混層も存在する。その内1層のみが砂質土であり、墳丘構築後の堆積と考える。墳丘東側は盛り上げるのではなく、逆に斜面を埋める方向で盛土が行われている。そのため、東側部分は比高差が、10cm程度しかない。これは、東側下位に大規模かつ高さを持つ集石墓が存在したことが要因として考えられ、下位の墓を大きく壊す事なく墳丘を造成していることが大きな特徴である。また、片側をかさ上げしていないのは、上面に水平面が必要だったためである。一方で、下位の墓であるにもかかわらず、西側が露出しているのは、墳丘のサイズが決められていたか、占有できる土地が決まっていたからであろう。これらの事柄は、あくまでも想定ではあるが、何らかの規制があったために、この特異な形をした墳丘が築かれたことは間違いないと言える。墳丘構築土自体には火葬骨片は混じらない。また、表面精査でも主体部は発見できなかった。しかし、断面図上では2ヵ所の掘り込みを検出することができた。a主体部とb主体部と呼称し報告する。a主体部はB-B'セクション上の盛土下で検出されている。上面で60cmを測り、中位段階で狭くなり22cmとなる。深さは20cmを測る。火葬骨片と灰のみで埋っており、土圧で潰れていないことから、曲物等の有機質の容器に入れられたものだと考えられる。構築段階途中で埋められていることから、作業の一環のなかで葬られており、最初の被葬者であろう。このことから、火葬墓であることがいえる。b主体部は上面から掘り込まれており、幅60cm×深さ24cmを測る。暗褐色～黒褐色の土で埋っている。覆土中に骨片はなく、礫が底面付近で検出されている。主体部とすべきかどうか疑問が残る。

#### VII-A-1号墓

墳丘上面北部に単独で存在する約100cmの範囲の集石である。区画には径20cm大の石を主に使用しているようであるが、付近の状況からみて、やや散逸したものと考える。内部には同じ大きさの礫少量と、径5cm大以下の礫が並べられている。

#### VII-B-1号墓

墳丘南側裾部の最も西側に造られている。2号墓より西側に派生したと考えられ、東辺を共有する。東西140cm×南北110cmの長方形である。区画石には約30cm大を超えるの礫も使用されている。内部には同じ大きさの礫と、径10cm以下の礫が見られる。

#### VII-B-2号墓

2号墓の東方に造られている。東西100cm×南北80cmを測る長方形区画で、区画石には径20～30cmの礫が使用されている。内部には同じ大きさの礫が主に充填され、径10cm程度の少礫も少量使用されている。但し、上層礫を除去すると、北辺の区画石には径10cm大の礫が使用されていた。

#### VII-B-3号墓

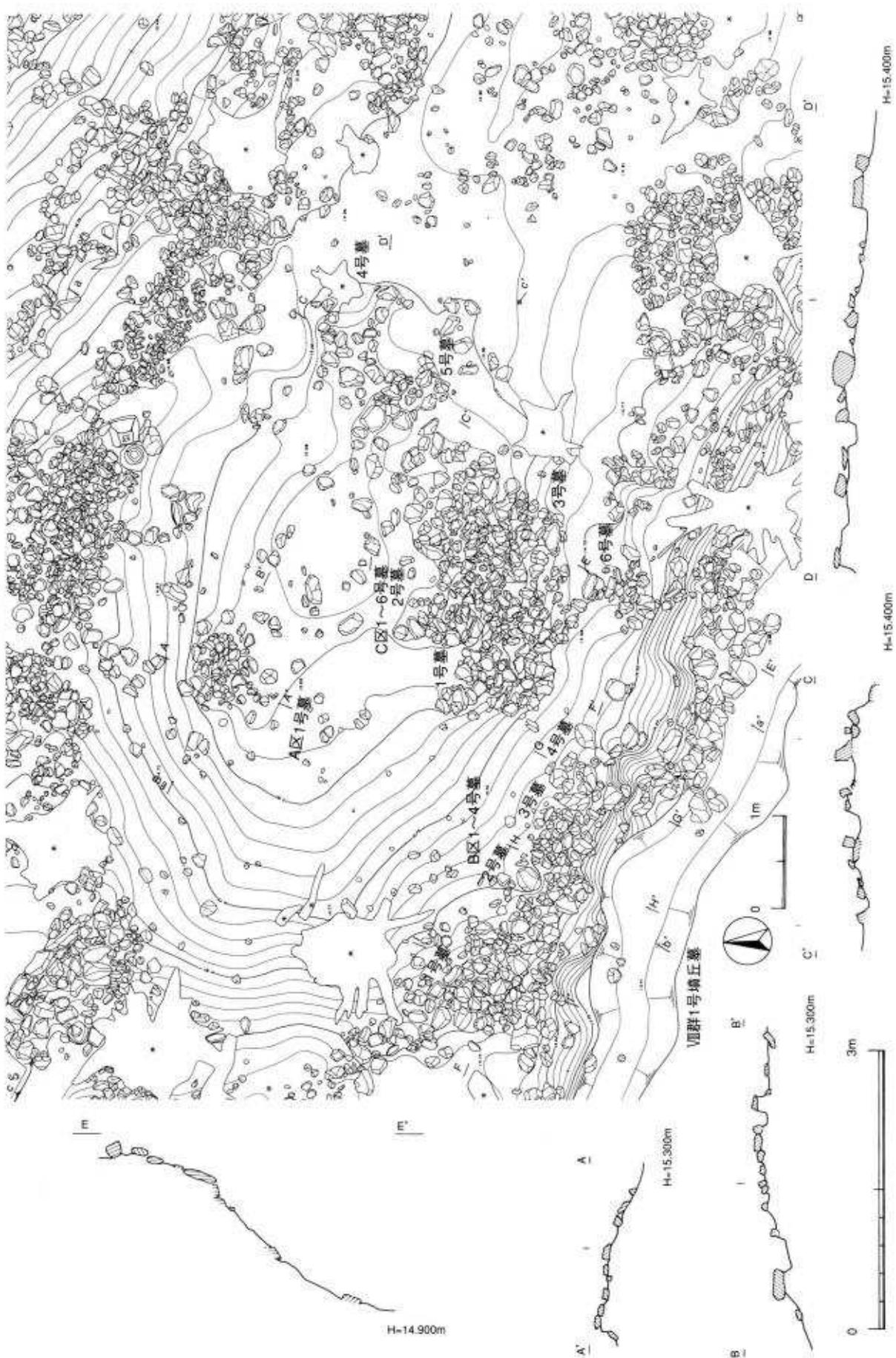
4号墓より西側に区画延長された墓である。東西90cm×南北70cmの長方形区画である。西辺を2号墓、東辺を4号墓と共有している。南北の辺は区画石で明確に示されてはいない。内部には径15～20cmの礫と径10cm以下の礫が使用されている。内部礫の中に、五輪塔空風輪の残欠の転用が見られた。

#### VII-B-4号墓

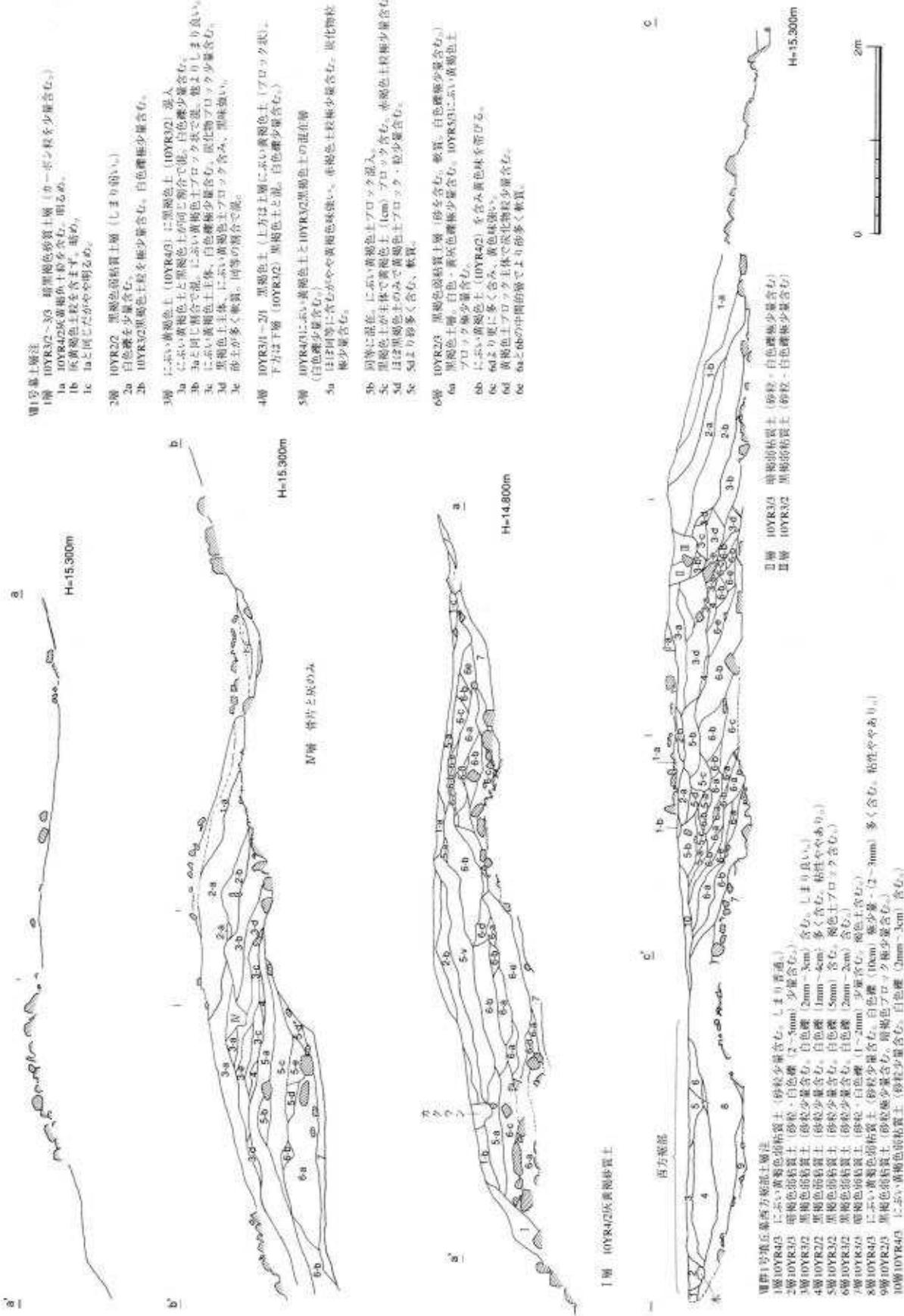
3号墓の東方に位置する。区画は、80cm四方の集石部分を確認したが、東側は流出している可能性があり、東方向に伸びる可能性がある。径30cm大の大きめ礫が目立つ。内部には径15cm程度のやや小さめの礫が使用されている。

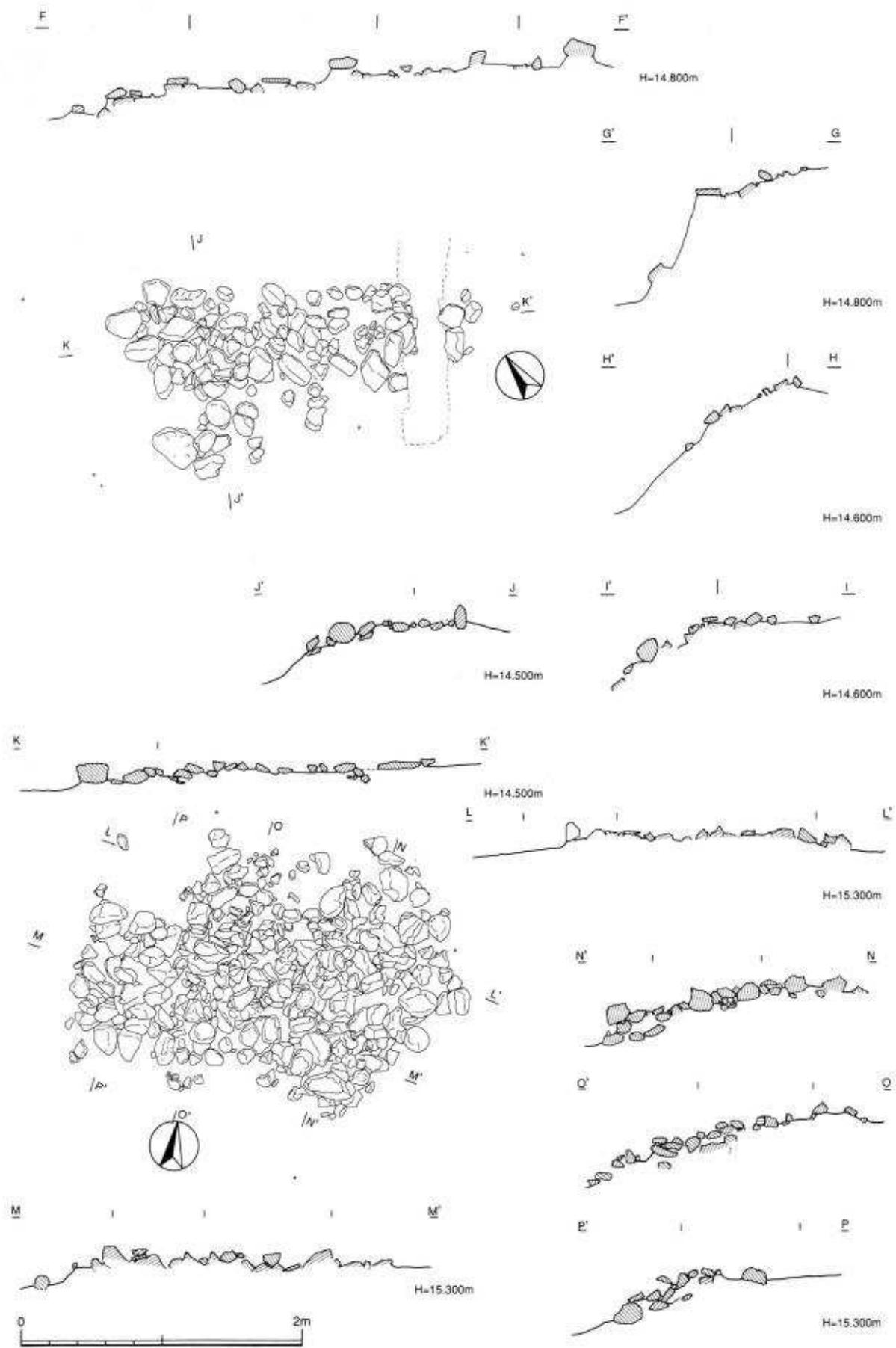
#### VII-C-1号墓

東西95cm×南北100cmのほぼ方形の墓で、2号墓の西辺を共有し、西側に区画延長された墓である。径15cmの礫が区画に使用されている。内部にも使用され、径5cm以下の小礫も大礫の隙間に使用されている。内部礫に五輪塔の残欠が1点見られた。

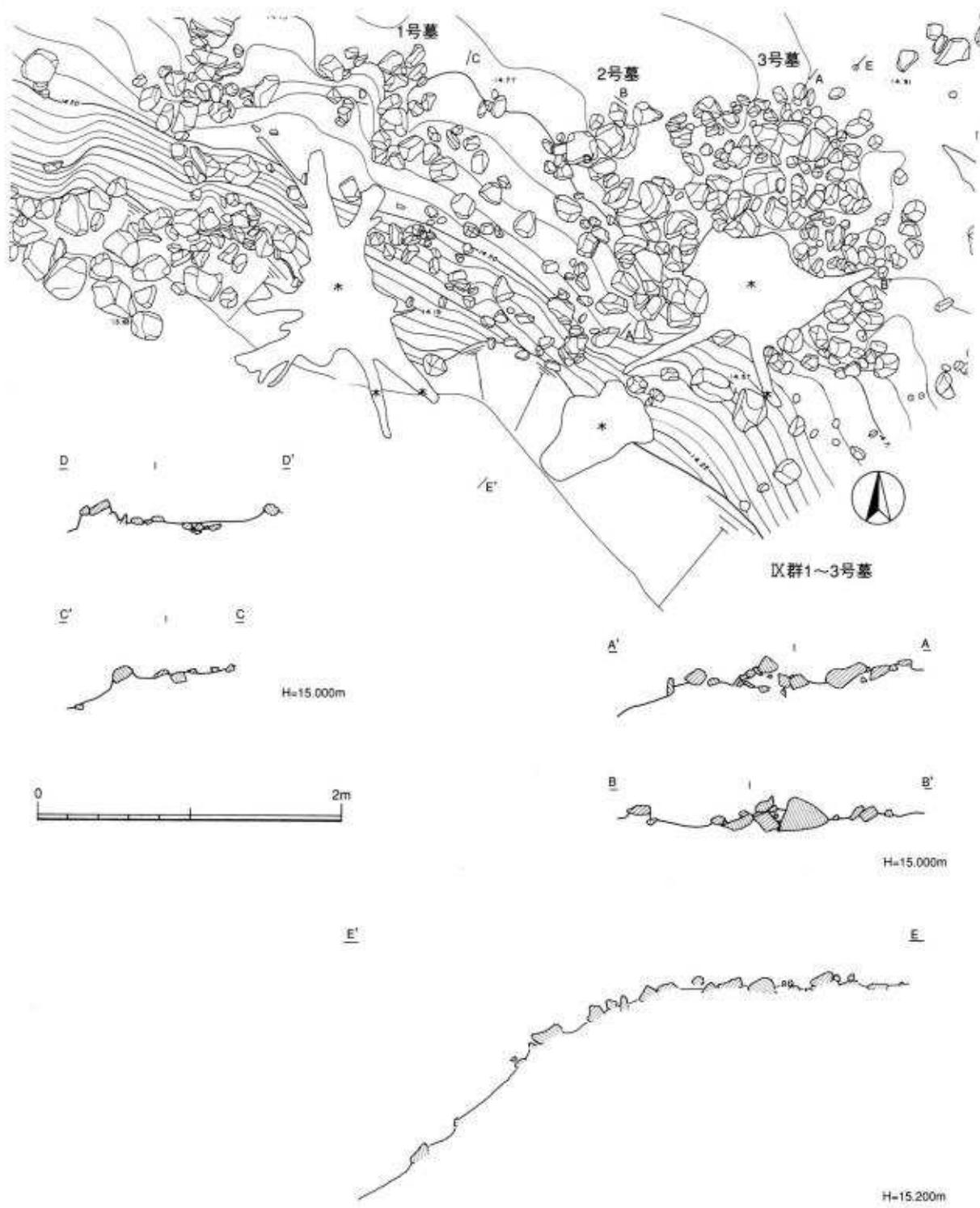


第311図 H遺跡VII群 1号墳丘墓-VII A～C区集石墓平面図・断面図 (S=1/60)





第313図 H遺跡VII群B区1・2号墓・C区1～3号墓平面図・断面図 (S=1/40)



第314図 H遺跡IX群1～3号墓平面図・断面図 (S=1/40)

#### VIII-C-2号墓

1号墓東側に位置する。1号墓の基点であり、東西100cm×南北150cmの長方形に区画され、区画石に約径10～20cmの礫を使用している。内部は同じ大きさの礫と、径5cm以下の小礫が使用されている。但し、3号墓が食い込むように造墓されているため、東西方向の大きさは若干大きくなると考えられる。

#### VIII-C-3号墓

2号墓の東辺に食い込む形で増設された墓で、東西140cm×南北120cmを測る長方形区画である。1・2号墓とは主軸が異なり、やや東側に振っている。区画石は径約15～30cmの礫が使用されている。内部は同じ大きさの礫が

敷かれており、径5cm程度の礫も少量使用されている。この状態は1・2号墓と共通性があり、基点の区画に食い込むものの、同じ系譜上にあるといえる。

#### VIII-C-4・5号墓

3号墓の上方にある礫の集まりを、空閑地などを考慮し二基の墓として捉えたものである。4号墓は直径200cm、5号墓は直径180cmの範囲の集石である。径約15~30cm大の礫が主に使用されているが、主体は径15cm程度のものである。一部集中区がみられるが、詳細は不明である。

#### VIII-C-6号墓

3号墓の下方に位置する墓である。約東西50cm×南北70cmの範囲に、ほぼ方形をなす。明確な区画石はなく、径約10~20cm大の礫が集石されている。内部は同様の大きさの礫が敷かれている。

### 第8項 IX群の調査（第314図）

墳丘墓東南の平坦面に造られた墓である。南面が過去の掘削と植樹によって搅乱を受けており、全体の形を捉えることが困難となっている。そのため、ここでは3基の墓として報告するが、不確定な部分を残す。標高は約14.7mを測る。

#### IX-1号墓

西辺と南辺の存在を重視して設定した区画である。残存部で東西85cm×南北75cmを測る。区画には径20cm大の礫を主に使用している。内部には径10cm大の礫も使用されている。

#### IX-2号墓

2号墓は、主軸を違えて、1号墓上方に東側造られた墓である。南東側が樹木による搅乱を受けている。東西60cm×南北120cmの長方形で、約20cm大の礫を主に使用している。内部は同じ大きさの礫及び、径30cm以上の大礫で構成されている。礫の構成の違いから、3号墓より区画延長された墓と考える。

#### IX-3号墓

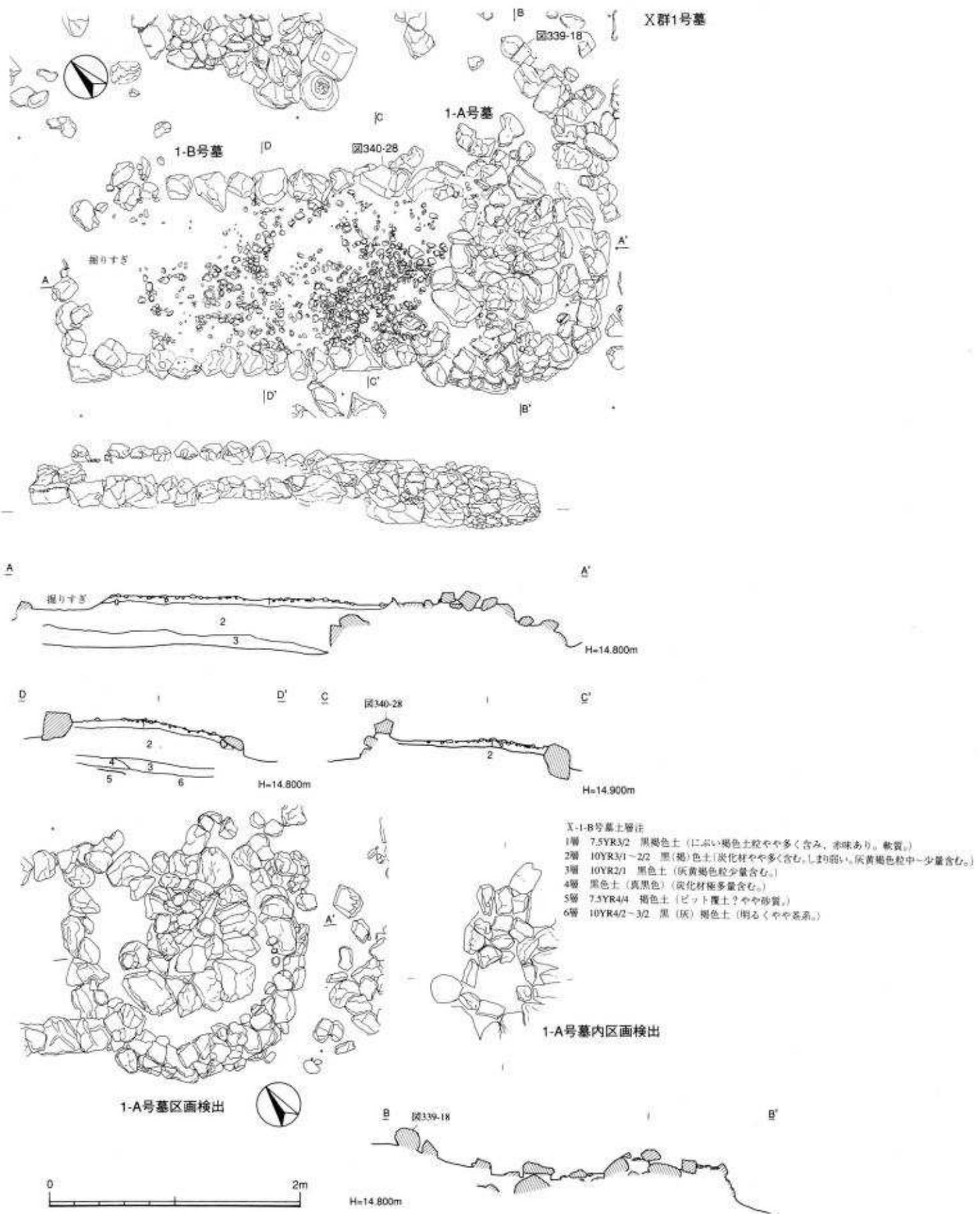
3号墓は2号墓の基点で、東側に位置する。南西側が樹木による搅乱を受けている。東西120cm×南北180cmの長方形で、約10~20cm大の礫を区画石に使用し、内部は同じ大きさの礫や、径5cm以下の小礫から成る。北側には径30cmを超える大礫の集中部分も見られる。内部礫の中に五輪塔の破片が見られた。

### 第9項 X群の調査（第315~316図）

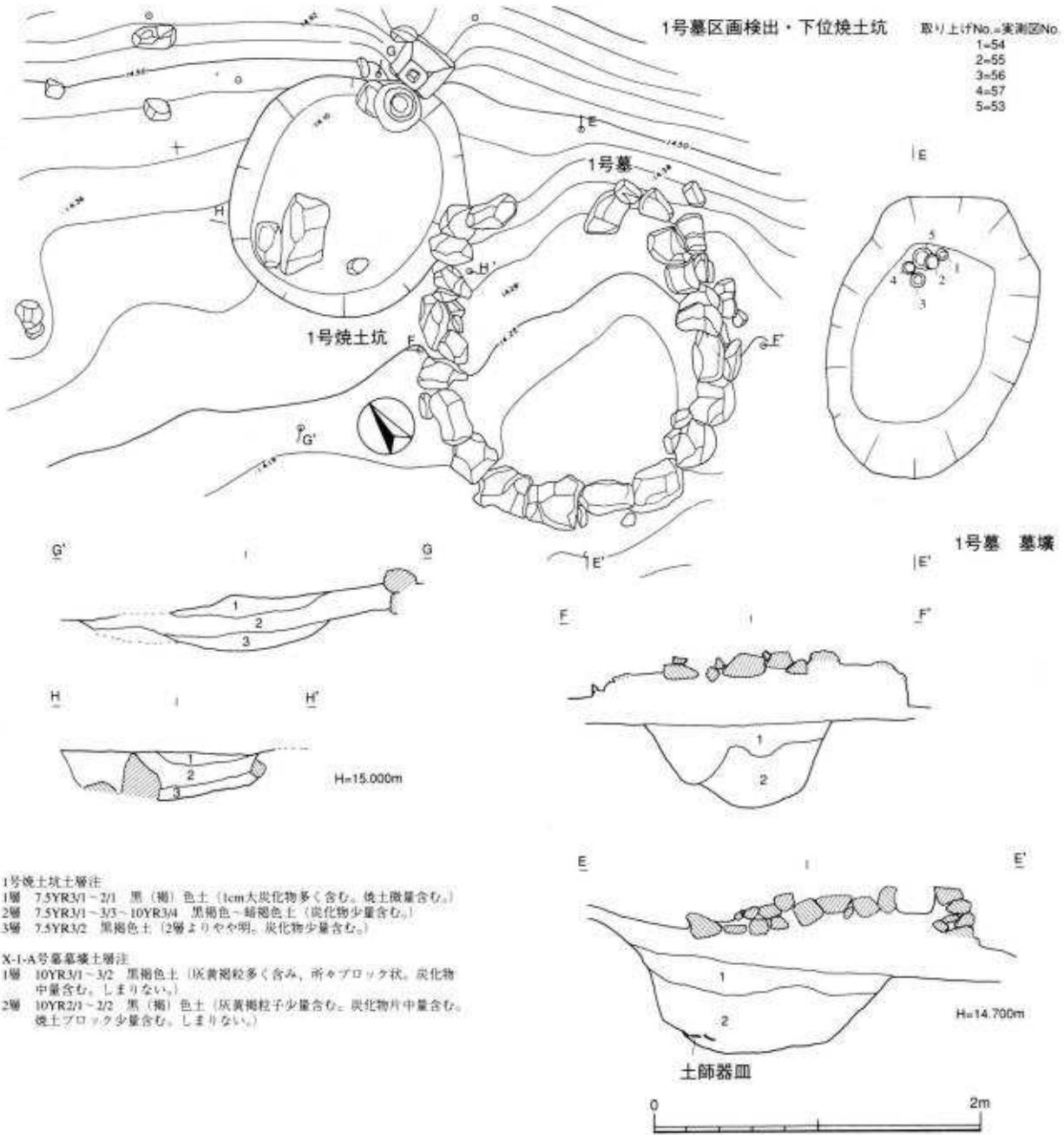
墳丘墓構築以前の緩傾斜面北西部に造られた墓である。墓は円状プランを持つ礫積みの墓（1-A号墓）と、追葬された長方形プランの区画墓（1-B号墓）から構成される。この墓は、頂上で見つかった領主級と考えられる大型墓に類似した外観をしている。この墓の方が後出であり、意図的に似せたものであろう。頂上の墓との、より強い血縁的な関係が想定できる。なお、この墓に先行する形で焼土壙が存在する。

#### X-1-A号墓

円状プランを持つ墓である。北側部分がやや礫が崩れている。斜面に立地しているため、北側と南側検出面には20cm程度の高低差がある。外区の区画石は斜面に合わせた礫積となっており、低い南側部分は4段に積まれ、西側と東側は傾斜に合わせ2段となっている。高い北側は1段のみとなる。外区は東西190cm×南北約210cmを測る。基底石に径30cm大の礫が使用され、その上に径15cm~20cm大の礫が積まれている。内部には土を充填し水平面を形成し、内区が集石によって造られていた。内区は東西105cm×南北130cmを測る。四隅に50cm大の大きい礫が配置され、それらを長径30cmの礫でつなぐ形で形成され、長方形区画をなす。内部には更に小さい径10cm大の礫を詰めていた。小礫を除去すると、円形の空白地が検出されたが、遺物や骨片は出土していない。また、封土内からも遺物は出土していない。下位より墓壙を検出しており、東西120cm×南北172cm×深さ50cmを測る。やや北寄りだが、外区内に収まる。内部は焼土・炭化物交じりの黒色土で埋るが、火葬骨片等は含んでいない。北西隅底面に、5枚の土師器皿が納められていた。内訳は大1枚小4枚で、全て完形である。3枚が表、2枚が裏の状態で検出された。



第315図 H遺跡X群1号墓平面図・断面図 (S=1/40)

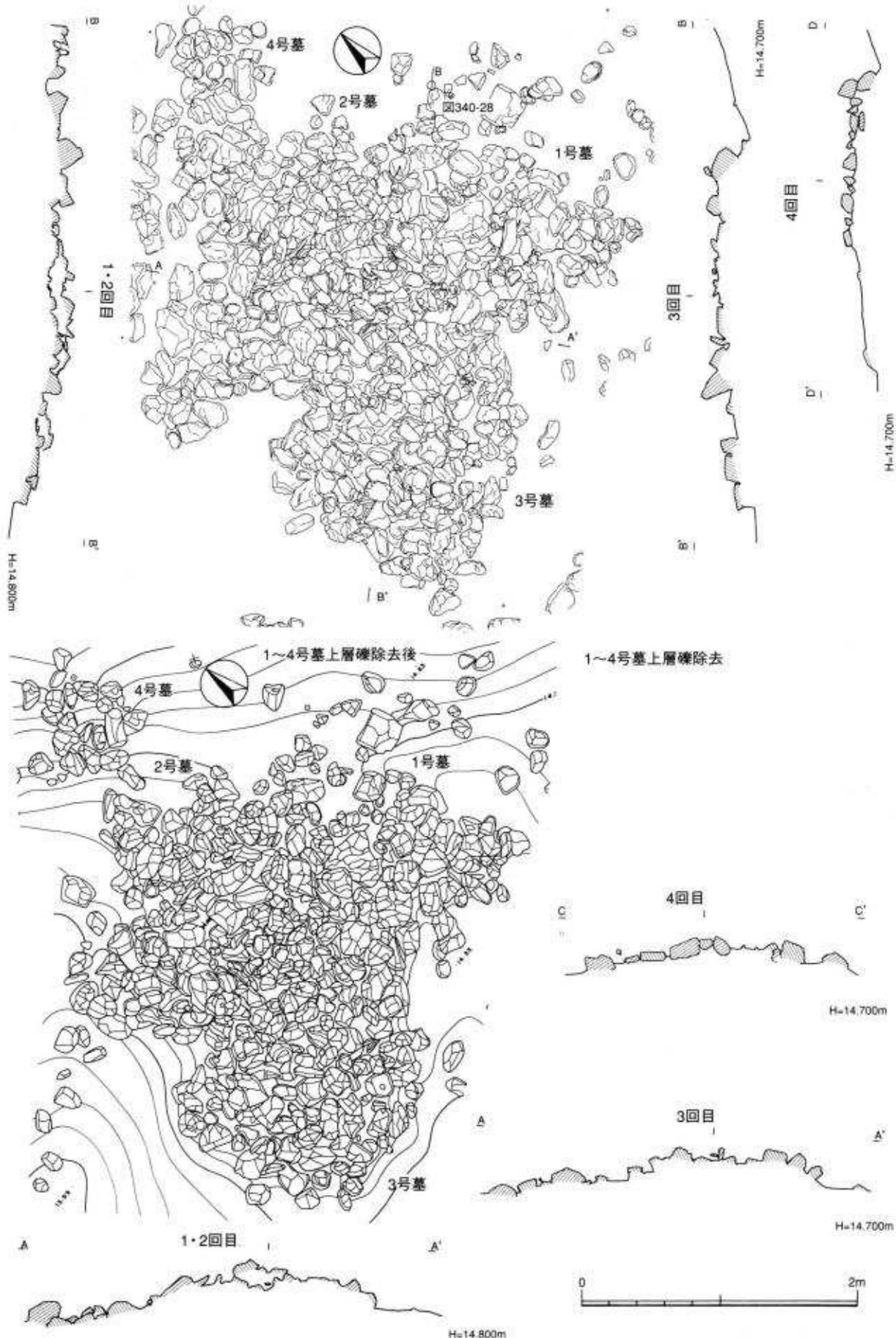


第316図 H遺跡X群1号墓平面図・断面図 (S=1/40)

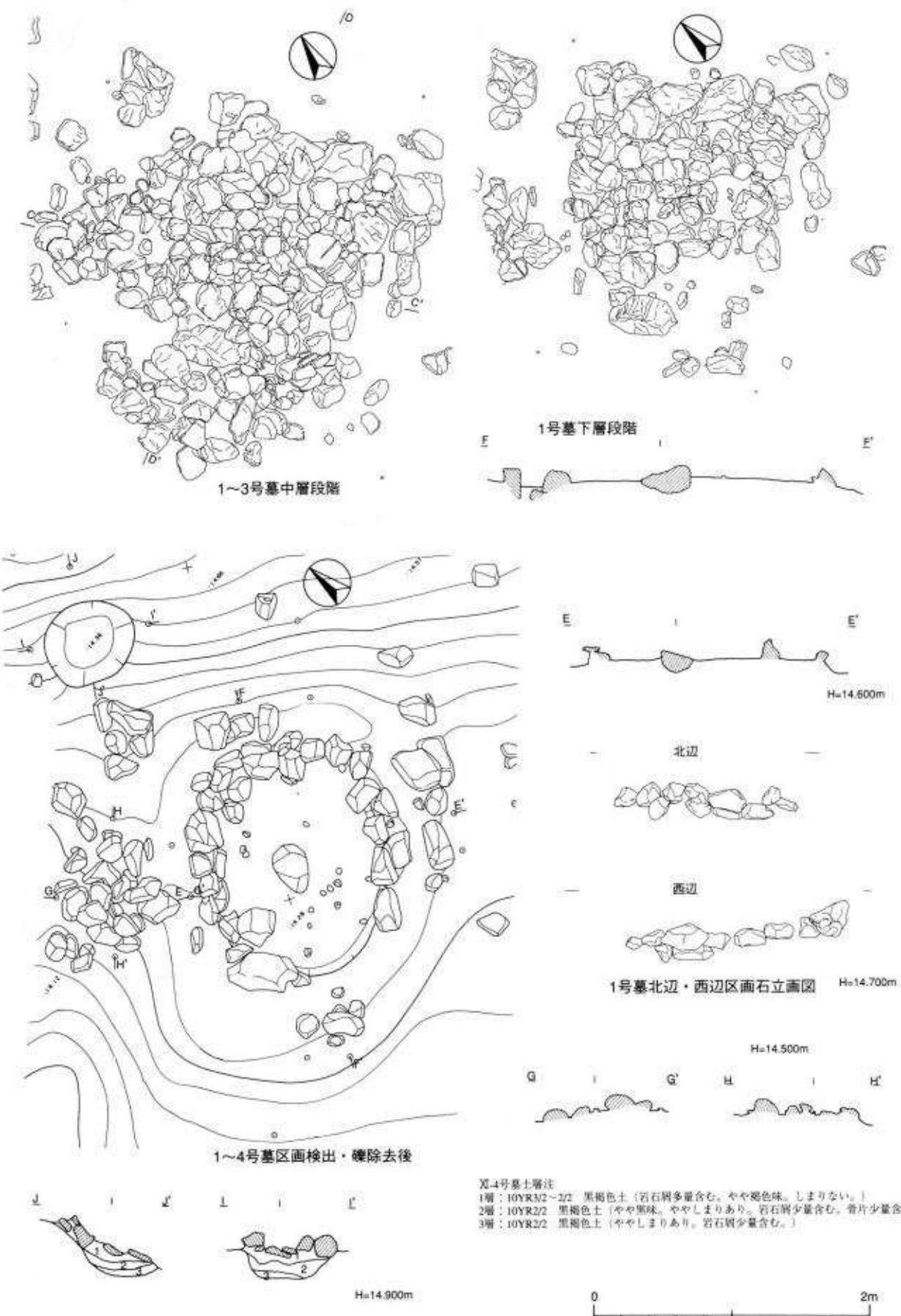
### X-1-B号墓

1-A号墓の西側に区画延長する形で造られた墓である。東西308cm×南北160cmを測る。区画石は一段のみであり、1-A号墓内区西辺を1-B号墓の東辺として区画を設定している。このことは、区画石下の土層が区画外に延びていることから、追葬には時間差があったと考えられる。しかし、この地にこの2基が造られることは、最初から決まっていたと考えられる。区画石には径15cm~30cm大の礫を使用している。北西隅のみ欠損していた。また、北東隅部分で五輪塔火輪の転用が見られた。内部は整地され、小礫が敷き詰められている。小礫の分布には明らかに空白部分があり、石塔を造立した可能性もある。但し、西端部分の空白は、調査時に除去してしまった結果である。

## XII群1~4号墓



第317図 H遺跡 XII群1~5号墓平面図・断面図 (S=1/40)



第318図 H遺跡 XI群 1~5号墓平面図・断面図 (S=1/40)

## 1号焼土壙

1-A号墓の西隣から検出された。当初、1-B号墓の墓壙かとも考えられたが、区画を外れており、また、1-A号墓の外区基底石が上位にあることから、1-A号墓より先行する。断面図上で、東西140cm×南北220cm×深さ30cmを測る。焼土や炭化物を含む黒褐色土で埋るが、遺物や骨片は出土しておらず、長径50cmと30cmの大礫が2つあるのみだった。しかし、西側の壁が焼けており、何かを燃やしたことは確実である。但し、火葬を行ったかどうかは判断できない。

## 第10項 XI群の調査（第317～318図）

墳丘墓構築以前の緩傾斜面北東部に造られた墓である。310cm四方の大きな一つの集石として検出されたが、礫の状態や、墓壙の位置より類推し、3基の墓の集合体として捉えた。基底石のレベルがX-1-A号墓と同じ地山上に存在することから、ほぼ同じ時期と考える。この集石墓の西北上方にある小規模の集石墓は、墳丘墓構築以前の斜面上にあり、距離的に近いXI群の墓として報告する。

### XI-1号墓

検出状態では外区プランは判断できなかった。上層礫を外していくと、方形プランが出現した。外区は東西210cm南北約240cm×を測ると考えられる。内部に楕円形プランの内区が存在しており、基底石に径20～30cm大の礫が使用され、1段～2段に組まれている。南東部分には、基底石が存在しなかった。南西隅にのみ径50cm大の礫を使用し、中央に径40cm大の礫が単独で存在した。内区は、東西160cm×南北180cmを測る。この墓は、礫積みのみで造られている。楕円形の内区が設定された後、一回り大きな長方形の外区が造られ、内部に礫が積み上げられて造られたものといえる。南方向から見ると約40cmの高さを持つ。

### XI-2号墓

2号墓は、1号墓の西側に区画延長する形で造られた墓である。区画石は明確ではないが、東辺は1号墓と共有する。東西90cm×南北180cmを測る長方形をなす。内部は径10cm～25cm大の礫が敷き詰められている。礫を除去すると、南側下間に礫の集中が見られた。

### XI-3号墓

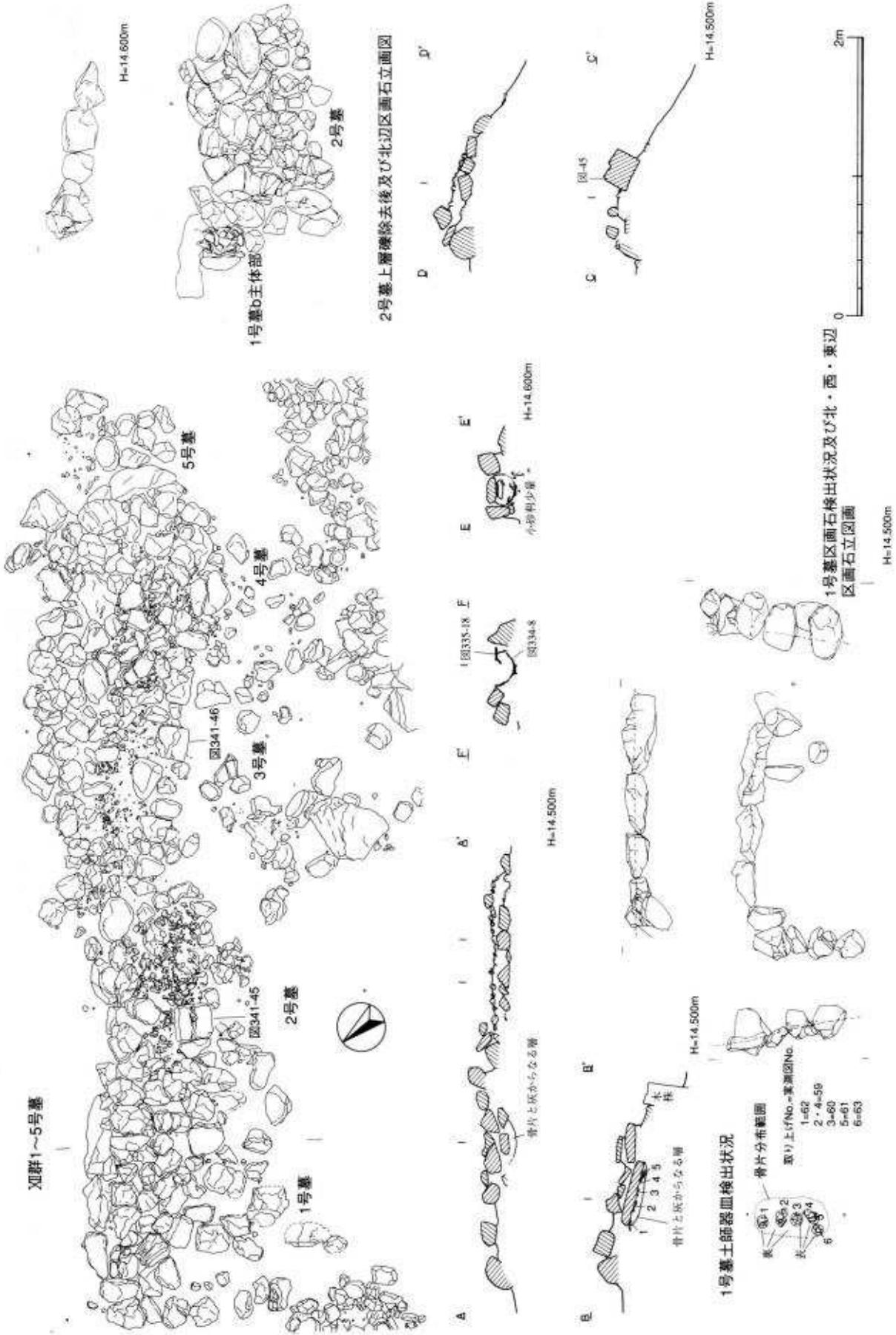
1号墓の南側に区画延長された墓である。主軸は1号墓より西側に振る。北西部分が1号墓に食い込んでいるため南北軸の大きさは断定できない。推定で南北120cm×東西160cmを測る。2号墓と同様に径10cm～25cm大の礫が敷き詰めた状態である。南辺のみ25cm大の礫を多用していることから、正面をしっかり造る意識が読み取れる。

### XI-4号墓

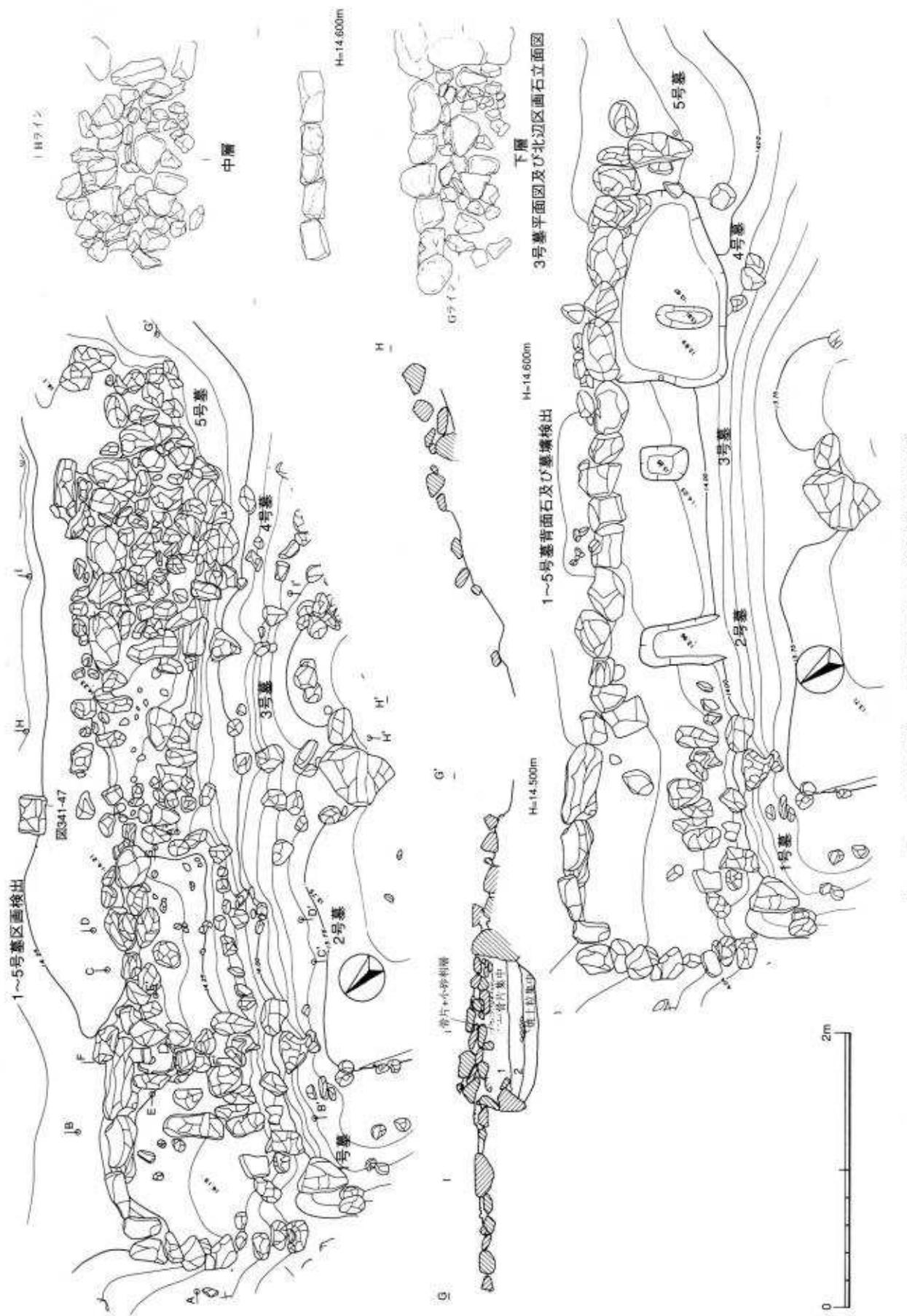
4号墓は、1・2号墓の北西側の斜面上に造られた、東西55cm×南北60cmを測る方形区画である。径15cm～20cm大の礫から成る。墓は斜面に対し平行に存在し、上端と下端で30cm程度の比高差がある。下位より墓壙が検出されている。上端で東西69cm×南北75cm、底部で東西42cm×南北30cmを測る。背面側を深く掘ることにより、底部が水平に造られている。埋土は黒褐色土で、中層部分より少量の火葬骨片が検出された。

## 第11項 XII群の調査（第319～321図）

墳丘墓構築以前の緩傾斜面中央部分に造られた墓である。西端の1号墓は、墳丘裾から露出した状態であった。東西軸で5基が連続する状態で作られた墓であり、同族関係が想定される。墓自体は小型化しており、周辺のX、XI、XII群の大型墓が造られたあとその隙間に占地したようである。このことは、追葬と考えられるX-1-B号墓と同じレベルの地山上に存在することからもいえよう。前述の群と墓の構築時期に差があることは確実だが、墓の大きさが単純に階層差を示すのかは判断材料がない。基底石によって予め3基分のスペースが占地されている点が特徴である。基本的に2～4号の順で造られているが、3・4号墓の前後関係は後で詳述する。北辺基底石は長さ440cmを測り、西から東へ詰まれている。3基とも東西約150cm前後を占有している。1号墓北辺の基底石も連続するように見えるが、東から西に詰まれており、区画延長されたものである。5号墓は4号墓から区画延長されたものである。2号墓が北辺連続基底石に規制されて、これを北辺として造墓しているのに対し、3・4号



第319図 H遺跡X群1～5号墓平面図・断面図 (S=1/40)



第320图 Hanyang Tomb Cluster 1 ~ 5号墓平面图·断面图 (S=1/40)

墓は、さらに北側に外郭線を設定しており、北辺連続基底石を跨いで区画が設定されている。しかし、下位施設の構築はその規制をうけており、無視したわけではない。これは、時期差と考えるよりは、2号墓の被葬者より両者の関係を強調するためか、対外的により大きな表象を作る必要があったためであろう。なお、1~5号墓とも南面は崩壊した状態で検出されており、以下このことを前提に記述している。よって、個々に示す南北軸の大きさは残存長である。

#### XII-1号墓

2号墓より西側に区画延長された墓である。東辺を2号墓と共有する。外区は基底石の内側に接して、更に区画石が回る二重区画になっている。北辺基底石には長辺30~60cmの細長い礫が使用され、他の区画石に20~30cm大の礫が使用されている。東西180cm×南北150cmを測る。東寄りの位置に方形区画の内区が造られている。15~20cm大の礫が使用され、東西100cm×南北110cmを測る。内部は礫敷きである。内区下位には、長辺50cm×短辺15cmの扁平な蓋石が検出された。蓋石は、土に覆われた状態であり、敷石を外しても蓋石は見えない状態である。蓋石の直下に約5cm程度の掘り込みがあり、内部より集中して火葬骨片が検出された(a主体部)。5枚の完形の土師器皿が副葬されており、蓋石の重みで割れた状態であった。一方で、北東部の2順目の区画を崩して、西と南に礫を一つずつ置く形で主体部を形成し、追葬が行われていた(b主体部)。調査区内で唯一蔵骨器が検出された墓である。礫の外側で約50cm四方をはかり、内側で東西22cm×南北31cmを測る。その内側とほぼ同じ大きさの蓋石が載った状態であった。蓋石を外すと、越前焼の鉢で蓋をされた、臓骨器の壺が設置されていた。但し、鉢は蓋石及び墳丘の土圧で破損しており、壺の口縁部ごと内部に押し込まれた状態であった。内部には、骨片と共に、銭貨が一枚副葬されていた。壺の設置に際し主体部底に砂利が少量敷かれていた。臓骨器の壺は、時代は弥生後期で、東海系の在地化したものであり、蓋である鉢と1000年以上の開きがある。時期は「法仏期」という見解もあり、八里向山遺跡群の中では該当する遺跡はない。また、土器の依存状態からも低湿地にあったといえ、付近では梯川流域や大長野付近に当該期の遺跡の分布がある。しかし、それらの遺跡からは見つかっていない型式の土器である。

#### XII-2号墓

2号墓は1号墓の東側に位置し、北辺連続基底石が造られたあと最初に造られた墓である。区画石は西辺と北辺は基底石をそのまま使用し、東辺は10~20cm大の小ぶりな礫が使用されている。東西150cm×南北130cmを測る。内部は小礫・砂利が敷かれたあと、石塔が建てられていた。石塔は地輪のみが検出されている。かなり斜めになっているが、これは南面が崩壊していることの影響であり、位置自体はほぼ原位置を保っていると考える。内部の小礫・砂利敷きを除去すると、基底石上辺とほぼ同じレベルで礫敷きが検出された。10~15cm大の礫が使用されている。これを除去すると区画中央部分より、小ピットが検出された。南側が失われているが、東西30cm×南北65cm測り、隅丸の長方形体をとる。しかし、火葬骨片等は区画のどの部分からも見つかっておらず、石塔自体に納められた可能性もある。一方で、この区画に最初に造られた墓の石塔であることを重視すれば、藤澤氏の言う「墓地を聖地化する意味の造塔」と捉えることも可能である。

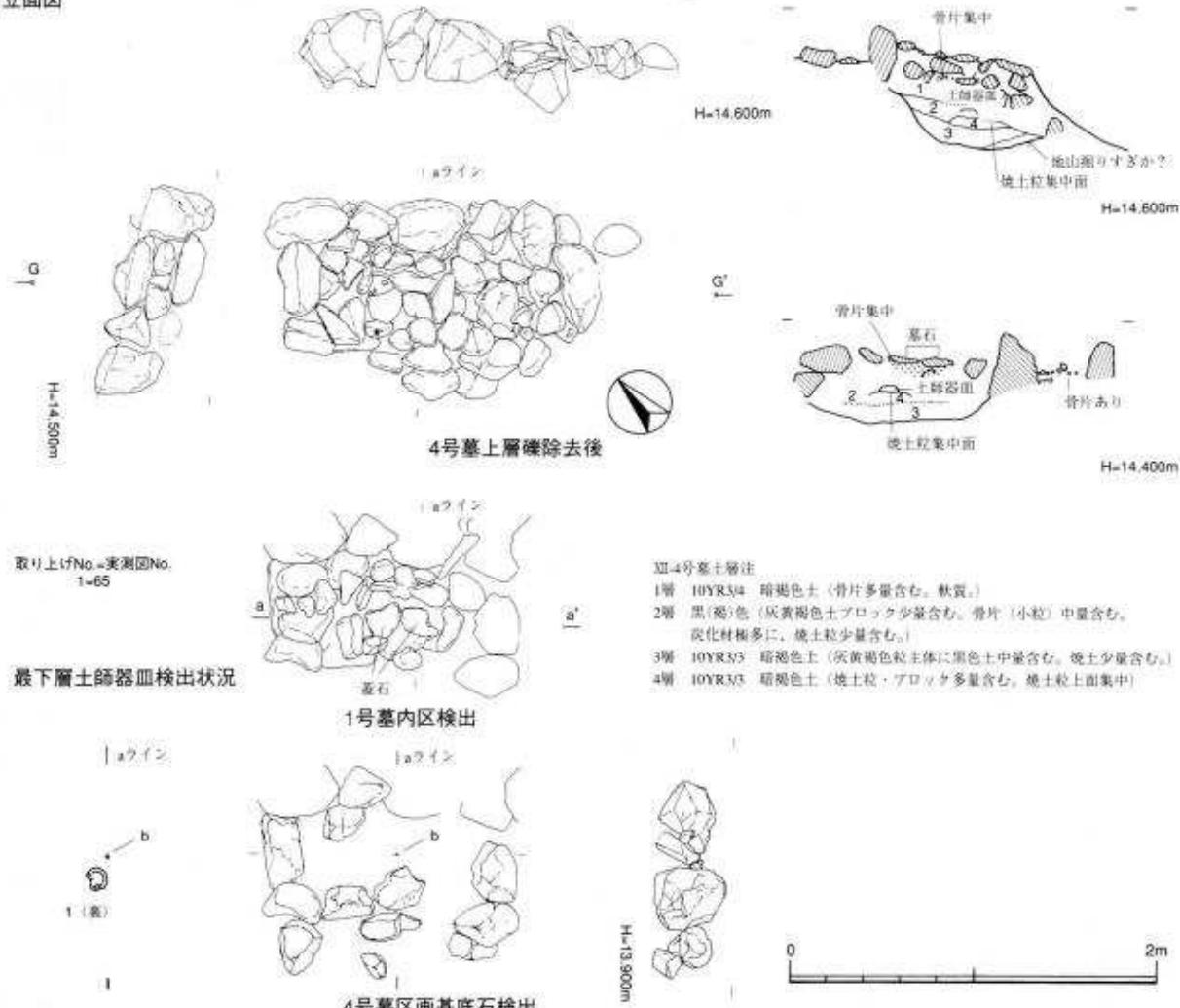
#### XII-3号墓

2号墓の東側に区画延長された墓である。西辺は明確ではなく、2号墓と共有していると考えられる。北辺が北辺連続基底石より約30cm程度北にずれた位置に設定される。東西150cm×南北100cmを測る。区画石には10~20cmの礫が使用されている。内部は砂利が敷かれているが、疎らに20~30cm大礫が見える。内区を示す可能性がある。下位ピット真上に来るものがあり、蓋石とも考えられる。南西隅部に、地輪が検出されている。南面は崩壊の影響を受けてはいるが、3号墓に造立されたものと考える。内部の砂利層を除去すると、内部は礫敷きになってしまっており、蓋石付近の礫以外は、2号墓同様の大きさの礫が使用されている。下位ピットは区画の中央よりやや西寄りに位置し、東西25cm×南北35cmの長方形体を成す。しかし、火葬骨片等は検出されていない。

#### XII-4号墓

3号墓の東側に造られた墓である。150cm四方を測る方形区画である。区画石は径25cm~30cm大の礫から成る。最終形態は礫積みの状態であり、10~20cmの礫が使用されている。表面観察により3箇所の骨片集中区が見られた。直下には骨片混じりの砂利層が敷かれていた。その下は礫敷きになっており、15~20cm大の礫が使用されている。中央に東西70cm×南北45cmの範囲の内区が造られている。内区は長辺15cm程度の細長い石によって囲

4号墓平面図及び北・西・東週  
区画石立面図



第321図 H遺跡群4号墓平面図・断面図 (S=1/40)

まれている。その内にも骨片層があり、中央に2つの扁平石による蓋石が検出された。とくに扁平石周辺に骨片が集中しており、その中でも東側の石の裏に極多の集中が見られた。全体を覆う骨片混じりの1層を除去すると、下位より墓壙が検出され、特殊な納骨形態が観察された。最下層を暗褐色土で埋めた後、焼土ブロックを多量に含んだ土を盛り上げる。その上端平面部の焼土粒が集中した部分に土師器皿に灰と骨片を詰め、逆さにして設置し、骨片をやや多く含む黒色土で覆うというものである。土師器皿はやや浮いた状態であり、有機質の袋状の入れ物に被せた状態だったとも考えられる。上端で東西100cm×南北75cmを測る。東西の壁面は基底石によって押さえられている。崩壊した南面斜面にも火葬骨片が分布しており、調査区の中で最多である。

### XII-3・4号墓の造墓関係

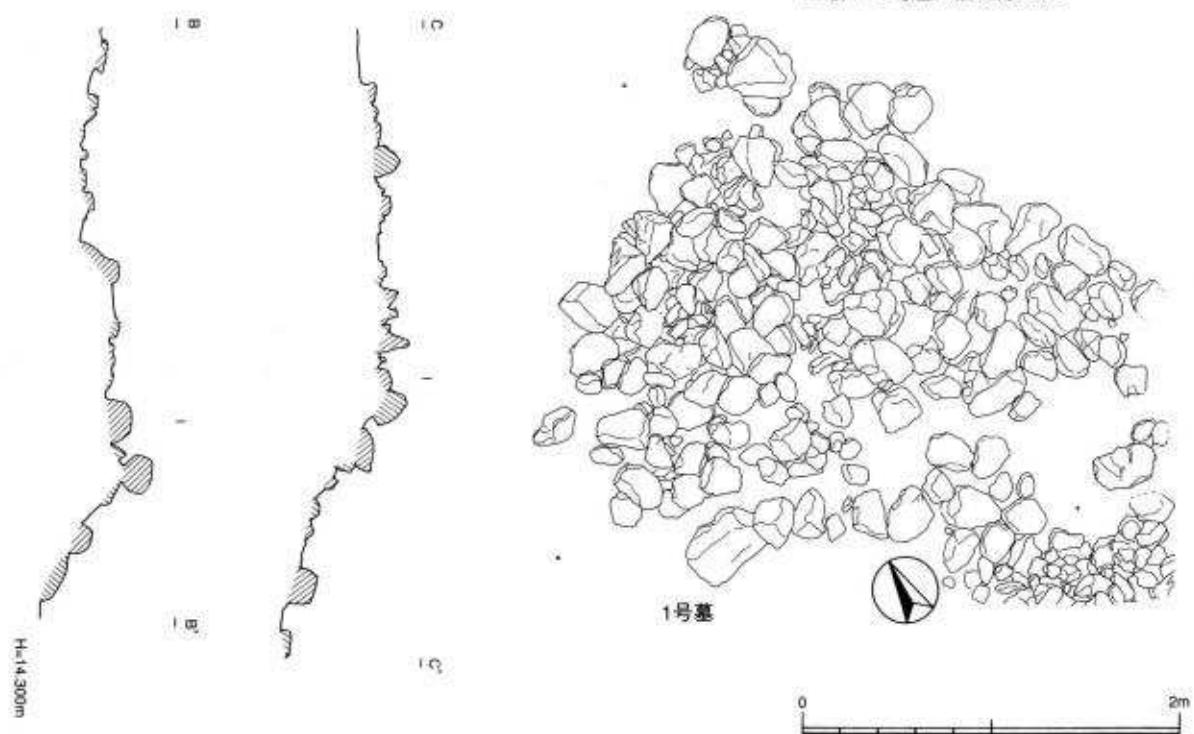
ここでは、3・4号墓の造墓過程を検証する。境界付近の根石の上下関係より判断した。最初に4号墓墓壙が掘られる。これは、西側が3号墓敷地内にやや食い込んでいることからも分かる。その東西壁の立ち上がり30cm程度を礫で押さえれる。最下層を埋めた後、焼土を敷いて土師器皿によって火葬骨が納められる。その上に骨片を多量に含む土で覆い、内区が形成される。内区内には火葬骨片が多量に納められ、蓋石がされる。3号墓はこのときに、敷石が形成されたものと推察する。それは、4号墓の西辺根石を基準としている可能性が高いからである。この段階で外区のラインが決められ、その後砂利混じりの封土が敷かれる。4号墓は、礫が積まれ、3箇所の骨片集中区が形成される。五輪塔が建てられたのは3号墓形成以後ということ以外は不明である。これらの造墓過程に時間差があったであろうか。流土層の堆積が認められないことから、人為的に流土層の除去が行われない限りは、一連の流れのなかで形成されたものと考える。但し、4号墓上位の3箇所の骨片集中は追葬の可能性もある。

XII群1・2号墓

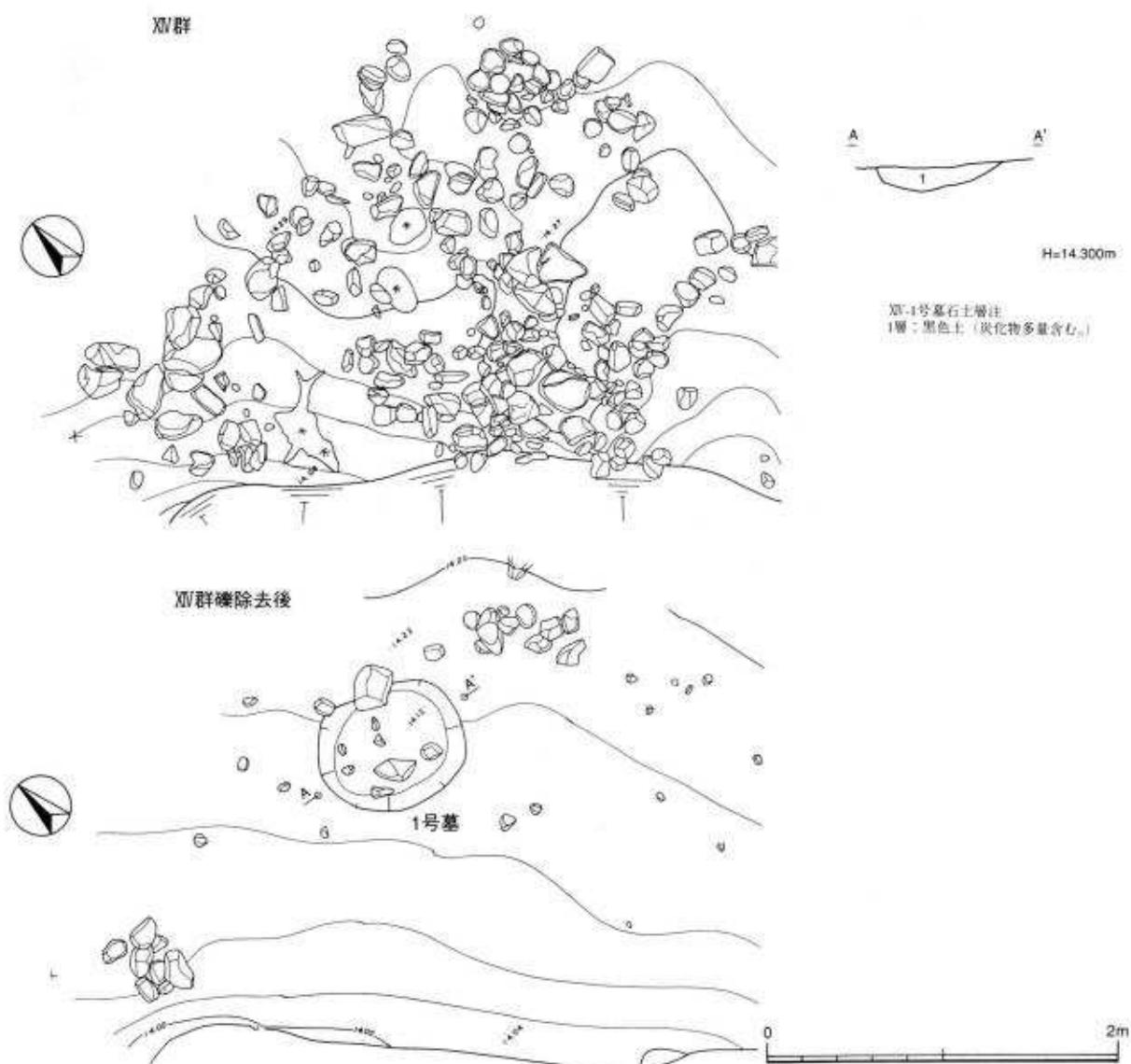


H=14.300m

XII群1・2号墓土層除去後



第322図 H遺跡XII群1・2号墓平面図・断面図 (S=1/40)



第323図 H遺跡XIV群1号墓平面図・断面図 (S=1/40)

また、五輪塔が建てられたのは3・4号墓形成以後といえ、後の供養塔の可能性もある。

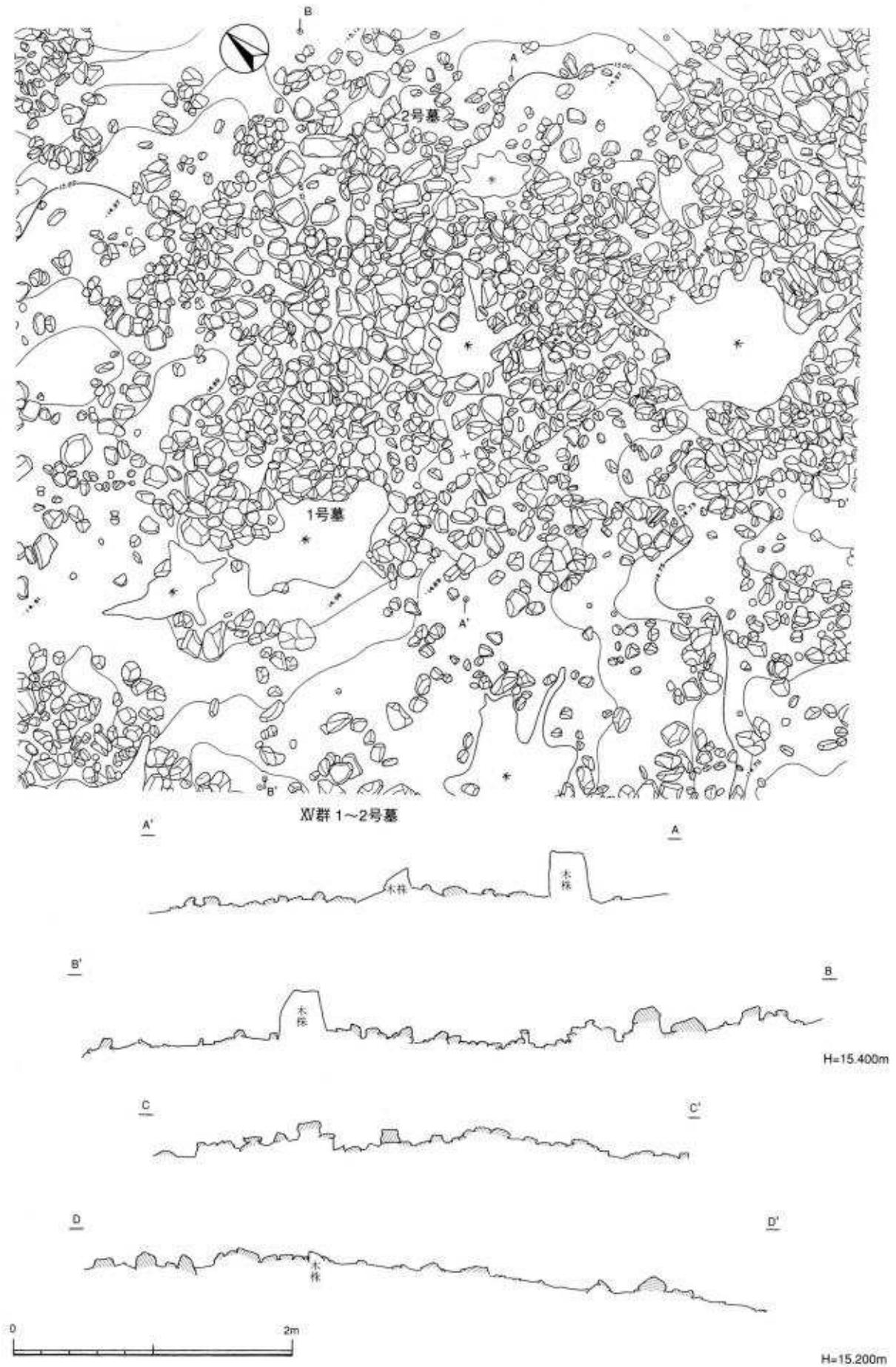
#### XII-5号墓

4号墓の東側に区画延長された墓である。西辺を共有している。60cm四方の小区画の墓に見えるが、北東隅部にある2石は、25~30cm大と内側の石よりやや大きく、外区の石と考えられる。よって、方形区画の内区の外側を外郭石が囲むタイプと想定できる。内区は15~25cm大の礫が使用されている。内区より火葬骨片が検出されている。

#### 第12項 XIV群の調査 (第322図)

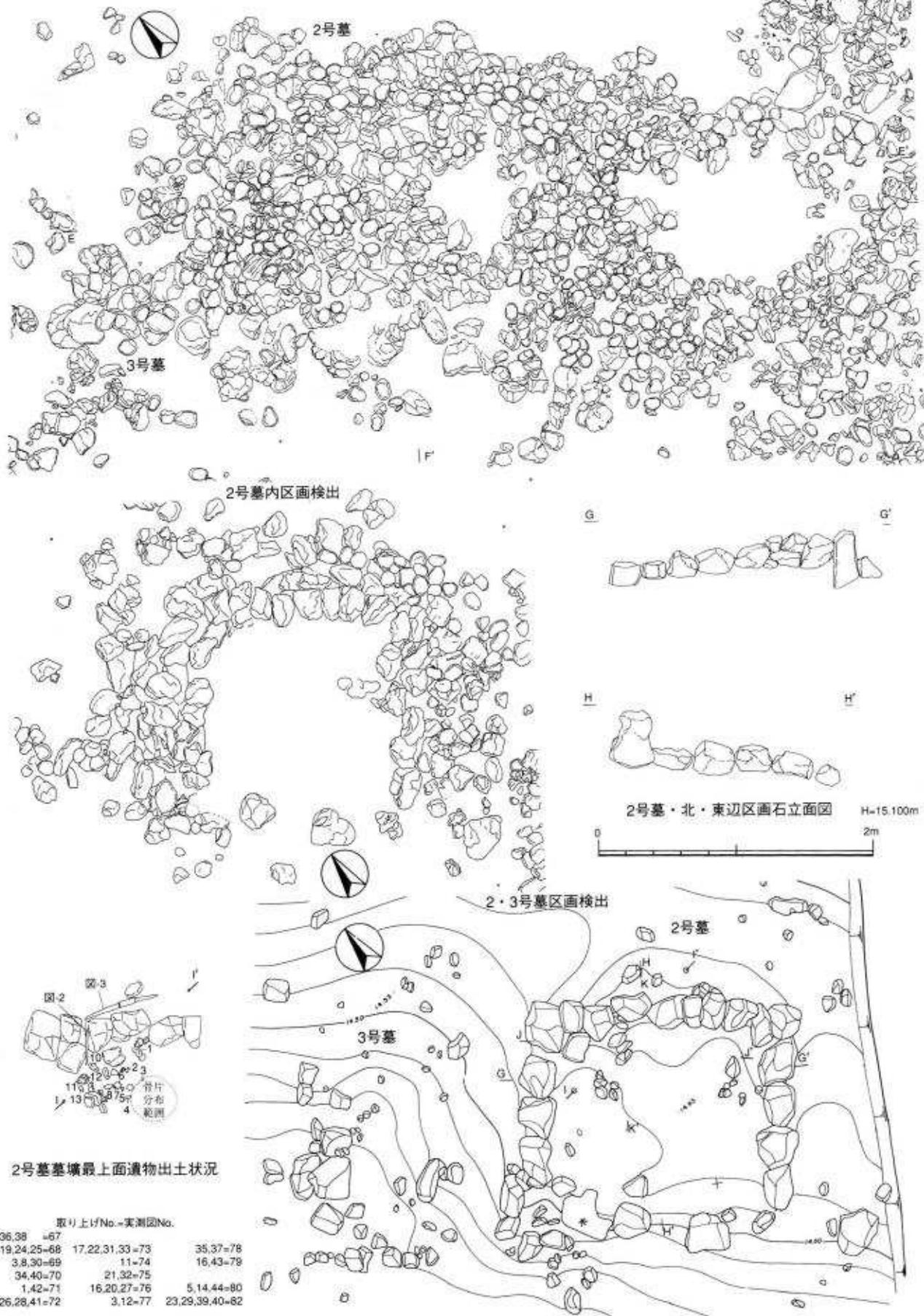
#### XIV-1号墓

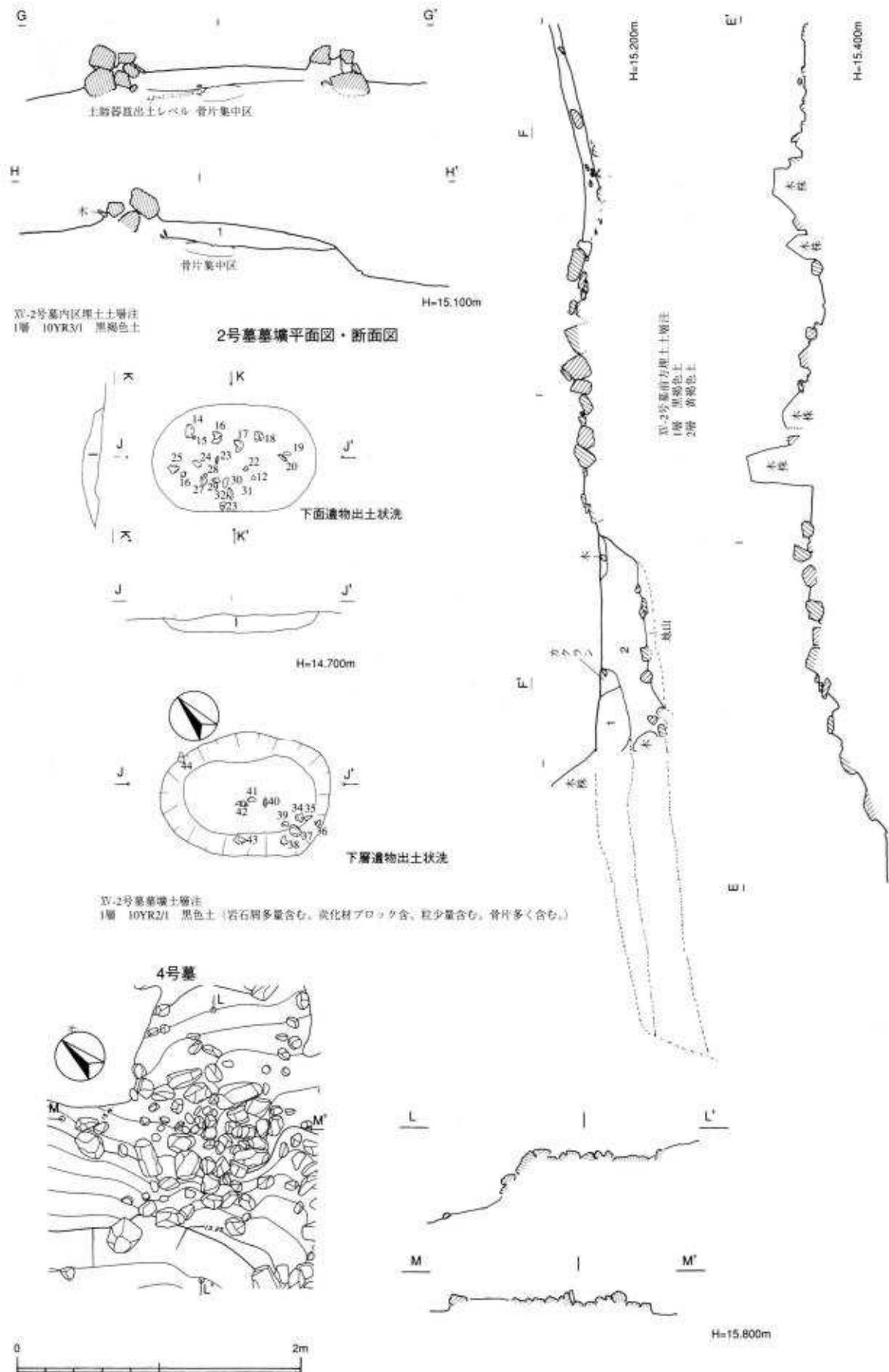
墳丘墓構築以前の中央南端平坦面に位置する。東西350cm×南北300cmを測る礫を積み上げるタイプの墓である。北西部に東西80cm×南北70cmの空白地があった。区画石には径20~30cm大の礫が使用されている。内部には径30~40cm大の礫もあるが、径10cm以下の小礫が多く使用されている。五輪塔の地輪が2基、水輪が1基見えるが、破損状態を見る限り転用であると考える。上位礫を外すと、約220cm四方の区画が検出された。その東側



第324図 H遺跡XV群1～2号墓平面図・断面図 (S=1/40)

F  
2~3号墓上層疊除去後

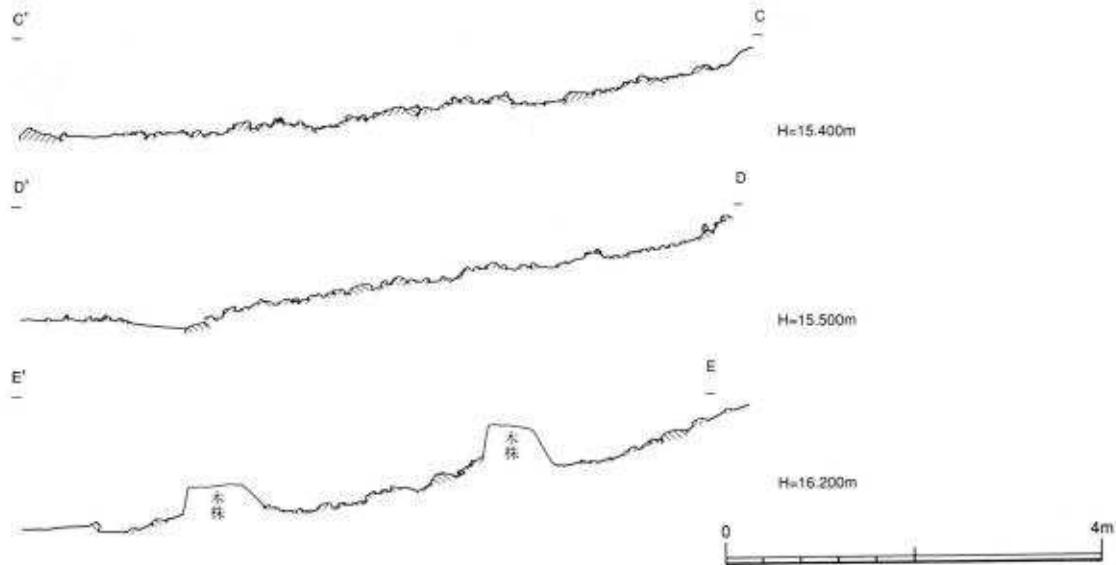




第326図 H遺跡XIV群2・4号墓平面図・断面図 (S=1/40)



第327図 H遭跡群保存区域平面図・断面図 (S=1/80)



第328図 H遺跡X群現状保存区域断面図 (S=1/80)

に連続してもう一区画墓が形成されているようだが、立ち木による搅乱により、規模は不明である。東端部分で火葬骨片の分布が確認されている。これ以上掘り下げることはせずに、保存措置をとった。

#### 第13項 X群の調査（第323図）

墳丘墓構築以前の東南端平坦面に位置する、東西350cm×南北250cm圏内にある礫群である。数箇所の礫集中部分があるが、立ち木の搅乱を受けており、明確な区画として捉えることはできない。その中で、墓壙が検出された墓のみを報告する。

##### X-1号墓

北西部で検出され、東西84cm×南北68mを測る。深さは13cm程度である。内部は礫のみが点在していた。但し、黒色の埋土中には多量の炭化物が混入していた。上位の表象の存在は、捉えることができなかった。

#### 第14項 X群の調査（第324～328図）

調査区の東側斜面の大半を占める礫群である。南北6.5m×東西11.5mを測る広大な範囲だが、礫の切れ間がないため一群として報告する。墳丘墓下の墓群よりはやや高い位置に存在している。東端部分では上層除去後、更に下位に礫の広がりを確認しており、上下に分布する可能性を示唆している。突出部分でも上下の重なりが観察でき、それが墳丘構築前後に分かれられるようである。しかし、調査を行ったのは、西端部分の突出した部分のみである。残りの部分は、現状保存扱いとして、調査は行わなかったため、詳細は不明である。

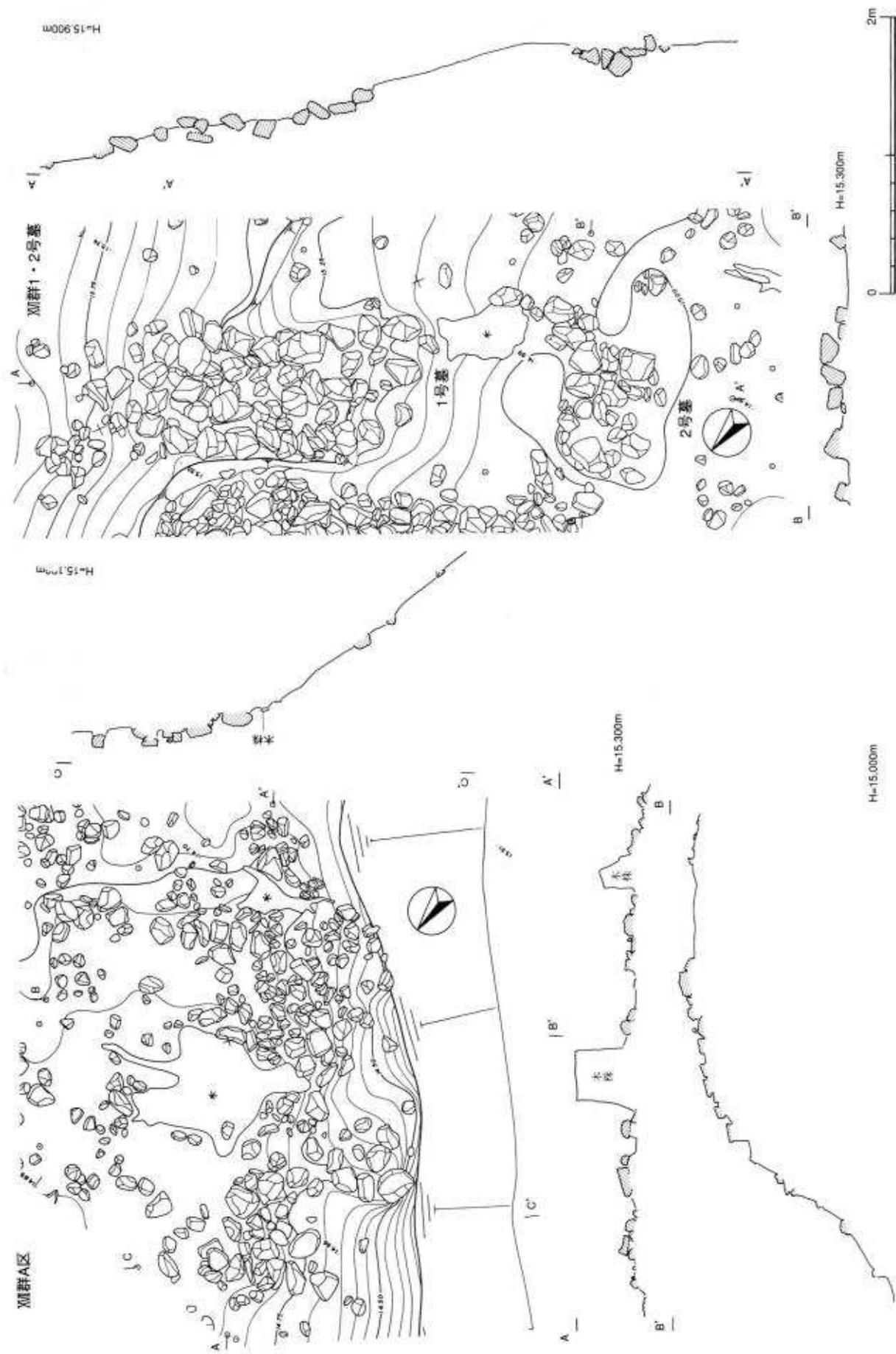
##### X-1号墓

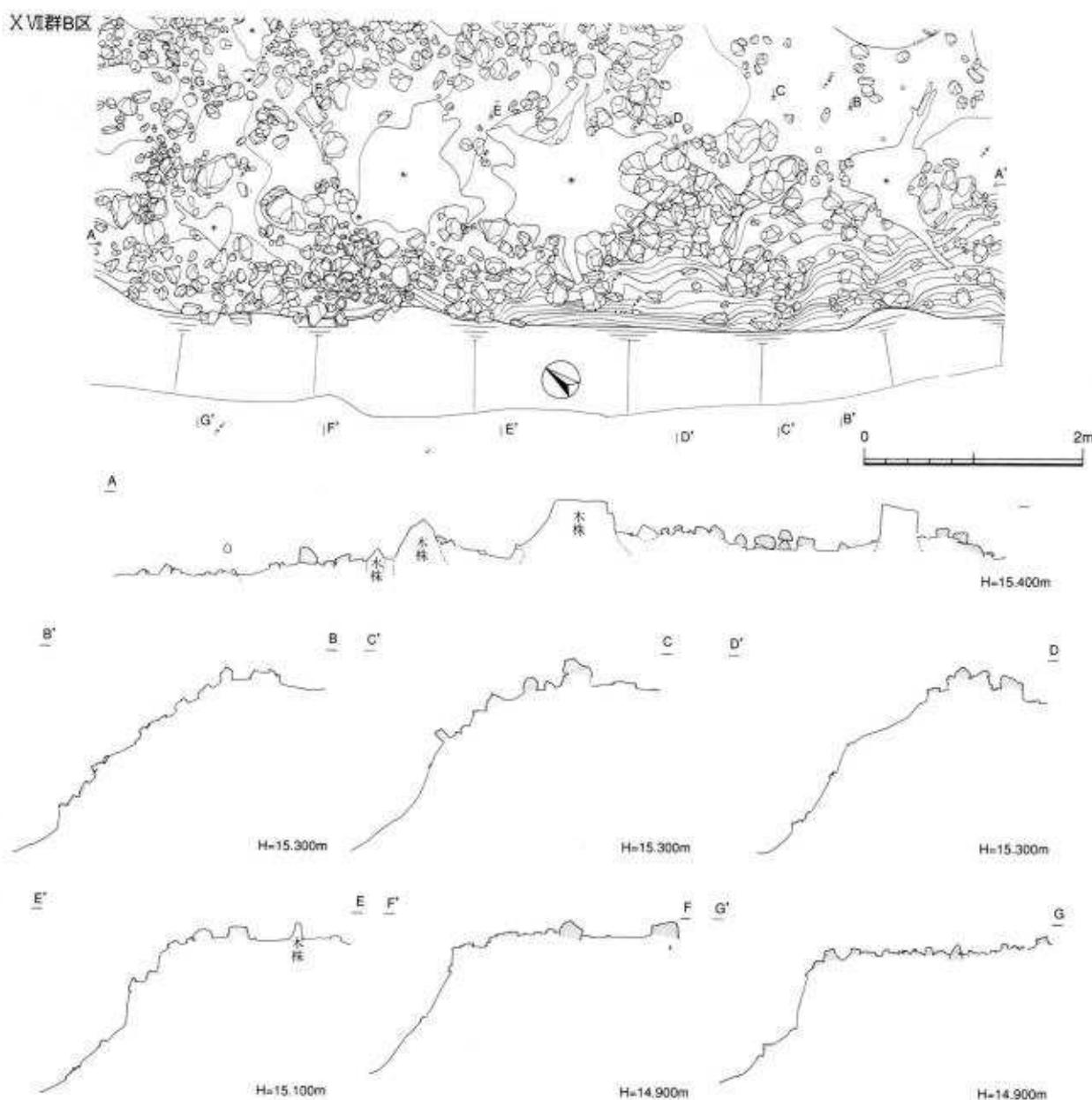
墳丘墓が形成され2号墓が検出時の段階まで埋った状態で造られた墓である。2号墓の東南隅部に位置する。この部分に河原石が全く存在しないことからも上位遺構であるといえる。区画は東西150cm×南北105cmを測る長方形である。区画石には10～20cmの礫が使用されている。内部は、区画石と同様の大きさの礫が敷かれた状態である。

##### X-2号墓

調査部分の中心を占める墓である。標高は基底部で14.6m、頂上部で14.9mを測る。区画は東西310cm×南北235cmを測る長方形区画である。南面は、立木による搅乱のため崩壊している。外郭石には20cm大の礫が使用されている。東辺に接してほぼ同規模の墓が形成されている。そのためか、東辺の区画石は不明瞭である。中央に

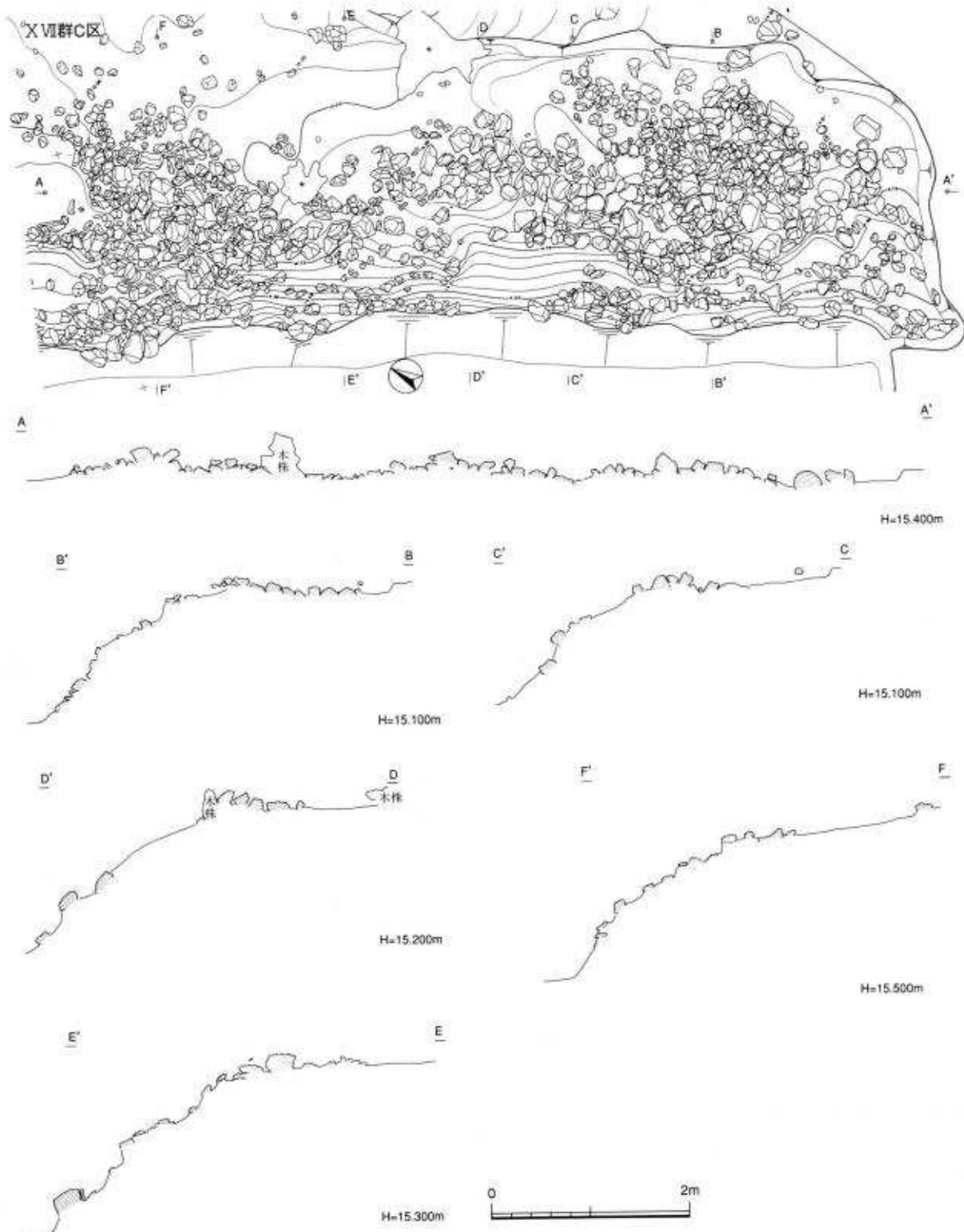
第329図 H遺跡XII群1・2号墓・XII群A区平面図・断面図 (S=1/40)





第330図 H遺跡VI群B区平面図・断面図 (S=1/60)

内区画の設定があり、東西200cm×南北190cmの方形である。南辺は攪乱の影響で、礫が所々抜けている。区画石には30cm大の礫が使われている。外郭と内区の石列を基準として、その間に2列の石列が回る。使用される礫の大きさは外郭石とほぼ同じである。その上に葺き石状で河原石が敷き詰められている。この墓における河原石の量の多さは、特筆すべきものである。隣接する東側の墓ですら、殆どない状態であり、特別にこの墓でのみ採用されたと言えるほどである。内部は内区区画石とほぼ同じ大きさの礫が敷き詰められた状態だった。その礫を除去し、区画のみの状態にし内部施設の調査を行った。内区内は、黒褐色土によって、10~15cm水平に埋められていた。それは、基底石の上端の高さといえる。その高さで北西隅区画石の外側に、鉄製の槍先が副葬されていた。槍は木質の付着痕から、鞘を被せた状態であったといえる。柄も付けられた状態だったと考える。その近接した位置、内区区画石の北西隅から2番目と3番目の間に小刀が副葬されていた。内区内を覆った土を除去すると、骨片の集中区と、その北側の区画石との間に、土師器皿が破損した状態で検出された。その直下に東西120cm×南北85cmを測る墓壙が検出されている。墓壙は深さ10cm程度の浅いものである。上面と下位より破損した状態の土



第331図 H遺跡XM群C区平面図・断面図 (S=1/60)

師器皿が出土している。埋土は火葬骨片を多く含み、ブロック状の炭化材を含んだ黒色土である。土師器皿は、最初に検出されたものから墓壙下位のものまで接合関係にあり、全て破片であることから純粹に副葬されたものではない。このことから、この墓の埋葬過程を検討すると、何処か別の場所で遺体が焼かれた後、又は、その灰と骨が集められた後に土師器皿を使った祭祀が行われる。その土師器皿と骨片の一部を含む土を埋めたものと想

定される。墓壙検出前に上位より土師器皿が出土したのは、この土が盛り上がっていたためであろう。また、一部火葬骨片は別に集められ、有機質の袋状の入れ物に納められ、墓壙が埋められた後におかれた。これが骨片集中区として検出された部分と考えられる。その後、内区区画石が並べられ、副葬品である小刀と槍が納められた。小刀や槍は生前の愛用品とも考えられるが、区画が設定された後に置かれたものであり、区画の内と外に置かれた点からも、破邪の意味も考えられるだろう。内区画は、墓壙の北西隅部を基準として造られている。墓の大きさや、唯一河原石を多用している点、他の墓には見られない鉄槍という副葬品が見られることからも、この墳墓群の中でも上位の階層に所属する人物の墓といえる。

#### IV-3号墓

2号墓の西側に位置し、東辺を共有する。東西100cm×南北60mを測る長方形区画である。30cm大の礫が所々に使用されるが、主体は10cm大の礫で覆われている。小礫を除去すると30cm大の礫が囲むように残ったが、下位施設等は検出されなかった。南面に10~15cm大の礫を使用した長さ100cmの石列が検出されている。その石列まで含めると、南北の大きさは120cmとなる。

#### IV-4号墓

4号墓は、北東側上方に独立して存在する。東西150cm×南北110m圏内の集石である。30~40cm大の細長い礫が区画の範囲を示しているように見える。その部分のみを区画とするならば、東西100cm×南北80cmの大きさになる。主体は10~15cm大の礫である。

#### 現状保存区域の調査

流土層を除去したあと、全体のエレベーション図のみ作成した。上位礫を外し、区画検出を試みて、表層遺物の位置を記録して採取していた段階で止めた状態である。

### 第15項 XM群の調査（第329図）

XV群の東側に位置し、流土層を1層挟み、やや上位に位置する。南北に細長い形態であり、現地の古老によれば、切り倒した材木を積む場所に似ているそうである。しかし、決め手にかけるので、墓として報告しておく。

#### XM-1号墓

北側上位の区画である。東西90cm×南北200cmを測る長方形区画である。20~30cm大の礫が使用されている。内部は区画石と同じ大きさの礫が並べられている。南面は崩れている。

#### XM-2号墓

南側下位の区画である。集中区で東西100cm×南北70cmを測る10~30cm大の礫の集石である。周辺の礫の観察から、もう一回り大きいものだったと考えられる。

### 第16項 XM群の調査（第330~331図）

XV群の南側に位置し、調査区東半分の南端平坦面の墓群をXM群とした。標高は14.7mを測る。約21mと東西に長く、調査区外にも延びているようである。立木による搅乱を受けており、区画を捉えることが困難だが、礫の分布の空白地を基準としてA~C区に分かれる。南面は排水路掘削により、既に崩れた状態であった。A区以外は、現状保存措置をとり、埋め戻しされている。

#### XM-A-1号墓

A区内の西側、比較的大きめの礫を使用した集石部分を1号墓とした。残存部で90cm四方を測る。25cm大の礫が主に使用されており、10cm大以下の礫も使用されている。

#### XM-A-2号墓

東側の径10cm大以下の小礫を中心とした集石である。西側部分が、搅乱を受けているため不明瞭だが、東西120cm×南北150cm以上を測ると考えられる。区画石には径15~20cm大の礫を使用しているようである。

#### 現状保存区域の調査（XM群B・C区）

B区は東西約8.1mを測る範囲であり、立木による搅乱を受けている。礫の集中区を中心に、エレベーション

図を作成した。6基程度の墓の存在を想定している。F-F' ライン付近で、宝塔の相輪部分の破片が出土している。C 区は東西約8m を測る範囲である。搅乱が少なく区画が想定し易く、5区画を想定してエレベーション図を作成した。東端の墓の周辺より五輪塔の破片が出土している。背面部分が埋った状態であり、全てを露出させようとしていた段階なので、区画は確定していない。東端の墓は、内区と外区をもつ墓であると言える。しかし、C 区は下位にも礫の広がりが確認でき、下位施設ではなく上下に重なり墓が造られた可能性がある。区画検出を試みて上位礫を外し、表層遺物の位置を記録して採取していた段階で止めた状態である。

## 第4節 出土遺物

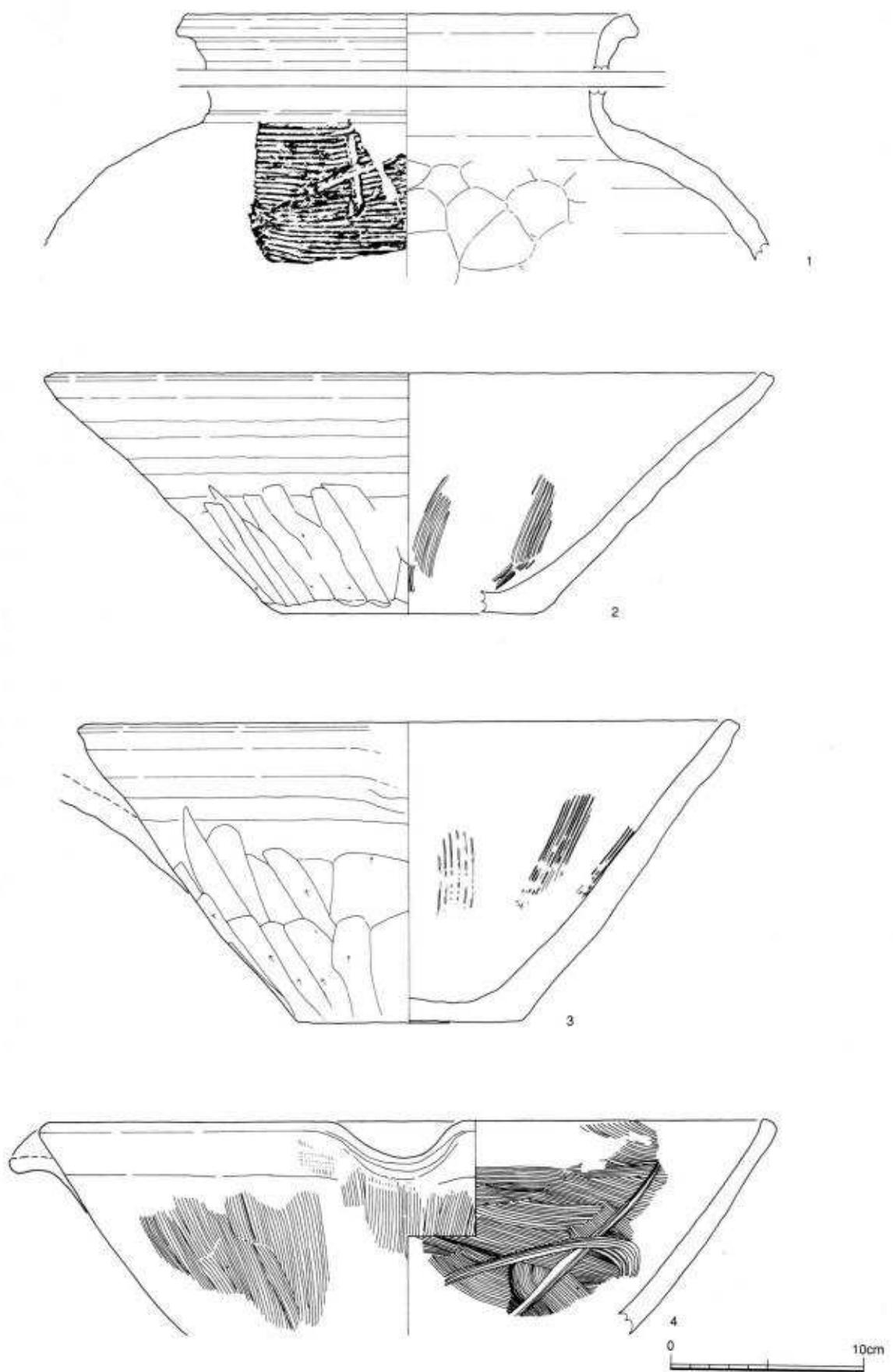
### 第1項 藏骨器

中世墓である F 遺跡と H 遺跡から出土した土器・陶磁器の壺と、その蓋である鉢について報告する。ここで、挙げる年代観は文末の参考文献に掲っており、あくまでも生産年代であり、墓に埋納された時期は各々検討が必要である。F 遺跡では、元位置を保っていたものではなく、全て1号墓上に破片として散乱した状態で検出している。個体数で珠洲焼の壺1点、加賀焼の鉢4点、珠洲焼の鉢2点が出土している。藏骨器と考えられる壺は1のみで、吉岡氏の分類・編年によれば、中壺1A 類・T 種で、- I 期の後半頃のものと言える。肩部に「+」の記号文が入れられている。接点がなく復元できなかったため、胸部下半は図示しなかったが、破片は存在している。しかし、一個体分ではなく、他の部分は広範囲に散逸した可能性が高い。次に鉢について述べる。2・3は加賀焼のⅡ期の製品であり、2は外面に上から下への縦ケズリを施し、内面に8条単位の卸目を施している。内部の磨耗度は上・中・下3段階で言えば中程度である。全体で1/4の破片しか残存していなかった。全体の特徴から、那谷カナクソダニ窯の製品と考えられる。3は2に比べ立ち上がりが急になり器高が高く、後出のものであることが分かる。外面に下から上への二段のケズリを施し、内面に9条の卸目を施す。内面の磨耗は激しく、下半の卸目は消えてしまっている。那谷コテンノウダニ窯の製品と考える。4・5は内外面にハケ目を施す製品である。4は、胸部下半の破片は失われている。外面は下から上へ端部までハケ目を施したあと、口縁端部付近のみ撫で消しを行っている。内面は、下半に斜めハケ、上半に横ハケを施し、装飾的な卸目を入れる。焼が非常に甘く軟質である。内面の磨耗は少ない。5は、ほぼ4と作りは同じである。底部の破片が残っており、下端のみ横方向にケズリを入れていることが分かる。内面は見込み部分に小磨耗が見られ、特殊用途のみの器種とはいえない。また、斜面下の H 遺跡から出土した破片と接合しており、破片の一部が下方へ放り投げられていることが分かる。両者はハケ目を入れる特徴から那谷カミヤ窯の製品と考えられ、時期は共伴した他の陶器類から考えれば12世紀末～13世紀前半代といえるが、加賀 I 期（12世紀後半～末頃）に先行する形態と言う見解もある。6・7は珠洲焼である。6は外傾して立ち上がり、器形に丸みがある。また、卸目も施されておらず、器表面に撫でによる凹凸が目立つ。I 期の後半頃のものと考える。7はやや丸みを持って直線的に立ち上がる。卸目は5条単位で十字に施すのみである。片口の形態などからⅡ期後半の製品といえ、13世紀第Ⅱ四半期の年代が与えられている。以上のことから、1号墓出土陶器についてまとめると、加賀焼のハケ製品の年代観は確定できないが、概ね12世紀末～13世紀前半代ものであることが言える。また、珠洲・加賀両者において、編年における若干の時期差がある。さらに、使用痕も認められることから、使用された時間も加味しなければならない。しかし、全てのものが、使用を経て横一線に並んだとは、墓自体に追葬が認められることからもいえない。むしろ、若干の時期差を持ちつつ、数回の追葬行為があったとみるべきである。次に H 遺跡では、藏骨器やその蓋として使用されたものとして、個体数で弥生土器1点、中世陶器32点が出土している。そのうち藏骨器として原位置を保っていたものは、8の弥生土器のみである。蓋である鉢では、17と20の越前焼の鉢2点のみである。他は調査範囲全体に破片として散乱して出土した。9～12は越前焼の壺であり、口縁部形態から10が13世紀前半代、9・11が14世紀前半代のものと考えられる。12は、外面底部付近のみ横方向のケズリが施されている。13～15は加賀焼の壺である。13は、外面に上から下への斜めケズリが入っており、灰味の強い色調に焼き上がっている。これは、加賀において古い段階の特徴といえる。14は大型の壺の底部である。16は古瀬戸で、前期様式の瓶子Ⅱ類と考えられる。17～26は越前焼の鉢である。17は、内面に卸目がなく、底部に高台が付くタイプの鉢であり、胸部外面下半に横方向のケズリが入る。内部の磨

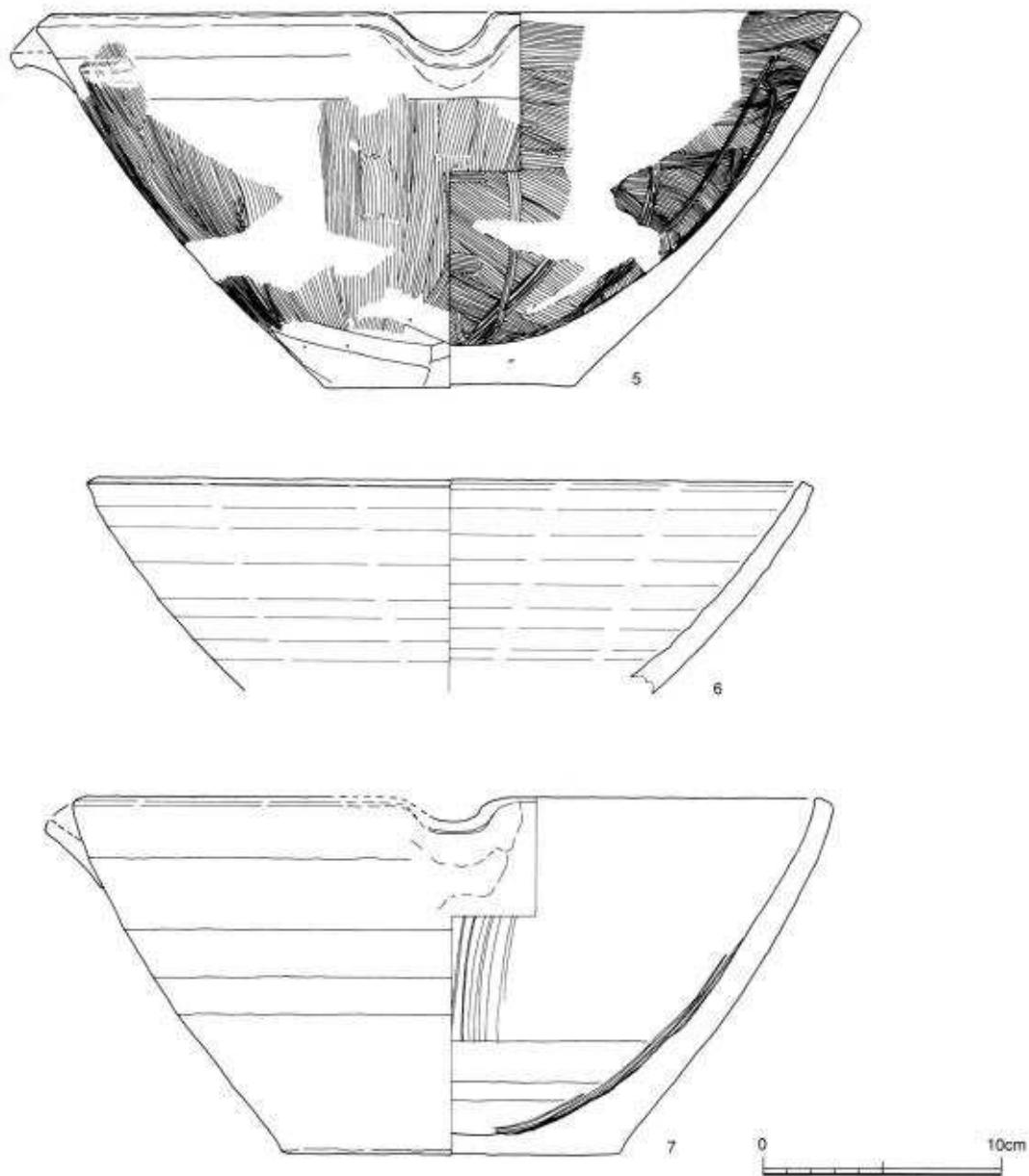
耗度は中である。2/3程度が残存していたが、欠けた部分の破片は見つかっていない。口縁端部には古い形態を残すものの、直線的に立ち上がる器形と、高台の低さより13世紀前半～後半の年代が考えられる。18は、17と同タイプの鉢であるが、底部径が大きくなり、高台も低く貧弱なものになっている。よって、17より後出のものといえる。内面の磨耗度は大である。8の弥生土器の蓋として使用されていたものである。上半部分の破片は見つかっていない。23・24・26も18と同じ器形のものと考えられる。程度の差はあるが、内面の磨耗や口縁端部の欠けが認められ、通常使用後の転用といえる。22は、やや大きめの高台がつけられており、直線的に立ち上がる器形であるが、口縁端部が比較的平坦になっており、沈線も単なる細線となっている。14世紀前半の年代が考えられる。内部の磨耗度は中程度である。19・20の破片も22と同タイプの鉢といえる。21は、卸目が入った段階の鉢である。焼が甘く内部の磨耗度は大である。25も同じタイプの鉢と考えられる。卸目がまだ間隔をあけて入れられる段階なので、14世紀後半のものといえる。27・28は加賀焼の鉢である。27は、外面下半に細いヘラによる縦ケズリが入り、上半には、ケガキ線のような筋が横方向に11本入る。この筋は全周すると考えられる。内面には卸目が入る。磨耗度は大である。加賀Ⅲ期の製品と考える。28は小型の鉢で、丸みを持って立ち上がる器形をなす。外面は胴部下に単位の細かいケズリが入り、内面には横方向に13条程度の卸目が1単位施されている。磨耗度は小である。小型鉢の類例は那谷コテンノウダニ・カミヤ窯に類例があるが、両者とも形態的に違なる。29～32は珠洲焼の鉢である。31は、内面の磨耗が激しく、底部外面にも擦れが認められる。32は、立ち上がりの角度が比較的急で、内部に11条単位の卸目が4本施されている。これは、端部から見込みを通って、反対側の端部まで一直線で引かれており、実質胴部内面では8本あることとなる。磨耗度は小である。Ⅲ期の製品と考えられ、13世紀中葉～1270年代とされている。29・30は口縁端部であり、Ⅲ～Ⅳ期に収まるものであろう。ここで、H遺跡の陶器の出土状況を、F遺跡の状況と比べながらまとめてみたい。なお、墓という特殊遺構であり、出土量自体が少ない中での比較である点を断っておく。第一に13世紀前半までの資料と考えられるF遺跡では、壺1点に対し鉢が6点と多く、壺は珠洲で、鉢は珠洲2点に対し加賀4点と加賀が多い状況にある。越前の製品は使用されていない。この時期の、消費遺跡における加賀の壺の確実な出土例が認められていない様相と合致する。H遺跡では、一部13世紀前半に遡る可能性のある資料もあるが、概ね13世紀後半～14世紀代の資料といえる。壺18点に対し鉢16点と量差はさほどなく、壺は加賀8点、越前7点と均衡した値を示すが、珠洲は小さい胴部破片1点のみで皆無に等しい。この時期は加賀が優位を占めるといわれているが、ここでは越前がほぼ同数を占める。鉢は加賀2点に対し、越前が10点と多く、珠洲は4点出土している。南加賀では珠洲の鉢が多く出土する傾向にあるが、ここでは越前の鉢が多く、異なった様相をみせる。さらに、優位期であるにもかかわらず、加賀の使用が少ない。このようにH遺跡では、越前の使用が多いという、南加賀において特異な傾向を示している。これは、この時期越前自体の生産量が増加したことだけの説明では不十分であり、墓という遺跡の特異性でも説明できない。造墓集団と「越前」との特別な関係を考える必要がある。次に、破片の散乱状況については、F遺跡とH遺跡では若干様相が異なる。F遺跡では明らかに何らかの掘り返しを受けた痕跡があったが、H遺跡の調査所見ではその痕跡は見つかっていない。よって、F遺跡が荒らされた頃に、H遺跡の調査区以外の部分（調査区の上方か？）が荒らされて、礫や石塔の破片と共に斜面裾の調査区に散乱したとも考えられる。一方で、石塔類の集石墓への転用や、墓が上下に重なる例もあることから、新しい墓を造る時に古い墓の一部を壊したといった造墓集団自体の破壊行為の結果かもしれない。それは、限られた区域の中でしか造墓できないという規制のもと、その内で次々と新しい墓を造る必要があったことが背景にあると考えられる。また、調査された墓の数に対し、藏骨器の数が非常に少ないので特徴として挙げられる。しかも原位置を保持しているのは、壺では転用された弥生土器のみであり、鉢では二例しかない。この状況は、宮竹墓谷中世墳墓群を始め辰口町周辺の中世墳墓でも同じ様相であり共通性が認められる。藏骨器の使用が限定されることが、この地域の通例であったとする説を支持する事例といえよう。

## 第2項 土師器四

C遺跡とH遺跡から出土している。C遺跡からは4号土坑内からの単独出土で、H遺跡では墓壙内に納められたものは7例のみであり、他は、集石墓の礫中や、墓壙の埋土中に混入したものや、破片が散乱していたもので



第332図 F遺跡1号墓出土陶器 (S=1/3)



第333図 F遺跡1号墓出土陶器 (S=1/3)

中世陶器壺

产地	加賀	越前	珠洲	瀬戸	計
個体数	8	7	2	2	19
約 %	42.11%	36.84%	10.53%	10.53%	100.00%
破片数	10	9	2	2	23
約 %	43.48%	39.13%	8.70%	8.70%	100.00%

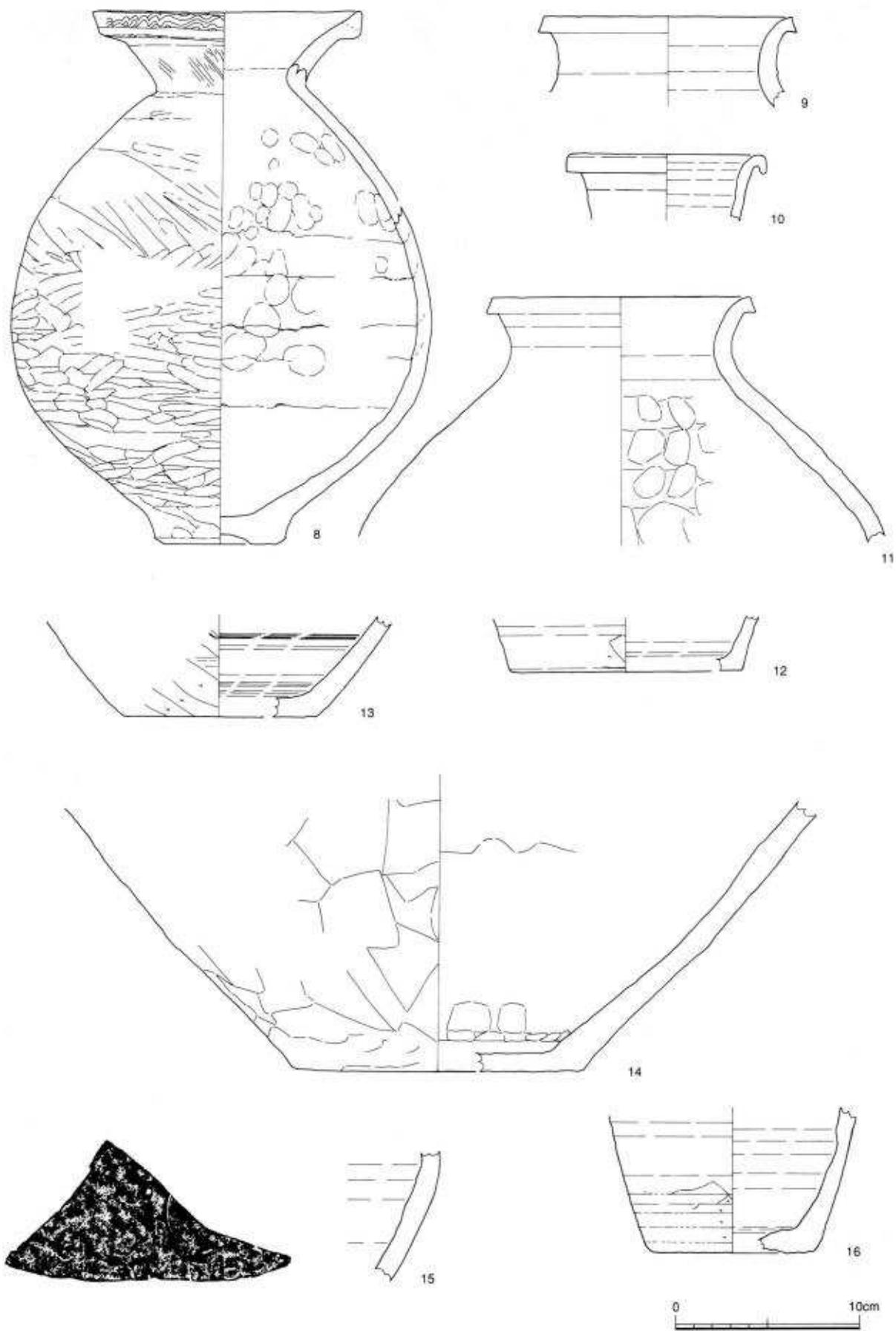
中世陶器鉢

产地	加賀	越前	珠洲	瀬戸	計
個体数	6	10	6	0	22
約 %	27.27%	45.45%	27.27%	0.00%	100.00%
破片数	6	11	6	0	23
約 %	26.09%	47.83%	26.09%	0.00%	100.00%

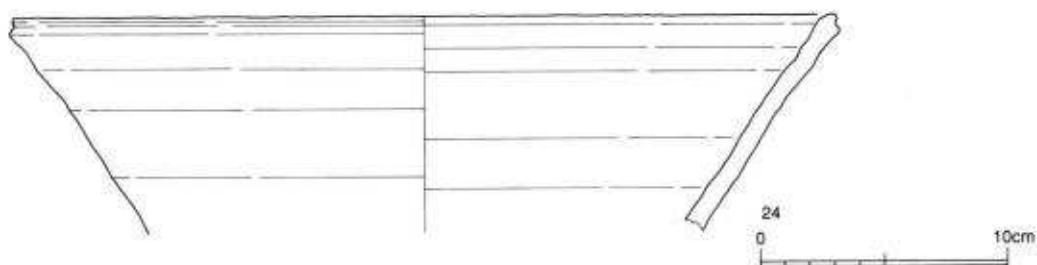
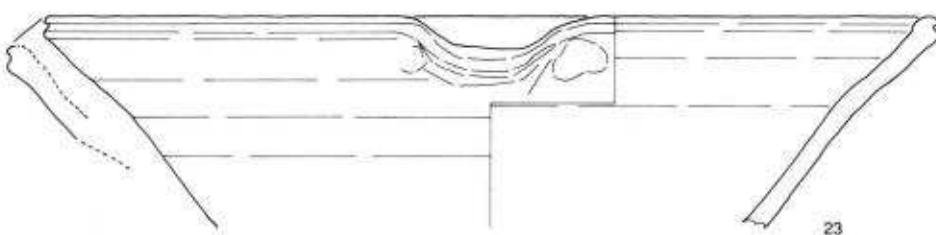
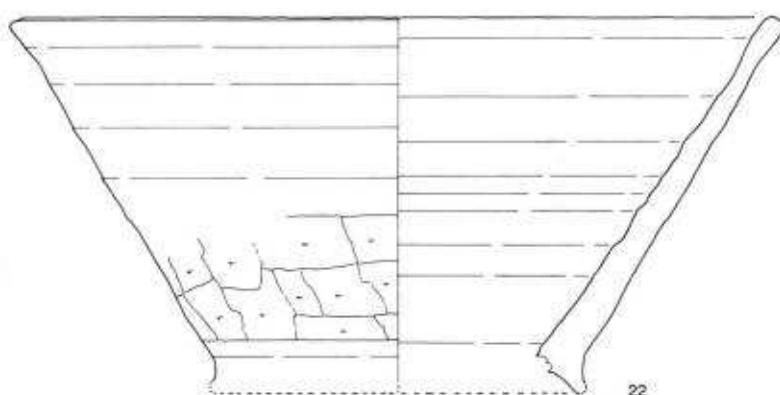
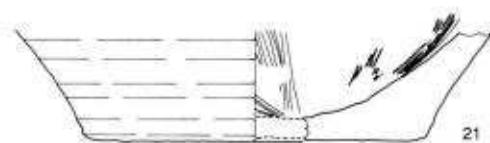
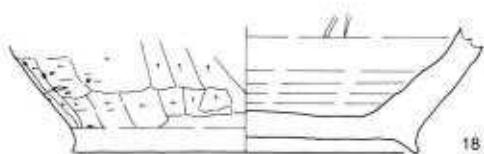
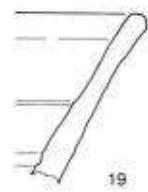
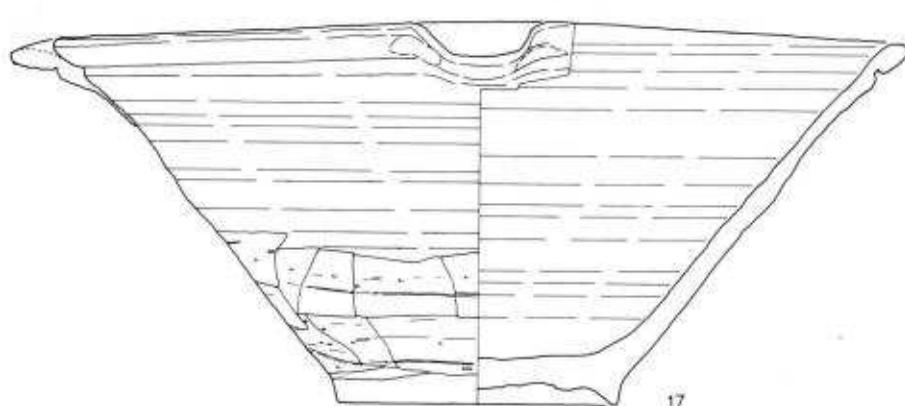
中世陶器全体

产地	加賀	越前	珠洲	瀬戸	計
個体数	14	17	8	2	41
約 %	34.15%	41.46%	19.51%	4.88%	100.00%
破片数	16	20	8	2	46
約 %	34.78%	43.48%	17.39%	4.35%	100.00%

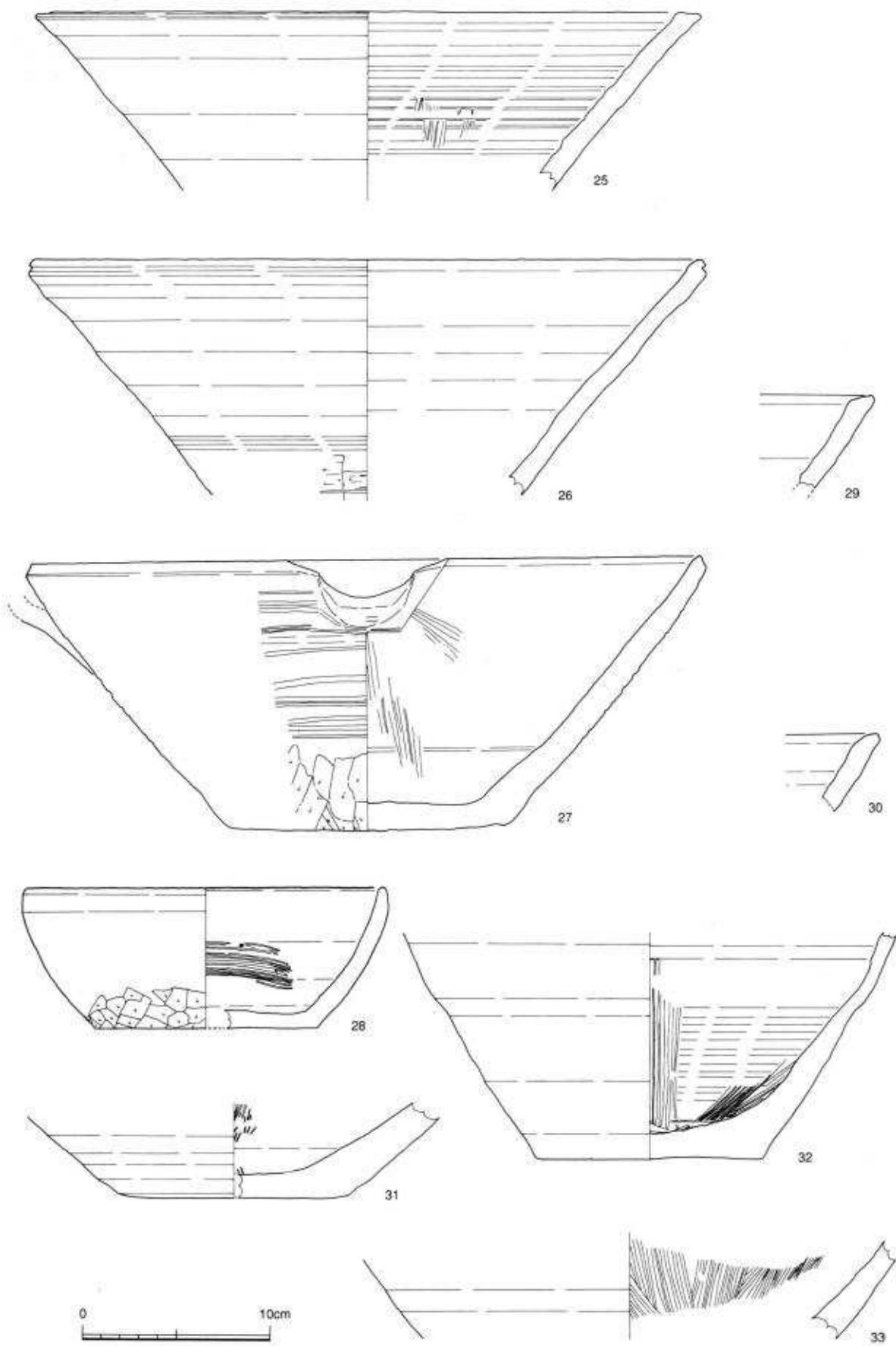
第28表 中世陶器集計表



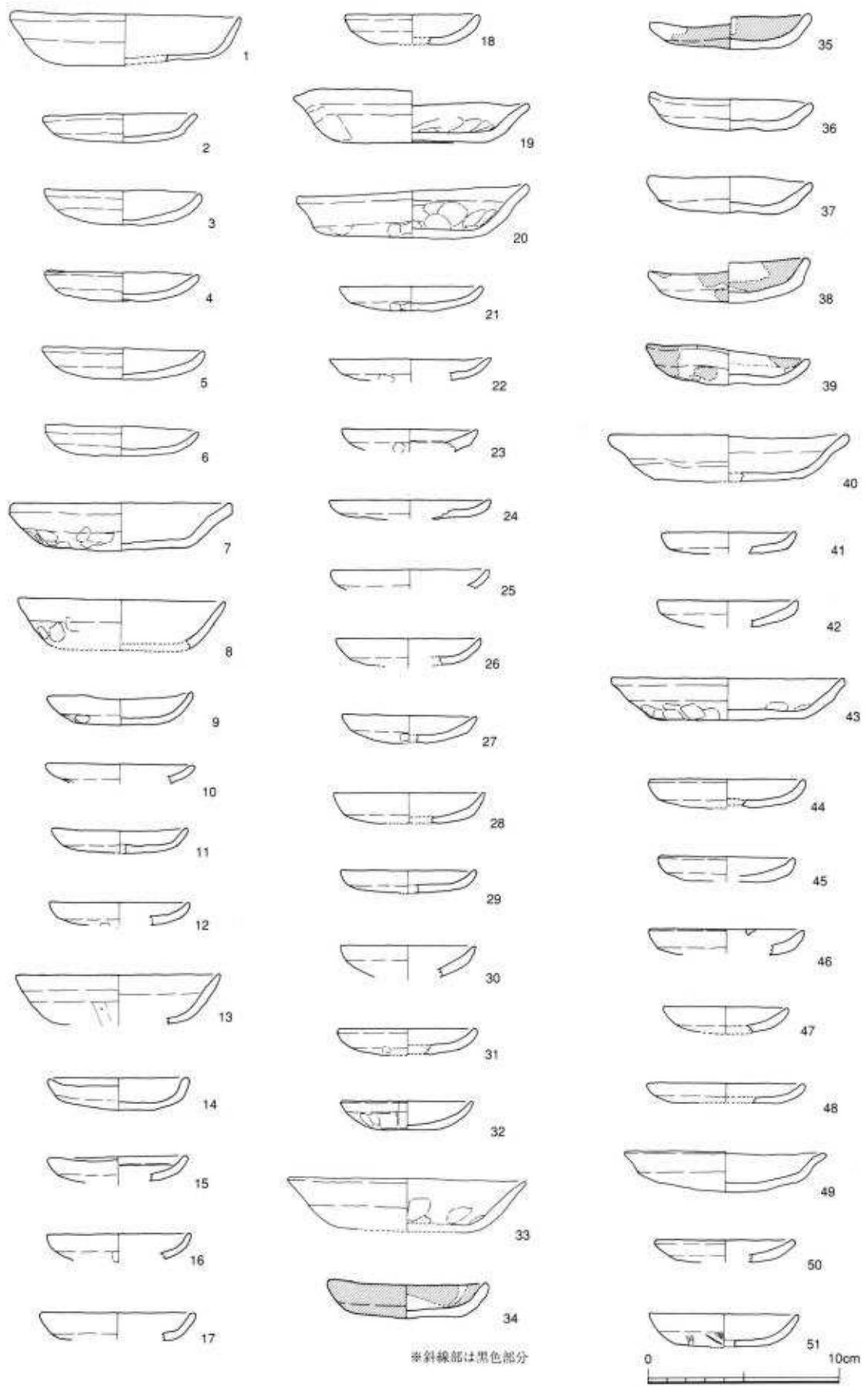
第334図 H遺跡出土土器・陶器 (S=1/3)



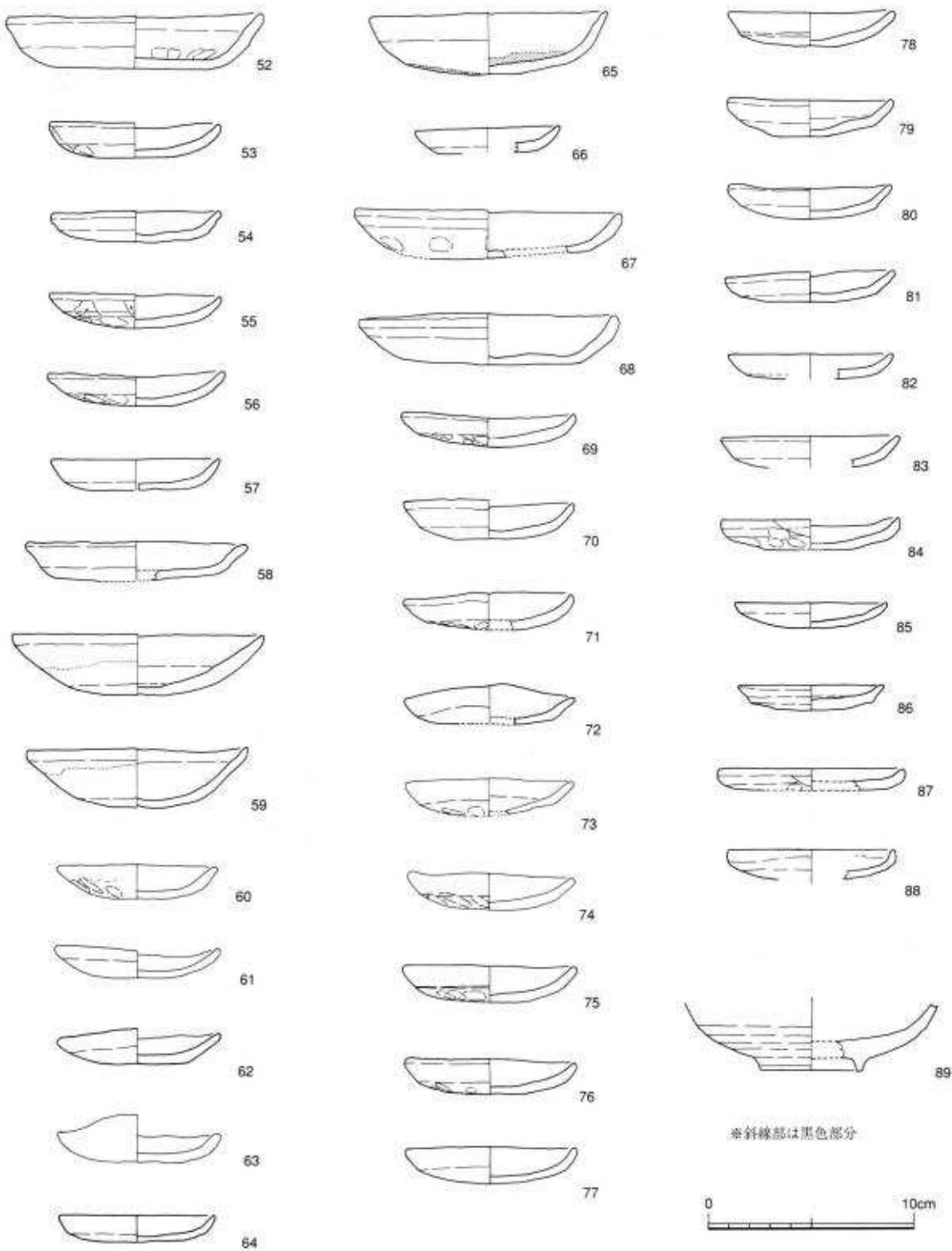
第335図 H遺跡出土陶器 (S=1/3)



第336図 H遺跡出土陶器 (S=1/3)



第337図 C・H遺跡出土土師器皿 (S=1/3)



第338図 H遺跡出土土師器皿 (S=1/3)

ある。その出土量は、破片数で298点出土しており、その内訳は、大59点、小207点、不明32点と小皿が非常に多い。そのうち、墓壙出土遺物を主体に、各群から出土した遺物をできるだけ図示した。詳細は観察表でまとめることとし、年代等は総括で検討した。なお、胎土に関しては肉眼及び100倍マイクロスコープによる観察を行い、5系統に分類した。b・c・e類は若干の違いによりさらに細分を行ったが、基本的には同じ胎土と考えている。

第29表 出土遺物観察表(陶器類)

No	地区 出土地点	器種	表面外觀	表面内面	底面	胎土	口径	高さ	見込 み高	底径	色調	備考	
1	F 1号墓	埴輪馬 1頭	頭部 面部	頭部 面部	頭部 面部	頭部 面部	17.8				青灰	保存率 9/36	
2	F 1号墓	埴輪馬 1頭	頭部下半下 向左入り	頭部下半上 向ケスリ	頭部8条 脚部大	ヘラ削て 凹凸	16.5	12.5	12.5	青灰	保存率 7/36		
3	F 1号墓	埴輪馬 1頭	頭部下半上 向ケスリ	頭部9条 脚部大	ヘラ削て 凹凸	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	33.1	15.6	14.1	11.6	灰青	保存率 10/36	
4	F 1号墓	埴輪馬 1頭	頭部下 向左入り	頭部10条 脚部大	ヘラ削て 凹凸	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	30.8			灰~灰白	保存率 15/36		
5	F 1号墓 N都C区1号	埴輪馬 1頭	頭部下 向左入り	頭部10条 脚部大	ヘラ削て 凹凸	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	33.2	15.7	12.9	10.0	青灰	保存率 14/36	
6	F 1号墓	埴輪馬 1頭	頭部下 向左入り	頭部10条 脚部大	ヘラ削て 凹凸	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	29.4			灰	保存率 11/36		
7	F 1号墓	埴輪馬 1頭	頭部下 向左入り	頭部10条 脚部大	ヘラ削て 凹凸	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	30.6	15.8	14.1	14.2	灰青~青 灰	保存率 18/36	
8	H N都C区1号	埴輪馬 1頭	頭部下 向左入り	頭部10条 脚部大	ヘラ削て 凹凸	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	34.2	26.8	27.3	7.0	浅青灰	保存率 24/36	
9	H N都C区1号	埴輪馬 1頭	頭部下 向左入り	頭部10条 脚部大	ヘラ削て 凹凸	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	33.4			灰~灰青	保存率 4/36		
10	H 125・130	埴輪馬 1頭				17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	30.4			灰~灰青	保存率 15/36		
11	H N都C区-N都CD区1号	埴輪馬 1頭				17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	33.8			灰~灰青	保存率 12/36		
12	H 138	埴輪馬 1頭				17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青			
13	H 140	埴輪馬 1頭				17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青			
14	H 141号	埴輪馬 1頭				17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青			
15	H 142	埴輪馬 1頭				17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青			
16	H N都B区	古墳戸様子II 埴	下部ケスリ 横開き	頭部縦	頭部縦	頭部					灰白	前面模式 ア	
17	H N都B区1号墓	埴輪馬	下部横 方向ケスリ	頭部	三角高台貼り 付け	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	33.8	15.4	13.5	11.0	灰	保存率 25.5/36
18	H N都1号墓	埴輪馬	横開き	横開き	三角高台貼り 付け	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
19	H N都2号	埴輪馬				頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
20	H N都4号墓出入	埴輪馬				頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
21	H 143	埴輪馬		加目 脚部大	ヘラ削て 凹凸	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰白		
22	H 144	埴輪馬	脚子、下半横 方向ケスリ	頭部	三角高台貼り 付け	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	30.2	14.7		74.6	灰~灰青	保存率 3/36
23	H 145-1号墓-1群 N都B区-1号	埴輪馬				頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青	保存率 14/36	
24	H 146	埴輪馬				頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
25	H N都B区-1号墓出入	埴輪馬				頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青	保存率 6/36	
26	H N都B区-1号墓-1号墓出入	埴輪馬	脚子	脚子	脚子	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青	保存率 4.5/36	
27	H 147-181	埴輪馬 1頭	脚子、下半横 方向ケスリ	脚子	脚子	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
28	H N都B区-1号墓出入	埴輪馬 1頭	脚子、下方 方向ケスリ	脚子	脚子	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含	18.8	7.4	6.6	14.4	灰~灰青	保存率 13.5/36
29	H N都B区1号墓出入-日野口区	埴輪馬	脚子	脚子	脚子	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
30	H N都C区	埴輪馬 1頭				頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
31	H N都B区	埴輪馬	脚子	脚子	脚子	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
32	H N都A区-1号墓-1号墓出入	埴輪馬 1頭	脚子	脚子	脚子	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		
33	H 青塗	埴輪馬 1頭	脚子	脚子	脚子	頭部	17cm大長石 灰青色 少量含 鉄青土植物微 少量含				灰~灰青		

(土師器・磁器類)

No	地区 出土地点	器種	外觀	内面	底面	底部 裏面	口径	高さ	見込 み高	底径	色調	備考
1	C 4号土坑A-10	土師器皿 大皿	横側て 鉛錆取り	横側て 鉛錆取り	横側て 鉛錆取り	平底	11.8	2.8	9.0	黄褐色 C-2	保存率 31/36	
2	C 4号土坑3	土師器皿 小皿	横側て 鉛錆取り	横側て 鉛錆取り	横側て 鉛錆取り	平底	7.6	1.5	1.2	0.2	黄褐色 C-2	保存率 25.5/36
3	C 4号土坑9	土師器皿 小皿	横側て 鉛錆取り	中央から横て上げ	丸底	中央深穴	3.6	1.6	1.1	0.2	浅米褐 C-1	保存率 30/36
4	C 4号土坑11	土師器皿 小皿	横側て 鉛錆取り	横側て 見込み一方角横	丸底	中央深穴	3.6	1.8	1.5	0.2	浅米褐 C-2	保存率 30/36
5	C 4号土坑5-7-8	土師器皿 小皿	横側て 鉛錆取り	見込み一方角横	丸底	3.4	1.6	1.3	0.2	浅米褐 C-1	保存率 34/36	
6	C 4号土坑2-8-12	土師器皿 小皿	横側て 鉛錆取り	横側て	丸底	3.0	1.45	1.1	0.2	黄褐 C-2	保存率 34/36	
7	H 147号墓外前回	土師器皿 大皿	横側て 鉛錆取り	横側て 見込み一方角横	平底	指紋	11.2	2.5	2.1	7.0	浅米褐 C-2	保存率 34/36
8	H 147号墓内	土師器皿 大皿	横側て	横側て 見込み一方角横	平底	指紋つけ	10.7	2.6	(2.2)	7.0	浅米褐 C-2	保存率 17/36
9	H 148号墓土	土師器皿 小皿	横側て	横側て	平底	指紋つけ	7.4	1.65	1.0	4.8	暗褐色 D-1	保存率 25.5/36
10	H 149号墓土	土師器皿 小皿	横側て	横側て	平底	指紋つけ	7.5			4.8	暗褐色 D-2	保存率 8/36
11	H 150号墓外前回	土師器皿 小皿	横側て	中央から横て上げ	平底	指紋	7.0	1.2	0.7	4.4	暗褐色 D-2	保存率 14.5/36
12	H 150号墓外前回	土師器皿 小皿	横側て	横側て	平底	+	7.2			4.0	暗褐色 D-2	保存率 5/36
13	H 151号墓墓壙内	土師器皿 大皿	横側て	横側て	平底	+	10.5	2.7	15.4	米白	米白 D-2	保存率 5.5/36
14	H 152号墓墓壙内	土師器皿 小皿	横側て	横側て	中央から横て上げ	丸底	7.2	1.7	1.3	0.2	米白 D-2	保存率 12.3/36
15	H 153号墓墓壙内	土師器皿 小皿	横側て	横側て(横さる)	横側て	+	7.2			0.2	米白 D-2	保存率 14/36
16	H 154号墓墓壙内	土師器皿 小皿	横側て	横側て	横側て	+	7.4			0.2	米白 D-2	保存率 10.5/36
17	H 155号墓墓壙内	土師器皿 小皿	横側て	横側て	横側て	+	7.6	1.4		0.2	米白 D-2	保存率 7/36
18	H 156号A区	土師器皿 小皿	横側て 鉛錆取面	横側て	横側て	平底	8.8	1.65	1.2	3.6	暗褐色 D-2	保存率 7.5/36
19	H 157号B区2号墓墓壙内	土師器皿 大皿	横側て	横側て	平底	指紋	12.2	2.45	1.45~ 2.15	8.2	暗褐色 D-2	保存率 13.5/36
20	H 158号B区2号墓墓壙内	土師器皿 大皿	横側て 鉛錆取面	横側て	平底	指紋	12	2.85	1.5	8.6	暗褐色 D-2	保存率 13/36
21	H 159号B区1号墓墓壙入	土師器皿 小皿	横側て	横側て	丸底	指紋	7.3	1.3	0.9	0.2	浅米褐 D-2	保存率 17.5/36
22	H 160号B区2号墓墓壙入	土師器皿 小皿	横側て	横側て	平底	指紋	8.2			0.2	浅米褐 D-2	保存率 6/36
23	H 161号B区3号墓墓壙内	土師器皿 小皿	横側て	横側て	平底	指紋	8.0			0.2	浅米褐 D-2	保存率 4/36
24	H 162号B区4号墓墓壙内	土師器皿 小皿	横側て	横側て	平底	指紋	8.2	1.0	0.6	0.2	浅米褐 D-2	保存率 1/36
25	H 163号B区5号墓墓壙内	土師器皿 小皿	横側て	横側て	平底	指紋	8.0			0.2	浅米褐 D-2	保存率 3/36
26	H 164号D区5号墓墓壙内	土師器皿 小皿	横側て	横側て	横側て	指紋	7.6	1.5	1.1	0.2	暗褐色 D-2	保存率 3/36

27	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	中央から傾て上昇	丸底、中央深み	4.9	1.5	1.0	浅黄緑 c-1	残存率 8/36		
28	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	中央から傾て上昇	平底?	7.8	1.6	1.3	棕 a	残存率 9/36		
29	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で 見込み一方傾て	丸底	7.0	1.2	0.8	棕 a	残存率 9.5/36		
30	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側下 見込み一方傾て	丸底	7.0			棕 a	残存率 5/36		
31	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で	丸底、中央深み?	7.0	1.4	(0.8)	b-2	残存率 5/36		
32	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で 見込み一方傾て	平底	6.7	1.5	1.2	2.0	浅黄緑 c-2	残存率 5.5/36	
33	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で 見込み一方傾て	平底、傾子つけ	12.6	2.8	2.4	2.6	浅黄緑 c-1	残存率 22/36	
34	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	中央から傾て上昇後、見込み一方傾て	平底、指圧	8.15	2.0	1.3	5.4	浅黄緑 c-1	ほぼ完形 まみ大	
35	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	中央から傾て上昇後、見込み一方傾て	平底? 指圧	8.0	2.0	0.8~ 1.15	浅黄 a-1	ほぼ完形 まみ大		
36	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で 見込み不整地?	平底? 指圧	8.25	1.6	1.2	浅黄緑 c-2	浅存率 12/36		
37	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で 見込み不整地?	平底、指圧	8.15	1.4	1.3	5.1	浅黄緑 c-2	残存率 10/36	
38	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で 見込み一方傾て	平底、指圧	8.05	2.05	1.3~ 1.6	5.0	浅黄緑 c-2	浅存率 10/36	
39	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	中央から傾て上昇	丸底? 指圧	8.3	2.4	1.3~ 1.5	明黄緑 d-2	浅存率 まみ大		
40	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 大石	横側で (極できる) 外反	横側で	平底、傾子つけ	12.2	2.5	(2.0)	2.7	浅黄緑 c-2	残存率 12/36	
41	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で	平底、指圧	8.0	1.1		3.0	浅黄 b-2	残存率 7/36	
42	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で	丸底、指圧	7.0				浅黄緑 c-2	残存率 14/36	
43	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 大石	横側下	横側で 沿岸面取り	平底、指圧	12.1	2.2	1.65	8.05	浅黄 b-1	残存率 10/36	
44	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	中央から傾て上昇	丸底、中央深み?	8.0	1.5	(1.0)	5.0	浅黄緑 c-2	浅存率 8/36	
45	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下		平底? 指圧	7.0	1.3	(1.0)	4.0	浅い緑 c-2	残存率 10/36	
46	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	沿岸面取り		7.0				浅黄緑 c-2	残存率 7/36	
47	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側下	横側で	丸底	6.4			棕 a	残存率 5/36		
48	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側で	横側で (極できる) 外反	横側で	平底? 指圧	8.0	1.65	0.7	5.6	浅い緑 b-2	残存率 5.5/36
49	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 大石	横側で	横側で 見込み一方傾て	丸底	8.0	1.05	0.7	5.6	浅い緑 b-2	残存率 10/36	
50	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 大石	横側で	横側で 見込み不整地?	丸底? 指圧	10.3	2.1	1.5~ 1.6	5.0	浅い緑 d-2	残存率 10/36	
51	H 中野区区5号基外斜面	土砂落石 小石	横側で	横側で	平底、指圧	7.2	(1.1)			浅黄緑 c-1	残存率 5/36	
52	H X群1号基 A 基壇内	土砂落石 大石	横側で (極できる) 沿岸面取り	横側で (極できる) 見込み不整地?	平底、指圧	12.3	2.8	1.9~ 2.0	8.8	浅い緑 b-2	残存率 8/36	
53	H X群1号基 A 基壇内	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り	丸底、指圧	8.2	1.8	1.0~ 1.2	7.3	浅い緑 b-1	残存率 10/36	
54	H X群1号基 A 基壇内2・理工中	土砂落石 小石	横側で (極できる) 沿岸面取り	横側で (極できる) 見込み一方傾て	丸底、指圧	8.1	1.6	1.1	5.0	浅い緑 b-1	残存率 10/36	
55	H X群1号基 A 基壇内	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り	丸底、指圧	8.2	1.7	1.1	5.0	浅い緑 b-1	残存率 10/36	
56	H X群1号基 A 基壇内	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み一方傾て	丸底、指圧	8.4	1.7	1.0	5.0	浅い緑 b-1	ほぼ完形 まみ大	
57	H X群2号基外斜面	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み一方傾て	平底、指圧、傾子つけ	8.0	1.5	1.2	4.6	浅 b-1	残存率 6.5/36	
58	H X群1号基 a 上博士 (油野博士) 5号	土砂落石 大石	横側で (極できる) 外反	横側で 見込み不整地?	平底、指圧	10.5	1.9	(1.4)	7.6	棕 d	残存率 5/36	
59	H X群1号基 a2・4・5番下博士中	土砂落石 大石	横側で	横側で 見込み斜面のみ面取り	丸底、指圧、中央深み	12.1	2.95	2.4~ 2.35	7.3	浅い黄緑 c	江戸川町 江戸川町	
60	H X群1号基 a3	土砂落石 小石	横側で	横側で	丸底、指圧	10.6	1.75	1.3	5.0	浅い黄緑 c-2	実物	
61	H X群1号基 a5	土砂落石 小石	横側で	中央から傾て上昇	丸底、指圧、傾子つけ	7.7	1.55	1.1		浅黄緑 c-2	実物 まみ大	
62	H X群1号基 a5・上博士中	土砂落石 小石	横側で	中央から傾て上昇	平底、指圧	7.65	1.45	1.0	4.6	浅黄緑 c-2	ほぼ完形 まみ大	
63	H X群1号基 aE	土砂落石 小石	横側で	中央から傾て上昇	丸底、指圧	7.75	1.45	1.1		浅黄緑 c-2	ほぼ完形	
64	H X群3号基外斜面、5号基外	土砂落石 小石	横側で	中央から傾て上昇	平底	9.4	1.3	1.0	3.4	浅黄緑 c-2	残存率 7/36	
65	H X群3号基外斜面	土砂落石 大石	横側で	横側で 見込み一方傾て	丸底、指圧、傾子つけ	11.5	2.9	2.6	8.2	浅い黄緑 b-1	残存率 30/36	
66	H X群1号基 a5	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み一方傾て	平底	6.9	(1.2)		12.0	浅黄緑 b	残存率 6/36	
67	H X群2号基3・6・9・10・36・38	土砂落石 大石	横側で	横側で 沿岸面取り	平底、指圧、傾子つけ	12.6	2.4	1.9~ 2.0	10.0	浅黄 c-1	残存率 20/36	
68	H X群2号基2・4・7・13・18・19・24・25	土砂落石 大石	横側で	横側で 沿岸面取り	平底、指圧、傾子つけ	12.3	2.35	1.9~ 2.1	8.6	浅黄緑 c-1	残存率 34/36	
69	H X群2号基2号基3・8・30・理工中	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み一方傾て	丸底、指圧	9.3	1.65	1.0	5.0	浅い黄緑 c-1	残存率 22/36	
70	H X群2号基34・40・理工中	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り	丸底、指圧	9.2	1.05	1.1~ 1.4	4.6	浅黄 c-1	残存率 28/36	
71	H X群2号基1・42	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み一方傾て	丸底、指圧	9.0	1.2	1.0	5.0	浅い黄緑 b-2	残存率 34/36	
72	H X群2号基26・28・40・理工中	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り	丸底	8.1	1.2	1.0~ 1.5	4.6	美 c-1	残存率 34/36	
73	H X群2号基17・22・31・33	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み不整地?	丸底、指圧	9.0	1.2	1.5	5.0	美 c-1	残存率 30/36	
74	H X群2号基11・理工中	土砂落石 小石	横側で	横側で	丸底、指圧	7.8	1.8	1.4	5.0	浅黄 c-1	残存率 20/36	
75	H X群2号基21・32	土砂落石 小石	横側で (極できる)	中央から傾て上昇?	丸底、指圧、傾子つけ	8.15	1.8	1.4		浅黄 c-1	残存率 35/36	
76	H X群2号基16・20・27	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り?	丸底から傾て上昇?	8.05	1.8	1.3		浅黄 c-1	ほぼ完形	
77	H X群2号基3・12	土砂落石 小石	横側で	中央から傾て上昇?	丸底、指圧、傾子つけ	8.05	1.8	1.4		浅黄 c-1	残存率 33/36	
78	H X群2号基35・37	土砂落石 小石	横側で (極できる)	中央から傾て上昇	丸底、指圧、中央深み	7.9	1.75	1.3		浅い黄緑 c-2	残存率 33/36	
79	H X群2号基16・43	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り	丸底から傾て上昇	丸底、指圧	7.75	1.95	1.3		浅い黄緑 b-2	残存率 27/36
80	H X群2号基5・14・44	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り?	丸底、指圧	7.8	1.7	1.1		浅黄 c-1	残存率 33/36	
81	H X群2号基21・29・33・40・理工中	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り	丸底、指圧	8.1	1.5	0.8~ 1.0		浅黄 c-1	残存率 33/36	
82	H X群	土砂落石 小石	横側で	横側で 沿岸面取り	平底?	7.8				浅黄 c-1	江戸川町 江戸川町	
83	H X群	土砂落石 小石	横側で	横側で	丸底?	8.4	(1.6)	0.5~ 1.2		浅黄 c-1	江戸川町 江戸川町	
84	H X群	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み一方傾て	丸底、指圧	7.3	1.2	0.9		棕 a-1	残存率 11/36	
85	H 126・140	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み一方傾て	丸底	6.9	1.25	0.75	1.0	浅黄 c-2	残存率 7/36	
86	H 136・138	土砂落石 小石	横側で	横側で 見込み不整地?	丸底	8.8	1.05	0.55	5.0	浅黄 a	残存率 12/36	
87	H H-3G	土砂落石 小石	横側で	中央から傾て上昇?	丸底	7.9				浅黄 c-2	江戸川町 江戸川町	
88	H H-3G	青磁磚	横側で	見込み不整地?	青磁磚、青砂質	東台原1.0 青砂質				青 a	裏入りあり	

### 第3項 石塔類

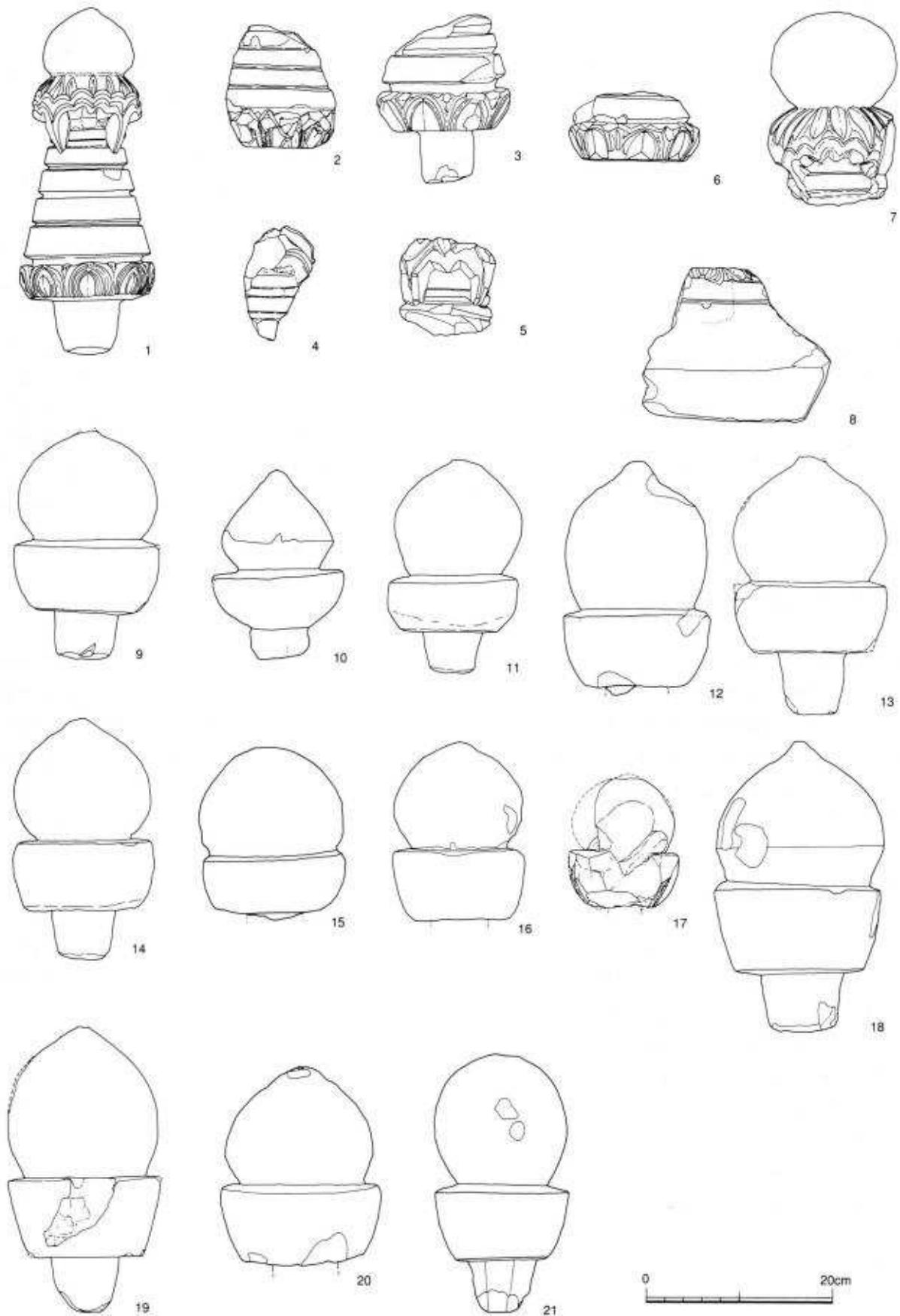
石塔類が検出されたのは、H遺跡に限定される。F遺跡からは1点の出土もなく、この点からもH遺跡より先行するといえる。調査では、少なくとも80点以上の石塔類が見つかっている。しかし、原位置を保っていたものは、台石1点・地輪4点のみであり、そのほとんどが破片となり散在した状態で見つかっており、区画石等に転用されて見つかったものもみられた。その中でも特筆されるのは、宮竹墓谷中世墳墓群で確認された相輪と笠の組み合わせが、本遺跡でも出土したことである。この形式の宝塔は北加賀に分布の中心があるといわれており、国府北域もこの宝塔の分布域に入ることが確認された。また、その系譜が越前嶺北にあることが指摘されており、このことは、当遺跡において越前焼の使用頻度が高いことと関連があるのかもしれない。石材は、ほぼ凝灰質砂岩か角礫質凝灰岩のどちらともとれる材質（以下、凝灰質砂岩（or 角礫質凝灰岩）と記述）か、典型的な角礫質凝灰岩に二分される。後者が五輪塔の各部位のみであるのに対し、前者は、五輪塔各部位及び宝塔に使用されている。また、水輪は、梵字を刻むものが前者の材質に限定されることから、宝塔の塔心である可能性もある。但し、普通の五輪塔も制作されており、笠以下の形態が五輪塔と同じである点からも、どちらかは判断できない。また、その石材産出地は、前者が遺跡に近い小松市北部丘陵域中心とする範囲、後者が小松市南部丘陵域を中心とする範囲が考えられる。宝塔が前者に限定されるのに対し、五輪塔は約8割が後者産のものであり、前者が補完的である点が指摘できる。今回図示できたものは、台座、不明品を含め53点であり、法量等は観察表にまとめて提示した。また、水輪の上下が判断できないものに関しては、最大径を上にして図示した。形態等の分類は総括で行った。

### 第4項 その他石製品・ガラス製品

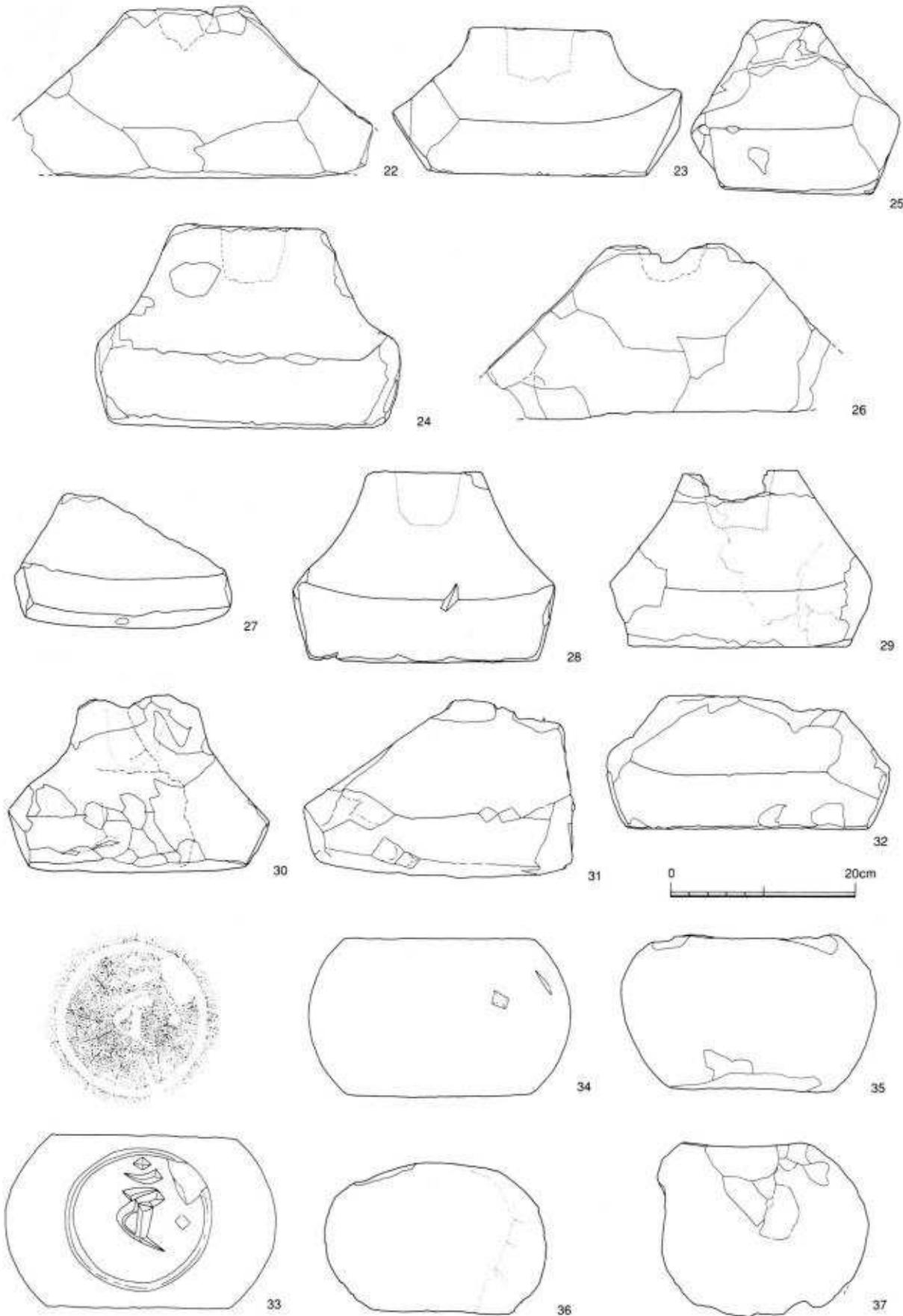
他の石製品はその殆どが砥石であり、墓群の礫中や埋土に混入する形で出土している。中世のものかどうかも確証はない。全てH遺跡からの出土である。6点のうち、5点が仕上げ砥石で、1点のみが中砥石である。材質は1・2が頁岩製、3が流紋岩製、4・5は同一個体の可能性があり、粘板岩製で非常に厚さが薄い。6は、中粒砂岩製であり、幅が3.5cmで小型のものであろう。7は、珪質頁岩製の扁平円形の石であるが、色調は真黒で、磨かれており、H遺跡では異質であるため図示した。ガラス製品は数珠であり、VI群の1号墓と2号墓の間で見つかっている。内部に気泡がみられる。

### 第5項 金属製品

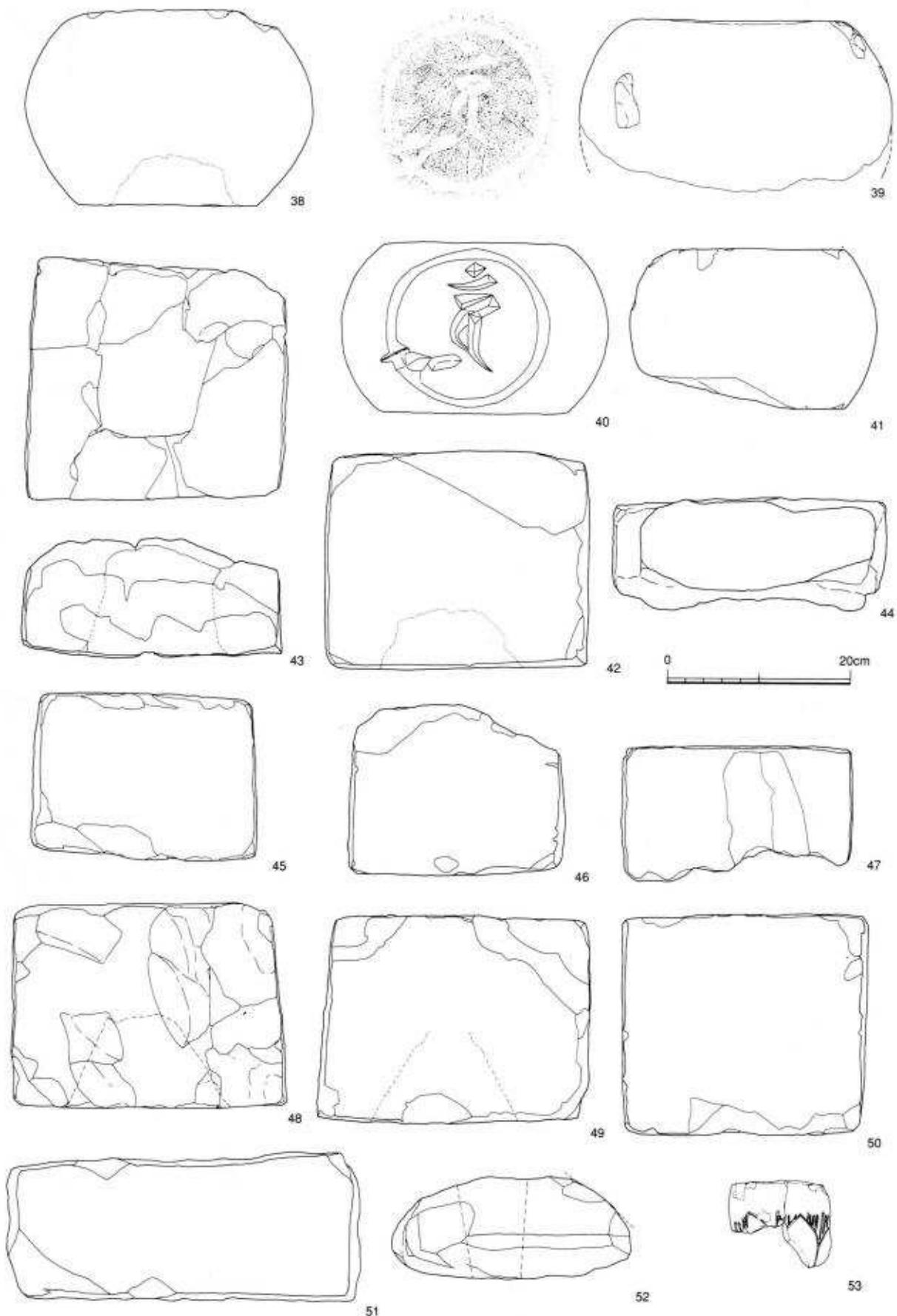
金属製品は副葬された刀剣類と鉄の破片、銅製品、銅錢がある。銅錢以外は全てH遺跡からの出土である。1~3は刀剣類で、1は小刀であり、IV群B区4号墓火葬土坑内への副葬で、中央から折り曲げた状態で土師器皿の左横に設置されていた。2・3は同じXV群2号墓の墓壙上面付近で見つかっている。2は、小刀であり、刃を上に向けて、刃先を南に向けた状態で検出された。3は、槍か薙刀と考えられ、刃先を西側に向けて、中央区画石の外側に設置されていた。木質が付着しており、柄に着いた状態で、鞘も被せられていたと考える。現状を見るかぎり、装着部分に近い部分が平造状であるが、刃先部分には鎬が観察できる。装着部分の柄側表面には皮巻きが施されている。5は、銅製品の不明品である。粒状の突起があり、その下に径2mm孔が空いている。銅錢は、全部で7枚出土している（H遺跡XII群1号墓のものは、計測不可能）。そのうち4枚がF遺跡1号墓からの出土であり、初鋳年代が1038年~1078年までの北宋錢のみである。H遺跡からは、IV群B区5号墓の墓壙内出土であり、2枚が重なった状態で検出された。その内訳は、F遺跡は、皇宗通寶2枚、嘉祐通寶1枚、元豐通寶1枚である。H遺跡のものは腐食が進んでおり、判読不可能である。



第339図 H遺跡出土石塔類 (S=1/6)



第340図 H遺跡出土石塔類 (S=1/6)

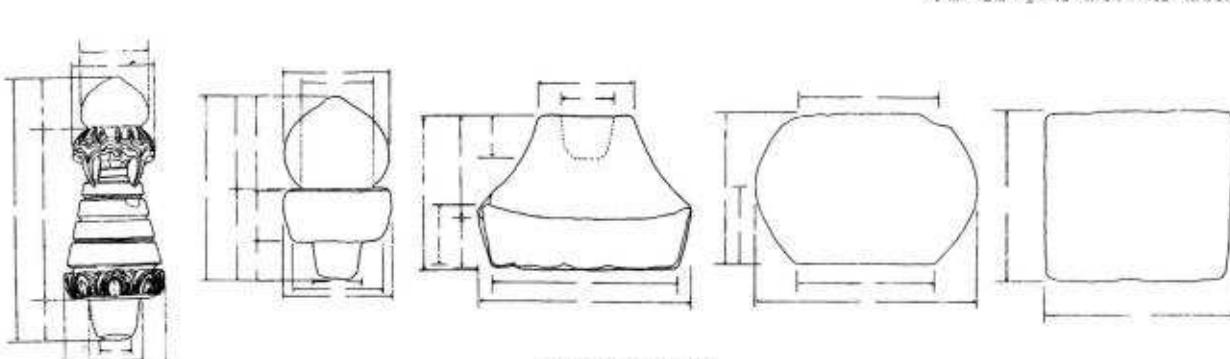


第341図 H遺跡出土石塔類 (S=1/6)

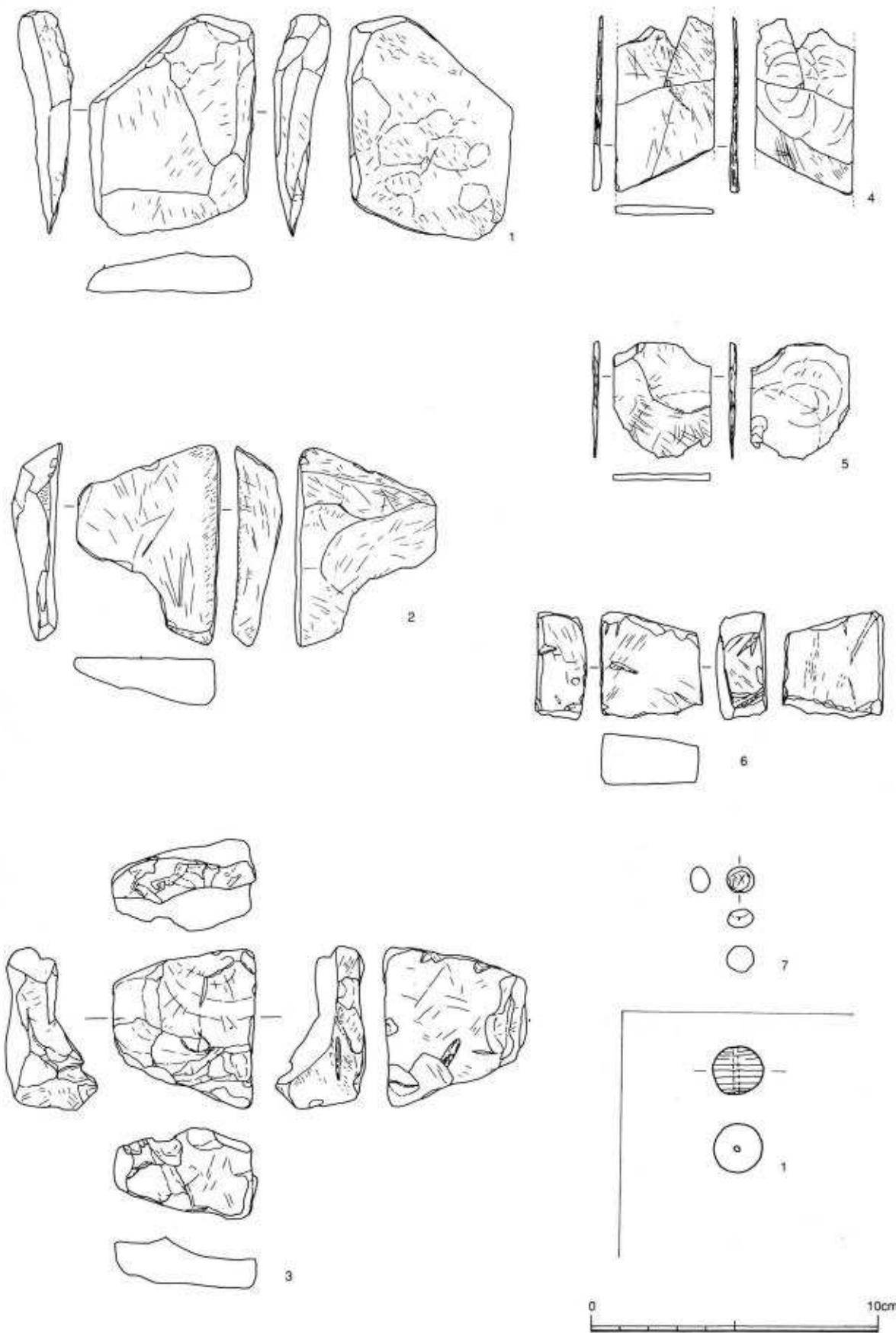
第30表 出土遺物観察表（石塔類） 法量の（ ）は残存値を示す。

図版番号	地区	出土地点	種別	類型	石質	法量(cm)										備考		
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k		
1	H	I群2号墓	柱輪		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	37.0	7.2	24.0	5.8	9.7	11.7	14.5	7.8	4.7				
2	H	II群B区1号墓	柱輪		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩			(13.1)				(11.7)						
3	H	III群D区2号墓	柱輪		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	(17.4)		(12.4)	5.5			14.1	6.0	4.8				
4	H	III群D区4号墓土中	柱輪		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩													
5	H	III群D区4号墓	柱輪		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩			(10.45)			10.1					区画石転用		
6	H	IV群B区1号墓	柱輪		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩			(7.5)				13.9	6.1			北側石列転用		
7	H	IV群C区	柱輪		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	(20.7)	10.1	(10.8)		(13.4)	(13.4)					包含層		
8	H	IV群碑中	笠		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	16.6	10.0	6.2	0.6	5.4	0.6	6.0	5.8	(20.0)	(17.1)			
9	H	I群1号墓前斜面	空風輪	II-A	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	(24.4)	(11.7)	12.7	(12.25)	7.0	14.75	11.15	15.5	10.6	6.9	5.05		
10	H	I群	空風輪	III-C	角礫質凝灰岩	26.2	10.6	9.6	11.5	5.5	11.9	5.7	14.1	6.1	3.2	包含層		
11	H	II群B区1号墓前斜面下	空風輪	III-D	角礫質凝灰岩	22.8	12.45	10.05	13.25	5.4	13.55	9.7	13.8	10.03	6.45	4.45		
12	H	III群D区2号墓	空風輪	II-A	角礫質凝灰岩	27.6	13.5	14.1	13.9	7.0	16.3	17.6	(16.3)	(11.65)	7.5	6.6	上方より崩落か?	
13	H	IV群B区1号墓	空風輪	II-A	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	25.8	13.1	12.7	13.35	7.2	14.6	10.2	15.05	12.4	6.9	5.4	区画石転用	
14	H	III群D区2号墓	空風輪	I-B	角礫質凝灰岩	25	15.8	9.2	16.5	7.7	15.2	12.2	15.7	10.7	3.3	(1.0)	区画石転用	
15	H	IV群B区3号墓前斜面	空風輪	III-A	角礫質凝灰岩	18.4	11.7	7.3	12.2	5.7	15.4	13.5	15.3	10.6	6.1	(0.9)		
16	H	IV群B区5号墓	空風輪	III-B	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	19.2	11.7	7.6	12.1	7.4	13.7	10.3	14.1	9.9			区画石転用	
17	H	IV群B区3号墓	空風輪	IV	角礫質凝灰岩	(13.9)	(7.9)	(6.0)	(8.1)	(5.8)	(8.5)					左側柱頭、右側柱頭あり		
18	H	X群A区墓背面	空風輪	I-A	角礫質凝灰岩	31.1	15.3	15.3	15.8	8.6	17.85	15.3	17.7	13.7	8.9	6.3		
19	H	X群B区	空風輪	I-B	角礫質凝灰岩	30.45	16.15	8.95	16.45	8.25	15.95	13	16.2	(12.1)	7.3	5.9	包含層	
20	H	X群C区碑中	空風輪	II-A	角礫質凝灰岩	21.1	12.55	8.95	13.5	7.6	15.8	13.6	17.2	12.6	6.9			
21	H	X群C区	空風輪	II-B	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	27.5	13.9	13.6	14.8	7.0	14.1	9.6	14.25	9.8	7.4	5.7	包含層	
22	H	II群A区2号墓	火輪	I	角礫質凝灰岩	18.5						0.4	4.7	13	6.45	(37.7)	片付跡?	
23	H	IV群B区3号墓	火輪	III	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	15.9	9.5	6.1	9.3	9.1	9.8	5.6	15	7.55	30.9	23.7		
24	H	IV群C区6号墓	火輪	II	輕石質凝灰岩 or 角礫質凝灰岩	21.9			(0.95)			6.1	16	7.1	32.8	29.5	片付跡?	
25	H	IV群C区7号墓	火輪	II	角礫質凝灰岩	(18.5)	(10.4)	7.8	0.4						(21.85)	16.4	区画石転用	
26	H	VI群外	火輪	I	角礫質凝灰岩	18.45						3.9	(12.6)	7.8	(36.3)	(30.02)		
27	H	XII群2号墓	火輪		角礫質凝灰岩	(14.2)		4.35	0.9	(4.4)	2.45					23.4	21.9	混入
28	H	X群1群B号墓	火輪	IV	角礫質凝灰岩	(20.6)	12.7		0.5	(8.1)		5.7	12.7	7.05	(28.2)	(24.0)	区画石転用	
29	H	XI群外	火輪	IV	角礫質凝灰岩	19.1			0.4	(7.0)	1.5	6.5	12.3	8.9	(28.05)	(23.4)		
30	H	X群A区	火輪	IV	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	(19.2)			0.5	(5.8)	1.0	(6.35)	13.0	(7.05)	(27.9)	(23.3)		
31	H	X群C区碑中	火輪	I	角礫質凝灰岩	19.3												
32	H	表探	火輪	II	角礫質凝灰岩	(14.4)	(8.0)		(0.4)		0.4			30.3	(30.3)	25.9		
33	H	II群A区2号墓	水輪	II-A	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	18.6	10.2	19.7	19.9	29						強烈な凹凸、削り跡?		
34	H	III群D区3号墓	水輪	II-B	角礫質凝灰岩	17.0	8.4	20.3	19.9	28.1						上方より崩落か?		
35	H	III群D区3号墓	水輪	III	角礫質凝灰岩	16.7	9.5		17.5	27.3							区画内転用	
36	H	IV群B区3号墓背面	水輪	II-C	角礫質凝灰岩	(16.1)	7.2		15.1	23.8								
37	H	IV群C区3号墓	水輪	I?	角礫質凝灰岩	(18.7)		(13.7)		(20.9)							区画石転用	
38	H	IV群C区6号墓	水輪	I	角礫質凝灰岩	21.4	11.0		19.2	31.1		5.3		14.5		孔有り、片付跡?		
39	H	III群3号墓	水輪	I	角礫質凝灰岩	(11.3)		22.8		33.8							月輪、梵字大日如来	
40	H	IV群碑中	水輪	II-A	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	18.6	9.9	19.7	20.5	28.9								
41	H	III群C区碑中	水輪	II-B	角礫質凝灰岩	17.2	8.8	18.6		26.7								
42	H	II群B区4号墓	地輪	I-A1	角礫質凝灰岩	28.7	(23.6)					6.5		15.6		孔有り、原位置		
43	H	III群D区5号墓	地輪	I-A2?	角礫質凝灰岩	28.2	(12.7)					8.9		16.2		中心に孔有り		
44	H	IV群D区2号墓	地輪	I-A2?	角礫質凝灰岩	29.6	(8.4)									前方石列転用		
45	H	III群2号墓	地輪	II	角礫質凝灰岩	24.5	18.0									原位置		
46	H	III群3号墓	地輪	II	角礫質凝灰岩	23.4	(18.5)									原位置		
47	H	II群背面	地輪	II?	凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	25.0	(14.6)											
48	H	II群2号墓	地輪	I-A2	角礫質凝灰岩	29.9	22.0									孔有り、区画内転用		
49	H	II群1号墓	地輪	I-A2	角礫質凝灰岩	29.2	22.6									孔有り、区画内転用		
50	H	表探	地輪	I-B	角礫質凝灰岩	26.6	24.0											
51	H	II群B区2号墓	台石		角礫質凝灰岩	38.5	16.5									原位置		
52	H	III群D区3号墓	火輪?		凝灰質砂岩 or 角礫質凝灰岩	(11.2)								(25.85)		区画石転用		
53	H	IV群碑中	風輪?		角礫質凝灰岩	(9.5)				(13.1)						線刻蓮華文あり		

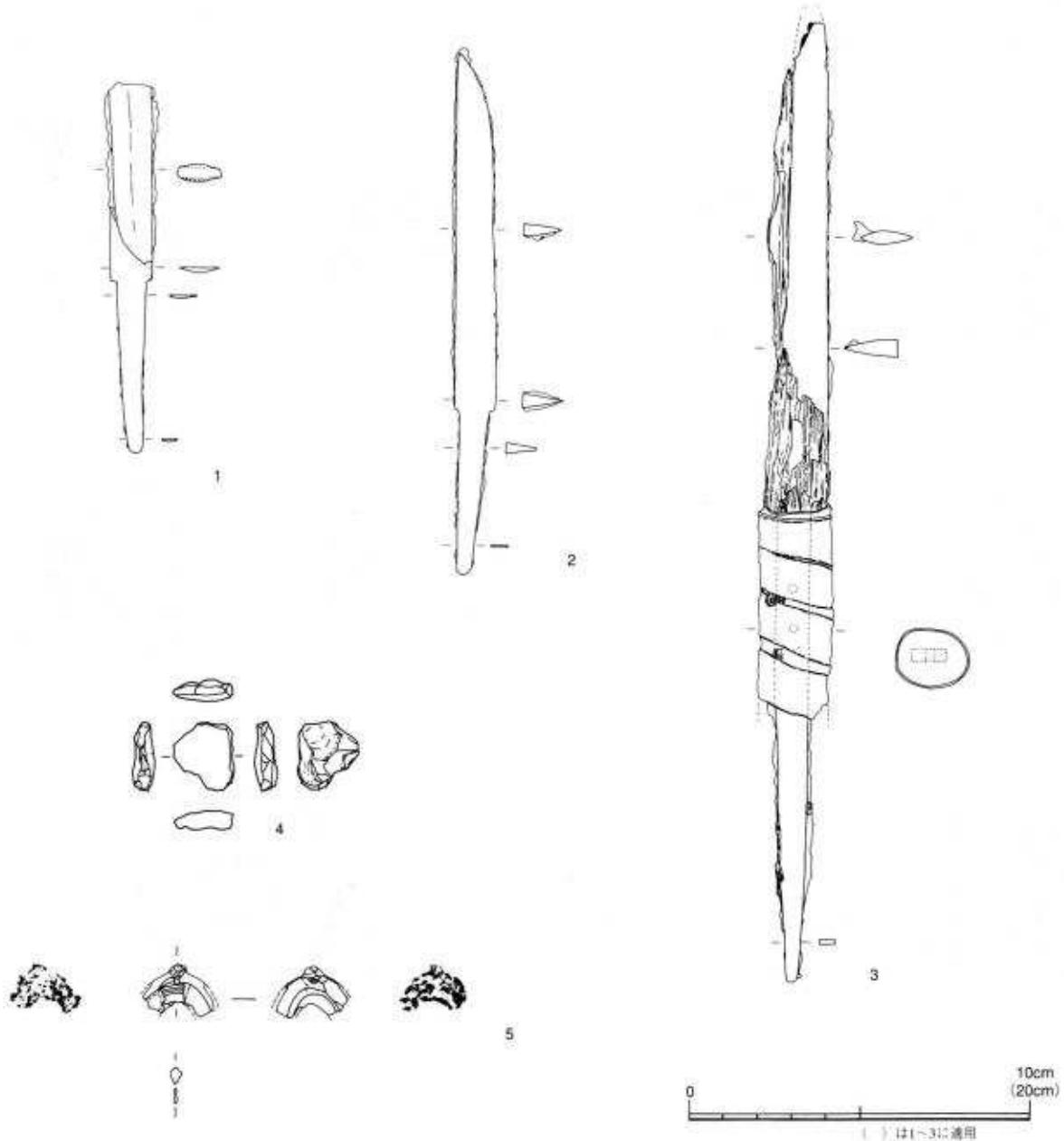
(水輪・地輪のgは花の深さ、jは孔の幅を表す。)



石塔類法量凡例



第342図 H遺跡出土石製品・ガラス製品 (S=1/2)



第343図 H遺跡出土金属製品 (1~3:S=1/4, 4・5:S=1/2)

第31表 出土遺物観察表 (石製品) 法量の( )は残存値を示す。

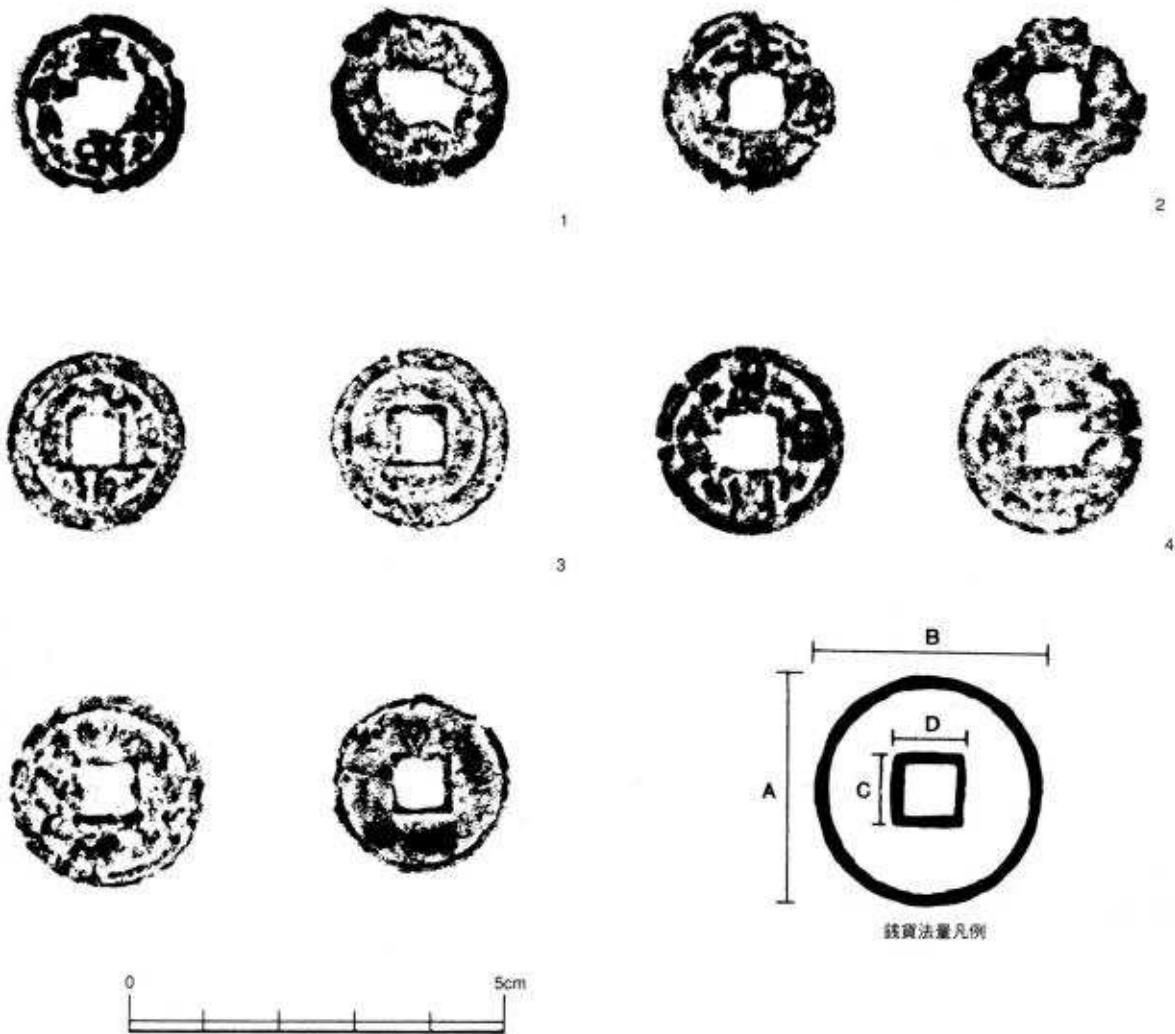
図版番号	地区	出土地点	種別	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
1	H	II群B区	砥石	真岩	長さ(7.7)幅5.7厚さ(1.3)	85.2	
2	H	VI群	砥石	真岩	長さ(6.9)幅4.9厚さ(1.6)	49.0	仕上げ砥石
3	H	IV群櫻中	砥石?	流紋岩	長さ(5.5)幅4.9厚さ(3.0)	63.7	仕上げ砥石
4	H	IV群B区4号墓墓壙埋土中	砥石	粘板岩	長さ(6.1)幅3.4厚さ(0.3)	6.5	仕上げ砥石、5と同一個体?
5	H	IV群B区4号墓墓壙埋土中	砥石	粘板岩	長さ(4.0)幅3.4厚さ(0.2)	3.4	仕上げ砥石、4と同一個体?
6	H	IV群櫻中	砥石	中粒砂岩	長さ(3.7)幅3.5厚さ1.8	33.1	中砥石
7	H	?		珪質真岩	長さ0.95幅0.9厚さ0.6	0.7	

(ガラス製品) 法量の( )は残存値を示す。

図版番号	地区	出土地点	種別	法量(cm)	備考
1	H	VI群	数珠	径1.7 孔幅0.2	白濁色

(金属製品) 法量の( )は残存値を示す。

図版番号	地区	出土地点	種別	法量(cm)	備考
1	H	IV群B区4号墓墓壙内	小刀	長さ(21.5)幅2.4厚さ0.3(鍔部分)	中央で折れ曲がる。鍔造
2	H	IV群2号墓	小刀	長さ30.3幅2.4厚さ0.8(鍔部分)	平造
3	H	IV群2号墓	槍(薙刀)	長さ(56.0)幅3.2厚さ1.0(鍔部分)柄装着部幅4.3厚さ3.5	精木質状で一部残存。柄装着部分、表面皮巻きあり
4	H	I群6号墓墓壙内	鉄片?	長さ(2.0)幅(1.75)厚さ(0.65)	
5	H	I群4号墓墓壙内	銅製品	長さ(1.5)幅(2.1)厚さ(0.3)	径2mmの孔あり



第344図 F・H遺跡出土錢貨 (S=1/1)

第32表 出土錢貨一覧表 法量の( )は残存値を示す。

番号	地区	出土地点	錢貨名	時代	初鑄年	書体	重量(g)	A(cm)	B(cm)	C(cm)	D(cm)	備考
1	F	I号墓64	皇宋通寶	北宋	1038	真書	(1.5)	2.44	2.40	0.63	0.66	やや摩滅、一部破損
2	F	I号墓65	嘉祐通寶	北宋	1056	篆書	(1.9)	(2.48)	2.35	0.63	0.60	摩滅、やや錯化、一部破損
3	F	I号墓97	元豐通寶	北宋	1078	行書	2.0	2.45	2.41	0.55	0.57	やや錯化
4	F	IA号墓11	皇宋通寶	北宋	1038	篆書	(1.6)	2.55	2.53	0.64	0.63	腐食、一部破損
5	H	IV群B区5号墓	—	—	—	—	5.7	2.61	2.52	0.67	0.70	磨耗大、錯化顯著、腐食

(5は錢貨が付着しているため、重量は2枚分の値。A~Dは前面の錢についてのみの値である。)

## 第5節 総 括

### 第1項 土師器皿の検討

#### はじめに

中世遺構の時期の決定は、土師器皿の編年を軸に展開している。使用期間の長い中世陶器は、消費地で出土した場合そのズレを算定する方法がないからである。今回の調査において、H 遺跡で墓壙内という限られた区間に埋納された良好な資料を得ることができた。よって、それらの資料を用いて土師器皿の様相の検討を試み、造墓過程を判断する材料としたい。但し、土師器皿以外の時期の推定可能な共伴遺物が出土しておらず、筆者自身実年代を示す資料は持っていないため、加賀地域全体の編年への位置付けは、藤田氏の研究に拠らせて頂いた。よって、時期の提示は参考程度あり、前代との幅を持たしておきたいと考える。

#### 分類及び出土土器の様相

C 遺跡の4号土坑及び、H 遺跡のII-B-2号墓・IV-A-1号墓・X-1-A 号墓・X II-1号墓・X V-2号墓の墓壙内埋納資料について主に検討を行い、1点単独出土であるIV-B-4号墓・X II-4号墓は補助的に使用した。出土状況等については前節も参照して頂きたい。

#### 分類

各資料の器形の検討を行い各類型に分類した。第一に大皿（I）・小皿（II）で分け、次に、口縁部形態、体部形態を基準に分類を行い、口縁端部を丸くおさめ、外傾ないし内湾気味に立ち上がるもの（A）口縁端部に面取りを施し、外傾ないし内湾気味に立ち上がるもの（B）、口縁端部を丸くおさめ、大きく外反して立ち上がる（C）、深手で梢円形を呈するもの（D）に分類される。さらに、底部や細部器形の特徴により細分を行っている。A～C の分類は基となった器形の特徴から派生した、生産者の枠をこえたレベルでの分類であり、細分類はより生産者の実態に近づくためのものであり、それがどの領域まで共通事項であるか見ていくことは重要であると考える。また、胎土分類と合わせて検討することによって生産・供給体制が解明されるものと考える。

土師器皿 I A1 1類で A タイプはこの器形しか提示出来なかった。直立気味に立ち上がり、直線的な体部を持つ。底部は押し出され丸底になる。

土師器皿 II A1 体部が内椀して立ち上がるも。X V-2号墓段階では、体部と底部の境に、強いヨコナデにより稜がのこるが、X II-1号墓段階では残らない。丸底。

土師器皿 II A2 体部がやや外傾気味に立ち上がるも。体部外面は直線的である。X II-1号墓段階の器形は、勅使館跡 D1-G2土坑出土資料（藤田分類 E タイプ）と類似した器形も存在するが、I 類が存在せず、II 類のみで抽出することは不可能なため、A 類とした。丸底。

土師器皿 II A3 体部が外傾気味に立ち上がるが、底部の中心を押し出すことによって丸底となるも。

土師器皿 I B1 体部が外傾状に立ち上がり、比較的器高が高く、見込みの深いも。ナデが強く体部に外反傾向もみられる。

土師器皿 I B2 体部が内湾して立ち上がり、比較的器高が低く見込みの浅いも。ナデ幅は狭い。

土師器皿 I B3 体部が底部から屈曲して直線的に立ち上がるも、比較的薄手である。

土師器皿 I B4 体部の立ち上がり幅が大きく、外傾して立ち上がり、口縁の先端部分のみ面取りのように撫でを施すも。

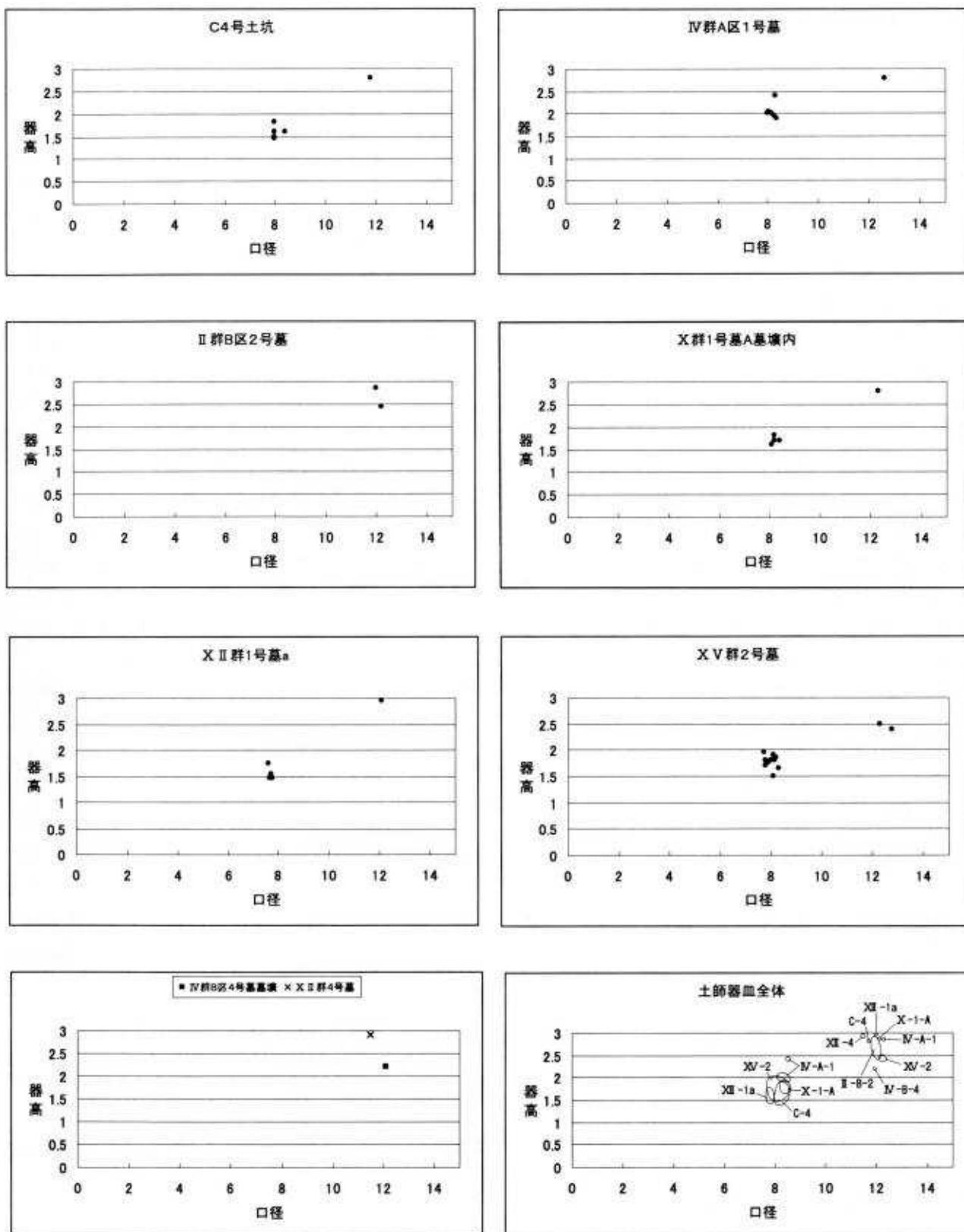
土師器皿 II B1 体部がやや外傾気味に立ち上がるも。体部外面は直線的であり、底部との境で屈曲する。平底風。

土師器皿 II B2 体部が内椀して立ち上がるも。丸底。

土師器皿 II B3 体部が直線的に立ち上がり、口縁部付近で弱く屈曲させ内湾気味に仕上げる。丸底。

土師器皿 II B4 体部が外傾して立ち上がるが、底部の中心を押し出すことによって丸底となるも。

土師器皿 I C 体部が大きく外反して立ち上がるも。平底であるが、時期が下ったものに、丸底風になつたものもみられる。



第33表 墓墳出土土師器皿法量表

土師器皿ⅠD 外傾状に立ち上がるもので、体部は直線的である。ナデ幅が広く胸部全体に及ぶ。深手で梢円形を呈する粘土帯貼り付け技法で制作されている。

#### 出土土器の様相

C-4号土坑出土遺物	B類のみの出土であり、ⅠB3類1点、ⅡB1類1点、ⅡB2類2点、ⅡB3類1点、ⅡB4類1点で構成される。胎土はc-1・2類のみである。
II-B-2号墓出土遺物	I類のみの出土であり、ⅠB1類1点、ⅠC類1点で構成される。胎土は前者がb-1類、後者はd類である。前者を身、後者を蓋として、藏骨器として使用されたと考えられる事例である。
IV-A-1号墓出土遺物	火葬土坑内からの出土である。B類のみの出土であり、ⅠB4類1点、ⅡB1類6点で構成される。胎土はe-1・2類のみであり、粗い砂粒を含むこの胎土は、遺跡全体でもこの7点のみである。そのため、分類及び編年の位置付けに若干の不安をのこす。
IV-B-4号墓出土遺物	火葬土坑内に小刀と一緒に埋納されたもので、ⅠB1類1点のみであり、胎土はb-1類である。
X-1号墓出土遺物	ⅠB1類1点、ⅡA1類1点、ⅡB1類1点、ⅡB2類2点で構成される。胎土はb-1類のみである。
XII-1号墓出土遺物	ⅠD類1点、ⅡA1類2点、ⅡA2類2店で構成される。胎土はⅠD類がc-1類、Ⅱ類は全てc-2類である。D類は他の皿と違い、骨片含有層の下側から出土した破片と接合しており、異なる埋納状態を想定しなければならない。
XII-4号墓出土遺物	有機質の藏骨器の蓋として検出されたものである。ⅠA1類1点のみで、胎土はc-2類である。
IV-2号墓出土遺物	H遺跡で出土量が最も多く、A・B類とも出土している。破片として埋土中に存在したが、一括性が高いと判断された。ⅡA1類3点、ⅡA2類2点、ⅡA類1点、ⅠB2類2点、ⅡB1類2点、ⅡB2類1点、ⅡB3類3点、ⅡB4類1点で構成される。胎土は、ⅡB2類、ⅡB4類がb-2類である以外は、c-1類のみである。

全体的な特徴として、一回の埋納行為に使用される土師器の胎土の齊一性が強いことが挙げられる。II-b-2号墓・IV-2号墓出土遺物以外は、全て同一系統の胎土で占められる。IV-2号墓でも15点のうち異なるのは2点のみである。量的にはC系統の胎土の製品が圧倒的に多く主体的立場にある。しかし、埋納行為ごとに土師器皿の供給先が異なっていた状況を読み取ることが可能であろう。

#### 編年の位置付け

時間軸への位置付けは、法量の縮小化を軸に判断した。器形にさほど大きな変化はなく、A類が体部の外傾度が若干強まる程度である。全体的に器形は歪んでおり、藤田氏の編年観でいえば、Ⅲ期（13世紀後半～14世紀中葉）の範疇に収まる資料であると考えられる。なお、法量比較は、歪みの大きい器形に際しては、最大値を採用して行っている。H遺跡において初段階に位置付けられるのは、IV-2号墓・X-1-A号墓出土資料を考える。類型の種類が豊富であり、IV-2号墓出土遺物内だけでも、ⅡA1～3類、ⅡB1～4類に分類可能である。X-1-A号墓出土資料はB類のみで、I類は前者と異なる2類がある。Ⅲ-I期の範疇に収まると考える。IV-A-1号墓出土資料は、特に粗い特殊な胎土で作られた一括性の高い資料であり、その編年の位置付けが困難である。特にI類は、H遺跡の土師器皿のなかでは特異な器形である。ここでは端部に面を取る為の撫でを施した点を重視しB類とした。時期は、法量が大きいこと、Ⅱ類がB1類に類似する特徴を持つ点や、器形の歪みが見られるところからⅢ-I期とみるべきであると考える。次に、II-B-2号墓・IV-B-4号墓・C-4号土坑が上げられる。Ⅱ類については、B1～4類型において、扁平化が見られる。また、口縁端部の面取りも更に退化傾向にある。I B類には、前代からの2類と、新たに3類がみられるが、法量は全体的に縮小傾向にある。I類に関しては、口縁端部の面取りは、比較的しっかり施されている。II-B-2号墓出土遺物において、IB類とIC類が共伴している。但し、両者の外觀は非常に近似しており、口縁端部の面取りの撫でを施すか施さないかの差である。このことからC類はB類の外反度の強いタイプから派生し、外反度をさらに増し、面取りを施さなくなったものという可能性がある。胎土も水肥された緻密なものを採用している点で共通している。市西北部の銭畠遺跡でも同時

<b>I A1類</b> 	<b>I B1類</b> 	<b>I C類</b> 	<b>I D類</b> 	<b>II A1類</b> 	<b>II B1類</b> 	<b>II C類</b> 	<b>II D類</b> 
<b>I B2類</b> 	<b>I B3類</b> 	<b>I C2類</b> 	<b>I D2類</b> 	<b>II A2類</b> 	<b>II B2類</b> 	<b>II C2類</b> 	<b>II D2類</b> 
<b>I A3類</b> 	<b>I B4類</b> 	<b>I C3類</b> 	<b>I D3類</b> 	<b>II A3類</b> 	<b>II B4類</b> 	<b>II C3類</b> 	<b>II D3類</b> 
<b>I A4類</b> 	<b>I B5類</b> 	<b>I C4類</b> 	<b>I D4類</b> 	<b>II A4類</b> 	<b>II B5類</b> 	<b>II C4類</b> 	<b>II D4類</b> 
<b>I A5類</b> 	<b>I B6類</b> 	<b>I C5類</b> 	<b>I D5類</b> 	<b>II A5類</b> 	<b>II B6類</b> 	<b>II C5類</b> 	<b>II D5類</b> 
<b>I A6類</b> 	<b>I B7類</b> 	<b>I C6類</b> 	<b>I D6類</b> 	<b>II A6類</b> 	<b>II B7類</b> 	<b>II C6類</b> 	<b>II D6類</b> 
<b>I A7類</b> 	<b>I B8類</b> 	<b>I C7類</b> 	<b>I D7類</b> 	<b>II A7類</b> 	<b>II B8類</b> 	<b>II C7類</b> 	<b>II D7類</b> 
<b>I A8類</b> 	<b>I B9類</b> 	<b>I C8類</b> 	<b>I D8類</b> 	<b>II A8類</b> 	<b>II B9類</b> 	<b>II C8類</b> 	<b>II D8類</b> 
<b>I A9類</b> 	<b>I B10類</b> 	<b>I C9類</b> 	<b>I D9類</b> 	<b>II A9類</b> 	<b>II B10類</b> 	<b>II C9類</b> 	<b>II D9類</b> 
<b>I A10類</b> 	<b>I B11類</b> 	<b>I C10類</b> 	<b>I D10類</b> 	<b>II A10類</b> 	<b>II B11類</b> 	<b>II C10類</b> 	<b>II D10類</b> 
<b>I A11類</b> 	<b>I B12類</b> 	<b>I C11類</b> 	<b>I D11類</b> 	<b>II A11類</b> 	<b>II B12類</b> 	<b>II C11類</b> 	<b>II D11類</b> 
<b>I A12類</b> 	<b>I B13類</b> 	<b>I C12類</b> 	<b>I D12類</b> 	<b>II A12類</b> 	<b>II B13類</b> 	<b>II C12類</b> 	<b>II D12類</b> 
<b>I A13類</b> 	<b>I B14類</b> 	<b>I C13類</b> 	<b>I D13類</b> 	<b>II A13類</b> 	<b>II B14類</b> 	<b>II C13類</b> 	<b>II D13類</b> 
<b>I A14類</b> 	<b>I B15類</b> 	<b>I C14類</b> 	<b>I D14類</b> 	<b>II A14類</b> 	<b>II B15類</b> 	<b>II C14類</b> 	<b>II D14類</b> 
<b>I A15類</b> 	<b>I B16類</b> 	<b>I C15類</b> 	<b>I D15類</b> 	<b>II A15類</b> 	<b>II B16類</b> 	<b>II C15類</b> 	<b>II D15類</b> 
<b>I A16類</b> 	<b>I B17類</b> 	<b>I C16類</b> 	<b>I D16類</b> 	<b>II A16類</b> 	<b>II B17類</b> 	<b>II C16類</b> 	<b>II D16類</b> 
<b>I A17類</b> 	<b>I B18類</b> 	<b>I C17類</b> 	<b>I D17類</b> 	<b>II A17類</b> 	<b>II B18類</b> 	<b>II C17類</b> 	<b>II D17類</b> 
<b>I A18類</b> 	<b>I B19類</b> 	<b>I C18類</b> 	<b>I D18類</b> 	<b>II A18類</b> 	<b>II B19類</b> 	<b>II C18類</b> 	<b>II D18類</b> 
<b>I A19類</b> 	<b>I B20類</b> 	<b>I C19類</b> 	<b>I D19類</b> 	<b>II A19類</b> 	<b>II B20類</b> 	<b>II C19類</b> 	<b>II D19類</b> 
<b>I A20類</b> 	<b>I B21類</b> 	<b>I C20類</b> 	<b>I D20類</b> 	<b>II A20類</b> 	<b>II B21類</b> 	<b>II C20類</b> 	<b>II D20類</b> 
<b>I A21類</b> 	<b>I B22類</b> 	<b>I C21類</b> 	<b>I D21類</b> 	<b>II A21類</b> 	<b>II B22類</b> 	<b>II C21類</b> 	<b>II D21類</b> 
<b>I A22類</b> 	<b>I B23類</b> 	<b>I C22類</b> 	<b>I D22類</b> 	<b>II A22類</b> 	<b>II B23類</b> 	<b>II C22類</b> 	<b>II D22類</b> 
<b>I A23類</b> 	<b>I B24類</b> 	<b>I C23類</b> 	<b>I D23類</b> 	<b>II A23類</b> 	<b>II B24類</b> 	<b>II C23類</b> 	<b>II D23類</b> 
<b>I A24類</b> 	<b>I B25類</b> 	<b>I C24類</b> 	<b>I D24類</b> 	<b>II A24類</b> 	<b>II B25類</b> 	<b>II C24類</b> 	<b>II D24類</b> 
<b>I A25類</b> 	<b>I B26類</b> 	<b>I C25類</b> 	<b>I D25類</b> 	<b>II A25類</b> 	<b>II B26類</b> 	<b>II C25類</b> 	<b>II D25類</b> 
<b>I A26類</b> 	<b>I B27類</b> 	<b>I C27類</b> 	<b>I D27類</b> 	<b>II A26類</b> 	<b>II B27類</b> 	<b>II C27類</b> 	<b>II D27類</b> 
<b>I A27類</b> 	<b>I B28類</b> 	<b>I C28類</b> 	<b>I D28類</b> 	<b>II A27類</b> 	<b>II B28類</b> 	<b>II C28類</b> 	<b>II D28類</b> 
<b>I A28類</b> 	<b>I B29類</b> 	<b>I C29類</b> 	<b>I D29類</b> 	<b>II A28類</b> 	<b>II B29類</b> 	<b>II C29類</b> 	<b>II D29類</b> 
<b>I A29類</b> 	<b>I B30類</b> 	<b>I C30類</b> 	<b>I D30類</b> 	<b>II A29類</b> 	<b>II B30類</b> 	<b>II C30類</b> 	<b>II D30類</b> 
<b>I A30類</b> 	<b>I B31類</b> 	<b>I C31類</b> 	<b>I D31類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C31類</b> 	<b>II D31類</b> 
<b>I A31類</b> 	<b>I B32類</b> 	<b>I C32類</b> 	<b>I D32類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D32類</b> 
<b>I A32類</b> 	<b>I B33類</b> 	<b>I C33類</b> 	<b>I D33類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D33類</b> 
<b>I A33類</b> 	<b>I B34類</b> 	<b>I C34類</b> 	<b>I D34類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D34類</b> 
<b>I A34類</b> 	<b>I B35類</b> 	<b>I C35類</b> 	<b>I D35類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D35類</b> 
<b>I A35類</b> 	<b>I B36類</b> 	<b>I C36類</b> 	<b>I D36類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D36類</b> 
<b>I A36類</b> 	<b>I B37類</b> 	<b>I C37類</b> 	<b>I D37類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D37類</b> 
<b>I A37類</b> 	<b>I B38類</b> 	<b>I C38類</b> 	<b>I D38類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D38類</b> 
<b>I A38類</b> 	<b>I B39類</b> 	<b>I C39類</b> 	<b>I D39類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D39類</b> 
<b>I A39類</b> 	<b>I B40類</b> 	<b>I C40類</b> 	<b>I D40類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D40類</b> 
<b>I A40類</b> 	<b>I B41類</b> 	<b>I C41類</b> 	<b>I D41類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D41類</b> 
<b>I A41類</b> 	<b>I B42類</b> 	<b>I C42類</b> 	<b>I D42類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> 	<b>II D42類</b> 
<b>I A42類</b> 	<b>I B43類</b> 	<b>I C43類</b> 	<b>I D43類</b> 	<b>II A30類</b> 	<b>II B31類</b> 	<b>II C32類</b> <img alt="Illustration of II C32 knife	

第345圖 八里向出遺跡出土師器變遷圖 (S=1/6)

32：燃焼内の要機の上下は傾斜のものであって時期遅を考すものがではない。

- |    |     |   |
|----|-----|---|
| a類 | b-1 | 胎土は非常に緻密。微砂粒少量含む。やや大きい白色粒を極少量含む。赤色粒・黒色粒少ないが、砂気もない。  |
| b類 | b-2 | 胎土は緻密。極微砂粒少量含む。赤色粒多く含む。白色粘土ダマ。黒色粒を少量含む。比較的大きい白色粒を少量含む。極微砂粒を凝縮したように器表面がサラサラする。               |
| c類 | c-1 | 胎土は緻密。胎土ダマが多く、目立つ。赤色粒、石英微砂を含む。含有砂粒が細かい。   |
|    | c-2 | 胎土は緻密でキメが細かい。極微砂粒少量含む。赤色粒、石英微砂を含む。比較的の緻密に焼き上がり、特に調整を施していない部分でも器表面が照る。                       |
| d類 | e-1 | 胎土は粗く、白色粒（特大粒あり）多く含むため、器表面がザザフする。粘土ダマも多く含む。赤色粒、黒色粒少量含む。但し、粘土素地自体は比較的緻密なため、調整を受けた部分はまとまりがある。 |
| e類 | e-2 | e-1より微砂粒（石英微砂含む）を多く含み、器表面のザザフ感が強くなる。  |

期のIA類（望月分類、藤田分類のEタイプ）の初現期のものが、口縁部に面取りが施されており、IC類（望月分類、藤田分類のCタイプ）との共通性をもつ器形があることが報告されている。藤田氏もCタイプからEタイプへ器のもの機能が移った可能性を指摘している。以上のことからB類とC類は、相関関係にあるといえ、共伴事例を視野に入れた分析が必要とされる。また、墓壙内埋納ではないが、IV-B-2号墓区画内埋土中からIC類が出土している。II-B-2号墓出土資料と法量はほぼ同じだが、体部の外反が強まり、器形として完成した段階といえる。但し、前述したとおり資料の位置付けに不安を残しており、参考程度の指摘に留めたい。C類は藤田分類ではEタイプにあたり、その出現をIII-I期とIII-II期とを分ける基準としていることから、III-II期と考えたい。XII-1号墓・XII-4号墓出土資料は、IA1類、IIA1・2類を確認している。B類が認められず、法量では口径が更に縮小し、I類で11cm代、II類で8cmを切り、7cm代後半となる。また器形の歪みも増している。よって、III-II2期に位置付けたい。また、この墓の真上に造られたⅦ群1号墳墓の盛土中から、IC類と胎土が共通し、その最終形態と考えられる皿が出土している。さらに、法量の縮小化したII類の皿も見られるところから、IV-1期までは、H遺跡において土師器皿が使用されていたと考えられる。

### まとめ

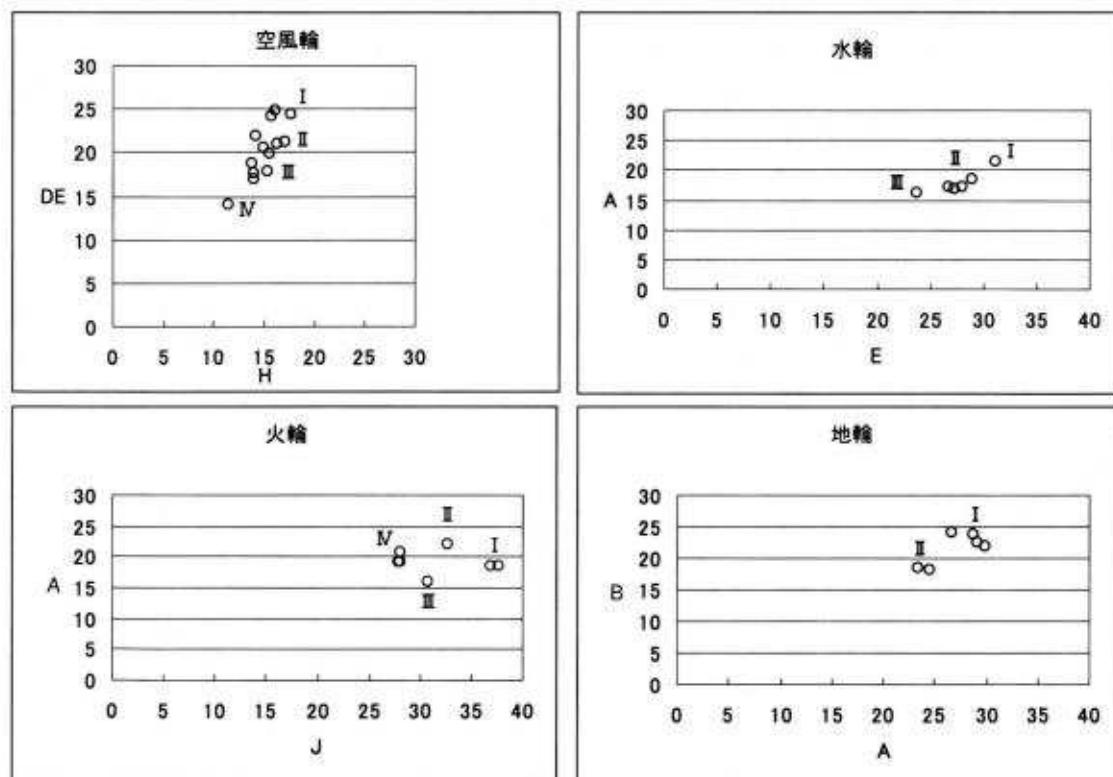
H遺跡において、土師器皿で得られた年代観は、中世陶器で得られた13世紀前半～14世紀後半という年代観と矛盾するものではないといえる。D類等は集落ではみられない特殊器形ではあるが、他は集落の様相と異なるわけではない。八里向山遺跡群中世遺跡を統一的に理解するためには、周辺集落の様相も視野にいれた検討が必要であり、今後の課題としたい。

### 第2項 石塔類の検討

八里向山遺跡群で検出された石塔は、宝塔と五輪塔であり、全て倒壊した状態で見つかっている。さらに、破片も多く全体の計測値を出すのは困難であり、正確さに欠ける可能性もあるが、法量・形態差に注目して分類を試み、少しでも造立過程の解明に帰したい。

#### 相輪

宮竹墓谷中世墳墓群でその存在が確認された宝塔の相輪部分である。全景が観察できるのは1のみであり、他は部分的な破片のみである。さらに、個体によって意匠が異なるため、厳密な分類は出来ない。このことは数多



第34表 五輪塔量表

く出土した宮竹墓谷中世墳墓群でも言えることである。但し、相輪の隙間の幅が広いもの、狭いもので分かれる可能性がある。前者は1・3・4・7、後者に2・5・6が該当すると考えられる。しかし、法量や宝珠の意匠が異なり、細分が可能である。石材は凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) のものに統一される。

#### 空風輪

空風輪は、法量により大 (I類) ・ 中 (II類) ・ 小 (III類) ・ 特小 (IV類) に分けられる。計測値は、火輪との装着部分が折れたものもあったため、計測値 DE の合計値を高さとし、計測値 H を幅とし採用した。

I類 高さ24cm代を測る製品である。幅により細分される。石材は角礫質凝灰岩のみである。

I-A類 (18) 幅17.7cmを測り、風輪との接続部のくびれも小さく重厚感のある製品である。H遺跡出土品の中で最大幅のものである。

I-B類 (13・19) 幅15.7~16.2cmを測る。空輪部分が細くなってしまっており、A類に比べ縦長傾向が伺える。19がしっかりした作りであるのに対し、13は、風輪部が丸く空輪部との接続部もやや間延びした印象を受ける。

II類 高さ19.75~21.8cmまでの製品である。幅と形態により細分を行った。

II-A類 (12・20) 幅16.3~17.2cmを測る製品である。意匠的にはI-A類とほぼ共通し、全体的に一回り小さくした印象を受ける。石材は角礫質凝灰岩のみである。凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) 製の9・14は、幅15.05~15.5cmまでの製品である。意匠的には、空輪部がより球状に近い点を除けば、ほぼ同じであり、若干小さくしたものといえる。しかし、この違いは、石材の違い、つまり産地差と考えられる。よって、形態差だけを問題にする場合は、同じA類に含めても良いと判断される。

II-B類 (21) 幅14.25cmを測る製品である。空輪部は縦長の梢円形状になり、風輪部も幅が狭まり、全体的に縦長形になっている。石材は凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) である。

III類 高さ17.0~18.65cmまでの製品である。幅と形態により細分される。

III-A類 (15) 幅15.3cmを測る。空輪部と風輪部との境にくびれが殆どなく、全体が球状に近い印象を受ける器形である。石材は角礫質凝灰岩である。

III-B類 (16) 幅14.1cmを測る。全体の器形のなかで風輪部の割合が比較的高い製品である。意匠的にII-B類の空輪部を一回り小さくし、風輪部の厚みを変えずに幅を減じたものと言えようか。石材も凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) であり共通する。

III-C類 (10) 幅14.1cmを測る。B類と幅は同じだが形態が全く異なるため分離した。空輪部は算盤型とも言え、円錐形に尖る器形である。また、風輪部も、基部を丸底に仕上げる他の類型とは共通性のない器形である。周辺地域ではあまりみられない形態である。石材は角礫質凝灰岩である。

III-D類 (11) 幅13.8cmを測る。II-A類を一回り小さくし印象をうける製品である。但し、空輪部が円形から梢円に近くなり、縦長傾向を示している。石材は、角礫質凝灰岩である。

IV類 高さ13.9cm、幅11.4cmを測る最小型の製品 (17) である。破碎品で詳細は分かりづらいが、空輪部は球形状、風輪部は基部をやや丸く作る形態である。線刻による蓮華文が入る。石材は角礫質凝灰岩。

#### 火輪

法量により大扁平型 (I類) ・ 中 (II類) ・ 中扁平型 (III類) ・ 小 (IV類) に分けられる。計測値は A 値 (高さ) と J 値 (幅) を採用した。破損した製品が多く、欠けた状態そのままの計測値を使用しているため、修正する必要があろう。しかし、グラフ上でははっきりと分布が分かれていることから、分類自体は間違っていないと考える。

I類 (22・26) 残存値で高さ18.5cm前後、幅36.9~37.7cmを測る。高さの2倍以上の幅があり、H遺跡では最大幅を測る製品である。両者とも軒先が欠けているが、計測に入れなかった31がこの類型に該当すると考えられるため、援用して形状を把握することとした。屋根の反りは見られず、軒端の突出も弱く、軒口は若干斜めに切れる程度である。H遺跡の初現期の製品とみている。石材は角礫質凝灰岩のみである。

II類 (24) 高さ21.9cm、幅32.8cmを測る。若干扁平な印象を受けるが、H遺跡では最大高を測る製品である。屋根は反り、軒端はやや突出する。軒口は斜めに切れ、軒厚である。唯一空風輪装着部の臍穴が方形のものである。石材は凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) である。計測に入れなかった25・32がこの類型に該当すると考えられる。石材は角礫質凝灰岩であるため、若干の形態差は産地差と考えられよう。

**III類 (23)** 高さ15.9cm、幅30.8cmを測る。非常に扁平な器形である。屋根及び、軒端の反りが最も強く、軒口も斜めに大きく切れる。また、造詣も美しく丁寧に作られており優品といえる。H遺跡の中では最も新しい段階の所産であるといえる。石材は凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) である。

**IV類 (28・29・30)** 高さ19.1~20.6cm、幅27.9~28.2cmを測る。II類に比べ幅が大きく縮小し、高さの占める割合が大きくなっている。軒端はII類よりもやや突出する。軒口もII類より斜めに切れている。このような特徴から、II類よりも後出の形態である可能性が高い。石材は、28・29が角礫質凝灰岩で、30が凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) と違いがある。しかし、法量がほぼ一致し、両者とも臍穴の器形が丸であるなど意匠の共通性が認められるため同類型と考える。

その他、破片であり除外したものの中に、軒が薄く、屋根、軒端の反りが殆どない形態である27も存在することを補足しておく。石材は角礫質凝灰岩である。

#### 水輪

法量により、大 (I類)、中 (II類)、小 (III類) に分類した。中のみ形態・法量差で細分した。

**I類 (38)** 高さ21.4cm、幅31.1cmを測る。高さと幅の割合から、出土水輪中最も高さを感じる製品である。最大径は、ほぼ中位にある。下面中央に掘り込みがみられる。なお、大には、今回下面が欠けており計測できなかったものに、幅33.8cmと広がり扁平な印象を受ける39があり、前者をI-A類、後者をI-B類とする細分も可能である。37はI-A類に該当すると考えられる。石材は角礫質凝灰岩のみである。

**II類** 高さ26.7~29.0cm、幅16.7~18.6cmの製品である。法量のまとめ、形態により細分される。

**II-A類 (33・40)** 高さ18.6cm、幅28.9~29.0cmとほぼ同数値を示す製品であり、正面に月輪と梵字「パン」(金剛界大日如来) が薬研彫りで刻まれる。最大径はほぼ中位のあり、扁平な印象を受ける形態である。梵字が彫られるのは、この類型のみであり、石材は凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) のみである。近隣の宮竹墓谷中世墳墓群に類例があり、同じ系譜のものと考えられる。その遺跡の事例から判断すれば、宝塔・五輪塔両者に使用されるものであり、当遺跡でも約2割程度凝灰質砂岩 (or 角礫質凝灰岩) 製の五輪塔の各部位が存在することから、どちらに使用されたかは判断できない。

**II-B類 (34・41)** 34は高さ17.0cm、幅28.1cmを測る。最大径がほぼ中位にあり、扁平な印象を受ける形態である。A類を若干小さくしたような器形である。石材は角礫質凝灰岩と異なるため、产地差とも想定できるが、梵字を刻まないなど違いがあり、別類型とした。41は幅26.7cmと若干小さいが、ほぼ同じ形態であり、同一石材である点から同一類型として考える。

**II-C類 (35)** 高さ16.7cm、幅27.3cmとB類とほぼ同じ数値を測るが、最大径が上位にある点が異なる。石材も角礫質凝灰岩と共にしている。三浦氏の論考によれば、B類より後出する形態の可能性がある。

**III類 (36)** 高さ16.1cm、幅23.8cmを測り、最大径はほぼ中位にある。II類よりさらに一回り小さい製品であるが、高さに大きな差はない。石材は角礫質凝灰岩である。

#### 地輪

法量により大 (I類)、小 (II類) に分類した。

**I類** 法量のまとめ、形態により細分した。石材は、角礫質凝灰岩のみである。

**I-A類 (42・48・49)** 高さ22.0~23.6cm、幅28.7~29.9cmを測る製品である。さらに、下面の掘り込みはこの類型のみでみられ、形態差により細分される。

**I-A1類 (42)** 下面中央の掘り込みは浅く、楕円形を呈する。高さと幅の差が、約5cmとI-A2類よりは、方形に近い器形である。

**I-A2類 (48・49)** 下面中央の掘り込みは深く、断面台形状を呈する。高さと幅の差が約7cmとI-A1類より大きく、長方形をなす形態である。法量や下面の掘り込みの形状から、43・44もこの類型に含まれると考える。

**I-B類 (50)** 高さ24.0cm、幅26.6cmを測り、高さと幅の差が、2.6cmと小さくほぼ方形である。

**II類 (45・46)** 高さ18~18.5cm、幅23.4~24.5cmを測る。I類を二回り程度小さくした器形であり、高さと幅の比率で言えば、45がI-A2類、46がI-A1類に比定でき、45の方が若干扁平である。この2個体は、原位置を保っており、造墓順から言えば45→46の順といえる。しかし、造墓と塔の造立が同時期であった証明はなく確

定は出来ない。法量から言えば47もⅡ類の範疇に含まれると考える。石材が凝灰質砂岩（or 角礫質凝灰岩）であり、若干の法量差は産地差と考えられる。

### まとめ

第一にその組み合わせについては、不明といわざるを得ない。復元可能な出土状態を示す遺物はなく、石材・法量で組み合わせを合わせることも可能だが、元通りでない可能性の方が高い。但し、任意に最大値のものを組合せたとしても、高さ1mを超えるものは存在しない。地輪の幅が30cmを超えるものがなく狭い傾向にあるのに対し、火輪の幅は30cmを超えるものがあり、広い傾向にあることがいえる。また、類型により、石材が限定されるものと、限定されず両者共通の類型が存在することも判明した。石材の限定を受けない類型は、共通のモデルが存在したことを意味していると考えられる。ただし、石塔自体は、各部位が同一石材でまとまり、他の石材を混用して使用することはなかったであろう。次に造立された年代を検討してみたい。まず、宝塔に関しては不明な点が多く、近隣の宮竹墓谷中世墳墓と同型式と考えられるものもあることから、ほぼ同時期の14世紀後半代を中心とした時期としておきたい。組み合わせ式五輪塔については、原位置と考えられるものに、3点の地輪がある。I-A1類（42）は、Ⅱ群B区4号墓に造立されたものである。Ⅱ群B区で最終段階にある2号墓墓壙より、藤田編年Ⅲ-Ⅱ1期（14世紀前半頃）に比定される土師器皿が出土している。45・46はそれぞれXⅡ群2・3号墓上に造立されたものである。間を挟む1・4号墓より、藤田編年Ⅲ-Ⅱ2期（14世紀中頃）に比定される土師器皿が出土している。前述のとおり、墓の造墓過程と塔の造立が同時期に行われたという確証はない。しかし、空風輪I-A類（18）・火輪IV類（28・29）・水輪I類？（39）・地輪I-A2類（48・49）・地輪II類（45・46）は墳丘墓であるⅦ群1号墳墓の盛土下から出土しており、少なくとも、墳丘墓以前から造立していた型式の五輪塔であるといえる。Ⅶ群1号墳墓の造成時期は、盛土内から藤田編年Ⅳ-Ⅰ期（14世紀後半頃）と考えられる土師器皿が出土しており、その付近と考えている。次に、三浦氏の論考により五輪塔の形態から検討する。火輪は、I類（22・26）が屋根・軒に反りがないことからやや先行する形態と考えられ、扁平で軒口が突出するII-C類（35）が後出と考えられる。35は、IV期の藪田薬師塔群ほど顕著な突出は見られないため、III期に収まると考えられる。水輪は上位に最大径がある肩の張った水輪II-C類（35）があり、III期の特徴とされる。空風輪にもIV期の藪田薬師塔群ほど空輪と風輪の間が間延びした感ではなく、III期までに収まる形態であると考える。以上のことから、八里向山H遺跡の石塔群はII期～III期（14世紀前半～15世紀前半頃）の造立と考える。

### 第3項 造墓過程の検討

上記検討で得られた年代観をもとに、F・H遺跡の群ごとの造墓過程をまとめてみたい。群内の変遷過程は遺跡報告を参照して頂きたい。F遺跡1号墓が13世紀前半から少なくとも13世紀中頃までには造られる。丘陵頂上に造られており、当遺跡最大規模を誇り、領主級と判断される。また、それは二基並列墓であり、藤澤氏のいう「夫婦墓」と事例と合致し、当墓地初発と判断される。次に13世紀後半頃から、その南側斜面下方一帯に墓群が形成され始めると考える。調査範囲内で限定されるが、斜面裾の平坦面の中央にX群焼土坑が先行して構築された後、副葬品に武士的な色彩を強くもつXV群2号墓や、頂上のF1号墓と近似した形態を持つX群1-A号墓（I-B号墓の追葬はやや時期差あり）、が造られる。また、基底石が同じレベルにあるXI群1号墓もほぼ同時期と考えられる。XIII群は礫群内に五輪塔の破片がみられることから、やや後出と考える。まずこれらの墓自体が高さを持つ形態のものが造られている。これらの墓は共通して下位に墓壙をもつ。一方で同時期に、斜面中腹の調査区西端部分に火葬土坑が造られており、数回の火葬を行った後、そのまま集石墓として礫が詰められているが、大きなものではなく、後続する配石による区画墓に近い形態である。次に、斜面への造墓が行われ、上から2段目にテラスを形成し、五輪塔を造立する（Ⅱ群B区）が造られる。IV群B区の基点と考えられる火葬土坑でもある4号墓がほぼ同時期に造られている。既に墓自体は小型化し、1m前後の区画を接続するタイプの墓へ変化している。土師器の年代により14世紀前半～中頃とする。IV群B区1号墓の越前焼の鉢は古い形態を示すが、伝世期間を考える必要があろう。その後、X群の前面にXII群が形成される。これは、小区画の墓が接続するタイプであり、背後の列石により、最初に2～4号墓までの墓域を確保したことが明確に分かる事例である。接続することを予定した大区画を設定し、それを細分していくタイプの出現である。出土した土師器皿の年代から14世紀

中～後半頃とする。また、2・3号墓に小型の五輪塔が立てられる。五輪塔の形態は、造立した家の力の差によつても影響を受けるという意見もあり、一概には「時期差による小型化」とはいえないことを断つておく。造成土に混入した土師器Ⅲの年代による判断となるため参考程度にしておきたいが、この頃には、I群やIV群C区等での造墓が始まったと考えている。その後、墳丘墓であるVII群1号墳墓が作られ、墳丘墓上や、IV群C区の下方向へ派生した墓などが造られたと考えられる。五輪塔の各部位が多くみられるⅢ群D区もこの時期前後の造墓と考えている。14世紀後半～末以降と考える。以上、墓地造営の変遷過程をみてきたが、石塔の年代を加味すれば、15世紀前半までは墓地として機能していた可能性もある。墓壙出土土師器Ⅲの無い群の年代の位置付けには不安を残す。また、遺物の出土していない群には触れることが出来なかつた点など課題を残している。

#### 第4項 被葬者について

最後に、八里向山F・H遺跡の被葬者像について考えてみたい。当遺跡は、鍋谷川沿いに広がる耕地に南面する丘陵上に位置する。低地より、墓群を見通すことが可能である。前節までの検討から、二基並列墓であるが、全長10m全幅6mを測る巨大な墳墓は、加賀地域でも最大級の規模といえ、有力者の墓である点は論をまたないであろう。時期は13世紀前半～13世紀中頃と考えられる。H遺跡の中世墳墓群は集石墓主体で、13世紀後半～14世紀代が主である。在地領主層の墓地は本領内に営まれた可能性が高く、この頃の在地領主の様相を文献史料に求めてみたいと思う。遺跡群のある地域は、中世の行政区画でいえば、得橋郷に含まれていたと考えられている。郷域の一部が国衙在庁官人と考えられる得橋氏の所領であったが、没収されて鎌倉末期には六波羅探題の所領となっていた。その後、正安四年（1302年）龜山上皇より京都南禅寺に寄進され南禅寺領となった。その南禅寺領時代の延慶二年（1309年）内検名寄帳・田数目録案に、弥里介の名がみえ、現小松市八里付近に本拠をおく在庁官人と考えられる在地領主と考えられている。また、南禅寺領となる以前の史料に、文永7年（1270）五月平氏女退覚後家所領売券案、同九月八幡宮政所承納書状案に、弥里殿の名がみえ、前述の史料の弥里介本人か同族と推定されている。ここでは、能美荘（石清水八幡宮領家職の分）の惣公文職と名田畠を銭120貫文で買い取っていることが記載されており、在地荘官の長レベルの有力者であったことが分かる。この南禅寺領得橋郷内の在地領主層の弥里介とその一族が、被葬者として比定される可能性が高いといえる。

#### 引用・参考文献

- 新修小松市史編集委員会2002『新修 小松市史 資料編4』  
中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社  
北陸中世土器研究会編1997『中・近世の北陸—考古学が語る社会史』 桂書房  
北陸中世考古学研究会編1999『中世北陸の石文化』  
北陸中世考古学研究会編2000『中世北陸の石塔・石仏』  
永井久美男編1994『中世の出土銭』 兵庫埋蔵銭調査会  
川畠 誠1992「石製品の産地に関する一考察」『小川』 石川県立埋蔵文化財センター  
田中 照久1994「越前焼の歴史」「越前古陶とその再現」 出光美術館  
西野 秀和1998「宮竹墓谷中世墳墓群」「能美丘陵東遺跡群 Ⅲ」 石川県立埋蔵文化財センター  
藤澤 典彦1997「中世墓地の成立と終焉」「静岡県における中世墓」 静岡県考古学会  
藤田 邦雄1992「加賀における様相」「中世前期の遺跡と土器、陶磁器、漆器」 北陸中世土器研究会  
三浦 純夫1985「五輪塔の変遷について」「姫崎遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター  
吉岡 康暢1994『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

その他、刷毛目を施す加賀焼の所見については、小松市立博物館 宮下幸夫氏の助言を得た。また、石塔類の石材については、小松市教育委員会埋蔵文化財調査室 宮田明氏、転用された弥生土器の所見については、同下濱貴子氏の助言を得ている。

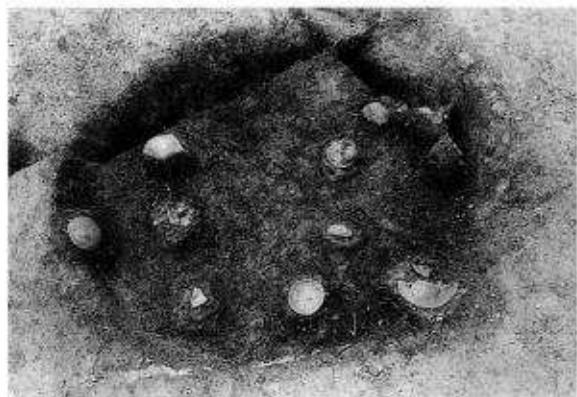


写真1 八里向山C遺跡4号土坑遺物出土状況



写真2 八里向山F遺跡1号墓全景（北より）



写真3 F遺跡1号墓全景（南より）



写真4 F遺跡1-A号墓（南より）



写真5 F遺跡1-A号墓基底石検出状況



写真6 F遺跡1-B号墓中央集石（上層除去後）



写真7 F遺跡1-B号墓中央集石基底石検出状況



写真8 F遺跡1号墓石區検出状況



写真9 八里向山H遺跡全景（南より）



写真10 H遺跡I-2号墓宝塔相輪出土状況



写真11 H遺跡II-B-4号墓石輪検出状況



写真12 H遺跡IV-A-1号墓火葬施設



写真13 H遺跡IV-B-4号墓（上層除去後）



写真14 H遺跡IV-B-4号墓火葬施設



写真15 H遺跡IV群1号填墓



写真16 H遺跡IV群除去後



写真17 H遺跡X-1号墓全景



写真18 H遺跡X-1-A号墓石積検出状況



写真19 H遺跡XX群全景



写真20 H遺跡XX-1b号墓検出状況



写真21 H遺跡XX群北辺連続基底石



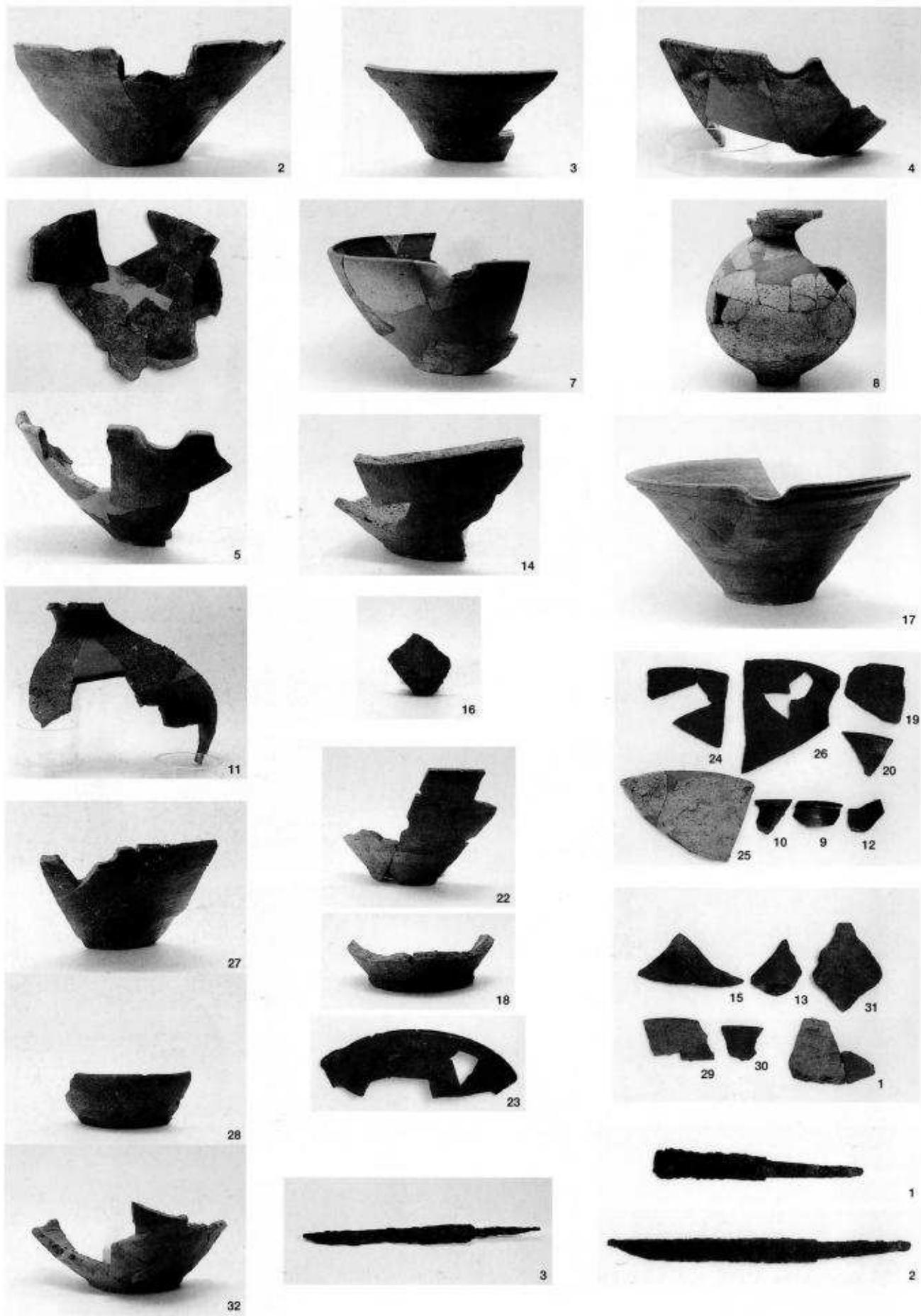
写真22 H遺跡XX-2号墓全景



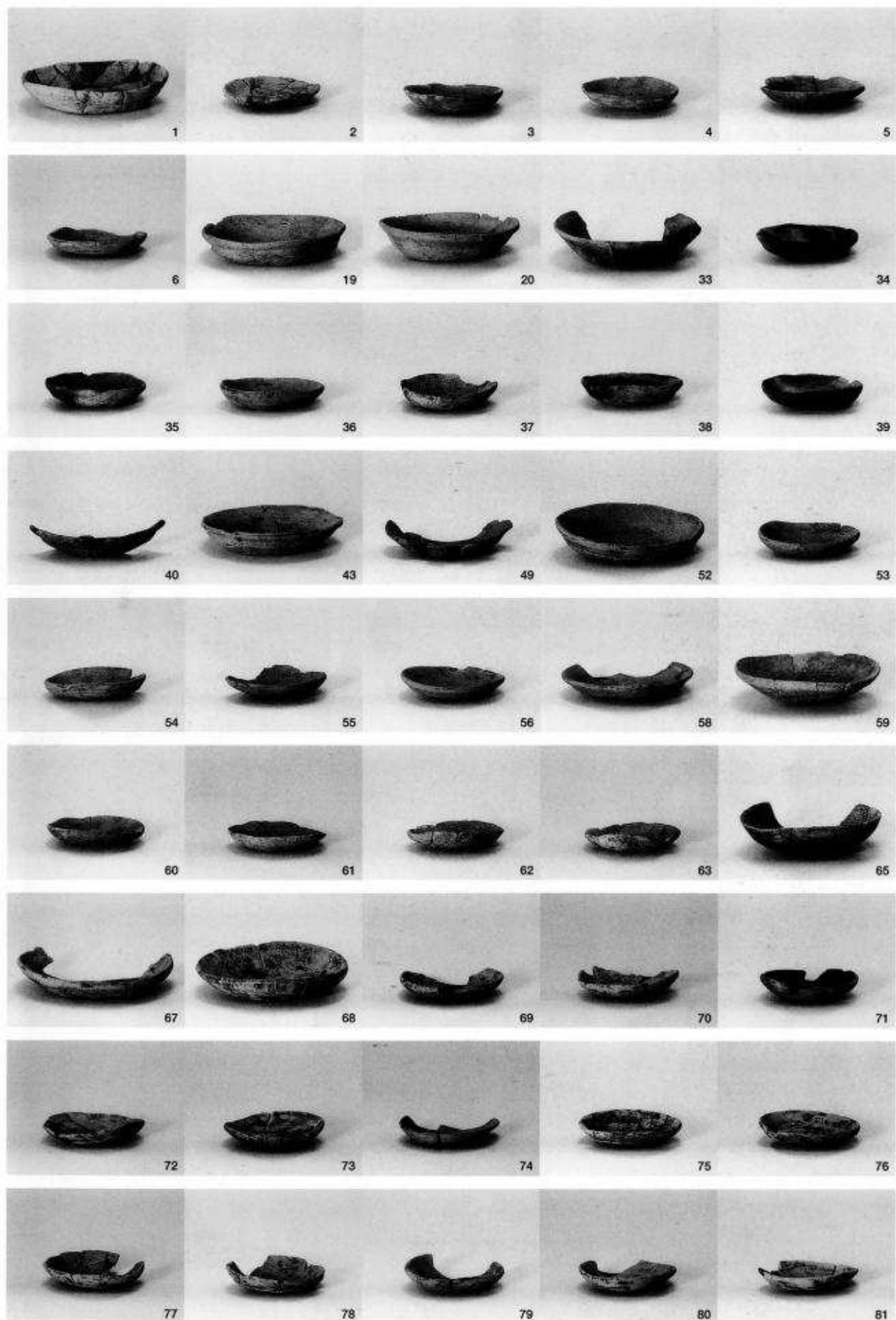
写真23 H遺跡XX-2号墓内区画検出状況



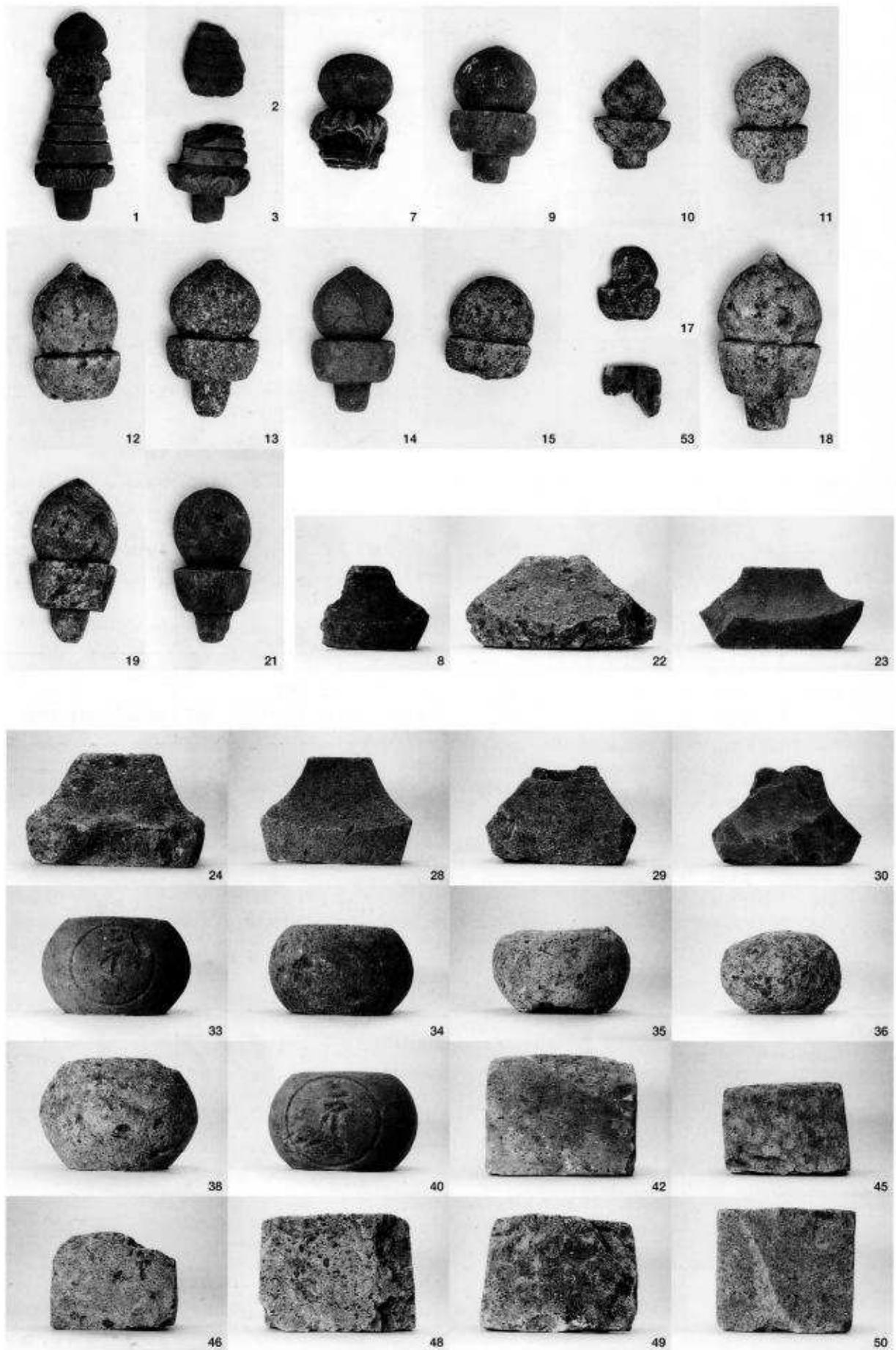
写真24 H遺跡XX-2号墓副葬品出土状況



F 遺跡・H 遺跡出土土器・陶器・鉄製品



C 遺跡・H 遺跡出土土師器皿



H 遺跡出土石塔類

## 報告書抄録

ふりがな	やさとむかいやまいせきぐん							
書名	八里向山遺跡群							
副書名	八里台住宅団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編・著者名	望月精司・津田隆志・川畠謙二・宮田 明・下濱貴子・林 大智							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町 91 番地 Tel:0761-22-4111							
発行年月日	西暦 2004 年 3 月 26 日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
八里向山遺跡群 (A・B・C・D・ E・F・G・H・I・ J 遺跡)	石川県小松市上 八里町 向山 20 番地他	市町村	遺跡番号	°, ′, ″	°, ′, ″			
		17203	未登録	36° 25' 17" ~ 25' 38"	136° 31' 31" ~ 31' 54"	1993/10/25 ~ 1997/9/8	23,500 m <sup>2</sup>	八里住宅団地 造成事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
八里向山 A 遺跡	散布地	縄文	堅穴住居 3 建物跡 14 土坑 8 方形周溝状遺構 2	縄文土器、石錐、石鎌、土製耳飾 弥生土器、土玉、土錐、ミニチュア 土器、管玉、ガラス玉、紫水晶、磨 石類、砥石、くぼみ石、袋状鉄整、 ヤリガンナ、鉄刀片、不明棒状鉄製 品、炭化米	A 遺跡 SJ01 は焼失家屋で あり、山陰系甌出土。谷を通じて G 遺跡とつながる。			
		集落跡	弥生	時期不詳	道路状遺構、焼土坑 3	須恵器、陶磁器、磁器		
八里向山 B 遺跡	散布地	旧石器		ナイフ形石器				
	集落跡	縄文	集石遺構	縄文土器、石錐、石鎌				
	寺院跡	平安	礎石建物跡 土坑	土師器、須恵器、三彩釉陶器、刀子	市内最古の山林寺院跡。			
八里向山 C 遺跡	散布地	旧石器		ナイフ形石器				
	散布地	縄文		縄文土器、石錐、凹石				
	集落跡	弥生	堅穴住居 2、建物跡 7	弥生土器、紫水晶、砥石				
	古墳	古墳	前方後方墳 1	土師器				
	寺院跡	古代	柱穴、土器廃棄場	土師器、須恵器、皇朝鏡	B 遺跡関連遺跡。			
八里向山 D 遺跡	散布地	旧石器		有鍼尖頭器				
	散布地	縄文		縄文土器、磨製石斧		石器製作址。		
	集落跡	弥生	堅穴住居 1	弥生土器				
	古墳	古墳	方墳 2	土師器、管玉、鉄(方形板刃先、 刀子、鎌、ヤリガンナ)				
	集落跡	飛鳥	堅穴住居 1	土師器、須恵器				
八里向山 E 遺跡	散布地	旧石器		剥片				
	集落跡	弥生	環濠、堅穴状遺構	弥生土器		試掘調査のみ。保存区域。		
	古墳	古墳	周溝	土師器				
	集落跡	古代	堅穴状遺構	須恵器				
八里向山 F 遺跡	集落跡	縄文	階穴 1	異形石器				
	古墳	古墳	円墳 10	土師器、須恵器、鉄(短甲、刀、劍、 ヤリガンナ、斧、鎌先、鐵、刀子)、 ガラス小玉、勾玉、臼玉、丸玉、橢				
	墓地跡	中世	集石墓 2、横穴 3	珠洲焼、加賀焼、銅錢				
	八里向山 G 遺跡	散布地	弥生	湧水地、土坑 2	弥生土器			
散布地		平安	湧水地	須恵器		B 遺跡関連遺跡。		
八里向山 H 遺跡	墓地跡	中世	集石墓多數	藏骨器(弥生土器、珠洲焼、越前焼、 加賀焼、瀬戸)、土師器皿、鉄(槍、 小刀)、銅錢、五輪塔、宝塔	一部保存。			
八里向山 I 遺跡	窯跡	古代	須恵器窯跡	土師器、須恵器	能美窯で最も新しい地下式 窯構造。			
八里向山 J 遺跡	窯跡	古代	須恵器窯跡	須恵器	能美窯最古の須恵器窯。			

2004年3月22日 印刷  
2004年3月26日 発行

八里向山遺跡群  
—八里台住宅団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

編集・発行 石川県小松市教育委員会  
〒923-8650 石川県小松市小馬出町91  
電話(0761)22-4411

印刷 英文堂印刷(株)  
〒923-0926 石川県小松市竜助町67  
電話(0761)22-0949